ニコライ二世：その生涯と死

エドワード・ラジンスキー

出版社「バグリウス」、２０００年

目次

序説

第１部
皇帝の日記をぱらぱらめくって

第１章「血の基金」
第２章「日記を始める・・・」
第３章「頭がくらくらする。信じたくない・・・・」
（若い皇帝の日記）
第４章「強力な夫婦」
第５章「皇帝一家」
第６章「私は４５歳になったことを考えると、奇妙な気がする・・・」
（平穏な皇帝の日記）
第７章「貴方の手紙を何度も読み返しています。これについては、貴方が私と相談してくれることを切に願っています」
（手紙でのロマン）

第２部
「アトランチス大陸」の消滅

第８章「１９１７年の新しい年となった・・・・」
第９章「私達が安全で一緒にいられるのは、神の御陰である」
（逮捕者のシベリアでの日記）
第１０章「同志」
第１１章「秘密の任務」

第３部
イパチェフスキー館の夜
第１２章「最後の館」
第１３章「逃亡」
第１４章「暗殺の準備」
第１５章「探査が始まる」
第１６章「客」

終章

参考文献

序説

今（この本の出版年は２０００年　＊）のように、その時、世紀が最後の年を、終えつつあった。そして、今のように、人類に科学の発展、穏やかな繁栄を約束した未来に、何の関係も持つことができない、年配の人達は、寂しい気持ちでその時を生きていた。が、若い２人は、何かがやってくる予感を持って生きた。特別で、神秘的な短い数「２０」という世紀が到来した。
２人の幸せ一杯の若者－ニキとアリックスーは、お互いに愛し合っており、彼らは結婚に至った。そして、世界の６分の一を占める国の最高指導者達は、幸せな未来に、全人生をかけた。彼らの戴冠式の日は、次の世紀で、２人を待っている、より大きな幸せの人生への序章となることを約束した。

１８９６年５月１４日。モスクワ。クレムリンの教会では、鐘が鳴り響いた。若いニコライと、金髪の美人の皇后が、ウスペンスキー寺院に入った。鐘の音が止んだ。人で溢れた古い広場が、静まった。
ウスペンスキー寺院。聖なる戴冠式。最大の瞬間がやってきた。府主教の手から、皇帝が王冠を受け取った。それを自分の頭にかぶった。
府主教の話：「敬虔で専制の偉大な国王、全ロシアの皇帝！　＊＊＊＊。」

１９１８年７月１８日。エカテリンブルグ。
「遺体を穴に横たえ、識別できないように、また、分解による悪臭を防ぐために、顔や体に、硫酸を注いだ。土と枯れ枝を投げかけ、上に、枕木を敷いた。穴の跡が残らないように、車で行き来し、地面を平らにした。」（１９１８年７月１７日夜にでの皇帝一家銃殺の指導者であったユーロフスキーの「書き付け」より。）

「神が語っている。たとえ、貴方が鷹のように空高く飛び上がって、星々の間に、貴方のねぐらを作ったとしても、そこへ、私は貴方を投げ落とす。」（聖書の言葉より。彼らの人生の最後の日、１９１８年７月１６日、皇后が、自分の娘達に、読んで聞かせた。）

自分の最後の日まで、ニコライ二世は、あるノートを保存していた。それは、彼の偉大な祖先のうちの１人、改革の皇帝アレクサンドル二世が統治した、ロシアの歴史の概要である。
「ロマノフ家・・・」自信満々に表題が、ノートに、つけられている。
「ロマノフ家」、ロシアの歴史の内の３００年間は、このように表題することができよう。

バルト海沿岸から来た、有名であったよそ者が、１４世紀に、ロシアの地にやってきた。そのなかで、アンドレイ・イワノビッチ・コビラと、その兄弟のフョードルが、ロマノフ家という貴族の創設者となった。２人は、それ以後の、ロシアにおける貴族の、沢山の子孫の始まりとなった。
アンドレイ・コビリ・アナスタシの女の玄孫が、イワン雷帝の妻、つまり皇后となった。このように、アンドレイの子孫は、モスクワで皇帝を頂いていた古い王朝と親戚関係にあった。皇后の兄弟であったニキータ・ロマノビッチは、厳しい皇帝と、特に親しく交わっていた。そして、イワン雷帝が死ぬ。イワン雷帝の遺言に従って、ニキータ・ロマノビッチは、新しい皇帝フョードルの後見人の一人に指名される。つまり、自分の甥の相談役に。
フョードル皇帝の岳父である、権勢を誇るボリス・ガデュノフの中傷で、ニキータ・ロマノビッチの子供のうちの長兄は、剃髪して修道士となり、フィラレットと名乗った。
フョードル皇帝が死ぬ。リューリック王朝が断絶する。そして、ルーシに、未曾有の、暗い時代が到来する。スムータ（動乱　＊）の時代である。王座後継者の若いドミトリー殺害の疑いのあるボリス・ガデュノフの皇帝への選出、未曾有の飢饉と疫病。ボリス・ガデュノフの死。ルーシへのポーランドの襲来。ロシアの玉座へポーランドによって座らせられた偽ドミトリー。全国的な貧困化、人食い、略奪。
スムータの時に、フィラレート・ロマノフが、流刑から戻り、ロストフスキーの府主教となった。ポーランド人がモスクワから追い出され、偽皇帝は殺された。１６１３年に、大ゼムシキー寺院が、遂に、皇帝不在と動乱の困難の時代を断ち切った。
府主教フィラレート・ミハイル・ロマノフの息子は、この時、コストロムスキー・イパチェフスキー修道院にいた。この息子が、一致して、皇帝に選出された。１６１３年２月１２日、ロマノフ家の３００年にわたる歴史が始まった。

教師の指示で、ニコライの叔父が、自分達の王朝の創設について、心安らぐ話を書いた

：
「感激の涙にむせびながら、祖国は、ミハイルが王座に就くことを祝福した。ミハイルを皇帝とする合意は、全住民の喜び迎えられた。住民達は、歓喜した。イパチェフスキー修道院にいたミハイルは、じきにモスクワへと移った。・・・。」
歴史のミステリー：修道院の名前は、イパチェフスキー。ここから、初代のロマノフが皇帝に任命された。ロマノフ家の最後の皇帝、ニコライ二世が、人生を終えた建物は、建物の所有者である、技師のイパチェフの名を取って、イパチェフスキーと呼ばれていた。
ミハイルは、ロマノフ家の最初の皇帝の名前である。そして、ロマノフ家最後の皇帝の名前もミハイルである。ニコラ二世の退位後、弟のミハイルが皇帝に指名されたが、１日で、後任の皇帝を指名することなく退位した。

第１部
皇帝の日記をぱらぱらめくって

第１章「血の基金」

６０年代のモスクワに、奇妙な老婦人が住んでいた：劇場用のメーキャップの度はずれた圧化粧が、皺だらけの顔を覆っていた。腰の曲がった体が、ハイヒールの上で、フラフラしていた。彼女は、ほとんど手探りで動いていたが、その時に眼鏡をつけることはなかった。彼女は、老婆と見られることを嫌っていた！　劇場の百科事典によれば、その時に、彼女は９０歳を超していた。

この老婦人は、ベーラ・レオニドブナであった。今世紀初めの劇場の星であった。彼女のスペクタクルが終了した後には、ファン達が、御者付きの馬の替わりとなり、馬車を引き、彼女を自宅まで送り届けた。当時は、。しかし、今では、悲運となった昔の美人は、わずかな年金で、共同住宅で、生きながらえていた。彼女の２つの部屋のうち１つを、歴史古文書研究所の気の毒な学生であった私に、貸し出した。

帰宅して、夕方毎に、共同台所で、私は彼女と良く話をした。ペテルブルグのレストランの内室、大公達の秘密のヨットクラブ、白夜の中での宮廷、・・・。これら沈んでしまった世界を、ベーラ・レオニドブナは、「アトランティス（昔大西洋にあったとされた伝説上の大陸の名前　＊）」と呼んだ。彼女は、やたらに、「アーニヤ」の名前を連発した。アンナ・ビルボアのことである。皇后アレクサンドラ・フェドロブナの宿命の女友達である。そして、「サナ」。これは、皇后アレクサンドラ・フェドロブナのことである。

このように、モスクワの台所で、毎晩の話し合いー沈んだアトランチスへの旅ーが始まった。私はどん欲に、彼女の話を書き留めた。そして、今、あの悲惨な出来事の参加者達の、多数の追想記を読み上げた時、彼女の意見は、大きな魅力を持って、私には忘れずに、残っている。が、彼女は、参加者ではなかった。

残念ながら、彼女の意見は、非常に偏っている。「参加者のように、嘘を言う。」という公式を、私は判ってはいる。ベーラ・レオニドブナは、はたから見ると、好奇心旺盛な人物ではあるが、全くの同時代人である。

「アトランチス」の最後についての、ベーラ・レオニドブナの話のうちの１つ。

「革命後、ミハイルが私の夫になった。私達の結婚を、亡命新聞は「ボリシェビキの１つの勝利」と書き立てた。（ミハイルは、２０年代から３０年代における著名なジャーナリスト。テロルの時期に銃殺される。　著者）

ホテル「メトロポリ」に、当時、重要なボリシェビキが住んでいた。娯楽のために、彼らは、しばしば、新しい権力に協力的な作家、ジャーナリストをそこへ招待していた。ミハイルも、しばしば訪れていた。一度、ミハイルは、そこで、２人とあった・・・・。

１人は、エカテリンブルグの主要なボリシェビックであった。そこ、エカテリンブルグで、皇帝家族が銃殺された。もう１人は、銃殺を指揮した。

彼らは、全てがどのように進んだ・・・、かを覚えていた。砂糖を囓りながらお茶を飲み、砂糖を音を立てながらぽりぽり食べ、
弾丸が、女性から跳ね返され、部屋中を飛び回った、・・・・、ことなどを話していた。彼らを恐怖が襲った。彼らは、少年の息の根を止めることができなかった・・・。少年は、手で銃撃をかばいながら、床をはいずり回りった。射撃者達は気がついた：大公達は、ベルトをしていた。ベルトの中で、大量のダイヤモンドが、防壁の役割をしていたのである。ミハイルが話した。惨劇時の写真が必ずあるはずであると。「最後の皇帝を片付けたことを、彼らは本当に自慢にした。が、彼らは、殺人者としての汚名からは逃げ切れなかった。それ以上に、この殺人現場の指揮者は元写真家であった、ということです。」そして、ミハイルは、この写真を探した。」

お茶を飲みながらの、皇帝暗殺話、女性で跳ね返される弾丸、床の上の少年、写真、私にはもう忘れられないことばかりである。

その後、私の歴史古文書研究所で、秘密の「書き付け」について耳にした。皇帝家族射殺を指揮した元写真家が、書いたものです。彼の名前は、ヤコフ・ユーロフスキー。この「書き付け」に、彼は全てを、述べていた。

古文書実習をしていると、私は、十月革命中央古文書保管所にたどり着いた。そこで、無邪気に、ユーロフスキーの「書き付け」について質問をした。

「ユーロフスキーのそのような書類は、存在しません」　失礼な質問であることを強調するかのように、女子職員は毅然として返事をした。

しかし、私に、ロマノフ財団を教えてくれた。私が驚いたことには、全てが秘密扱いで

あった当時、これらの書類は明るみに出ていた。
　最初、私は、ロマノフ家の写真アルバムを、自分の目で確かめた。淡々とした顔をして、女子職員は、次々と、革張りで、皇帝紋章の付いたもの、付いていないもの、と、大きなアルバムを持ち出してくれた。が、１秒たりとも、彼女は、これらの写真を、私とだけに残すようなことは決してしなかった。最初は、冷たく、無表情で、

しかし、その後、奇妙で、消えてしまった生活を自慢するかのように、夢中になって、写真の各々を、私に説明をした。皇族の写真の古ぼけた冊子は、彼女（女子職員　？）が、自分の貧しく、地味な生活から、のぞき見られる窓となっていた。
　「彼らは皆写真を撮っていました。家族全員にカメラがありました。娘達、皇帝自身、皇后も写真を撮っていました。」　女子職員は、誇らしげに語った。

　写真、写真。背が高く細身の美人とハンサムな若い人－彼らの婚約の時。
　最初の赤ん坊－小さい鼻の女の子
　革製のソファーに座っている４人の娘。男の子が写っている。長い間待っていた玉座の後継者。犬と一緒の少年、大きな車輪の自転車と少年、当時の自転車は滑稽である。しかし、少年が、しばしばベットにいる時には、傍に皇后がいる。皇后は年をとったようである。カメラを見つめている、私達を見つめている。口の周りに深い皺、細い鼻は鍵に似ている。悲しさに満ちた、若くはない女性。
　ニコライと、将来の英国国王ゲオルグ、彼らはお互いに見合っている。２人は、おどろくほど、可笑しくなるほど、本当によく似ている。（彼らの母親は、姉妹であった。）皇帝狩猟の写真、大きな角を持った大鹿が、雪に横たわっている。休暇中の写真。ニコライが泳いでいる。水に潜り、素っ裸で泳いでいる。彼の背中からは、丈夫な体が見て取れる。
　私は、時々、これらの写真を思い出す。死んだ鹿と、裸の皇帝。そして、ニコライが、死んで、裸となり、彼の体が投げ捨てられた、暑い７月の大地の穴に、横になった時を、私は思い出した。

　その後、私は、彼の日記を読み始めた。

　１９１８年７月。チェコ軍団とコサック部隊が、エカテリンブルグに近づいた。ボリシェビキは、町を手渡さなければならない。ヤコフ・ユーロフスキーは、エカテリンブルグから、最後の列車で、立ち去った。皇帝専用の皮のボストンバックに、自分の荷物－射殺した皇帝一家の家族写真－を入れて運び出した。「秘密の急使」、ヤコフは、文書上で、公式にそう呼んでいた（？何を　＊）。
　ヤコフは、道中をどのように過ごしたのか。写真アルバムを見たはずである・・・・。古い写真は結構面白い。しかし、大事なのは、皇帝の日記を、ヤコフが読んだことである。皇帝の日記は、今後、そして永久に、ヤコフの名前と関連され続けるであろう。全世界が注目している、皇帝の生活を描き出している、皇帝の日記を、長い道中で、ヤコフは、どのような感情を持って、めくったのであろうか。

　１０月革命中央古文書保管所に、「ロマノフ財団」が集まった。私この財団を、「血の財団」と命名する。

　ニコライは、３６年間にわたり、中断することなく、日記をつけている。ニコライは、ガッチンスキー宮殿にいた、１８８２年に、１４歳の時に、日記を始め、逮捕されている５０歳の時、エカテリンブルグで、終わっている。
　５０冊のノートは、最初から最後まで、彼の几帳面な書体で書き込まれている。しかし、最後のノート、５１冊目は、半分までが満たされている。満たされている。人生が中断した。ノートには、空でぽっかりと空いたページが残された。空きページには、ニコライによって、前もって、大事に番号がつけられている。この日記には、熟考は無く、意見は希である。評価は小さい。日常の出来事の書き留めという、日記以上の何者でもない。しかし、そこには彼の声が残っていた。真実の話の不思議な力が。
　この口数の少ない、自閉的な人間が語る。
　私は彼の日記をめくる。＊＊＊＊＊＊。貴方は、他人の手を感ずる。１００年を経た手の接触を。

第２章「日記を始める・・・」
（ 注　年月日は全てロシア歴である）

著者は１８６８年５月６日に生まれた。
古い写真：レースのルバシュカ（シャッツ）を着た、縮れ髪の天使のような赤ん坊が、母が手にしている本を、のぞき込もうとしている。この時、ニコライ二世は１歳。
ほかの古い写真もある：流行の髪型をした若者。

１８８２年。ニコライ二世は、母からプレゼントとして、「思い出の本」をもらう。本は、象嵌の施された高価な表装をし、金色の裁断面をしている。
この贅沢な本が、ニコライの最初の日記本となった。１８８２年から、ニコライは欠かさずに日記をつけるようになった。ロシア史の運命の日、１８８１年３月１日。

１８８１年３月１日の、冷え冷えとして湿った夜、ペテルブルグ市のある部屋では、深夜目で灯がともっていた。前日の早朝から、絶え間なくこの部屋に、若者たちが駆け込んでいた。夜８時には、この部屋には６人が残っていた。４人が男で、女が２人。１人の女は、テロ組織「人民の波」の有名な指導者であるベーラ・フィグネール。後になって、彼女はこの日のことを、自叙伝に書いている。
もう１人の女は、ソフィア・ペロフスカヤ。彼女は、朝に仕事に直接参加する予定なので、周りのものは、彼女に早く寝るように説得した。
ベーラと４人の男たちは、夜中じゅう、仕事をしていた。朝には、灯油の空き缶に「ニトロゼラチン（爆薬の１種）」を充塡しきった。そして、４個の自家製爆弾を完成させた。
ロシアの歴史において、著名な改革者の１人であったアレキサンドル２世を暗殺することが彼らの仕事であった。この春に、皇帝はロシアに、要求されていた憲法を制定する準備をしていた。その憲法は、封建的専制国家を、文明的なヨーロッパの国家の１つへ導くものであった。しかし、若者たちは、その憲法は、社会に偽善の満足を与えるだけのものであると考え、ロシアを、この革命から回避させようとしていた。皇帝の改革は、若者たちにとっては、余りにも鈍すぎるものであった。若者たちは急いでいた。
その時までに、テロリストで革命家である彼らは、皇帝の暗殺を、既に７回企てていたが、全て失敗に終わっていた。その報いとして、２１人が死刑となっていた。彼らは再びペテルブルグの通りで、皇帝の暗殺に企てたのである。

その日、パブロフスキー連隊の兵舎では、若い兵士であったアレキサンドル・ボルコフが、衛兵として立ち番をしていた。エカテリニンスキー運河の方から、鳴り響く２回の爆発音を、アレキサンドルは聞いた。そして、煙がゆっくりと立ち上るのを見た。その後、アレキサンドルの脇を、警察署長の橇が駆け過ぎ去っていった。
皇帝警護隊中の３人のコザック兵が、瀕死の皇帝を支えていた。２人は橇の脇で、もう１人はその前で。兵の民族コートは、皇帝の血で、少し黒ずんでいた。皇帝の引き裂かれた足の筋肉から出血をしていた。橇は冬宮に向かっていた。「あそこで死にたい」、皇帝は何度も繰り返した。ペテルブルグ市の一室で自作された爆弾で、皇帝は瀕死の重傷を負った。爆弾は復活祭用の鶏肉に扮されていた。若者たちは、皮肉を込めて、「すばらしい復活祭のプレゼントであろう。」と言うことを忘れてはいなかった。

ボルコフの脇を、警護隊を伴い、冬宮へと馬車が疾走していった。馬車には、大柄で頭のはげた人物と、１３歳の子供が乗っていた。新しい皇帝アレキサンドル三世と、その日、ロシアの玉座の後継者となった息子のニコライである。

この日、衛兵として立っていた兵士アレキサンドル・ボルコフの全人生は、馬車に座っていた、この若い息子と関係することになる。
２人の君主殺しのうちの１人であるベーラ・フィグレールは、皇帝は瀕死の怪我であることを知った。このことは、この若い娘に、歓喜をもたらした。「興奮して、皇帝を殺した、と言うのがやっとであった。涙が出てきた。これで、若いロシアに、十年にもっわたって与えられてきた恐ろしい悪夢は中断した。私たちによって流された皇帝の血は、今までの間のこと全てを償うものである。」　皇帝を暗殺した若者たちは、幸福を感じながら抱き合っていた。

「改革者とは、運の尽きた人である・・・・」。これは、バクーニンの著名な「改革者入門」からの引用句である。この「改革者入門」によれば：改革者は、文明世界における法律や習慣と絶交し、革命の名の下に、全ての個人の生活と血縁関係を放棄しなければならない。社会を軽蔑し、社会に容赦なく向かい、社会から赦免を期待もしなく、死さえ恐

れない。人民の不幸を、全ての手段で増大させ、人民を革命突き進める。即ち、全ての手段は、革命という唯一の目的により、正当化される。
若者たちは、動かないロシアの馬車に血を塗ることにした。そして、将来の１９１７年における、エカテリンブルグ市の地下での出来事、悲惨な赤色テロルへ向かって動き始めた。

アレキサンドル二世皇帝は、宮殿で苦しみながら最後を迎えた。
ニコライは、自身の全人生において、祖父の流された血のことを決して忘れることはなかった。
血の流れる中で、ニコライは玉座の後継者となったのである。

「流れる皇帝の血」が、ニコライの日記の切っ掛けとなった。ニコライは皇帝の後継者である。今や彼の人生は歴史そのものとなった。新年から、ニコライは自身の生活を記録しなければならなくなった。

著者の家族
歴史家は指摘している：長い間に渡る王朝間の結婚の結果、２０世紀には、ロシアの王朝であるのロマノソフ家の血管内には、殆どロシアの血は残っていなかった。・・・・
しかし「ロシア皇帝」とは民族である。ロシア史の中で、エカテリーナ大女帝として賞賛されている、ドイツの王女（ドイツ貴族の娘であった。ロシアのロマノソフ家に嫁いだ。その後、ロシアの女帝となった。）は、自分を本当にロシア的あると感じていた。彼女の兄弟が、ロシアを訪問しようとしたとき、彼女は憤慨して語った：「何故来るの。ロシアでは、ドイツの兄弟がいなくても、十分やっていけているのに。」　ニコライの父、アレキサンドル三世は、外見でも、習慣から見ても、全てのロシア人が憧れる典型的なロシア貴族であった。ロシア皇帝のドイツ人としての血の中には、誇り高い「専制、正教、民族」が流れていた。
ニコライの母は、デンマークの王女ダグマラである。彼の祖母は、デンマーク女王である。この祖母は、「全ヨーロッパの姑」と呼ばれた。英国からギリシアまで全ヨーロッパ大陸を連結させているかのように、彼女のたくさんの娘、息子、孫たちは、全ヨーロッパの王宮で親類となっていた。
祖母の娘であるダグマラ王女は、最初、アレキサンドル二世の年長の息子、ニコライ（今までのニコライとは別人）と婚約をしていた。が、このニコライは、ニースで、肺病で亡くなった。アレキサンドルが玉座の後継者となった。爵位とともに、新しい後継者は、亡くなった兄貴の婚約者を妻とした：臨終の床で、死に際のニコライは、彼らの手を握り合わせた。デンマークの王女ダグマラは、マリア・フェドローブナ妃殿下となった。
結婚は幸せであった。彼らはたくさんの子供に恵まれた。アレキサンドルは、非常に家族思いであった：家族と政府において基盤を大事にすること。これが、彼の主要な戒律であった。
不変性が、将来、アレキサンドル三世皇帝となる、ニコライの父の主要な座右の銘であった。
改革、変更、調査が、アレキサンドル二世皇帝の主要な座右の銘となる。
祖父の女性遍歴には終わりがなかった。アレキサンドル二世のロマンスは、次から次へと続いた。美人のドルゴルーカヤ公爵夫人が現れるまでは。本当に驚いたことに、アレキサンドル二世は、新しい愛人を、心から信用した。子供が生まれた。２番目の皇帝の家庭ができた。アレキサンドル二世は、２番目の家庭に入り浸しとなった。そこへ、政府の書類までも持ち込んだ。革命家狩りが始まったとき、ニコライの祖父は、常識外れの一歩を踏み出した：安全のために、２つの家族を、冬宮に住まわせたのである。
１８８０年に、アレキサンドル二世の正妻であり、ニコライの叔母である、マリア・アレキサンドロブナがなくなった。
ニコライの祖父は、愛人と結婚をした。利発で、慎重な公爵夫人は、息子を玉座に着ける権利の放棄を急いだにもかかわらず、ご存じの通り、今日は不可能な事でも、明日になれば可能かもしれない。アレキサンドル二世は６２歳で、力にあふれ、健康であった。ニコライの父はにはどうでもよいことであった。「恥ずべき」結婚後、数ヶ月して、突然の、エカテリンスキー運河での爆弾の爆発。「罪深き皇帝に、天罰だ」、と周りで話しているのを、ニコライは聞いた。」

日記の表紙
１８８２年秋、ニコライは詩を歌っている。

自分の日記の表紙の裏側に、この詩を書いているほど、この詩にニコライは感動した。
≪私たちの誰かが隠れている間、私たちが歌う詩：

≪川の下手に、
カザン寺院の下手に、
灰色のカモが泳いでいる。
岸に沿って、
急な岸に沿って
若者が歩いている。
縮れ毛の若者が、
亜麻色の髪をした若者が
独り言を言っている・・・

・
・
・

ただ、髪をかきむしるだけ≫

犠牲となった若者の縮れ髪を櫛けずる、老婆と死についての、この民族詩が、ニコライの日記の巻頭となっている。

少年の日記

≪私の日記は、１８８２年１月１日から書き始めた・・・・。朝、チョコレートを食べ、近衛兵の予備役の制服を着た。 庭園を父と散歩した。木を切り倒し、鋸で挽き、大きなたき火を起こした。９時半頃まで寝ていた。
パパとママと私は、２組の代表団と謁見した。≪ボロネジの農民より、皇太子殿下へ。パンと塩とタオルをどうぞ（ロシアの歓迎儀式の一つ）≫と書き込まれた、精巧に作られた木製の板を、私に進呈した。≫
ガッチナ市での遊び、同じ年の人ー大公のいとこーの訪問。ロマノフ家は大きい。
≪朝、小さい木製の鳥かごに、カナリアを移し住まわせた・・・・
サンドロ、セルゲイ、・・はスケートをし、ボール遊びをした。パパが去ると、私たちは雪合戦をした・・・≫
子供たちは遊ぶ・・・・毎日が休日である。セルゲイとサンドラ（アレキサンドル）は、彼（？）の祖父の実の兄弟であるミハイル大公の息子。
ニコライ（あるいはニキ、ニコライをみんながそう呼んでいる）は、ミハイル家の人とは特別に仲がよかった。セルゲイ、サンドロ、ゲオルギーは日記中の恰好の題材であり、子供遊びの友達であり、青年期の友人であった。
著名なリベラルな歴史家であった、ニコライと同名の、ミハイル家の年長の兄は嘲笑的に彼らの遊びを観察している：彼（？）は、皇帝ニキに、いつも軽い皮肉を持った態度をとろうとしている。
このような楽しく、笑いの絶えない仲間たちは、その後・・・・・

≪その後≫**とは**、銃殺されたニコライとゲオルギー・ミハイロビッチが、ペテロパブロフスキー要塞に、戻るときのことである。もう１人の遊び友達であった、セルゲイ・ミハイロビッチは頭を撃ち砕かれ、いまだ坑道の底に眠っている。

≪庭で働いた。お互いに倒れかかっていた４本の木をきれいに片付けた。その後、大きなたき火を起こした。ママが、たき火を見に来た。たき火がママを引き寄せたのである。≫
深夜、大きなたき火が、燃え上がっている、燃え上がっている・・・　数十年後、ほかのたき火が、この灰色の目をした少年を焼くことになる。そのたき火で皇帝が殺される。

ニコライの生活状況

これは全てガッチナ市（サンクトペテルブルグ市の南西部の都市）でのことである。父（アレキサンドル二世））の殺害後、アレキサンドル三世と、彼の家族は、ここで喪に服した。ペテルブルグ市には、新年から復活祭前の大祭期まで、姿を見せた。その時には、

外国の大使たちを驚かせるような贅を尽くした宮廷舞踏会が催される。しかし、これはショーウインドウのようなものである。家族の生活拠点はガッチナ市であった。家族は豪奢な宮殿に住んでいるが、宮殿の儀礼用ホールは閑散としている。アレキサンドルと彼の家族は、以前に従僕の部屋であった中二階に住んでいる。苦労してピアノを入れた、狭い小さい部屋に、アレキサンドルの大家族が住んでいる。
殺された父の影が、アレキサンドル三世に付きまとう。塀に沿って番兵が鎖のようにいる、宮殿の周りには近衛兵が、公園内にも近衛兵が配置している。このような監獄のような状況下で、若いニコライの生活が始まっている。
その間に、前述しているアレキサンドル・ボルコフは昇進をし始める：ボルコフは宮殿の内部警備隊に勤めていた。皇帝が魚釣りをしているのを、湖のところで、深夜過ぎに、ボルコフは見ている。
ガッチナ宮殿での月の夜。ボルコフは岸に、警備隊員の数を少なく見せるように、１人で立っている。本物の警護隊員、３０名は、湖の周りの茂みに隠れている。皇帝の乗っている船の後ろには、護送艦に乗ったほかの隊員が。
皇帝の乗っている船では、雇われ漁師が、灯火を照らしている。魚は光の中で泳いでいる。皇帝が、浮き上がってきた魚を、満身の力を込めて、やすで突く。
魚釣りと狩猟。これらの仕事は、政務さえ押しのける。≪ロシア皇帝が釣りをしている間は、ヨーロッパは待機している≫。　絶大なる君主で、地球の６大陸の主人の、この格言には、世界の新聞は触れない。

ニコライは狩猟と魚釣りを行う、しばしは弟のミハイルと一緒に。ミハイルは元気で腕白である。父と母のお気に入りである。
皇帝が、客人と一緒に、バルコニーでお茶を飲む。下では、ミーシャ（＝ミハイル）が遊んでいる。贅沢な暇つぶし：父がじょうろを取り、上から子供に水をかける。ミーシャは満足し、大笑いをすると、皇帝も笑い、客人も笑う。
と、突然、予想外の反駁をする：≪じゃー、パパ、パパの番だよ≫。皇帝はおとなしくじょうろを差し出す。ミーシャは、パパに、足から頭まで水をかける・・・。
しかし、父の鋼鉄のような意志が、ミハイルの子供としての自主性をへし折る。２人の兄弟を、優しく、弱々しく、内気に育てている。頑固な父の元で、子供はこのように育つことがよくある。

つまり、当時、ニコライは少年として、つらい立場にあった：（皇帝は）お前（＝ニコライ）は好きではない、ミハイルは好きだ。いやいや、これらのことが、ニコライを、内気以上に、意地悪くも、陰気にも、しなかった。ただ、ニコライは、心を隠した人となっていった。
このようなことから、ニコライは愛を求めた！　ニコライの妻となった女性は、母性本能で、このことを感じた。≪女性それぞれは、自分を愛してくれている人に対して、母親としての感情を持っています。これは女性の本性なのです。女性が本当に愛してるならば、そのように感情を表現します≫（アレキサンドラ・フェドローブナ（＝ニコライの妻）の手紙より）
父は、著名であった、宗務院の検察官長である、パベドノースチェフを、ニコライの家庭教師とした。
アレキサンドル三世は、わかりやすい論理を持って、玉座に着いた：改革は父のものであった。どうなったのか？　殺人で終わった。パベドノースチェフを中枢に召還した。大宗教裁判官としての地位で息絶え絶えとななった、突き出た両耳を持った痩せた老人である。
パベドノースチェフは自身の考えを述べている：ロシアは特殊な国である。変革、出版の自由は、ロシアでは、必ず堕落と混乱で終わる。

ロシアの社会評論家は、パベドノースチェフについて、≪彼はマローズのように、さらなるロシアの腐敗を止めるであろうが、それからは何も生まれないであろう≫、と評論している。しかし、マローズのような彼でも、既に、帝国に向かって突き進んできている革命という発光物体の強烈な明るさを、感じていた。誰がそれを止められるのか？　全く皇帝としての資質も持っていない、このかわいい少年か？パベドノースチェフは、将来の皇帝である、ニコライを教育したが、ニコライを好きになることはできなかった。
ニコライの方も、家庭教師に愛情を見いだせなかった。
愛の代わりに、ニコライが得たものは、軍であった！
アレキサンドル三世は、≪仲介者≫というあだ名をいただいた。三世は戦争避けた。が、軍は社会全体に、以前にも増して高くそびえ立った。軍は、いつでも、ロシアの力の根源である。ビッテ伯爵は書いている、法は無い、文化もない、あるのは軍だけである。陸軍

幼年学校の教科書には、≪ロシアは貿易の政府でも、農業の政府でもない。軍の政府である。その使命は・・・、≫と書かれていた。軍とは、全てにおいて、服従と実行である。ニコライの少年時代には、この２つの性質を持っていた軍が、そのうち、破滅的な方に成長していく。
　玉座の後継者は、親衛隊勤務に就く。１８世紀あたりから、ロシアにおいては、最上流家族や、最富豪家族では、自分たちの子供たちを、ペテルブルグの親衛隊に入隊させていた。大酒飲み、どんちゃん騒ぎ、ジプシー、決闘、が、親衛隊における紳士としての一式であった。ロシアにおいては、全ての宮廷革命は、親衛隊が行っている。親衛隊員たちが、皇帝ピョートル三世と、皇帝パーベル一世を殺害し、玉座に、エリザベータと、エカテリーナ二世を就けた。が、親衛隊は、宮殿に進軍しただけではない。ロシアにおける大戦争においては、親衛隊は真っ先に進軍をした。
　新鋭大隊の混成中隊で、ニコライは勤務を始めた。ニコライは、第一半個中隊と第二半個中隊・・・を指揮した。それらの中隊に、前述した兵卒アレキサンドル・ボルコフがいたのである。今では、ボルコフは下士官であった。皇帝の別荘で、ボルコフは、ニコライに、行軍術を教えている。
　ニコライは肉体訓練にあこがれを持っており、根気よく練習をしている。≪行軍一点張りの拷問≫を、弟のゲオルギーは、灌木の陰から見ている。ゲオルギーは万病持ちであった。自分の病弱さをひどく恥ずかしがり、隠れながら、兄のすることを灌木の陰から、有頂天になって見守っている。

≪私は２０歳になった、全くあのベテランのようにしている・・・≫
　１８８８年５月６日。≪私は２０歳になった、全くあのベテランのようにしている・・・≫
　５月７日。≪仮装舞踏会を私は気に入った。ご婦人たちは白いドレスを着、男性たちもきれいに着飾っていた。マズルカやワルツを踊った。≫
　舞踏会、連隊・・・・。生活は、毎日が祝日のようなものである、が。
　１８８８年１０月１７日に、ニコライは幸運にも、死を免れる。ハリコフ市の近郊で、皇帝専用列車が、大事故を起こしたのである。（ニコライの人生において、この１７という数値は、不幸の数値として初めてのものとなっている。）
　≪皆にとって運命の日。全員死亡していてもおかしくはなかった。が、神のご意志でそうはならなかった。朝食の時に、私たちの乗っている列車が脱線した。食堂車と客車が壊れた。私たちは皆無傷にすんだ。しかし、２０名が死亡し、１６人が怪我をした・・・・。ラゾバヤ駅で、感謝の短い祈りと、死者を追悼する祈りを捧げた。≫
　そして、再び、祝日が続く：１８８９年。
　≪深夜、１時半に舞踏会から戻った。１時間目の授業を寝過ごした。≫
　≪非常に楽しく、ジプシーの踊りに見とれた。２時に帰宅した。≫
　≪ガッチナ宮殿で目が覚めるとは驚きだ。太陽の光に照らされている私の部屋の様子。お茶の後、ママの所で、フェンシングをした・・・。≫
　≪我慢できなくて、たばこを吸い始めた。これぐらいは許されるであろうと思っているが・・・。≫
　≪深夜に、パパから黒ライチョウが届いた。　仮小屋に座った。鳴き声がすさまじい。≫
　≪５月６日・・・。法制審議会会員、及び政府委員会会員となる・・・。≫

　驚くことに、内気で、気の優しいニコライが、喜んで、勝手気ままな親衛隊の世界に飛び込んでいる。ニコライの連隊司令官は、父の弟である、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公であった。
　自身の死まで、ニコライの意志の中では、叔父は指揮官であり続けた、彼の多くの欠点にも関わらず。堂々たる大物で、　反駁を許さず、厳しい指揮官であったセルゲイ・アレクサンドロビッチ大公は、本当に不幸な人であった。（彼は信心深く、死ぬまで自信の性癖に苦しんだ。男同士の友情で閉じられている親衛隊は、男色と暴飲に汚染されていた。）
　ロシアの親衛隊の暴飲は伝統である！　英雄で、放蕩者の軽騎兵デニス・ダビドフの詩がある！　詩に曲をつけて、彼らは親衛隊兵舎で、夢中になって歌った。

≪おじさん！　貴方のことを覚えているよ、私は。
杓子で、少し飲み、
明かりを前に座っている
青みを帯びた赤鼻をした貴方を
・・・・・・

再び、柄杓が微かに動く・・・・ ≫

ニコライの日記から（クラスニイ村での演習時）：
≪夕べ、シャンパンを、１２５本飲み空けた。師団の当直であった。１時に、演習場に、中隊を引き連れて出発した。５時に、土砂降りの雨の中で、軍学校の閲兵式があった・・・≫
夜には、また柄杓がわずかに動いた・・・
目が覚めた。
デニス・ダビドフが遺言をしている：「肘酒」（肘の長さにコップを並べ、一度に飲み干す）を飲んだ。「階段酒」（階段にコップを並び上げ、コップを空にしながら階段を上っていく。しかし、しばしば意識を失って落下し、上までいけなかった。）を飲んだ。「狼の如し」（丸裸になり、厳しい寒さの中へ、馬で駆け出した。世話好き者が、タライにシャンパンを入れて、この親衛隊員達に持ってくる。彼らは、タライに入っている酒を、狼のようにがぶがぶ飲み、そして、飲み干す。）も飲み干した。セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公は、この奇妙な慰みを、個人的には、名誉なことであると思っていたようである。
ニコライの日記より：
≪こんなに多人数のジプシーを見たことはなかった。４つの合唱団が参加した。ご婦人方と夕食を食べた。朝の６時頃まで酒の中にいた・・・≫
いささか気味が悪く、騒々しい気晴らしの中で、ニコライは、穏和で、汚れることなく、うまく過ごすことができたが・・・１人ぽっちであった。
愛への期待感、理想的な愛・・・・
≪どう説明していいのか、わからない。が、何か気分が盛り上がってきた。気が重くはないが、楽しくもない。殆ど雪は溶けた、茶を飲み、読書をした。≫
このニコライの孤独を破ったのが、彼女であった。

ネフスキー大通りを、群衆の中で、早足で、背はそれほど高くはない若い士官が、歩いていた。
この時、ペテルブルグ特別市長の馬車が、ネフスキー通りをゆっくりと疾走していた。特別市長は、道行く人々を注意深く見ていた。ようやく、彼は群衆の中に、若い士官を見つけた：馬車は止まった。宮殿の戻るようにとの父の命令を、特別市長は、しっかりと伝えた。
ベーラ・レオニードブナは語っている：
ニコライは散歩が好きであった・・。いい加減なデマが出回っていた：ニコライは散歩中に、ヨーロッパ美人と出会った。そして、恋愛が始まった。ここの恋愛が、ペテルブルグ市では、多くの人の話題となった。しかし、ニコライの父は、いつも通り、厳格であった。このヨーロッパ娘を、家族共々、退去させる事に決した。このようなことになったとき、ニコライは彼女の家にいた。ニコライは特別市長に言った、≪私の目の黒いうちは許さない≫ しかし、死ぬまでのことではなかった：ニコライは聞き分けの良い息子であった。ようやく、ニコライを説得し、アニチコフ宮殿にいる父の所へと連れて行った。ヨーロッパ娘は首都から去っていった。

≪アリクス・Ｇ≫（若者（＝ニコライ）の日記）
≪アリクス・Ｇ≫－ニコライは、日記の中で彼女をそう呼んでいた。
私は、古文書保管庫の椅子に座っている。目の前には、書類の山がある。全部、アリクス・Ｇが残したものである。これら書類は、長い旅をしてきた。惨劇のあったイパチェフ邸の塵が書類の中に入っている。
数百以上もある、ニコライからのたくさんの手紙。残されている彼女の日記。皇帝が殺された１９１７年３月のはじめに、彼女は自分の日記を焼却した。ただ、１９１７年から１９１８年－彼女の人生の最後の２年間－にかけての短いメモが残っている。

神学者と哲学者の詩からの抜き書きや、彼女が書き写した好きな詩人の句のあるノート：マイコフ、フェット、レールモントフ、プーシキン、コンスタンチン・ロマノフ大公（２０世紀初めにおける著名な詩人、匿名＜Ｋ．Ｐ＞で書いていた）、ブラニツカヤ、又、プーシキン、又、フェット、又、Ｋ．Ｐ．。
１冊の特別なノートがある－同じく格言集である、が、アリクス・Ｇの意識や心に多大な影響を与えた、予想もしない哲学者の格言集である。その人物こそ、読み書きのできなかったロシア人のグリゴリー・ラスプーチンである。

ヘッセン・ダルムシュタット家で、大公爵エルンスト・リュードビグ４世とアリス・アングリスカヤの間に、１８７２年に、娘が誕生した。

木々の生い茂る丘陵は、暗いレイン谷間に下っている。ゲーテが愛した土地である。この地に、ヘッセンの大公爵領であるダルムシュタット市－小さなドイツ政府の小さな首都－がある。１８７２年には、町は花で埋もれていた－宮殿博物館には、ハンス・ハリベインの優しい「聖母」が保管されていた。
ヘッセン国王であった父アリクス・リュードビグは、イギリスのビクトリア女王の娘、アリサと結婚をした。有頂天のアリサ・アングリスカヤは、著名であったドイツ人の神学者であり、かつ哲学者であったダビット・シュトラウスに対する、激烈な自身の熱狂さ（とはいえ、プラトニックであったが）で、高名であった。これは崇拝であった。彼女の娘の、グリゴリ・ラスプーチンに対する崇拝を思い出させる。アリサ・アングリスカヤに早い死をもたらした、神経過敏症と重症の頭の病を、彼女の娘である、アリサ・ヘッセンスカヤが引き継いだ。母は、娘に自分の名前を、与えただけではなかった。
　この親子伝来の熱狂性に、１００年の記憶が混じっていた。アリクス・Ｇには、マリア・スチュアルト女王の血が流れていたのである。（血友病遺伝子の持ち主）

母は、３５歳で亡くなった。大家族が残された。アリクスは妹であった。敬意を表して、おばあちゃんと呼ばれ、イギリス女王となった、長姉のビクトリアは、イギリス海軍司令官であったバッテンブルグ家の王子と結婚をした。２番目の姉エーラは、大公爵セルゲイ・アレクサンドロビッチの妻となる準備をしていた。最後の、３番目の姉イレンは、ドイツのウイリヘリム皇帝の兄弟である、ヘンリフ王子の妻となった。このように、ヘッセン家の王女達は、生まれながらにして、ロシア、イギリス、ドイツの宮廷と密接な関係の中にあった。
彼女のおばあちゃん－有名なイギリスのビクトリア女王・・・・。ビクトリア時代－風俗、家具様式、生活様式。ビクトリア女王は、非のうちどころ無く、伝統を守っている：権力は国会に属しており、賢明な助言－女王に。

アリクス・Ｇは、リベラルな女王の、愛しい孫である。金髪の美人娘・・。明るい性格から、イギリスの宮殿では、彼女のことを「日光の子」と呼んでいる。いっぽう、ドイツの宮殿では、悪戯や反抗から、彼女を「いたずらっ子」と呼んだ。姉妹、兄弟、父から引き離され、一人っ子となったアリクスは、気楽で楽しかったのであろうか？　祖母のビクトリア彼女をそのように見ていたのであろうか？
しかし、彼女は、いたずらっ子であった。
ビクトリア女王は、ドイツ皇太子に敬意を持っていなかった、特にウイリヘリム皇帝には。イギリス流に話し、考えるアリクスは、年老いた女王の棘のある冗談を、笑みを浮かべて最後まで聞かなければならなかった。果たして、彼女は懐かしがらずにいられたのか：父、彼女の家族。大家族は消滅し時には、彼女が６歳であった。
結婚をすると、彼女は大家族を作ることに努力を傾けるようになる。

一人っ子の娘は、多くの親類の宮殿を訪問している。そして、１８８４年、１２歳になったアリクスは、ロシアを訪れる。
アリクスの姉エーラが、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公と結婚する。ウイリヘリム皇帝は、小さい金髪の綺麗な娘、アリクスのロシアの宮殿への出現を、注意深く見守っている。ロシア皇帝の弟である、セルゲイ・アレクサンドロビッチの、ドイツ王女との結婚は、後に続くことになる。ロシアの玉座の継承者（＝ニコライ）はまだ１６歳である。ヘッセン一族は、ロマノフ家（＝ロシア皇帝家）の歴史において、特別な一族である。パーベル皇帝の最初の妻、ニコライの祖母であるアリア・アレキサンボロブナ皇后、は共にヘッセン家の王女である。
このようにして、彼ら、アリクスとニキ（＝ニコライの愛称）は出会った。
牧歌：ニコライはアリクスに一目惚れをした。小さな皇帝の別荘「アレキサンドリア」がある、ペテルゴフ市に来ていた日であった。
ついでながら、結婚後１年ほどして、ニコライとアリクスは、この別荘「アレキサンドリア」を訪れている。ニコライは日記に書いている：≪一日中雨が降った。コーヒーを飲んだ後、私たちは２階に行った。１８８４年に、２人の名前を刻んだ窓枠を見た。≫（アリクスは、壁に、宝石の付いた指輪を描くのが好きであった。冬宮の豪華な窓で、彼女の自筆に出会うことができる。）
後になって、貴重な思い出の残されている古い「アレキサンドリア」別荘を、２人は大事にしている。
１８８４年のその日、２人は窓を見つめている。２人は窓のそばに立つ。彼らの運命の

始めの場所である。
　その後、ニコライは自分の妹のクセイニアと相談した、余り社交好きではなかったイギリス育ちのヘッセン家の王女（＝アリクス）は、このクセイニアとだけは親しくしていたからである。クセイニアは兄に助言を与えた。
　ニコライは、母から、ダイヤ付きのブローチを貰い、それをアリクスにプレゼントした。彼女は受け取った。ニコライ嬉しかったが、ニコライはアリクスを未だ良く分かってはいなかった。彼女の意識は、清教徒のイギリス宮殿で培われていた：頑固さ、好戦的な厳しさ、横柄さ－イギリスの王女の性質はそのようである必要があった。アリクスは、あるまじき行為をすることに決めた。次の日、アニチコフ宮殿での子供のダンスパーティで、ダンスを踊りながら、アリクスは、ぶっきらぼうに、ニコライの手にブローチを突き返した。何も言わずに。沈黙が支配した。
　　ニコライは、黙って、このブローチを、妹のクセイニアにあげた。
　１０年後に元へ戻して貰う。このブローチは悲惨な運命を味わうことになる。

　５年後、１７歳になったアリクスは、再びロシアの宮殿を訪問する。アリクスは、姉のエーラの所にやって来る。もっとも大事なこと－それは見合いであった。これまでの年月の間、ニコライは若い美人への思いを持ち続けていた。そして、遂に、ニコライは本望を遂げた。

　＜魅力が無く、無表情で、冷たい目をしている。背筋をぴんと伸ばしている。＞　王女は皇后を好きではなかった。皇后－母親の声はいつも大きく響き渡った。
　全ては単純であった。政治である。アレキサンドル３世の政治－ロシアとフランスとの同盟。オレアンスク家の王女、フランスのパリの公爵の娘－ロシア皇太子の妃としてふさわしい相手であった。
　国においても、家族においても、権力のある皇帝に、誰も反抗することはできない。気の弱いニコライでは尚更であり、ニコライはもめ事を嫌っている。ペテルゴフ宮殿で、父と息子の間で、最終的な話し合いが行われた。ニコライはアリクスとの結婚を諦めることに、従順に従った。が、オレアンスク家の王女を、頑なに拒否した。ニコライは第３の道を選択する。待つこと、黙って、不平を言わない、展望もない。神が自分とアリクスを結ばせるまで、ただ待つこと。これが唯一、ニコライに残された方法であった。静かに、平成に、騒動を起こさず。
　１８８９年のニコライの日記は、若いアリクスの写真で始まっている。ニコライは、アリクスの出発後に、この写真を貼り付けた。ニコライはアリクスを待つことにした。
　姉のエーラ（ロシア正教へ改宗後、エリザベータ・フェドローブナ大公爵夫人となる）は、アリクスが、求愛を断って、不幸な状態から脱することの手助けをした。実際、アリクスには、予想されるどんな結婚の話も進まなかったし、進めることもできなかった。アリクス自身は、自分の宗教を変えるつもりもない。
　アリクスはイギリスに戻る。もっとも驚いたのは、何とも奇妙な安堵感であった。アリクスは思った：お姉さんは正しい、お姉さんは簡単には宗教を変えることはできていない。お姉さんの人生において、信仰は大半の部分を占めている。

　１年後の、金髪娘のアリクスの訪ロにおいては、彼女と会うことが、傷心のニコライには、許可されていない。
　アリクスは、モスクワ郊外にある、イリンスコエ領地に住んでいる、姉のエーラの所、に滞在した・・・。
　≪１８９０年８月２０日。おお神よ！　私は、なんとイリンスコエ行きたいことか。今彼女を見れないならば、そして、さらに１年待たないとしたら、これは、余りにも残酷すぎる！！！≫（絶望から、ニコライは感嘆符を３個も記している。）

　イリンスコエ領地は、今ではモスクワ市にある。アリクスは、数週間この領地で生活をしている。驚きを持って、領地における姉の状況を見ている。ドイツのダルムシュタット、イギリスのロンドン、そしてロシアのペテルブルグの関係は、緊密であるが、詳細はお互いに良く理解をしていない。エーラの結婚は、夫の性癖のために、虚構のものであった。エーラは決して子供をもてない運命であった。これに対して、夫のセルゲイ・アレクサンドロビッチは、彼女を大宴会に引きずり出したり、根拠のない嫉妬を示している。
　アリクスは驚愕を持って見ている：姉のエーラは幸せであり、彼女の目は輝いている。彼女は夫を愛している。というのは、神がそのように命じているからである。不幸な夫を愛することは、神の戒律を実行することである。人生におけるはかない喜びと、神に帰依する永遠の喜び。
　この時まで、イリンスカヤ教会が建っている。そこでは、蝋燭が燃えており、聖歌隊の

歌声が響き、２人の姉妹はこの教会で祈った。

ニコライは、「従順な反乱」を続けている。このように、ニコライは、父の命令を実行していた。が、ニコライに、アリクスと会うことは禁止できても、ニコライがアリクスを待つことを禁止することはできないと言うことである。
日記より：
≪１８９０年１２月２１日。ママの所で、夕食食べながら、今時の若者の家庭生活について、あれこれ言い合った。偶然に、話は、私の心の心線に触れた。夢や希望にも触れた。それらを、毎日毎日、私が生き甲斐としている。ペテルゴフ宮殿で、私が、これについてパパと話した時から、もう１年半が経過した。悪くも、良くもなっていない。何も変わっていない。私の夢は、何が何でも、アリクスと結婚をすることである。私はずっと彼女を愛している。彼女が、ペテルブルグで６週間の冬を過ごした、１８８９年の当時と比べると、思いは寄り深く、より強くなっている。私の心に秘めた夢の実現は、不可能であると自分をだますことに努力しながら、私は、長い間、自分の感情に反抗してきていた。彼女と私の間にある唯一の障害、或いは深い崖は、宗教の問題である。この障壁以外には、何の障壁もない。私たちは相思相愛であると、確信している。全ては、神の意志である。神の御慈悲を期待し、私は平静に、従順に、将来を見ていく。≫

ニコライに気晴らしをさせるため、ニコライを旅行に派遣する。
地中海、アドリア海、ベネチア・・・。生活は祝日！　舞踏会！　舞踏会’
≪ゴンドラで、上陸した。宮殿、教会、アカデミーを見学した。運河を乗り回した。この町には、奇妙な印象が残った。広場に座り、コーヒーを頂いた。≫

ニコライがペテルブルグに戻ったとき、何も変わっていないことを、父は認識した。即ち、行動するべきと時だ。
直に、ニコライの日記には、もう１人の重要な人物「マレンカヤ・Ｋ」が出現する。

≪私は、マレンカヤ・Ｋを熱愛している≫　（マレンカヤ・Ｋ＝マチルダ・クシェシンスカヤ）
ペテルブルグの３月の夕べは忘れ去られ、速歩で走る馬が、有名なヨットクラブに近づいて行く。（親衛隊の優秀な士官、皇帝の随員、皇帝の家族がクラブに入っていた。）
１８９０年３月に、マレンカヤ・Ｋの名前が、ここで初めて響き始めた。
クラブの全会員は、バレー狂であった。ペテルブルグバレー学校のあった通りは、１００年以上にもわたり、首都のしゃれ者の散歩コースであった。ペテルブルグの上流階級の古い伝統：愛人にするならバレリーナ。
親衛隊と同じように、バレーは宮殿と密の関係にあった。大公・・（・・には色々な名前を入れることができる）はバレリーナに夢中になり、彼女と公然と同棲をし、彼女に家を買って上げ、彼女との間に子供をもうけた。これに関するスキャンダルの歴史書は長くなる。帝国劇場の支配人は、外交官で戦略家でなければならない。いつでも、自分の部下と、皇帝家族との相互関係の複雑な配置計画に精通している。バレーに行くと、観客は、まず最初に、「高貴な方の臨席」に興味を示す：誰が皇族席に座っているか。しばしば、これが、バレリーナの地位を決めている。

ベーラ・レオニードブナの話から：
＜彼女は美人ではなかったし、足も短かった。が、目！　大きな目をしていた。　２つの深淵のような目で、彼女は人を惹き付けた。彼女は小柄な魅力的な女であった。彼女はイタリア人女性の元で勉強をし、高度な技術を持っていた。彼女は、かって、３２回のフィエッテを踊った。嵐のような拍手が鳴り響いているとき、彼女は、かわいらしくもう一度これを繰り返した。誰だかが、彼女について語っていた：＜彼女はバレーはまあまあ好きであり、人生は特に好きであった。＞　逆に、彼女は人生はまあまあ好きであり、バレーは特に好きであった。全人生において、彼女は大バレリーナになろうとしていた。ステージで、成功を彼女にもたらすようなこと全てに、彼女は物惜しみをしなかった。が、個人生活では、控えめであった。劇場では、彼女は万事気に入るようにしていた。プレゼントをあげ、劇場の労働者達やメーキャップ係達に優しくしていたが、彼らは彼女を好きではなかった。それ以外に、世間では、不平を言うのがはやった：未来の皇帝が、彼女を好きになったとき、彼女は踊りに気がなくなってしまった。私の友達のバレリーナが、コッソリと彼女に注意をした。自分の劇では、私の友達は、たくさんの花束を貰った。メモに：＜マチリダ・クシェシンスカヤ様へ　貴方に感謝をします。彼女は華麗に生きることができた。目の特徴から、彼女を「鹿公園の妖精」と呼んでいた：フランスの皇帝リュードビック１５世は、鹿公園に、自分のハーレムを持っていた。

バレー一族について。彼女の父は、ポーランド人のフェリックス・クシェシンスキー。ペテルブルグは、マズルカ・ダンスを踊ることを彼から教えられた。フェリックスは、当時の著名なバレリーナと一緒に踊った。世紀末には、皇帝劇場で、フェリックスの子供達でるヨシフとユーリアが踊っていた。（ユーリアの妹が、脚光を浴びるようになってからは、ユーリアはクシェシンスカヤ一世と呼ばれるようになる。）

日記より：
≪１８９０年３月２３日。エラギン島に、若駒の引く橇で立ち寄った。新しいトロイカ馬車で戻った。８時に軽い食事をした。劇場通りへ、芝居を見に行った。こじんまりとした歌とバレーが演じられた。生徒達との夕食は非常に楽しかった。≫
よく分からないこの文章の後ろに、ロマンの始まりが隠れている。

マチリダ・クシェシンスカヤは１８７２年に生まれた。彼女は、１００歳にあと１年というところで、１９７１年に、パリで亡くなっている。パリで、マチリダは、玉座の後継者に対する若いバレリーナの恋についての感動的な歴史である、回想記を書き上げる。彼女は、１８９０年３月２３日の夕べについて書いている。
皇帝と継承者が臨席した、卒業ダンスパーティの後、食卓の用意がなされた。突然のことに、彼らは夕食に残った。特別席に、彼らを着席させると、皇帝が問いただした：「クシェシンスカヤ２世は何処か？」
皇帝のテーブルに、若いバレリーナを案内した。皇帝は、彼女に少しお世辞を言い、彼女の父と知り合いであることも付け加えた。皇帝である父は、後継者である息子と並んでこのバレリーナを座らせ、冗談半分に語った：「ただ、余りいちゃついてはだめだよ。」
若いバレリーナが驚いたことには、その夕べ中、ニコライが黙って、彼女のそばに座っていることである。

クシェシンスカヤのロマンチックな話を、俗話としよう。皇帝自身が、娘を、息子と並んで座らせ、餞の言葉さえ贈っている：「いちゃついてはだめだよ」
ベーラ・レオニードブナ：＜これは普通のことです。裕福な家庭においては、若者が成長すると、家に美人を集める、より重要なのは、処女の召使いを集める。当時は危険な時代であった。＞
梅毒は、数千の若者の命を奪い去り、暴飲と淫売屋通いは親衛隊の日常生活となっていた。後継者の健康は、国家の運命に関わるものであった。ユダヤ人との関係も危惧する兆候にあったし、家長や国の長などは、息子のことを心配していた。クシェシンスカヤはすばらしい候補である：バレーの将来の星とのロマンは、青年の経歴を飾ることができた。しかし、重要なことは、ヘッセン家の王女のことを、この青年に忘れさせることであった。これ故、ダンス学校来訪を思いついたのであった。

若いバレリーナは、遊びの申し合わせを理解していたのであろうか？　いや、彼女にとっては、ロマンスの光輪の中にいるようなものであった：相手は、後継者であるロシア皇太子である！　成人が行う遊びであった。しかし、どう考えても、遊びは遊びであった。

小柄で大きな目をした娘は、夏まで、ロマンスを継続させることができた。１８９０年の７月に、マチリダ・クシェシンスカヤは、マリンスキー帝国劇場に、団員として採用された。クラスニエ村で、親衛隊の演習が行われた。それに、ニコライも参加をしていた。その地で、帝国バレー団が、夏のシーズンのバレーを踊った。
幕間に、何をするのか、彼女は分かった。大公達は、楽屋に立ち寄るのが好きであった。彼らと一緒に、多分彼も来る。彼が来たがっていることも、彼女は分かっていた。
彼はやって来た。このようにして、２人は楽屋で会った。彼は何かどうでも良い言葉をしゃべった、が、彼女はじっと待った・・・。次の日も、彼は楽屋にやってきた。そして再び－何のことはない。ある時、楽屋に、彼女を引き留めた。火照った体で、目を真っ赤にして、ステージに急いだ・・・自分を求める内気な求愛者を逃げていくことを心配しながら。ニコライは既に立ち去っていた。ニコライが彼女に会っているときには、ニコライから、頼りなさや、焼きもちがほとばしり出た：「君は、只いちゃついているだけなんだ！」　そして、当惑しながら、走り出ていった。このようにニコライは弁明をした。

当時、帝国劇場の管理部を、フセバロジスキーが指導していた。彼は裕福なロシア貴族として生活していたが、みんなが驚いていたが、女優を追い回すことはなかった。彼にはほかの熱を上げるものがあった：彼は美食家であり、フランス料理のコックを雇っていた。彼は、フランスのコメディとイタリアのオペラを好んでいた。しかし、アレキサンドル三

世は愛国者であった。それ故、帝国劇場では、民族文化が支配していた。下手なロシアのオペラを、ロシアの劇作家オストロフスキーを、好きにならなければならないのは、フセバロジスキーにとっては、不幸なことであった。彼はいつでも、皇帝を満足させたがっていたので、準備には怠りはなかった。
それ故に、彼は、直ぐに新しいバレリーナに気がついた。

皇帝の家族は、１階左の特別席を使用した。このボックス席は舞台の隣である。新人バレリーナであるクシェシンスカヤ２世は、ダンスを踊りながら、父と一緒に席に着いている後継者を、自身の大きな目で、穴の開くほど見た。怖い皇帝から、何の叱責も受けなかったのは驚きであった。フセバロジスキーは全てを理解した。この瞬間から、彼はこのバレリーナの出番を多くするように、気を配った。直に、彼女は、帝国バレーのプリマドンナの地位を獲得した。

≪６月１７日・・・・。部隊の演習が行われた。クシェシンスカヤ２世を、私は大いに気に入っている。≫
≪６月３０日。クラスノエ村。小山での仕事に熱中した。劇場に行き、ボックス席の窓越しに、かわいいクシェシンスカヤと談笑をした。≫
後年になって、クシェシンスカヤは思い出している、ニコライはボックス席の窓際に立ち、自分は、ボックス席の前の舞台に立っていたことを。談笑は、いつも、素晴らしい引き分けで終わった。その後、ニコライは別れの挨拶をして、帰って行った：ニコライは世界旅行に出発した。
≪７月１日・・・。最後に、ママの所にいるウジナルと別れの挨拶をするために、クラスノエ村の小さな劇場へ出かけた。≫

クシェシンスカヤは、ニコライのことを分かっていなかった。全ては簡単である：アリクスを待つこと。ニコライは貞節を守っていた。

クシェシンスカヤは、毎日、新聞を読み、ニコライの旅の跡を追った。ペテルブルグが激震に襲われる出来事が起こった：日本の小さい町の通りで、警官がニコライに襲いかかり、刀でニコライの頭に切りつけた。ニコライは、奇跡的に、生き延びた。
首都は噂で持ちきりとなった。非常に活動的なニコライの、何らかの愛憎関係、許せぬ接待など、信じられない説があった。（ 彼女は、自分の、内気な、恋する男の性質を分かっていたので、信じなかった）　結局、襲撃者は、気の狂った狂信者であった。
≪１８９１年４月２７日。京都に到着した：私たちは不思議なものを見ているようで、目移りばかりしている。弓の射撃を見た。鎧姿の騎馬武者を見た・・・。９時に、ジョージ（著者注　旅行に同伴したギリシア皇太子）と一緒に、茶屋に出かけた。ジョージがダンスを踊ると、芸者達はきゃーきゃー笑い声をたてた。≫

≪祇園の川は、私の枕の下で、夢見心値に流れる。≫祇園とは、京都の茶屋のブロックのことである。その通りには数百人の芸者がいる。茶屋の住人は、模様の付いている金の着物を着ており、金襴の人形のようである。日本流エロチズムーヨーロッパの通りにおける粗野な愛の表現に比較すると、明瞭でかつ官能的である。お茶の接待が終わる・・・。その後、みんなは秘密の接待に残る・・・。

≪４月２９日。目が覚めた、不思議な日である。神のご加護が、私を死から救ってくれないとしたら、私には最後は見えない。（　？　）
人力車に乗って、京都から小さな町大津へ向かった・・・。
大津で、小さくて丸い知事の家へ出発した。知事の家は、完全にヨーロッパ式であり、バザールが催されていた。そこで、あれやこれやの小間物に、散財をした。ジョージは、そこで、竹の杖を購入した。この杖が、１時間後に、私に大いなる奉仕をしてくれることになる。軽い昼食後に、戻ることになった。ジョージと私は、京都で夕方まで、息抜きができることを、喜んだ。人力車に乗って、両側に、群衆がいる狭い通りへと、左に曲がった。と、その時、私は頭の右側、耳の上部に、強い衝撃を感じた。振り向くと、警官の醜い顔が見えた。警官は、両手で刀を掴んで、２度ほど、振り上げた。私は、ただ叫んだ：「何事だ。」・・・。私は、人力車から舗装道路に飛び降りた。ならず者が私に向かってき、誰もならず者を止めないのを見て、傷から噴き出している血を手で押さえながら、通りを駆けだした。私は群衆の中に隠れたかったが、それができなかった。というのは、びっくり仰天した日本人達は、ちりじり逃げ出したからである・・・。もう一度振り返って、私は、私を追いかける警官に向かって駆けだしているジョージに気がついた・・・。
どうにかこうにか、６０歩ほど走って、私は小路地の角で止まり、後ろを振り返った。神

よありがとう、全ては終わっていた。ジョージは私の救助者である。彼による杖の一撃が、悪党を打ち倒した。私が悪党の所へ近づくと、車夫と警官達が、悪党の足を引いて連れて行った。彼らの内の１人が、悪党の首に刀を突きつけていた。ジョージがどのような方法をとったのか、私は何も分からなかった。群衆の中に、私と悪党だけが残された。群衆の中の誰も私を助けに、飛び出しては来なかった。随員の中からも誰も助けに来なかった。随員は長い行列を作っていたのである。３番目の位置にいた有栖川殿下さえ、何も見ていなかった。私はようやく平静を取り戻し、少しは両足で立てるようになった。ランバフ（医者）が、最初の包帯を巻いた。まず大事なのは、止血することであった。通りの群衆は、私を少し傷つけた：大半は跪いていたし、同情の意を示すために手を挙げていた。それ以上に、この事を大事なパパとママに通知したら、パパとママが平静でいられるか、という思いが、私を悩ませた。≫

惨劇時、ニコライの叫び声が彼によって書かれた「何だ、何だ？」であるのは、驚きである。
２７年後、　同じく惨劇時－その時、ニコライはエカテリンブルグ市の地下室の椅子に座っていた－における、ニコライの叫び声は、彼の暗殺者ユーロフスキーが書いている。

このように、１８９１年に、人生で２度目となるが、ニコライは死を免れた。ニコライは、自分には、神の加護があると感じ始めている。神はニコライに、不慮の死を与えない。即ち、ニコライには、何らかの使命があったのか？

≪５月１日。東京。　　１人の狂信者の不快な行為のために、善良な日本人を、少しも怒ってはいない。私が、日本人の模範的な治癒所と清潔さを好きなのは、以前と同じである。そして、外で見たもの・・・に、見とれ続けていたことを、白状しなければならない。１１時に、天皇が来る・・・。　≫

父親は、ニコライに、ペテルブルグに帰還することを命ずる。再び、全員で楽しく、踊り明かす人生を。ニコライは、ウラジオストクで、シベリア縦断大鉄道幹線の起工式に出席をする。トランプゲーム、酒盛りをしながらの、シベリアの大河の旅行。２度目の死を免れた祝日である。
帰国中に、ニコライはトボリスク市に立ち寄る。
≪１８９１年７月１０日。灰色に曇った明かりの中、トボリスクに到着した。桟橋では、いつも通り、パンと塩を持った町長、市民、儀仗兵が、出迎えてくれた。馬車に乗って、教会のある丘に向かった。町の通りには、独特な板塀がある。教会から、シベリア開拓当時に関係した、たくさんの資料が保管されている、祭服と聖器物保管室を見学するために向かった。博物館に向かった。ここでは、ウグリチから寄贈された鐘が一番私の興味を引いた。ドミトリア皇后の命日に、この鐘は、警鐘を鳴らした・・・。≫
その後、この鐘のように、ニコライは、トボリスクに、送られることになる。
未だ先のこととなるが、来るべき次世紀の１９８９年に、逮捕されたニコライは、若き日に気に入った通りや町の一部分を、塀の隙間からのぞくことになる。

ニコライは帰還した。ペテルブルグには留まらず、両親の住んでいるクラスノエ村に行く。
１８９１年８月７日。何処にも出かける必要が無くなったこと、遅い到着と早い出発のある宿舎生活が無くなったこと、が奇妙に感ずる。以前通りの規則正しい生活が本格的になる。
≪１２月７日。本当によく眠った・・・、コーヒーの後、橇で出かけた。シベリアの毛皮外套を満喫した・・・≫
≪１２月１５日。朝、政府と内閣委員会からの大量の書類を受領した。このような大量の書類を、１週間で読み上げることができるか、わからない。私は、１つか２つの仕事、興味ある仕事に、いつも制限をしている。残りの書類はそのまま火の中へ直行する。≫
≪１２月３１日。１８９１年が終わってしまうことに、何か悔やむことがあるのか、何も言えない。この年は、私の一族にとって、全くの不運の年であった：オリガ叔母（ニコライの友人、ミハイロビッチの母親－著者）の死、ゲオルギイ（ニコライの弟－著者）の病気と永遠の別れ、最後に、私の大津での出来事－全ては、あっという間に、次々起こった。これらの大変な不幸な出来事に、飢饉も伴った起こった。来年は、今年と同じようにならないことを、神に祈る・・・。≫

また、３月がやって来た。
≪１８９２年３月５日。ママが語った・・・・。≫

≪３月８日。聖体礼儀ギリギリに、目を覚ました。それほど熟睡していた。まで寝過ごした・・・。≫
このように、無為の生活が続く。アリクスは遠くにいる。ニコライはこの子が好きである。セルゲイはニコライの良い仲間である・・・。
≪３月２５日。牡丹雪の中を、アニチコフ宮殿に戻った。もう春といえるのであろうか？私の所で、セルゲイと食事をし、その後、クシェシンスカヤを訪問しに出かけた。そこで、１時間半ほど、楽しい時を過ごした。≫
この日、ニコライは、優柔不断な若者としては、目を見張るような、思いきったことをした。
多分、食事の時に、勇気のある決断をしたのに、違いない。それについて、ニコライが書いている。幼友達、セルゲイ・ミハイロビッチ大公との、宴会と食事では、若いバレリーナの魅力にとりつかれたことを隠しはしなかった・・・。この３月で、ニコライが初めて、マチリダを見てから、２年が立つ、と彼らが話し合ったのでもあろう。ペテルブルグの遊び人であるセルゲイが、笑いながら、ニコライに女たらしと言った、とも想像することもできる・・・。

ニコライは決心をした。
クシェシンスカヤは、５月のペテルブルグの日のことを思い出した。彼女は、目に包帯をして、病気で家にいた。急性炎症が、彼女を苦しめていた。親衛隊の将校、ボルコフ氏が、彼女に面会したがっていると、召使いが報告した。彼女は驚いたが、この将校は知らなかった。が、とにかく彼を客間に通した。自分の目（包帯をしていたので、多分片目で）を疑った。客間にはニコライが立っていた。ニコライは、軍職における教師の名前－アレキサンドル・ボルコフ－を利用したのであった。
初めて、彼らは１つになった。彼らは語り合った、それ以上何があろうか！　楽しい１時間半後、クシェシンスカヤが驚いたことに、ニコライは去っていった！
次の日、クシェシンスカヤは、メモを受け取る：私が君に出会って以来、私は霧の中にいるようである。直ぐに、又、来られることを期待している。ニキ。
ニキは、クシェシンスカヤの彼氏となった。魅惑的で、風習としては驚きであるが、純粋な愛の遊びが始まる。軍学校のニコライの友人が、恋をするニコライに、花束を贈っている。恋をするニコライ自身は、今ではフェリックス・クシェスンスキー家の私的な客となった。不思議なことに、ニコライが、訪問をするときは、他の家族がいつも不在であった。
ニコライが訪問しないときには、メモを不断に遣わしている。今ではニコライは、クシェシンスカヤを、「お嬢様」と呼んでいる。
≪若いお嬢様を崇拝しているアンドレイがしたことを考えても見よ。≫
かれ（ニコライ？）は、徒に、ゴーゴリの劇に登場する人物を恐れている－お嬢さんへの愛のために、厳しかった父の遺訓を裏切ったコザックのアンドレイの歴史－ここでは完全に場違いであるが。
というのは、ニコライの恋愛史の楽屋裏には、いつでも、怖い父である皇帝が立っているとはいっても・・・。マチリダと会っているとき、ニコライはいつも他の女性への思いを持ち続けた。それには父が反対をしていた。彼女と一緒になることは、父への反逆となろう。クシェシンスカヤは、単なる偽お嬢様であった。ニコライの心の奥底には、本当のお嬢様であるアリクスがいた。
ニコライはうまい具合に二股をかけていた。
≪３月３１日。私たちは、ミーシャ（ミハイル）おじさんの所に、少し立ち寄った。彼は、亡くなった自分の妻の部屋部屋をあちこち案内してくれた。少しも傷んではいない。≫　ここで、ニコライはアリクスに思いをはせている・・・。彼の友達であるミハイロビッチの両親の感動的な愛、夫婦愛－そして、アリクス。　、
≪ガッチナ宮殿に戻った。私の気分は、反大斉期である。（この時、大斉期であった。－著者）　首都から遠く離れているガッチナ宮殿で生活しているということは、この場合には都合がよい。≫
さて、マチリダは・・・・。
≪４月１日・・・。極めて奇妙な現象である、それに私は自分で気がつく：２つの同じような感覚、２つの愛が同時に心の中に存在した、ということを、私は決して思わなかった。私がアリクスを愛してから、既に４年が経過した。神がどうにかして結婚させてくれることの思いを、私はずっと大切にしてきている・・・。１８９０年の軍の野営の時から、この時まで、私はかわいいクシェシンスカヤを深く愛している（プラトニックで）。素晴らしい物、私たちの心。これらと共に、私は、アリクスについて考えることを止めることはなく、むしろより愛するようになった。ある程度までは！　しかし、心の中では、私は厳しい裁判官であり、極めてロうるさいことを、私は付け加えなければならない。夕べ、

反大斉期と名付けたのは、正にこのような気分からである。≫
　クシェシンスカヤの部屋では、毎晩パーティーがあった。それに、ニコライは、ミハイロビッチ家の友人とやって来た：セルゲイ、サンドロ、ゲオルギー。３人の大公と継承者。はやりのダンスの教師の狭い部屋に。クシェシンスカヤは小さい白鳥のようにダンスを踊る、とニコライは面白おかしく話している。

　ニコライは皇帝と一緒に、デンマークへ旅行した。そこから、マチリダは幾つもの情熱的な手紙を貰う。しかし、この手紙と同時に、ニコライは、アリクスについて、父と話を注意深くしている。
　皇帝は心配であった、皇帝の処方が未だ結果を出していないからである。＜お嬢さん＞の決定的な攻勢が始まってはいないのであろうか？
クシェシンスカヤは、パリで思い出を語っている「当時、私は親密になることだけを考えていた。私はニコライを熱愛しており、ただ１つ、私の幸せを願っていた。この幸せがどんなに短くても。」
　その通り、クシェシンスカヤは、ニコライに最終決断をするように強いた。イギリスの海岸に、素晴らしいホテルを借りていた。ここで、最終的に、プラトニックラブが終演することになる。このホテルは、コンスタンチン・ニコラエビッチ大公の所有であり、ダンサーであるクズネツオーバのために買った物である（全ては繰り返すものである）・・・。クシェシンスカヤは、家を出て、公然と、皇太子の愛人となった。
　父は落胆し、私に問いかけた「彼と結婚など絶対にできないことを、私が理解しているのか？」　私は答えた「全部わかっています。私は幸せになりたい。それが私を自由に身にしてくれるから。」
　老後に、クシェシンスカヤはその様子を、簡単に述べている。彼女の父は、彼女に、ざっくばらんに、条件を伝えた。国の長であり、家族の長である、ニコライの父は、その条件の下で、ニコライの愛人関係の存在を認めていた。その条件とは、皇太子の結婚に当たっては、彼の全ての関係を直ぐに止めることであった。
　息子の遊びについては、皇帝は理解のある家庭人であった。

　こうして、彼女は勝った。が、それは、終局の始まりであった。
　「私たちは新居祝いをした・・・。皇太子は私に、宝石が象嵌された８個のウオッカグラスセットをプレゼントした・・・。」
　頻繁に、彼は私にプレゼントを持って来た。私が受け取りを拒むと、彼は悲しんだ。私が受け取らなければならないのだと。
　彼女は夢を見ることを止めた。彼は、遠くの美人にさらに思いを募らせた。人生と夢想。可愛くて気さくなマチリダー高貴な皇帝の王女。小柄なクシェシンスカヤは、日記から消える。
　ニコライの人生の、もう１年が終わった。
　≪２月３１日。アニチコフ宮殿が電気で輝いた。６時半に、祈りに出かけた。深夜１２時に、私とパパとママは、新年を迎えた。今まで通り神のご加護を。≫

　当時、クシェシンスカヤは、ダンスを踊ることに忙しかった。ロシアのトップの青年は１番のバレリーナを愛人とする必要があった。大バレリーナマスターであるマリス・ペチパが、クシェシンスカヤに、エスメラリダを踊るように指名したとき、マリスは、「君は恋愛をしているの？」と、問いただした。「はい。」　「苦しんでいるの。」　「そのようなことはありません。」　クシェシンスカヤは嬉しそうに答えた。悩んでいる芸術家だけがエスメラリダを踊ることができる、とクシェシンスカヤに説明をした。

　「私は後になって、これを理解した、－マチリダは悲しげに思い出を語っている、－そして、エスメラリダは、私の１３番となった。」
　マチリダは、状況をわかるようになってきていた。マチリダは、ニコライを偶にしか見ることが無くなった。しかし、マチリダは未だ古い関係を保っていた。彼女の家で、愛するニコライの友人であるサンドロと、ニコライの姉妹であるクセーニアとの婚約式が行われた・・・。彼らは、寝室の床に座り込んで、シャンパンを飲んだ。が、これが最後となった。

　ニコライは、アリクス・エルニの結婚式に出るために、コブルグへ去っていった。その後直ぐに、新聞は、皇太子とドルムシュタット家のアリス・ゲッセンとの婚約を報じた。コブルグから戻ってきた後、ニコライが、クシェシンスカヤの所に行くことはもう無かった。
　ニコライとクシェシンスカヤは手紙を交換した。クシェシンスカヤは、必要ならば、ニ

コライの所を訪問することを許してほしいと、尋ねた。彼女は慎重に振る舞った。ニコライからの返事：君と一緒に過ごした日々は、私の若い時期の素晴らしい思い出として、永遠に残るであろう。君はいつでも私に相談することができる。
ニコライは、マチリダに、最後の別れをする場所を指定するように頼んだ。２人は、ペテルブルグからクラスノエ・セロに向かう道で出会った。マチリダは町から馬車に乗ってやって来た。ニコライは宿営地から乗馬でやって来た。「そのような場合は、いつもの事なのであろうが、何を話していいのかわからない。私は嗚咽にむせび、何の言葉も出なかった。」　マチリダはニコライの後ろ姿を目で追った。ニコライは鞍の上で振り向き続けながら、段々と遠ざかって行った。
このように、マチリダは最後の情景を書いている。

恋愛遊技についての後書き
　　大胆なクシェシンスカヤは関係の継続を試みた。「悲しみの中に、私は１人ではいなかった。セルゲイ・ミハイロビッチ大公は、私の側にいて、私を助け、後援してくれた。私は、大公には、ニコライに持っていたような感情は全くなかった。彼の愛着さと態度は、私の心を虜にした。」
心にしみいる思い出を、また、簡単に述べよう。クシェシンスカヤは、以前通りにバレーを保証してくれる人を頼った。何となれば、彼女は、バレーを一番信用していたからである。
セルゲイ・ミハイロビッチ大公は、芸術界とロシアバレー界を指導していた。（残念なことに、彼はバレーと共に、同時に、ロシア砲兵隊も指導をしていた。（当時を、辛辣に言えば、我が国には、いいバレーがあったが、砲兵隊はなかった。））
宮殿に、再び、クシェシンスカヤの姿が見られるようになった。ニコライは友人のセルゲイと会う度に、過去を思い出さざるを得なかった。クシェシンスカヤはニコライの語った「君はいつでも私に相談することができる。」を、しばしば利用した。
１８９６年５月に、モスクワで、戴冠式、そして華麗で盛大なコンサートが開催された。壇上では、ロシアの最高芸術が披露された。ロシアの第一人者のバレリーナが、バレーを踊らなければならなかった。
マチリダが踊らないであろう事は、誰にも明らかであった。新しい皇帝の絶対権力をもつ母である、未亡人になった王妃の希望がそうであった。宮廷官庁と帝国劇場支配人は、演技目録から、騒動の名前を削除した。戴冠式スペクタクルは、ボリショイ劇場で行われることに決定された。ペチップの振り付けによる「真珠」が踊られた。驚いた観客が、プログラムに目を通したとき、そこには、マチリダ・クシェシンスカヤの名前が載っていた。彼女は主役を踊った。これは、ニコライに騒動を起こさせないようにするために、母、宮廷官庁らが仕組んだことであった。が・・・。クシェシンスカヤは、前の恋人を、十分に熟知していた。

クシェシンスカヤは、亡くなったアレキサンドル三世の兄弟である、好きになっていたウラジーミル大公の所に出かけた。彼女がどのような手段を用いたか、謎解きすることもできよう。とにかく、年老いた女たらしは、ニコライを口説き落とすために出向いた。別の方からは、少年時代の友人であるセルゲイが、進み出てきた。このようなことから、ニコライはクシェシンスカヤの名前を書き加えることを指示した。

クシェシンスカヤは、全く以前の力を示した。彼女は、ロマノフ家とうまい具合に付き合うことができた！　ウラジーミル・アレクサンドロビッチ大公は、ニコライとセルゲイがしたように、いつでも彼女に奉仕をするであろう。ウラジーミル大公には、自分の息子であるアンドレイと彼女の恋愛についても、反抗する権利はない。２人の間の子供に名前をつけることに同意をしている。誕生を祝して、ウラジーミルと命名している。

これ以後、クシェシンスカヤは、自分のことを忘れることを許さなかった。ミハイロフスキー劇場で、皇帝が待っているとき、クシェシンスカヤは、皇帝の特別席に向かい合っている２階正面特別席に、しばしば座った。
ニコライはクシェシンスカヤのことを決して忘れなかった。ニコライの全人生において、彼女はただ１人の愛人であった。
１９１１年２月１３日、クシェシンスカヤの引退記念興業が開催された。これに、ニコライは出席し、彼女に伝統の記念品を授与することにした。記念興業の前日には、劇場は、包囲された町のようであった。皇帝の母は、皇帝と一緒に劇場に来る、のは明らかであった皆わかっていた。未亡人の王妃は、”したたかな女である”クシェシンスカヤと、皇帝を、二人っきりでは会わせないことに決めていた。母は不安で一杯であった。
宮廷官庁は、帝国劇場支配人を呼び出した：

－皇帝は、自分の特別席に、あの女を呼んではならない。そのようなことが起こることを、未亡人の王妃が許してはくれない。－
記念興業の日、皇帝から記念品が届いた。ダイヤモンドの鷲の付いたブローチであった。「この記念品を、皇帝は、自ら、クシェシンスカヤに授与したがっている。」　支配人が驚いたことには、配送者達は、支配人にそう説明をした。ニコライが母と一緒に劇場に到着したとき、知力にあふれている支配人は、突然、大声で質問をした。
－クシェシンスカヤ女史に、記念品です、陛下。今、授与するのかご命令ください。それとも、皆の集まる祝賀会でですか？
驚いて、母は、不運のニコライをチラリと見た！
－もちろん、もちろん、今する－　困り果てて、皇帝は呟いた。
勝ち誇る支配人は、マチリダの所に行き、この記念品を渡した・・・。
引退記念公演。彼女は何度引退公演をしたことか－何度にも渡る引退公演にも関わらず、１９１７年まで、この高齢のバレリーナはダンスを踊り続けている。この期間、、ロマノフ家の物達を、自分を支えてくれる適当な手段とした。
彼女の家について、伝説が一人歩きをし始めた。ベーラ・レオニードブナが語っている。「初演を前にした、あまたの若いダンサー達が、彼女の家を、ひきも切らず訪れた。バレリーナ達は巨大なホールに集まった・・・・。明かりが消され、闇の中でドアが開く。若い大公達の群れは、喜びにあふれた雄馬となって、部屋に潜り込む。これを、＜サビニャンカの人さらい＞と呼んだ。無数の室があり、人さらいは各々の部屋で、朝まで、＜生々しい絵＞を続ける。」
第一次世界戦争の時、セルゲイ・ミハイロビッチとクシェシンスカヤは、砲弾と大砲の注文において、優先的に割り当てをしたことで貰った、という巨額の賄賂の嫌疑をかけられた。ストレリン宮殿で、大規模なトランプゲームが開催され、利権が分配さ、大金が動いた。
「セルゲイは、直に、現在の役職から外れるのでしょうか？　クシェシンスカヤも。」－アリクスは、ニコライに、脅すように書いた。

セルゲイ・ミハイロビッチはクシェシンスカヤとずっと一緒にいた。しかし、２０世紀末に、浮気性の大公に、真剣なロマンスが始まったとき、クシェシンスカヤは直ぐに、新しいロマノフ家の人の世話を焼いた。「素晴らしいホテル」に、１人の住人が現れた。その住人も又、青い目をした、内気な人である・・・。最初の出会いの時、彼は彼女のワンピースにワインを零した。この若者に、ニコライの面影を、彼女は見たのである。このようにして、クシェシンスカヤの生活に、アンドレイ・ウラジミーロビッチ大公が、入って来た・・・。彼らは、ベネチアに出かけ、そして、プロバンスに旅行した。そこで、アンドレイは、彼女に、海岸にある家を買ってあげた。この家は、ロマノフ家の人から買って貰った３番目の家となった。２人がペテルブルグへ戻ってくると、セルゲイ・ミハイロビッチは、再び、彼女と一緒に暮らした。その後、彼女に、息子のウラジミールが生まれた。子供は誰の子なのか、彼女は本当に知っていたのであろうか？　彼女は知っていた－とにかく、ロマノフ家の子である。
１９１７年２月に、彼女の邸宅で、最後のレセプションが開催された。翌朝、管理人が銀製の食器セットを検査していたとき、延々と続く群衆が、橋の上で罵詈雑言をはき、宮殿に向かっていくのを、彼女は窓から見た。その後、彼女にペテルブルグ警察署長から電話があった。彼は、「状況は危機的です。できるだけ大事にしなさい。」と、簡単に話した。
ベーラ・レオニードブナ：
「１９１７年２月の日、私の知人であり、著名は芸術家であるユリエフの家にいた・・・。その家に、何日間か、マチリダが助けられていた。彼女はみすぼらしい外套に着替えて、ネッカチーフを巻いていた。小さい子供と犬を伴い、極小さいハンドバックを持って、ここにやって来た。それらが、宮殿から彼女の元に残った全てであった。無数の富は・・・・。」
彼女は震えていた。黒く年老いたあばたの手の中で、クシェシンスカヤは、しっかりとハンドバックを握りしめていた。

２月革命の後、クシェシンスカヤ宮殿は、ボリシェビキが使用した。２階の部屋はたばこの煙で一体だ。足跡で汚された階段を、多くの訪問者達が行き来し、水兵達が警備をしていた。石の土台の上に大きな鏡と、冬の庭のあったクシェシンスカヤのお気に入りであったホールでは、１９１７年４月には、ボリシェビキの大会が行われた。このホールでは、彼女の椅子に、ウラル・ボリシェビキ指導者を指名された、フィリップ・ゴローシェキンが座った。このゴローシェキンは、クシェシンスカヤのごく緊密な２人－ニコライとセルゲイ－の運命を決定したその人となる。

臨時政府に、クシェシンスカヤは、状況の安定化を信用はしていなかった。彼女は、子供と一緒に、ペテルブルグを旅立つ。
駅で、彼らを、セルゲイ・ミハイロビッチが、見送った。汽車は出発した。セルゲイは、長い外套を着、帽子をかぶり、立ちつくした。
キスロボヅスクで、アンドレイが、彼女を出迎えた。そこで、彼女は、セルゲイ・ミハイロビッチから、最後となる手紙を受け取った。手紙は長文であった。彼女が読んでいた時には、手紙を書いた当人である、ペテルブルグの華奢な、しゃれ男は、泥で汚れた靴を履き、暴行されて血を流し、頭を試し撃ちされて、坑道の底に横たわっていた；もう一人の皇族である愛人は、硫酸で醜くされ、エカテリンブルグの森の中の、穴の底に、避難所を見つけた。

パリで、クシェシンスカヤの夢がかなった：アンドレイ・ウラジミーロビッチ大公は、彼女と結婚をした。彼の兄弟であるキリルは、追放下で、ロシア皇帝となった。クシェシンスカヤは、彼の順法の親類となった。

≪窓の所に・・・≫
（ 青年の日記の続き）
１８９４年の初めに、明らかとなった：アレキサンドル三世の命は長くはない。ボルカにおける重大な列車事故の結果であった。皇帝は、そこで打撲を受け、それが、腎臓の死の病まで進行したのである。後継者の結婚の準備を急ぐ必要となった。
皇帝の突然の死の病は、クシェシンスカヤとの遊びを終わらせた。

外交官達はよく働いた。ペテルブルグ（ニコライが住んでいる）と、ダルムシュタット（アリクスが住んでいる）の間で文通は途絶えることはなかった。
４月、コブルグで、アリクスの兄エルニと、ザクセンブルグ王女ビクトリア・メリッタ（家族の間では、彼女をダキと呼んでいた）との結婚式が予定された。ウイリヘリム二世皇帝、英国女王、王子・王女達が、コブルグに集まった。激動の新しい世紀の敷居で、ヨーロッパの王室の、最後の１つとなる華麗なダンスパーティが開催された。
大人数の大公が、ロシアを代弁していた。皇帝家族の霊的神父であるヨアン・ヤニシェフ司祭が到着した。彼の参加は、参加者達のもっとも真剣な意図について語っていた。エカテリーナ・アドリフォブナ・シュネイデルが、コブルグに到着した。彼女は、アリクスの姉妹であるエーラに、ロシア語を教えた。仕事がうまくいった場合には、ヘッセンの王女に、ロシア語を教えることになっていた。もちろん、エーラも到着した。
このようなので、エルニの結婚式で、アリクスの婚約が行われるに違いないと、皆が知っていた。
ニコライの日記から：
≪４月５日・・・。彼女は極めて魅力的になっていた。が、本当に寂しそうに見えた。私達を二人だけにしてくれた。そして、長い間私が待ちこがれ、非常に心配していた、私達の間に会話が始まった。１２時まで話をした、が旨くいかなかった：彼女は、宗旨替えをすることに完全に反対であった。かわいそうな彼女は、泣き崩れた。より平静を装って別れた・・・。≫
全てが、ライラックの花に埋もれている。寒くて綺麗な春。このように、日々は始まった。彼女（アリクス）の拒否にも関わらず。彼（ニコライ）は結構平静であった。結婚に出席した彼の全ての親類、政府代表を彼は知っていたし、彼女が自分を愛していることも知っていた。２度の死に際を経験した、彼にとって明らかとなった法則があった。全てのことについて、神を信頼すること。この法則で、彼はその後の人生を進んでいくことになる。しかし、コブルグでの日々は、この法則に反しており、彼は非常に神経質となっていた。彼が妻に従っている少女は、深く宗教に帰依していた。少女にとって宗教を変えると言うことは、いかほどの意味があるのかを、理解して、彼は少女を哀れんだ。このための彼女の絶望と涙を思いやり、彼は自身の優しさのある根気強さで、解決の責任は自分にあるとした。
しかし、彼女はこの日々を、ただ泣いてばかりいた。
後になって、宗教を変えるという決定は、自分にはとても難しい、ということを何度も手紙に書くことになる。もちろん、宗教は彼女の生活の重要な役割を果たしていた。しかし、ヘッセン家の王女であった彼女の曾祖母達は、遠くのロシアへ嫁いで、宗教を変えている。彼女の姉妹のエーラはロシア正教を受け入れて、新しい宗教の元で幸福であった。いや、いや、彼女には、他の何かで、泣き続けていた。他の何かとは、彼女は言葉で表現できなかった：運命の決定の瞬間において、熱狂的で神経質な性質は、未来を予感させる。
≪４月７日。ダキとエルニの結婚日。朝食に遅刻することから始まった・・・。１２時に、全員階上に集まった。結婚調書への署名の跡、教会に出発した。エルニとダキは良い

カップルである。私が身をもって体験した問題の本質に驚くほど似ている内容の説教を、牧師はした。この時、アリクスの心の中を覗いてみたいという欲求が強烈にわき起こった。結婚式の後で、家族の会食・・・。若い２人は、ダルムシュタットへ旅立った。ウラジーミルおじさんと散歩に出かけた、ゆっくりと、宮殿まで・・・。武器博物館をじっくりと見学をした。恋うてであるので、平服ではなく、制服を着て、マリアおばさんの所で食事をした。その後、土砂降りの中、できるだけ速く走って、劇場に出かけた。「ピエロ」の第一幕をやっていた。≫

ニコライには、宮殿の丘をよじ登るのが楽しかった。そして、夕方に、通りを駆け抜け、海軍の制服姿で劇場に座る。ニコライは全てを楽しんだ。ニコライはわかっていた。今日は今日であり、明日はまた明日であることを。ニコライはみんなを好きであった：優しいエルニ、優しいダキ、優しいビキ、優しいウラジーミルおじさん・・・。

≪４月８日（著者－日記では、この文字の下に３本の線が書き込まれている）。私の人生において、不思議と忘れられない日である。大事で、愛しいアリクスと、私の婚約の日である。アリクスとの談笑後、私達はお互いに約束した・・・。愛しているママとパパを喜ばせることができたことは、本当に嬉しい。私は、麻薬で酩酊したかのように、何をしているかわからないまま、一日中ぶらついた・・・。ダンスパーティが開催された。私は踊らないで、私の婚約者と散歩をし、庭園で腰をかけた。私に婚約者がいる、ということさせ、信じられなかった。≫

母親への手紙で、ニコライは、アリクスのよく分からない絶望と涙につて詳細に書いている。

≪彼女はいつも泣いている。ただ、囁くように：「だめ、私にはできない。」　しかし、私は説得を試み続けた。２時間にもわたって。私は、彼女に貴方の手紙を渡した（デンマークの王女の手紙、彼女は宗教替えをしても、幸せになっている－著者）。その後、彼女は反論できなくなった・・・。私が、エーラとビリゲリムと座っていた客間に、彼女がやって来て、言った最初の言葉が、プロポーズを受け入れる、であった（この結婚を、皇帝はどれほど待ち望んでいたことか！－著者）。私がどうなったかは、神のみぞ知るである。私は子供のように泣きじゃくった。彼女も泣きじゃくった。愛している母様、私がどれほど幸せであるかを、言い尽くせません。私の周りでは、世界が大変革をしました。自然、人々は、私には、快く、優しく、幸福に見えます。手が震えて、手紙をまともにも書けません・・・。彼女は本当に変わりました。陽気になり、ひょうきんになり、おしゃべりになりました。≫

ニコライはアリクスに、ルビーの付いたリングをプレゼントし、かって、ダンスパーティでプレゼントをしようとして、受け取ってもらえなかったブローチももう一度プレゼントした。アリクスは、十字架と一緒に、ルビーのリングを首にはめ、ブローチは、彼女は一生身に着けた。

婚約２１周年期でのアリクスの手紙より：

≪１９１５年４月８日。記念日で、私の祈りは貴方の周りに存在する。私が、あの朝に着ていた王女の服を、保管していることを、貴方は知っている。私は貴方のくれたブローチをずっと身に着け続けます。≫

２２周年期では：

≪１９１６年４月８日。私は貴方をしっかりと抱擁したかった。そして、私達のあの不思議な婚約の日々をもう一度生きてみたかった。今日、私は貴方がくれたブローチを着けます・・・。私は、貴方の灰色の服に、あの臭い－コブルグ宮殿の窓辺での－を感じます。≫

１９１８年７月１７日早朝、泥だらけのたき火の中で、彼らの衣服は焼かれた。その跡から、１カラットのダイヤモンドが見つかっている。ブローチに付いていたものである。アリクスは、最後までブローチを身に着けていたのである。

当時・・・。当時ニコライは幸福であった。アリクスも、幸せになろうと努めていた。しかし、その日々を、アリクスは泣きあかしていた。周りの誰もそれを理解していなかった。アリクスの涙を見て、無邪気な令嬢は、書き留めておかなければと思い、日記に書いている。「アリクスは将来の伴侶、ニコライを愛してはいない。彼女自身が、自分の涙を理解していない・・・。」

長年、甘い接吻を私は空想し、憧れていた。そして、もう、得られることを期待していなかった・・・。私が何かを決心する－それは永久である。私の愛情と愛着はにおいて、余りにも大きな心が、私を虜にする・・・。（１９１６年４月８日の手紙より）

ニコライはただただ幸福であった。ニコライは、全人生を楽しく思い出すであろう。コブルグ宮殿で、オーケストラがどのような演奏をしたか、結婚式で料理でどれだけ食べ過ぎたか、アリフレッド叔父（エデンブルスキー公爵）が、寝ぼけて、轟音で、自分の杖を

うっかり落としたこと、・・・。その時には、ニコライは将来を、そのように信じていた！
コブルグ宮殿のホールに集まっていた、当時、国民の運命を決めていた彼の叔父や叔母（女王、皇帝、公爵、王女）達も、未来を信じていた。当時、彼らが未来を見ることができたならばだが！
良いカップルであった新婚夫婦のエルニとダキは、あっという間に、離婚をし、姉妹のエラは、坑道の底で殺される。軍服が好きで、ロシアとの軍事同盟を期待していたビリー叔父は、ロシアとの戦争を始める。今、マズルカを踊っているパーベル叔父は、心臓を試し撃ちされ倒れ、ニコライ自らは・・・。
「お前が、鷹のように、高く高く飛び上がって、星の間に、お前の巣を作っても、お前をそこから、投げ落とす。」と、主は語っている。
４月９日、アレキサンドル・ボルコフは、主人である、パブロフ大公によって、婚約に対する贈り物を渡すために派遣された。ボルコフは、ロビーで、ニコライとアレキサンドラ（＝アリクス）を見つけた。手を握り合いながら、彼らはソファーに座っていた。２人はお互いに夢中になっており、ニコライは直ぐにはボルコフには気がつかなかった：
－あ、これは、親愛なるボルコフ君！
ボルコフも親愛なる友であった。「親愛」の単語は、ニコライの気に入った単語であった。
この時期に、エカテリーナ・アドリフォブナ・シネイデルは、アリクスと一緒に、ロシア語の勉強をしていた。２人は動詞を変化させ、アリクスは、きちんとそれをノートに書いた。２人は勉強が好きであった。
私は彼女のノートをめくる：３つの動詞、「忘れる」、「歌う」、「信じる」を変化させ、ロシア語の勉強をしていた。
＊＊。
アリクスの先生であるエカテリーナ・シネイデルは、宮廷朗読家となった。１９１７年に、自分の生徒と共に、自ら流刑となった。１９１８年、ペテルブルグから１０００ｋｍ離れている道路脇の、汲み取り穴の所で、この年配の宮廷朗読家を銃殺する。

婚約後の幸せの日々。ゲーテスタイルの詩的な愛：２人で馬車に乗り、郊外で花を摘む・・・。
復活大祭がやって来る・・・。受難週間の土曜日に、ペテルブルグからやって来た聖歌隊員は、王女に、ロシア正教の祈祷式の荘厳な神の恩恵を合唱する。聖歌合唱団員と共に、ペテルブルグから、軍の伝書使がやって来た。彼は、アリックスに、皇帝と皇后の手紙、そして勲章を持ってきた・・・。

１２日間が過ぎた。≪４月２０日・・・。アリクスと駅に出かけ、そこで、彼女と別れの挨拶をする。帰宅したときには、私はどれほど寂しいことか・・・。１月半の別離がある。私が馴染んで、気持ちのよい場所を、一人でぶらついた。彼女の好きな花を摘んで、夕には手紙に挟んで送り出した・・・。≫
≪４月２１日。朝食を食べた・・・。私の食器の所には、好きなバラの花に囲まれているアリクスの写真がおいてある・・・。≫
アリクスは、イギリスの、ビクトリア女王のいるウインザーへ去って行った。１月半余りで、ヨット「極星」はイギリスの海岸に行き着いた。このヨットは、ニコライの愛艇であった。このヨットは、アリクスや彼らの子供達の愛艇となる。ヨットはテームズ川に入っていった。
「一日中遊んだ、ボートに乗り、岸辺でハイキングをした。本当の田園風景である。が、その後で、ウインザーに行かなければならなかった。その際、愚痴をこぼすことはできないー祖母（ビクトリア女王ー著者）は、非常に思いやりがあり、私達が従僕なしで出かけることを許してくれた・・・。本当のところ、私は何も期待していなかった・・・。」ビクトリア女王の宮殿のピューリタン式様式さえ、この思いやり譲歩した！

この間中、彼女は、日記で、彼に、自分の好きな格言を書き加えている：「彼らは一緒になって、幸福と貧困を体験する。最初の接吻から、息を引き取るまで、彼らは、お互いに愛について歌い合う。」　「いつも、自信を持ち、愛情を持ち、献身的に、純粋に、利から強く、死の如く。」
ニコライの手で書かれた単語「死」は、ニコライの日記にある。
≪７月１１日。１月以上の天国の楽しい生活の後の、別れ、別居の陰鬱な日々。ヨット極星で、アリクスから手紙を受け取った。本当に疲れた、陰鬱である≫。
別れてから、２人はお互いに手紙で会話をしていた。グリムの兄弟の童話：ヨットは去って行く、王宮の塔、王女と皇太子・・・。

この童話の反響は、エカテリンブルグの彼らの最後の家のトイレに、警備隊によって汚され、書き殴らされた卑猥な文章の中に残っていた・・・。１９８１年に、彼らの死後、このトイレで、パイプを使って、暗号と署名の付いた小さな本を見つけることができた：「私の愛するニキには、＊＊＊＊＊＊＊＊の時に、利用するのが有効です。愛するアリサより。オスボルン、１８９４年６月」。
これは、彼らの将来の往復書簡のための暗号本であった（アリサは神秘主義を崇拝していた）。オスボルンで、幸せな６月の日々を送った愛するアリサが、ニコライに与えた本であった。

ニキとアリクスは良いカップルであった。別れてから、彼らは毎日のように手紙のやりとりをしている。
小さい王冠マークの付いた薄い紙－２人の手紙。ニコライは、狩猟をした宮殿から、臨終間際の父の所へ、彼を乗せていく皇帝列車から、・・・・・、彼女に手紙を書いている。数百通のニコライの手紙。数百通の彼女の返信・・・。愛の無限の呪文。
１０月初旬に、ダルムシュタットで、アリクスは電報を受け取った。直ぐに、クリミアに来るようにとのことであった。アレキサンドル三世が亡くなった。ベルリンでは、駅に、ウイルヘルム皇帝（皇帝には、ある期待があった！）が、アリクスに同伴した。皇帝は、可愛いアリクスが、揺るぎなく頑固であり、優しいニコライは軟弱であることを知っている。そして、アリクスは絶対に自分の祖国を忘れることはないであろう、と確信している。
しかし、皇帝は、ヘッセンの王女を、よく知っていなかった。
「私の人民は、貴方の人民です。私の神は、貴方の神です。」　遙か彼方の国へと去って行ったヘッセンの王女の過去は、彼女をそのように教育をした。
皇帝が瀕死の床にあった。瀕死の皇帝の寝ている寝室へ、著名な医者ザハリーンが、ゆっくりと進んでいく。彼は息切れをし、ちょっと腰を下ろしながらでないと、数歩も前に進まない。そのため、ホールに、椅子を延々と並べている。

皇帝の寝室には－司祭ヨアン・クロンシュタットスキーと、皇帝の霊的神父ヨアン・ヤニシェフ。そして、医者ザハリーン。彼らは瀕死の皇帝の周りに集まった。無力の医療と、患者に最後の苦しみを和らげるための万能の祈祷。

全てが終わった。寝室の扉が開け放された。大きな背の高い深々とした肘掛け椅子に、皇帝の遺体が深く沈んでいる。皇后が皇帝を抱擁する。少し離れて、ニコライは顔を青ざめて立っている。玉座に座りながら、皇帝は人生を終了した。

第３章「頭がくらくらする。信じたくない・・・・」
（若い皇帝の日記）

≪１８９４年１０月２０日。神よ！　神よ！　何という日だ！　神が自分の元に、私達の愛する父を呼び寄せた。頭がくらくらする。信じたくない。これまでは本当にあると思われなかったことが、恐ろしいほどの現実となった！　私達は父の周りに集まった。２時半頃、父は聖体機密を受けた。父の枕元に立ち、彼の頭を支える。これが、聖なるものの死であった。≫
≪１０月２１日。深い悲しみの中で、神は私達に、少しの喜びを与える。１０時に、私のアリクスが、聖油式を受けた。追悼祈祷が行われ、続いて他の・・・。親愛なる父の顔は、不思議な様相をしていた。笑っているようでもあった。寒かった、海鳴りがしていた。
動揺があった：何処で私の結婚式を行うのか。親愛なる父のいる宮殿の屋根の下で行うのが、最良であると、ママと私は考えていたが、叔父達は全て反対であった。結婚式はペテルブルグで行わなければならないと言うことである。≫
叔父連がかった。アレキサンドル三世の死後、叔父連の声が目立つようになる。

いつもの如く、即位には噂が伴った。ある筋に依れば、未亡人の皇后は、ニコライを替えて、自分の好きな息子であるミハイルにしたかった。それで、ニコライに玉座を拒否するように働きかけた。
しかし、これは単なる噂であった。彼女の夫と息子の著名な大臣であったビッテが、自身の「追想記」で、ニコライについて、皇后との相談内容を記している。
「ニコライは、皇帝としての資質を持っていないと、言いたいのですか？」
「多分そうです。」　マリア・フェドローブナは答えた。「それならば、ニコライの代わりが、ミハイルとなるが、ミハイルはニコライよりさらに意志が弱く、資質も劣る。」

他の噂の方が正しそうである。アレキサンドル三世、死んだとき、５０歳になっていなかった。この人物は大男で、かつ、意志堅固な人物であった。ニコライが、父の死の病を目の前にしたとき、ニコライは不安に襲われた。この時のパニック的な状況は、ニコライの自信の記録に残っており、友人のサンドロ・・・。ニコライは玉座を拒否することを許されるように懇願した。しかし、アレクサンドル三世は、不屈であった：玉座の後継法は、遵守されなければならない。ニコライは王冠を受領するしかない。ニコライの従順な受託に対して、ヘッセンの王女を妻にすることが許された。

ペテルブルグは、陰気な秋の日であった。駅のプラットホームに、葬送列車が到着した。アレキサンドル三世の棺を出迎えた人々の中に、当然、ビッテも居た。
「新しい皇帝が、新しい后となる新妻を連れて、ペテルブルグに到着した。ニコライは、新妻に惚れ込んでいた。」、ビッテは書いている。

アリックスの予感は的中した：棺の後から、アリクスは、ペテルブルグに入った。

葬式は長期間続いた。府主教が、長い話をすると、後家の皇后は耐えることができなかった：彼女にヒステリーの発作が起こり、彼女は叫び続けた：「十分よ！　十分よ！　十分よ！」

皇帝は、ペテロパブロフスキー寺院に葬られた。国中に、１年間の喪が、宣言された。しかし、２人の結婚式は、１週間後に行われることになっていた。その日は、ニコライの母である皇太后の誕生日であった。結婚式まで、２人は別々に暮らした。アリクスは、姉妹であるエラのもと、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公の宮殿、で暮らした。ニコライは、母と一緒に、アニチコフ宮殿で暮らした。
「私達の結婚式は、葬式の継続であった。ただ、私は白いドレスを着ていただけであった。」その後、アリクスは友達のビルババヤに、そのように、語っている。

≪１８９４年１１月１３日。アニチコフ宮殿。１１時に、私達の教会での礼拝式に出かけた。１つの座席が、これからは永遠に空席となることを認識して、気が重い。余りにも重大なことであり、愛するママがどれほど胸を痛めているか、言葉では言い表せない・・・。愛するアリックスと、茶を分かち合った。８時に、アリックスと別れた。それ以上会っていてはいけないという！　結婚式までは！　私には他人の結婚式のように事が進んでいるように思える。このような環境下で、自分自身の結婚について考えるのは、本当に奇妙なことと思われる・・・。≫

何故、結婚式を急いだのか？　何故、父の死亡後、決められている４０日間を待てなかったのか？
１１月１４日は、精進蔡の開始前の最後の日であった。精進蔡は、１月の始めまで続く。結婚式を延期するには、期間が長すぎた・・・。

≪１１月１４日。私の結婚の日。皆とコーヒーを飲んだ後、着替えに向かった。軽騎兵の制服を着て、１１時半に、ミーシャと冬宮に向かった。ネフスキー大通りには、軍人が整列していた。ママはアリックスと一緒。クジャクの間での化粧が終わるまで、私達は待機した・・・。≫
　遂に彼女が現れた：ダイヤモンドの首飾りを着けた、銀のドレス。長いひき裾の付いている、オコジョの毛皮で裏打ちをした金襴のマントを上に羽織っている。頭には、ダイヤモンドな輝きが王冠を突き抜けているよう。新しい王妃。

≪・・・・・・。私達に、親族から、巨大な銀製の白鳥が送られた。着替えて、アリックスは、私と一緒に馬車に乗り、カザン寺院に向かって出発した。通りには人はいなかった・・・。アニチコフ宮殿に到着すると、軽騎兵連隊の親衛隊から、名誉衛兵が玄関に立ち番をしていた。ママは、パンと塩を持って、私達を待っていた。夕方中、電信が鳴り響いていた。早めに寝床に横になった。アリックスが頭痛し始めたのである。≫
この少々粗暴な、親衛隊風「寝床に横になる」は、彼の困惑、処女を前にした怖さ、を隠した。」　では、彼女の方は？　ニコライは、アリクスの頭痛を、ただ単に記述しているわけではない。彼女の家庭教師が語っている：「彼女は青ざめて、悲しそうであった・・・。」　結婚式の夜、自分の幸福について、日記に記することにした。しかし、奇妙な単語が残っている：「この生活が終わるとき、私達は他の世界で出会います。永遠に一緒です・・・。」　憂鬱と奇妙な恐怖が彼女を苦しめていた。

≪ 全ては平穏で、満足≫
（若い夫の日記）
未亡人の皇太后は、２人を自分の所にできるだけ長く置きたかった。最初、２人はアニチコフ宮殿に住んだ。
≪１１月１５日。私は女房持ちだ・・・。≫
≪１１月１６日。朝に、アリックスの顔を、１時間も見続けた。ペテルブルグで、彼女と一緒に座っているのは、誠に奇妙に感ずる。≫
≪１１月１７日。アリクスと一緒にいるのは、思いもよらない幸せである。仕事が時間を取り上げるので、残念だ。アリクスとずっと一緒にいたいのに・・・。≫

彼女は、ロシア語が上手ではないので、苦労している。活発な性格にとっては、辛いこともしなければならない－彼女のニキを、未亡人の皇太后と閣僚達がどのように指導しているか、観察をしなければならない、のである。しかし、彼の日記中に、しばしば彼女の言葉が聞こえる。彼女はそこに説教を記している：「まず最初は、仕事。その後、静粛と休息・・・。」　「危険を恐れてはいけません、神は貴方のそばにいて守ってくれています。」　ニコライの弱さとアリクスの頑固さが、２人１組の調和となっている。
１年間の喪：ダンスパーティや娯楽は無し。２人は好きなようにした。ニコライは、沢山の時間を取り上げている仕事の後、アリクスは終日。内閣の書類と、簡単な政府の仕事がから解放される３時（日記にはようやくと書いてある）に、２人は、アニチコフ宮殿から出かけ、ネフスキー通りを進み、彼らの部屋の建設が進んでいる冬宮に入る。その後、アニチコフ宮殿に戻る。毎晩、ニコライは、声を出して、アリクスに、本を読んであげる。以前に父が彼にしてくれたように。初雪が降ると、彼らは、ツアルスコエ・セロに移った。そこで、初めて、１週間の休息をとった。
年の最後の日に、２人は、ニコライの日記に、書いている。
ニコライ：≪取り返しの付かない不幸と共に、神は私に、夢にさえ見ることができなかった、幸福を与えてくれた。私にアリクスを与えてくれた。≫
アリクス：≪過ぎ去る年の最後の日。神と共に、本当の幸福が到来しました。私の愛情は、日増しに、深く、強く、純粋に、なって行きます。愛情には限界はありません。神が貴方を祝福し、守ってくれます。≫　そして、レールモントフの詩：≪先まで見通せる薄暗さ、灯明の明かり、聖像入れ、十字架－聖なるものの象徴。全ては平穏で、満足。≫
愛が、２人を満たしている。

ニコライが玉座に就いたとき、彼に期待があった・・・。新しい良い皇帝を期待する永遠のロシア人民の期待である。既にニコライは、自分の型を作っていた：宮殿を抜け出すことを試みていた。自由を渇望していたのである。ユダヤ人に好意を持っていた。（外国人を圧迫をしていない。）　警察署長を、１昼夜、営倉に入れた（もちろん、自主的なことであったが）・・・。　地方自治制度の大改革が、これらの期待を呼び起こした。
パベドノースチェフは決心した：たしなめるときである！　しかるべきスピーチをしなければならない。パベドノースチェフ自身が、皇帝に、話す原稿を書いていた。
１８９５年１月１７日（また１７である！）。若い皇帝と、新しい皇后（フェオドロフスキー寺院で、洗礼を受けたので、今では名前は、アレキサンドラ・フェドローブナ）は、国民の前に、初めて姿を見せた。
アニチコフ宮殿に、地方、町、カザックの代表者達が集まった。パベドノースチェフが確信していた通り、参加者の大半が反逆の兆しを見せており、気の弱いニコライが、不安に陥らないよう、パベドノースチェフはやるべき事をやった。皇帝の毛皮の帽子に、テキストを置いた。
甲高く大きな声で、ニコライは読み始めた：
「最近、幾つかの地方自治会において、分別のない夢想にふけっている人々の声が聞こえている・・・。」
話している言葉の最後の語句に驚いて、トベルスク貴族の代表者である老人をまじまじと見ながら、ニコライは叫び声を上げた。皇帝の叫び声に驚いて、老人は、手から、パンと塩の乗っている黄金の皿を落としてしまった。これは古式に則って、新しい皇帝に、地方の代表者達が贈呈するものであった。
金の皿は音を出しながら、床を転げ、パンに差し込まれていた塩入れは、皿の後を追って転げた。非の打ち所の無いほど教養のある皇帝は、老人の手から転げ落ちたものは、若い者が拾い上げなければと考えた。ニコライは皿を拾い上げようと試みた。宮廷官僚の、老ボロンチエフ・ダシュコフは、急いで皿の後を追って飛び出した。皿は拾い上げられた。迷信を信じている物達は、未来の帝政に、不安を感じて、嘆きのため息をついた。
後の外務大臣となるラムズドルフ伯爵は、自分の日記に書いている：「町では、皇帝の一昨日の話に強く攻撃することが始まった。その話は、非常におもぐるしい印象を引き起

こした・・・。若い皇后は、何もしないで突っ立て居て、代表者達にお辞儀もしない、と、皇后も非難する。」
　アリクスは、自分の夫と同じように、人見知りをした。しかし、騒乱から。帝政を守った。

≪神によって遣わされた娘を・・・≫
　　（若い父の日記）
　夏に、彼らは南のクリミヤへ出発した。その地の、リバディスク宮殿では、最近父の皇帝が亡くなっていた。母、弟のミーシャ、幼なじみのサンドロ、サンドロの妻（ニコライの妹のクセイニア）。クセイニアは臨月間近であった。
　≪１８９５年６月３１日。お茶の後仕事をしていると、クセイニアに、娘イリーナが誕生したことを知った。アリクスと私は、直ぐに、農場の方へ飛んでいった。クセイニアと小さい甥を見た。神よ、御陰で旨くいっています。≫
　揺りかごで泣いているこのイリーナは、ラスプーチン殺害の主犯であるフェリックス・ユスポーフの妻となっている。
　アリックスは出産を待ちかまえていた。

　秋になって、彼らは、ペテルブルグのツアルスコエ・セローに戻ってきた。この年から、統治の最後まで、ツアルスコエ・セローはニコライの家族の主要な宮殿となった。「快くて、懐かしく、良い場所。」
　豪奢なエカテリン宮殿から、余り遠くない、小さな人工池の中の公園に、木々で隠された小さな白いアレキサンドル宮殿が建っていた。そこにニコライ家族が住んだ。１１月３日の夜に、ガッチナ宮殿から、そこへ、未亡人の皇后が呼び出された。
　≪１１月３日、金曜日。多くのことに苦しんできたが、この日は、私には永遠に忘れられない日である。深夜１時頃、アリクスに陣痛が始まった。それで、アリクスは寝ることもままならなかった。一日中、リックスは、陣痛に悩まされて、ベットに横たわっていた。私は、平静に彼女を見ていられなかった。深夜２時頃、ガッチナ宮殿から、ママが到着をした。ママとエーラは、２人で、アリクスに付ききりとなった。ちょうど９時頃、赤ん坊の泣き声を聞いた。私達はみんな、一息をついた。祈りに答えて、神は私達に娘を与えてくれた。オリガと命名した。≫
　≪１月６日。朝。私達の素晴らしい娘に、見惚れた。娘は、大きな赤ん坊であり、頭に髪が伸びて覆っていたので、新生児のようには見えなかった。≫
　ロシアの子守は語っている：「生まれた娘が将来幸せになるための、必要な兆候は、赤ん坊の頭が髪で覆われていることである。」

　１９１８年に、彼女を、引きずっていく。彼女は、反地下の室内に、母と並んで立つことになる。「皇后とオリガは、十字を切って、救ってくれることを期待したが、成功しなかった。銃声が鳴り響いた。」（警備隊員のストレコチン狙撃兵の証言より）

　娘は成長していく。ニコライが撮った写真：アリックスと、母と並んで、たどたどしい足取りで立っている小さいオリガ。ニコライは子供みたいに、自分の娘を、妹の娘と比較をしている。≪１８９６年３月２１日。礼拝式のための、娘を、プリチャスチ教会に連れて行った。私達の娘は、温和しくしていたが、イリーナは少し泣いていた。≫
　≪４月１日。クセニアが、私達の小さい風呂に、イリーナを連れてきた。イリーナの体重を量ったら、約１０ｋｇ。私達の娘の方が少し大きい。≫

　誕生は葬送の最後と一致した。盛大な舞踏会が、冬宮で開催された。数千人の招待客、オーケストラはポロネーズを演奏し、式典係は、自分の杖で、床を３回打つ。白いターバンを巻いた黒人が、扉を大きく開け放つ。全員が、頭を垂れる。皇帝と皇后が現れる。
　まず、アリクスが、下手ながらロシア語で話す。人の中にいるのは、アリクスには苦手である。アリクスは、家族とツアルスコエ・セロは支配できているが。
　ママとその取り巻きが、国を支配している。それなりの噂がある：夫の鉄のような意志を押さえつけながら、権力志向の母は、ようやくのびのびと振る舞えるようになった。まず第一に、全てを、より悲劇的に、より簡単に。後家の皇太后（ミンニおばさんーロマノフ家内では、そう呼ばれていた）は、余りにも良く自分の息子と事を知っていた。誰かが、人の良いニコライに、必ず影響を与えるに違いないと心配した。その時は、アリクスは考慮に入っていなかった。保守反動の大公セルゲイ・アレクサンドロビッチ、少しおしゃれであるが機知に乏しい亡くなった皇帝の弟であるウラジーミル。心優しいが少し軽薄な３番目の弟アレキサンドル、それに、パーベル、らがいた。彼らからの影響は、皇帝にとっては避けがたいものであった。後家の皇后は、アレキサンドル三世のもとで、十分に勉強

をしているものとして、自分に自信を持っていた。
　ビッテの日記に、鮮明な記述がある：大臣の指名において、ニコライはビッテに答えた「ママに聞いてくれ。」
　別の機会に、再び困難な時があった：「ママに相談をしてくる。
　マリア・フェドローブナ（後家の皇太后のこと）は、洞察力に富んでいた：彼女の夫（アレキサンドル三世のこと）の財務大臣であったセルゲイ・ユリエビッチ・ビッテは、ニコライの前では、彼女のお気に入りとなっている。ビッテは改革の協力者であり、リベラリストであった。より正確には、中庸なリベラリストであった。アレクサンドル三世時代には、弾圧が猛威をふるったからである。ロシアでは、急激な温度変化はふさわしくない、とビッテは理解していた。しかし、母親が、主要な相談役として、残ってしまった。

　最初の時期は、皇太后である母親は、息子である皇帝と一緒に出ることに努めた。
　ベーラ・レオニドブナ：
「当時、未亡人の皇太后が、驚くほど若くなった。ペテルブルグ中に、この謎が話題となった。皇太后は、パリで手術を受けた、という噂であった。未来の英国女帝となるアレキサンドラ王女に対して行った手術について、皇太后は耳にした。より正確に言えば、その成果を目にした。年の割には、王女は、自分の若さで、文字通り、全ての人を驚愕させていた。これは謎の手術であった。最初、鋭いナイフで、顔から上皮をはぎ取る。顔は一面傷だらけとなる。傷に塗れたものをあてがい、少し治療をする。顔に、ワニスを塗る。この新しく、柔らかく、綺麗な顔に対しては、ワニスが壊れないように、本当に大事に扱うこととなる。さらには、辛いこともある。・・・・・・・・。これらの手術には勇気が必要である。」
　皇太后はこの手術を受けることにした。若い皇帝と並んでいる時には、自分も若い母親と見られなければならない。

　彼女は、彼の統治の初期には、息子と並んで立っている。しかし、その後、母親としてはそれ以上のことがあり得ない、全くの悲惨なことに彼女は巡り会うこととなる：全ての息子、孫、皇帝、の死。彼女は、生きている最後のロシア皇女として、強大な難破船の生き残りとして、コペンハーゲンで生活することとなる。

≪起こった全ては・・・、息子によるものであろう≫
　モスクワのウスペンスキー寺院で、ロシアの皇帝は、戴冠式をする。大ロマノフ家の全員が、皇帝列車で、５月６日に、モスクワに到着した。
　≪１８９６年５月６日。結婚してから初めて、私達は別々に就寝した。非常に寂しい・・・。９時に起床した。コーヒーを飲んだ後、電報に返信をした。列車に乗って居てさえ、静穏にしてくれない。クリン市で、叔父セルゲイ（元司令官の大公セルゲイ・アレクサンドロビッチ、モスクワ知事となっていたー著者）が、私達を出迎えた。５時に、モスクワに到着した。ひどい天気だ。雨、風、寒さ。≫

　皇帝と皇后が、公式のモスクワ訪問をする時には、通常では、当時、モスクワから数ｋｍ離れているトベリ関所にある古いペトロフスキー宮殿に宿泊をする。トルコ人との戦いでの勝利を記念して、エカテリーナ女帝が建立した宮殿には、ゴチック式の窓、魅力ある塔があった。ここに、彼らは３日間宿泊した。
　≪５月７日。寝過ごした。陰鬱な天気である・・・。各国からの代表団と面接をした・・・。≫
　ロシアの皇帝の戴冠式に、全世界が出席した。

　モスクワへの荘厳な入場の日がやってきた。初めて太陽が姿を見せた。モスクワの教会の数多くの金色の塔が、光り輝いていた。
　朝早く。腰まで金色の髪を垂らした若い皇后は、窓の脇に立ち、ペトロフスキー宮殿の塔を見ている。話を続けたい！が、馬車に乗る時間となった。

　ペトロフスキー宮殿の窓からは、大公パーベルの従者である、アレキサンドル・ボルコフが、眺めている。後になって、彼はこの時のことを全て書き残している。チェルケスク人の隊列、馬に乗った皇帝、馬車には２人の婦人が、母と妻。周りは制服だらけである。これらの光り輝く列は、クレムリンに向かって、進んでいく。
　≪５月９日。私達にとって最初の大変な日である。モスクワへの入場の日。１２時に、全皇族の隊列が整列し、一緒に座って、朝食をとった。２時半に、行進が動き始めた。私は乗馬し、母は１台目の金色の馬車に座り、アリックスは２台目の金色の馬車に１人で座っている。≫

この戴冠式の日々の中で、奇妙な出来事があった。彼らは、ロシアの最大級の教会、トロイツエ・セルギーエフ教会を訪問した。しかし、教会からは誰も出迎えなかった。皇帝が、教会内に入ってきて、初めて、忘れていたことをに気がついた。これは戴冠式の実行者達の間の意思疎通不足によるものであった。が、・・・。事情に通じている人は、再び気がついた：セルゲイ・ラドネジュスキーは新しい皇帝を、出迎えてはいなかったのである。

≪５月１３日。クレムリンに住み着く・・・。＊＊＊＊＊＊＊。慈悲深い神は、私達を助け、支えてくれている。神は平穏な人生を祝福してくれている。≫
記述の後、彼は３個の感嘆符と十字を記していた。帝国における戴冠式、信心深いニコライのロシアとの戴冠式－人世における最大の日々の内の１つ。
１８９６年５月１４日。クレムリンから、ウスペンスキー寺院への行列。皇太后の母は、小さいダイヤモンドの王冠を着け、４人の元帥が彼女の濃紫色の長マントを持っている。その後、「万歳」の叫び声のもとで、２人、ニコライとアレクサンドラが、寺院に入場した。
≪アリクス、ママ、そして私にとっては、精神的な面において、最大で、荘厳で、重大の日であった。
朝８時から、立ちつくしていた。幸運にも、天気は持った。不思議なことだ。寺院の赤色の玄関は、光り輝いていた。ウスペンスキー寺院で行われたことは、夢のようであったが、人世において忘れることはないであろう。≫
蝋燭が灯り、聖歌が歌われた・・・。府主教の手から、ニコライは、大きな冠を受け取り、自分の頭に着けた。アリクスは、ニコライの前で膝まついた。ニコライは冠を外し、アリックスの頭にその冠を触れさせた。そして、再び、自分の頭に着けた。アリクスの金色の髪には、既に、小さいダイヤモンドの冠が光っていた。４人の女官が、それを、金のヘアピンで支えている(？？？)。ニコライとアリクスは、教会内の玉座に座った。個体号の母が、ニコライに接吻をした。続いて、アリックスの頬に接吻をした。
２人は、なんと若いことか、なんと幸せなことか・・・。
赤色の玄関から、２人は、３回、民衆に、深々と挨拶をした。
≪３時に、グラノビータヤ宮殿の食堂に向かう・・・。この長い試練に良く持ちこたえてくれているママの所で食事をした。９時に、上階のバルコニーに出た。そこで、アリクスが、イワン大帝の鐘楼の点火を行った。その後、次々に、クレムリンの鐘楼や壁が光り輝いた。≫
ヘッセンの王女は、教会群の金色の円屋根を見た。ヨーロッパとアジアの半ばに位置している古い首都が、光り輝いているのを見た。

皇太后のママは、この長い式典に、良く持ち堪えた。この我慢が、翌日にも、ママには必要であった。
≪５月１７日・・・。　１時過ぎから、歓待を受ける。最初は、大公妃、続いて、女官、町の女性・・・。足が少し痛くなってきた・・・。≫
特別演劇を見るために、ボリショイ劇場に出かけた。例によって、最初の演目は「皇帝に一命を捧げる」、最後の演目は「真珠」であった・・・。
が、この「新しいバレー」には、観客が驚いたことには、クシェシンスカヤが出演したのである。
この夕べで、母親は、息子のニコライが、如何ほど寛大であるのかを思い知った。
しかし、次の朝、５月１８日、母親の記憶から、気分の悪くなったバレーと、勝ち誇ったマチリダのことを、払拭する出来事があった。５月１８日は、母親の息子の統治における最悪の日の１つとなった。
戴冠式の後の行事として、大衆の野外遊楽が行われる。食事やお菓子が無料で提供されるのである。遊楽のための場所として、ホデンカ練兵場が選ばれていた。
昔より：「パンとショー」－「皇帝と大衆」

ホデンカ練兵場に花模様のついたテントが立っていた。そこには甘いものがあった。戴冠式用に紋章のついたコップも、無償で配られる予定であった。しかし、テント群と、１７日の夜から集まった群衆の間に、放置されている溝があった。政府の怠慢から忘れていたものであった。ごちそうに、沢山の大衆が集まった・・・。　大衆はおみやげが分配されるのと、今か今かと待った。５０万人をくだらない群衆が、一塊になり始めた。塊は大きくなるだけで、ゆるむことはなかった。と、叫び声が出始めた。大衆が、群衆の中で押しつぶされて、息苦しくなったのである。誰かが、甘いものを与える、と決めた。群衆は押し合いをした。群衆の塊は少しずつ移動し、溝に倒れ込んだ。頭から、そして、胸を圧迫されながら・・・。

押しつぶされた遺体は、朝早くに、馬車に積まれて運び去られた。
２２年後、同じように、朝早く、馬車に乗せて、彼らの遺体を運び出すことになる。

昼に、ビッテが馬車に乗って、祝祭の継続についてでかけたときには、彼は既に、ホデンカ練兵場で、２千人ほどの犠牲者があったことを知っていた。飾り立てた馬車が、ホデンカ練兵場に到着した時には、全てが綺麗に後始末され、惨劇の何の痕跡もなかった。太陽は、さんさんと輝いている。大オーケストラは、戴冠式の栄誉を祝して、カンタータを演奏している。練兵場には、着飾った民衆が詰めかけている。皇帝が到着した。皇帝の脇には付かず離れずに、戴冠式の実行者であるモスクワ知事である、大公セルゲイ・アレクサンドロビッチがいた。
ニコライは当惑し、落胆していたーこれが全てを示していた。

≪１８９６年５月１８日。　これまでは全てが順調に進んできた。が、今日は最大の悲劇が起きた：食事とお菓子の配布の開始を待って、ホデンカ練兵場に、深夜から集まった群衆が、建設現場で押し合いへし合いをし、大変な混雑となり、約１３００人が踏みつぶされる惨事が起こってしまった。私はこの事を、９時半頃に知った・・・。いやな気分が、この事について残った。１１時半に、食事をした。その後、「悲しい大衆の祝日」に出席をするべく、ホデンカに向かった・・・。
パビリオンで、馬車を取り巻く群衆を見た。楽団は、国歌を演奏し続けていた。
ペテロフスキー宮殿に移り、そこの玄関で、幾つかの国の代表団の表敬を受けた・・・。話をした。ママの所で昼食をとった。フランス大使館でのダンスパーティーに出かけた。≫

ニコライの運命には幾つかのミステリーがある。ニコライにとっての忌まわしい数値が１７なのである。
１０月１７日、ボルクでの列車事故。ニコライは幸運にも生き残った。１月１７日、ニコライはロシア社会に初めて姿を現したが、不成功であった（？）。１９０５年１０月１７日、専制の最後。この日、ニコライは」最初のロシアの憲法に関するマニフェストに署名をした。１２月１７日は、ラスプーチン殺害の日。そして、１９１７年が、彼の皇帝としての最後の年。７月１７日の深夜、ニコライ自身と、ニコライの家族の殺害。戴冠式の時のおびただしい血は、５月１７日の夜に流れた。

とはいえ、母の皇太后は、ホデンカの惨事の原因を、合理的に良く理解していた。彼女はまた、自分の夫（アレキサンドル三世）の支配の原理も良く習得していた。専制における命令系統は、恐怖がピラミッドの頂点に会ってこそ、機能するのである。皇帝の死去に伴い、恐怖は去った。熱の高い生き物が、自分の病気であることを、知らせるように、大惨事は、専制が機能していないことを示していた。恐怖は既にないのである。今は、貧弱な皇帝がいるだけである。
母親は決心した。恐怖は戻らなければならない。厳しい罰を与えなければならない。彼女の夫の兄弟である、大公セルゲイ・アレクサンドロビッチに罪があるのであるが？　それ以上誰にあるか。すなわち、彼が第一に罰せられなければならない。それにより、恐怖支配が戻る。
彼女は、急いで調査委員会を組織し、罪あるものを罰することにした。ニコライは承諾した。また彼女は、フランス大使館における、享楽とダンスパーティーの中止を要望した。
この間のニコライとの話の様子が、彼の日記の「≪ママの所で食事をした≫」の箇所に隠れている。
≪私達はママの所から去った・・・。≫

その時、後家の皇太后に、アリクスは初めて反抗した。アリクスは自分の姉の夫（セルゲイ・アレクサンドロビッチ）に、苦悩を与えることを許さない。遊興を中止することも許さない。セルゲイ・アレクサンドロビッチは正しい。何事もなかったかのように、全ては進行しなければならない。戴冠式は、人世で一度きりである。ダンスパーティも開催されなければならない。＊＊＊＊＊＊＊＊＊。そして、ニコライはアリクスに同意する。
≪フランス大使館での、ダンスパーティに出発した。≫・・・。
新皇帝の友人達は驚いた・・・。ニコライとアリクスは、このダンスパーティーで踊った。
ニコライに付かず離れずに、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公がいた。モスクワでは、既に彼のことを、「ホジンカ候」と呼んでいた。
そして次の日。

≪５月１９日。２時に、アリクスと、病院に出発した。そこで、夕べ惨事にあった人が収容されている、バラックやテントを訪問した・・・。≫
≪５月２０日・・・。３時に、アリックスと一緒に、他の病院を訪問した。沢山の怪我人が収容されていた・・・。≫
ニコライは惜しみなく、犠牲者に寄付をする。しかし、国は、記念式だけのことしか考えていなかった：ダンスパーティーに出席をした。皇太后の母親は正しかった。
皇帝の資質という概念が存在する。これは、断固とした意志を実行するという意味でもある。が、ニコライにはこれがなかった。「優柔不断な同情」、「意志の麻痺」、の皇帝、と、ある人は、ニコライについて語っている。別な人は、「狡猾」と反論する。彼はとにかく頑固である・・・。頑固さ故に、あの惨事にに対して、彼は、依頼者に、明瞭に「だめだ」と言えなかった。ニコライは非常にデリケートであり、＊＊＊＊であった。拒否する代わりに、ニコライは黙殺することを好んだ。このようなことから、依頼者達は、彼の黙りを、許可と受け取った。ニコライは、自分の視点と同調する意見を持ちすぎたのである。
その時そのように、決定がなされた。皇帝の黙殺を、許可として受け取った最初の依頼者は、結果として、皇帝の狡猾さを強く非難することになった。これは、クシェシンスカヤの場合にも当てはまる。母親と閣僚が、戴冠式の祝典の中に、彼女の名前に気がついた時、ニコライは沈黙した。母親の気分を害することができなかった。しかし、ニコライはじっと耐えた。ニコライの叔父であるウラジーミルが、マチリダの件に関して許可をもらいに来た時、ニコライはすぐさま許可に同意した。ホデンカに関して、このような歴史があった。アリックスの状況を理解していたニコライは、祝賀を継続することに決めた。が、敢えて自分の母親に反論することもしなかった。このようにして、ニコライは、セルゲイ・アレクサンドロビッチの要請に屈したのである。しかし、ニコライの意志のなさに関する伝説は作られたものであり、それは、彼の全人生に付きまとった。「皇帝らしからぬ資質」は、最初から、彼のやり方と、一体化していたのである。

ニコライは、調査委員会を組織し、その主幹に、皇太后のお気に入りのパレン伯爵を指名した。
しかし、反撃が続いた。ニコライの叔父であるウラジーミル、パーベルが、セルゲイ・アレクサンドロビッチが責任を問われるならば､即刻宮殿を立ち去ると宣言したのである。危険のない最後通告であった。彼らは、ニコライは、自分たちを、退職にできないと踏んでいたのである。彼らの背後には、皇后のアリクスがいた。
この時、神経質なニコライは、反対意見の人物達に、一心不乱に挨拶をして回り、全てを平穏に片付けようと試みた。パレン伯爵の報告書は、古文書の中で消えてしまった。しかし、それ故、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公は、モスクワ知事を罷免された。ホジンカ事件後、母親が危惧していたことだが、彼には、「ホジンカ候」の名前が送られることになる。
ニコライは皇帝になりたくなかったし、母親を悲しませたくもなかった。被害者を作り出すこともしたくなかったし、アリックスを悲しませることもしたくなかった。全てはこのようなもとで、進んだ。

死者の祝日
（若い皇帝の日記の続き）
今では、モスクワ郊外に、著名なイリンスコエ（？）の敷地に植樹された、年齢が１世紀にもなる木の立っている広い並木道が残っている。今は公園となり、１００歳となる菩提樹と古い教会が残っている。
≪６月３日。叔父のセルゲイとエーラの結婚記念日。≫
イリンスコエでは、この日を、大いに祝った。子供達は庭園を走り回った。ロマノフ家の世代代わりであった。
１９世紀が終わり、新しい悲惨な世紀の舞台装置は、隠れながら、出来つつあった。その舞台に、登場人物が出場し、始めた。
２０世紀のロマノフ家の１人、ビロードのズボンをはいている５歳の少年。アレクサンドル三世の弟であるパーベル大公の息子のドミトリーである（写真は何処にあるの？）。ドミトリーは、イリンスキー宮殿で生まれた。自分の母親の破滅の原因ともなった。
このことは、ニコライとアリックスの結婚前のことである。
現在では、丘の頂上から、モスクワ川まで、小さな小道がある。川に、半分崩壊している小さな橋を見つけることが出来る。
１８９１年、太陽が輝く午前の暑い夏の日、この橋に、若い女性が駆け下りてきた。ギリシアの王女であり、パーベル大公の妻であった。
彼女がボートに乗った時、早産の陣痛が始まった。直に、亡くなったアレクサンドルの

着飾った遺体が、庭園に寝かされた。しかし、赤子は生まれ、命を長らえた。赤子をドミトリーと命名した。
祝日に、イリンスコエ宮殿に参集した全員に、悲惨な運命が待っていたとは、不思議としか言いようがない。
ドミトリーの父、パーベル大公は、直に、ロシアを出国する。妻のアレクサンドラが亡くなった後、パーベルには、ウラジーミル大公の副官の妻との間に、スキャンダルなロマンスが起こった。パーベルは彼女を妻にすることにした。が、皇太后が、頑としてそれを聞き入れない。皇太后は、パーベルの兄弟であるセルゲイとウラジミルに同調せざるを得ない。この件が、ロマノフ家の初めてのスキャンダルであった。気弱なニコライは、これを決済しなければならないことになる。ニコライは、優しい叔父であるパーベルを、ロシア国外に派遣せざるを得なくなる。
しかし、パーベルの息子ドミトリーは、ロシアに残り、姉妹と共に、セルゲイ・アレクサンドロビッチとエーラの家で、養育されることになる。
２人の間には、子供ができなかったので、２人は、心底から、ドミトリーと姉妹の面倒を見た。
１９０５年の革命の日、社会革命党員のカリャーエフが、ボリショイ劇場の脇に、爆弾を持って立つ。全ては計算され尽くしていた。大公の馬車のほのかな灯火が、霧の中でキラキラしている。爆弾を持っているカリャーエフが、馬車を横切って、飛び出した。・・・。カリャーエフは、馬車に、セルゲイ・アレクサンドロビッチと一緒に、エーラと子供達が乗っているのに気がついた。カリャーエフは、爆弾を投げつけることができなかった。牧歌的な１９世紀における、牧歌的なテロリストであった。しかし、次回、セルゲイ・アレクサンドロビッチが１人である時、カリャーエフはヘマはしない・・・。
夫の死後、エーラは、修道院の建設に、自らを捧げる。ドミトリーは、他の親族、皇帝ニコライ二世のもとで暮らすことになる。ドミトリーは、ニコライとアリクスを、パパとママと呼ぶことになる。ドミトリーは、今は乳母である、ニコライの長女であるオリガの婚約者となる。オリガは、ドミトリーを、目を皿のようにして見つめる。
ニコライは、この２人に愛情を注いでいる。ドミトリーには、ニコライの持っていない何かがありそうである。ドミトリーは真からの親衛隊員であり、決闘好きであり、熱情的であり、豪遊者であった。
ニコライは、オリガを、彼にあげなかったが、心は与えた。トボリスクでの幽閉の時、この若いプレイボーイの手紙を取り出し読んでいる。「親愛なるおじさん。私は貴方の思いやりのある手紙に、本当に感謝しています。手紙に起立をして敬意を表したほど、手紙を貰ったことに満足しています。深々と平伏し、敬意を表して、直立しながら手紙を読みました。貴方が、ここへ来ると言うことを、本当に嬉しく思っています。貴方を見たくて見たくてたまりません。私の妹（？　姉）（著者　オリガ）が、上品な形をしている頭に、無理にかぶった帽子のことを思い出します。もう一度、手紙に感謝をします。私は大いに貴方を笑いものの種にします。しかし、尊敬をしていますので、その笑い声は、文字”エ”で発音します。”へーへーへ”であり、”はーはーは”ではありません・・・。そして、貴方をきつく抱きしめ、色っぽい接吻で、おばさんの手を覆い尽くします。自分の「息子」を忘れないように、貴方にお願いします・・・。」
この手紙を書いてからの６年後、「息子」ドミトリーは、「母」アリクスにとって、最も大事な人物ゲオルギー・ラスプーチンの殺害に参加することになる。「ドミトリーは自分の母親も殺した（＊　難産の結果）のです。」と、アリクスは、ドミトリーについて語っている。
今は、１８９６年。子供が、もう２人の子供と一緒に、草原を飛び回っている。公爵コンスタンチン・コンスタンチノービッチが、庭園に彼らを連れてきた。
ロシアの読書人ならば、この人物を、ペンネーム「ケー・エル」として知っている。彼のロマンティックな詩は、乙女のような日記や、アルバム中にある。皇后自身は、彼の詩を、自分のノートに、こまめに書き写している。チャイコフスキー、アリャビエフのロマンスが、彼の言葉で書かれている・・・。
ケー・エルが気に入っていた家である、大理石宮殿には、一度ならず、彼の知人である作家のフョードル・ドストエフスキーが訪れている。自分の日記に、一度、次のように、ケー・エルは書いている。
「ドストエフスキーには、何か秘密めいたところがある。私達皆が知らないことを、彼は究めた。ドストエフスキーは死刑判決を受けた。そのような瞬間は、誰でも体験できるものではない。ドストエフスキーは生きることに永遠の別れを告げた。が、突然、生が、彼に微笑みかけた・・・。ドストエフスキーは、ムロデツキー（１８８０年に、アレクサンドル三世の重臣の１人であったロリス・メリコフの暗殺の罪で、死刑となった。－著者）の死刑執行を見学に行っている・・・。そのような非人間的な仕業の証人となることは、私には不快である。多分、ドストエフスキーは、個人の感覚を体験したかったのかもしれ

ない。ムロデツキーは、周りを見回した。そして、平静の中で、死刑を執行された。フョードル・ミハイロビッチが、これについて説明をしている。そのような瞬間には、人は死に対する考えを追い払うように努力するものである。楽しいことだけを思い出すようになる。自分を、何か生き生きとした、春満開で、太陽が燦々と輝いている庭園に連れて行く。最後が近づくにつれて、避けられない死の知識は、よりつきまとい、より辛いものとなる。他の未知の想像を巡らすことは恐ろしい・・・。フョードル・ミハイロビッチの言葉に、私は、何か悲しみを覚える。そして、死刑を目前にした瞬間を体験したい、そして、赦免されたい、という以前の欲望が、再びぶり返してきた。私は、これら全ての苦悩を体験したかった。これらの苦悩は、精神を向上させ、判断力を沈静させるに違いない・・・。」

「死刑を前にして、最後の時を体験する。」ことは、ケー・エルには無かった。が、今、草原をはしゃぎ回っている彼の子供達は・・・・。
詩人として、ケー・エルは、長男に「ゆりかご」と題した長い詩を捧げている。

晴れ着を着て、ゆりかごで寝なさい、
レースの絹の着物で、
寝なさい、愛しい我が子よ、
暖かいお気に入りの隅で・・・。

この長い詩には、奇妙な行がある。

夜の静寂の中で
聖像を持って、神聖な悲しみの中で、
聖母マリアの目が
穏やかに君を見つめている・・・。
如何ほどの運命が
この悲しみの眼差しの中に、
悲しみがわかっているようだ
君の将来の人生の　　（著者　強調）

さらに、
寝なさい、未だやって来ていない
動乱と嵐の時は！　　（著者　強調）

ケー・エルは１９１５年になくなっている。神は彼を平穏に送った。彼は自分の予言が何を意味しているのかを知ることはなかった。
晴れ着を着てゆりかごに寝ていたのは、ヨアン（家族では、愛情を込めて、ヨアンチックと呼んでいた）である。ヨアンの兄弟には、コンスタンチンとイーゴリがいる。彼らは、動乱と嵐の年に、泥だらけの坑道の底で、犠牲となる。殴り潰された後、生きたまま坑道の底に投げ捨てらる。
彼ら犠牲者と並んで、この坑道の底には、公園の所有者であり、エーラの叔父が死ぬことになる。

エーラ！　彼女は、過ぎ去った過去における魅力的な女性の家の１人であった。ロシアにおけるフランス大使であるモリス・パレオログは、愛情を込めて書いている。
「１８９１年頃、パリで彼女と食事をしたことを思い出す。当時彼女は、背が高く、しっかりとした体格をしていた。目は輝き、奥深く、素朴であった。愛らしい口をし、顔は柔らかな輪郭をしていた。鼻はすっきりしており、魅力的な歩き方をしていた。彼女の話し方には、上品な女性の知性が感じられた。真から備わっている、心底からの、全く表に出ない思いやり。」
伝説がある。坑道の底で、エーラは、詩人ケー・エルが気に入っていた大理石宮殿で、レースの絹の着物で寝ていたヨアンチックの打ち砕かれた頭を、ハンカチで包帯をしていた。というものである。

イリンスキー宮殿では楽しかった。ヨアンチックとコンスタンチンは、ドミトリーと一緒に、庭園内を駆け回る。
パーベル大公の膝元をよく見ると、もう１人の犠牲者である若いイーゴリが。ケー・エルの若い方の息子である。叔父のパーベルは既に銃殺されている。

はしゃぎ回る子供達に目を向けよう。平穏。ニコライとアリックス。アリクスは、息子

に、何を予想していたのか！

人生の祝日は続いている。彼らは旅行をする。オーストリアへは、高齢のフランツ・ヨシフ皇帝への訪問。続いて、デンマークの国王と王妃である、ニコライの祖母と祖父の訪問。そこから、英国に行って、もう１人の祖母である、英国のビクトリア女王の訪問。王族家の巡回は、フランス共和国の訪問で終了した。
ロシアにいた時には、何度の思い出されていた、ホジンカの件は、ヨーロッパの旅行中には、頭をよぎることはなかった。が、２人は、フランスでは旅行を満喫した。ニコライの叔父であるアレクサンドル二世の不幸な訪問の後での初めてのパリ訪問であった。ポーランド人のベレゾフスキーが、アレクサンドル二世を銃撃したのである。抑圧されているポーランドのための復讐であった。
今回は、誰も銃撃をしなかった。感激している大衆の群れと、拍手喝采・・・。＊＊＊＊＊＊＊＊。
≪１０月２５日、父の名を冠した橋の起工式があった。大きなテントの中に座った・・・。ベルサイユには、３人で行った。パリからベルサイユまでの道は、群衆で一杯であった。私の手は殆ど麻痺していた（帽子の庇に手を添え続けている、体勢であった。－著者）。
３時半頃、綺麗な公園に入っていった。そこで噴水を見た・・・。ペテルゴフの公園とよく似ていた。宮殿のホールや部屋は、両国間の文化関係についての興味を引き起こした。≫
ペテルゴフとの類似はニコライを非常に驚かせた。つまり、歴史的な関係が。
アリックスは、宮殿のバルコニーに立った。革命の日に、暴徒化した群衆が、皇帝夫婦を引きずり出した場所である。・・・。
パリでは、ギロチンで処刑された人たちを運び入れた穴の場所について、アリックスに説明をした。・・・。アリクスは、穴と共に、ダントン・・・、ロベスピエール・・・、ジロンド党員・・・、等を思い浮かべた。彼らは、思い切って、自分たちの王を処刑した。神は、気違いじみたことをしたして、彼らを厳しく罰した。彼らはお互いに殺し合った。アリクスは、この事を忘れることは決してなかった。２０年後、ニコライの退位宣言を聞く時、彼女はフランス語で繰り返すことになる。「アブヂキュー」（退位）・・・。心の奥底は・・・。
　１８９６年が終わり、アリックスは子供を待っていた。彼女は、今度は男の子であると信じていた。彼女は本当に男の子を待ちこがれていた。が、。

日記：１８９７年５月２９日。我が家族の２回目の幸福な日である・・・。朝１０時に、神は、私達に、娘のタチヤーナを与えてくれた。体重３．４ｋｇ、身長５４ｃｍであった。沢山の電報のやりとりがあった。

かなわぬ夢
（若い皇帝の日記の続き）
ニコライは、亡くなった父の権力の元で、統治していたが、既に、目に見えない火山が燻り始めていた。軍隊内の動揺（これについては、何も書かれていない－軍は常に信頼すべきものである、（ということからか？））と、１８９８年のひどい飢饉（これについては、多く書かれている）である。
幸福な祝日は続いた。この年、ニコライはよく狩猟に出かけている。
日記。１０月２０日。撃った動物の総数。鹿１００頭、山羊５６頭、イノシシ５０頭、狐１０匹、ウサギ２７匹、１１日間で２５３匹。
しかし、自分の国では他の狩猟－人間の狩猟－が始まっていた。ここでも、戦利品は最も大事なものであった。このようにして、２０世紀のカウンが始まった。・・・。

１９０１年２月に、文部大臣が殺される。元学生が殺した。大臣の反動政策により、モスクワ大学はだめになった、と学生は説明した。１年後、内務大臣のシピャーギンが殺される。フィンランド人の将軍で知事が殺される。続いて、新内務大臣プレベが殺される。社会主義者・革命家達のテロ組織は、このようにして活動を始めた。
若い皇帝は、何か奇妙な振る舞いをしている。彼は犠牲となった自分の大臣達に、殆ど心を痛めることなく、忘却したかのようであった。
皇帝の日記に、謎解きがある。≪我々の幸福のためには、温和しく、かつ断固として神が我々に与えた体験を、乗り越える必要がある。≫（シピャーギンの暗殺後書かれた。）
≪神の聖なる意志である。≫（プレベの死後）
ニコライの世界観の特徴は、全てのこと、大衆の運命、人の運命、は神が決めることである、ということである。神の考えは、我々には思い知ることは出来ない。そして、幸福

は、神の各思し召しの中に隠れている。
　ニコライ自身が企画した事業などが実現しなくても、ニコライは平静でいられたのを、この事（神頼みであったこと）が助けている。自分のなす事、考えることは全て、消えてしまい、或いは、逆のことが為される、とニコライは当時思っていた。
　ニコライは、即位すると直ぐに、禁酒令を布告した。大酒－ロシア病－はヨーロッパ中で知られていた。法令は素晴らしい物であったが、大酒は消えることはなく、大衆は以前よりウオッカに金を使うようになり、以前同様大酒を飲み、短気にもなった。次にしたことは、ビッテが、ロシアルーブルを、金担保制に移行したことであった。＊＊＊＊＊。これにより、ロシアの富裕層は、ヨーロッパで、絶賛を受けた。パリのレストランで、ロシアの財産が散財され、ロシアの領地が遊興に使い果たされた。「ロシアのチョウザメが、金のイクラをばらまきにやって来た。」　が、結果として、貴族達や、富裕な人たちは、破産した。最も高価な金貨には、ニコライの横顔が刻印されていた。ニコライ以上に、全てのものが、ニコライの国(＝ロシア)を操った。

国民の中への行脚
　当時、ニコライとアリックスには、富裕層に対して、不信感があった。当時、世紀の切り替えの狭間で、ニコライには、「大衆と皇帝。これらの間には誰も存在しない。」という、思いが生じている。」　世紀の境目に、ニコライの奇妙な他力本願が存在している。
　かって、大候の中の誰かと話をした時、クロポフというとても面白い名字の９等文官が居るのを知った。このクロポフは、いつも、ニコライに手紙を書いている。手紙には、製粉作業において、官品横領があることを、明瞭に書いていた。この手紙は、ニコライの所まで届かなかったが、熱心なこの正義の探求者は手紙を書き続ける。ニコライはこの件についてアリックスに話す。２人は、声を出して手紙を読み、この、無名で、ごく普通の人間の純粋さに感動する。ニコライは、大衆の中からそのような人を見つけられるのであろうか？　ニコライ自身が、そのような人にたどり着けるのであろうか？

　９等官を、皇帝の前に連れてくる。遠慮がちで、小柄で、愛想の良い目をしたクロポフは、彼が、他の部屋であったことのある、余り背が高くなく、内気な人物を思い出した。みすぼらしい９等官と、世界の半分の支配者の、２人は本当に似ていた。

　ニコライは、クロポフに、秘密の勅裁書を与える。彼に、秘密で、最大効力の全権を与える。クロポフはロシアの調査に出かける。クロポフは、不作の原因を解明しなければならない。監視の背任行為を明らかにし、皇帝に真実をもたらさなければならない。その際、知事から見た真実－官僚側の真実－ではなく、皇帝に隠している、本質的で、人民から見た真実を。クロポフは出発した。
　「ロシアでは、全てが隠されているが、秘密のものなどはない。」　直に、国中が、秘密指命中のクロポフのことを知るようになる。請願を持った群衆が、皇帝の使者を取り巻くようになった。
　しかし、クロポフはやはり、製粉の仕事しか知らない９等官であった。高位の官僚達は、クロポフと愛想よく話し合い、クロポフの好きな製粉事業における不都合を一掃することを約束した。感激したクロポフは、ロシアの奥底から、そのような「真実」を、彼のパトロンに、もたらした。「プレベ内務大臣と閣僚達は、最高の気分で活気に満ちています。」
　このように、クロポフの危うい真実調査は始まった。出張の後、クロポフは一度自問すす事があった「夢の実現不可能性・・・。」
　これが全てである。ニコライは自分が戦争を回避できる力があるということで、「平和の創造者」と呼ばれることに満足をしていた。ニコライは、そのような考えを持って、玉座に就いた。世紀の切り替え時、ニコライはブロッホという人物の小説を読んだ。企業家で哲学者であったブロッホは、新しいヨーロッパにおいて、局地戦争はありえない、ということを書いていた。２０世紀の戦争は、もし始まるとすれば、それは必ず大規模なものとなろう。「勝利者もひどい破壊を免れない。それ故、近年戦争の準備をしている各国政府は、社会的な破滅に対する準備をせざるを得ない。」ブロッホは予言をしている「戦争は、ヨーロッパの君主制の棺となり得る。」。ニコライはブロッホの考えを受け入れた。交渉は、ニコライの考えを元に行われた。
　即ち、ビッテの提案から、「強国へのアピール」が生まれている。ニコライは、全面的な平和を、ヨーロッパに提案した。
　「アピール」の基本的アイデアについて、ビッテは自分の回想録に書いていた。＊＊＊＊＊＊。ヨーロッパは、相互の敵意と、国家間戦争下で、ぼろぼろとなっている。直に他の国、アメリカと日本が、ヨーロッパに関係して来るであろう。老齢の美人に対するように、尊敬持ちながら、かつ敵意を持って。

しかし、全面的な平和のアイデアは終了した。日本との戦争が・・・。

１８９９年に、３番目の娘が生まれた。マリアである。長い間待ちこがれていた男児は未だとなった。３人の娘と共に、皇帝一家は、２０世紀を迎えた。この１８９９年に、ニコライの弟であるゲオルギーが、結核で亡くなっている。王位の継承者は、末弟のミハイルとなる。
１９００年、秋に、ニコライは重病となった。チフスに罹ったのである。
ニコライは、死の手前にあった。問題が起こっていた。誰が、玉座を継承するのか。これは、アリックスにとっては奇妙なことであった。アリクスには、長姉のオリガが継承者となるものであった。英国では、祖母のビクトリア女王が玉座にいるからである。・・・。ロシアでも、女帝で良いはずである！　しかし、ミハイルが継承者となるべきである、と説明をする。パーベル一世が決めた王位継承法があるからである。母であるエカテリーナ大女帝に対する憎しみが全ての法であった。この法によれば、ロシアの玉座には、女性が就くことは出来ない。しかし微妙な状況が生じている。アリクスは妊娠をしていた。今回こそ、男の子であると、アリクスは固く信じていた。しかし、これは、法には関係のないことである。皇帝の死の瞬間に、誰が、皇位を継ぐかと言うことだけである。
ビッテは、毎日、リバディンスク宮殿に詰める。ヤルタのホテルには、閣僚が住みつき、ヤルタとリバディア宮殿の間を定期的に往来する。アリックスは獲物を待っているカラスのように見える。
しかし、ニコライは健康を回復した。３度目の死を乗り越えた。ニコライの病気の後では、息子の誕生の思いが、アリクスを捕らえて放さない。その時、チェルノゴルスクの王女達が現れた。

チェルノゴルスク候の娘達は、ロシアで勉強をしていた。有名なスモールヌイ学校で。
ミリッチャとスタナである（が、宮殿では、２人を意地悪く、チェルノゴルカ１号＝スタナ、２号＝ミリッチャと呼んでいた）。２人は、ニコラエビッチ一族の大公達と結婚をした。ミリッチャは、肺病を患っているピョートル・ニコラエビッチと、スタナは、弟のニコライ・ニコラエビッチと。大ロマノフ家では、ニコライ・ニコラエビッチのことをニコラーシャと呼んでいた。＊＊＊＊＊。ニコライ・ニコラエビッチ大公は、大声の大男で、軍隊好きであった。
２人のチェルノゴリカの王女といると、アリクスは、自分が女王になった気分であった。宮殿の慇懃な冷たさの代わりに、崇拝と熱心な愛があった。２人のチェルノゴリカの王女は、アリクスに、本当に良く尽くした。アリクスが胃病を患った時には、一番の召使いのように、彼女らはアリクスの世話をした。・・・。
２人の王女は、自分たちの秘密の郷土から、神秘現象についての揺るぎない信念を持ってきた。郷土では、未開の森で覆われた高い山の上には、魔女と魔法使いが住んでいた。そこには、死者と会話をし、生き物の運命を予言をする人々も住んでいた。ビクトリア女王の養女（アリクスのこと）には、全てが珍しかった。この秘密の世界が、懐疑的なアリクスを惹き付けた。しかし、大事なことは、アリクスが後継者を熱望していたが、その実現を、２人は約束したのか？　いや、そう簡単なことではない。霊力がある、適当な人物を捜す必要がある。熱狂しやすく、ロマンチックなアリックスは、新しいことに、心底から惹き付けられる。マリア・スチュアルト（　？　）の血が騒ぎ出した。
ヘッセンの王女（アリックスのこと）にとって、慣れ以上の、リヨン（フランス東部の都市）生まれのメシエ・フリップなる外国人と、やり始めた。メシエ・フィリップは、フランスにおいて、自身の奇蹟で名声を上げていた。チェルノゴリクの王女達は、ロシア大使館の武官を通じて、パリで彼について知っていた。
アリックスの特徴。信じたならば、一途に、完全に。アリックスは信じた。メシエ・フィリップの呪文で、望んでいる息子を得ることを。
ロシアの教会は、魔法使いに関しては弾劾をする。が、チェルノゴルクの王女達は説明をする。「メシエ・フィリップは魔法使いではありません。魔法使いは、神の背教者です。背教者は十字を切りませんし、教会で聖体拝礼をしません。魔法使いを通じて、悪魔が力を示します。他に、まじない師。まじない師はキリスト教徒。というのは、キリスト教徒は、自分のためではなく、神のために祈るからです。」　宮殿内では、この素朴な嘘に、誰も反論しない。フィリップが、ペテルブルグに現れる。フランスの当局からの彼の教育歴、推薦状に、疑念があったが、フィリップは医学博士で、かつ４等文官である。宮殿では、おかしな話をし始める。皇帝の寝室を訪れ、彼の祈祷で、後継者の誕生を祈る。母の皇太后は、ニコライと相談をし、変なフランス人をロシアから遠ざけることを要求する。ニコライは同意したが、フィリップは残留した。ニコライは、愛しているアリックスの希望を奪うことが出来なかった。フィリップは治療を続けた。

幸運にも、アリックスは妊娠していると感じた。アリックスは医者と相談することを危惧した。というのは、皇帝が、フィリップを追放させないためであった。しかし、医者にかかってみると、妊娠は奇妙なこととなった。想像妊娠であった。アリックスは、妊娠を夢見ていたのである。これか結論である、と医者は断言した。アリックスは子供を欲しがっている。フィリップスは、男児を予言した。

１９０１年６月５日、アリクスは、４番目の娘を産んだ。アナスタシアである。フィリップは、これは特別な兆候である、と説明した。男児の代わりに、女児の誕生は、女児の尋常ではない運命の星の下に生まれたのであると。
フィリップは、少し文明的であった。チェルノゴルクの２人娘は、もっと秘密的で奇怪な何かが必要である、と考える。
宮殿に、ミチカ・ユロディビーが連れてこられた。２人娘は、彼女を「ユロディビー団は、キリストのために、この国に存在しています。」と、紹介した。狂人を装いながら、時折、彼らは卑猥なことを行う。哀れな目に見える世界を笑いものの種にするため、人間への悪口を得るために、ボロをまとい、裸になって歩き回る。神の与える深い真実と、表面的な世間の常識との間の矛盾を、我々の前に明らかにする。しかし、彼らの口から、彼らの不明瞭な話から、神の言葉を見いださなければならない。そして、彼らは、神託を与え、奇蹟を成す。
しかし、アリックスは未だロシア語がわからない。ミチカの支離滅裂な言葉は、アリックスをただ疲れさせる。
ダリア・オシポーバが現れた。
ベーラ・レオニドブナも現れた。彼女は語っている。
「当時は奇蹟が生きていた。この神秘的な感覚は、多分、世紀末に生じている。これは、アトランチスク大陸の破滅の予感となった。降神術の会を熱愛し、コカインを吸った。・・・。当時、私達は、ダリア・オシポーバに熱中していた。・・・。このオシポーバは、テンカンでのたうち回り、その時、神託を叫びだした。私達は、彼女の呪文を書き写した。私の手元に、その文が、今でも残っている。・・・。「嵐で、新月の時に」、川で泳げ。これが、妊娠のための彼女の処方箋であった。・・・。魔女となり、夜ごと空を飛ぶために、薬草を作るように、彼女は語った。これは、身近にある「ニンニク・・・。朝鮮朝顔・・・。草の魔女・・・。」のことを語っていると、私は理解する。ついでながら、彼女から次のような予言が与えられた。引き続く次の３代の皇帝において、１２年ごとに、炉リアの歴史は、大きく変わろう、と。調べてみる。私の友人のニコライは、１８９４年に玉座に就いた。彼の１２年間の王制後、１９０５年１０月１７日の憲法は、ロシアの専制を終わらせた。さらに１２年後、１９１７年には、帝国は消滅した。さらに１２年後、１９２９年には、新しい皇帝、スターリンが、最終権力を握った。１９４１年には、戦争が始まった。１９５３年には、スターリンが亡くなり、フルシチョフが登場した。このように、１２年ごとに、何かが起こり続けていると言うことに、私は大いに興味を持っている。・・・。」
ベーラ・レオニードブナは生きながらえなかったが、１２年後には、フルシチョフは引きずり落とされた。ブレジネフが登場した。しかし、もう、皇帝ではない。パロディーであり、人形であった。この所のロシアの玉座に関する１２年の法則は、明らかに生き続けている。
異教徒のロシアで、疲れ果てている時の神の啓示・・・。まじない師の予言者的なもぐもぐ声は、その後、ラスプーチンのつぶやき声に、思い入れを入れさせるように教え込むことになる。変な宗教団体の退廃的行為のよく分からない話が、ラスプーチンの専横を許すことになる。・・・。
これらの魔法使い達が、「聖なる悪魔」の到来の準備となった。明らかに、これらの全ての有害な遊びが、ヨアン・クロンシュタットスキーに不安を引き起こした。

聖なる天使（セラヒム）
死後の栄光が、ロシア中に鳴り響いていたセラフィム・サーロフについて、本当の聖者で、奇蹟の創造者について、父ヨアン・クロンシュタットスキーは、彼ら（　？　）に語った。
セラフィムとは、サーロフ隠遁所で、１８３３年に亡くなった修道者である。「神への不断の賛美と、宗教本の読書で、神の意志を確かなものとし、一度ならず、セラフィムは、精神的なものを見る能力を得た。そして、彼は奇蹟によって病気を治し、予言をした。・・・。」
１８歳の時、家を出て、セラフィム（当時の名前はプロホル・モシュニン。修道院に入ってからセラフィムと称した。）は、キエフの大都市にある、聖ペチェルスキー大修道院

へ礼拝に出発した。その後、長い間、サーロフ修道院で、名を知られることなく暮らした。彼は習得した。「神の言葉を、心に与えなければならない。これは天使のパンであり、それを、心が活力源とするのである。」
彼は穏和で、満面に喜びを出す、修道士であった。「絶望に満ちている魂は、恐怖に打ち勝つ、狂人のようになる。勝つことと絶望。」（　？　）　憂鬱、絶望－罪深い。（　？　）
セラフィムは、処女達に囲まれて、巡礼をした。この処女達は、幸せなキリストの花嫁達である。
セラフィムに関してのうわさ話が飛び回った。上流社会の首脳達は心配をし始めた。宗教関係機関が、セラフィムを尋問した。神聖さの秘密は、政治的捜査の例となった（　？　）。直ぐに、捜査は禁止された。というのは、何も出てこなかったからである。しかし、「この状況は、私の死が近いことを示している。」と、当時、セラフィムは語っていた。そして、じきに、彼は静かに息を引き取った。
探査の時には、神託警察局（　？　）に、セラフィムの父が出頭した。

アリックスは、直ぐに信じた。セラフィム修道士は、神の座の所におり、彼ら（ニコライとアリックス　？　）を擁護する。聖なるロシアは、後継者を得る。穏和なセラフィムは、自分たちと共にいる。・・・。

全情熱を持って努力し、アリックスは、セラフィムを聖人の列に加えることに成功をする。このセラフィム修道士を、聖人列へ加えるのを良い機会に、サロフでの式典に、全家族を出席されることを決めさせた。このように、アリックスは、今回の旅行を信じていたのである！　２人は聖なる聖体に頭を垂れるべく、そして男児の誕生を願うべく、血筋が継続するように願うべく、旅行に出発した。
１９０３年７月１６日に、皇帝列車は、アルザマス駅に到着した。この駅から、皇帝家族は、サーロフ隠居所と、デベーフスキー修道院へと移動した。
この旅行には、プレーベ内務大臣を責任者として、内務省が時間をかけて準備をした。ロシアで良くある通り、特殊部隊は、全てを茶番にしてしまった。皇帝家族の通過する村落の住民達への命令が、出された。「村への入り口を、歓迎門で飾ること。各家では、旗で飾り立てること。道路の両側に勢揃いをして、歓迎をすること。・・・。」。その他。直に農家は飾られ、屋根も拭き直された。警備は厳重を究めた。訪問は、熟考された。駅での盛大な歓迎式典の時、偶然であるが、従僕が持っていたプレーベ内務大臣の外套から、充塡済みの拳銃がこら狩り落ちた。暴発した。狡猾なプレーベは旨く振る舞った。発射音は、皇帝に恐ろしい思いをぶり返させた。心配している内務大臣が行った予防措置を、皇帝は高く評価した。

しかし、これらの政治的な背景には、２人は気がついていない。２人は、ただ、道路や海端に立ちつくしている、興奮している大群衆を見た。修道院には、１５万人もの群衆が詰めかけていた。作家であり、聖地巡礼者達とそこへ行った、目撃者のカロレンコは、皇帝を出迎える大群衆の興奮について、書いていた。
サーロフへの旅行は、ニコライとアリックスに、大きな感銘を与えた。サーロフの地では、２人は、３日間祈りを捧げた。
息子の誕生を、セラフィムに祈りながら、聖なる池で、皇后は、夜ごと水浴をした。皇帝は、岸辺に座っていた。銀色に光り輝く水の中で、皇后の体は、白く見えた。
聖なる所の墓所、サーロフにおける静かな日々。これらは神の恵みである。・・・。
サーロフの地で、アリックスは、修道者について驚く考え方に達した。「修道者は、神の前において、貴方（ニコライ？）の庇護者です。貴方は自分の意志、ずるい自分の知性、を修道者にゆだねなさい。修道者は、絶えず神との交流を感じており、修道者は貴方を正しく導く。修道者は、貴方の道案内人です。修道者は、貴方に心に、天使のパンを運んできます。」
修道者セラフィムは、彼ら（アリックスとニコライ？）と共にいた。彼らは彼（セラフィム？）の存在を感じていた。彼の静かな声を聞いた。「人間は、肉体に関しては、輝く光に似ている。輝く光は燃え尽きなければならない。人間は、必ず亡くなるものである。しかし、人間の魂は、不滅である。私達の配慮は、肉体より、魂により大きく向けられなければならない。」

聖なるセラフィムは、皇帝家族の保護者であると宣言された。
セラフィムが亡くなる時、セラフィムは、野獣のえさとなっても良いように、自分の遺体は、遺棄するように依頼していた。セラフィムは穏和で、慎み深い人であった。
１９２０年に、セラフィムの聖骸が暴き出され、押収された。皇帝一族と共に、死んだ

後になって、セラフィムは、災難と侮辱を受ける羽目になった。彼の遺体は、完全に行方不明となり、彼ら（革命派？）は、消滅したものと見なした。が、７０年後、カザンスキー寺院に設置されていた無神論博物館の地下室で、彼らは発見をした。
調査員の１人は、布で覆われた大きな長方形の物に注意が向いた。それは、ゴベル織りに包まれて、隅に立っていた。布をはぎ取った。その下には木製の土台があり、無神論博物館の労働者が驚いたのは、ガーゼと綿に包まれて、腐っていない聖骸が、目の前にあったことである。完全な形の遺骸であった。ひげ、髪、筋肉組織の一部分が残っていた。頭蓋骨には、修道士の鐘、胸には銅製の十字架、十字に複雑に組み合わされた手には、金糸の刺繍の入った、アトラス製の長手袋。「聖なる父セラフィムへ、、我々について、神に懇願せよ・・・。」
自分の死から、７０年後に、セラフィムは、聖人の列に加えられた。
ひどい侮辱（墓の暴き）から７０年後、彼の腐っていない聖骸は戻ってきた。これら全ては、セラフィム自身が予言をしていた。

予言と言えば・・・。サーロフで、ニコライは、聖なる予言について幾つかの驚きを体験した。ビッテが、自身の「追想記」中で話している。ビッテが、ポルトスムットでの平和条約の締結のために、出発した時、彼を追いかけるように、彼を怒らせる訓令が、配送されて来た。＊＊＊＊＊＊＊。
政治局もまた、皇帝に、セラフィムの預言を伝えた。
それらの中で、ニコライを特に驚かせた物があった。今後のニコライの統治に関する奇才の修道士が予言をした。「この君主の統治の始めには、大衆は不幸になり、戦争はうまくは行かないであろう。国内には大混乱が起こる。父は子の上に立ち、兄弟は兄弟の上に立つ。しかし、統治の後半は、光り輝くであろう。皇帝の寿命は長いものとなろう。」
１年後に、予言の始めの全てが的中した時、ニコライはどのように思ったのであろうか？
最初、戦争はうまく進まなかった。その後、大混乱となった。・・・。聖なる修道者の予言を知っていたので、最も酷い不幸の最中の日々でも、神秘主義の傾向のある皇帝は、平静でいられたのであろうか？
いつ、ニコライは予言を信じることを止めたのか？　予言の最後の言葉が、ニコライのために、政治局で、書き加えられたということを、ニコライはいつわかったのか？　・・・。

セラフィム・ソロフスキーが、実際に何を予言したのか、我々（　？　）は知っているのか？

第一次世界戦争
１９０４年、ニコライの最初の戦争が始まった。ロシア・日本戦争である。戦争を憎んでいる「平和の創造者」の息子は、戦争をすることに決める。
その後、ビッテは、思い出している。「ニコライに、満州の土地を確保するように促し、そして、小さい日本は、ロシアを襲撃する勇気は決してない。と、ニコライを説得した。」
ビッテと母親は、状況の危険性を、ニコライに説明をする。ニコライは納得し、ビッテに、日本との関係の正常化の計画を立案することを、指示する。ニコライは、ポーランドの、狩猟用宮殿に出かけた。そこで、人によって殺される予定であった野生の動物を、自ら殺すことになる。
ビッテは計画を立案するが、この計画は、古文書の奥底で、紛失している。ビッテと母親が努力していた、日本との交渉は、破断してしまった。
ニコライの日記から。
≪１９０４年１月２６日。・・・。８時に、劇場に出かけた。「ルサルカ」が上演されていた。素晴らしかった。帰宅して、アレクセーフから、電報を受け取った。停泊中の「チェサレービッツ」、「パラーダ」、その他の艦船に、日本の水雷艇が、攻撃をかけ、艦船に穴をあける被害を起こした、事を知らせるものであった。これは疑いもなく戦争か？！戦争だ。神よ助けたまえ！≫
≪１月２７日。朝に、ポルトーアツツーラの爆撃に関する電報が届いた。至る所で、全員一致の精神高揚が見られる。≫
冷静な記述。日本人は、戦争が出来ない、という風に、周りはニコライに信じさせていた。ニコライの内閣は論争をした。「日本兵は、ロシア兵１人当たり何人にいるの。２人か、それとも１．５人か。」
しかし、そのうち、ニコライは、日記に、書くことになる。「大人数である。大変だ。」
それまで見えていなかった、ロシア軍とロシア艦船の被害が、直ぐ後に付いてきた。

スペインの言葉
「ニコライに、満州の土地を確保するように促した。」　しかし「促した」という、この個人がはっきりしない単語の陰に、誰が隠れているのか？

内務大臣プレーベ（警察局は、彼の部局に属していた。）が、爆弾で殺された時、彼の文書中に、極東に関する全ての文書のコピーが発見された。「革命を押さえるためには、我々には、少しでも勝利のある戦争をする必要がある。」　これが、戦争前に、重臣の１人に話した、内務大臣プレーベの言葉である。
「我々に必要・・・。」　誰に？
自身の回想録で、ビッテは興味深い出来事を書いている。首相在任時、彼は、ユダヤ人ポグロムと闘った。本来において、警察局は、彼を助けなければならない。そして、助けた・・・。しかし、当時、警察局の官僚の１人から、ビッテは、驚きを持って知ることとなる。ユダヤ人ポグロムと闘っているはずの警察局が、同時に、住民に、ユダヤ人ポグロムを呼びかけるプラカードを準備していたからである。これらのプラカードは、秘密裏に、各県に配送される。これらのプラカードと共に、悲惨なユダヤ人ポグロムが、ゴメリ州で始まった。ポグロムの潜在的な力が存在し、その動きを、首相さえ制御することが出来なかったのである。・・・。
ベーラ・レオニードブナの驚くべき話がある。
「私の当時の友達（彼女は遠い昔のことに笑みを浮かべながら、ウットリするように友人の言葉を発音した。－著者）・・・。彼は、ビッテ公爵の側近でした。ニコライの統治中に起こった多くの出来事は、「カマリリヤ（宮廷内の反動派）」の秘密活動と関係していたことを、彼は立証しました。今では忘れられたこのスペイン語の単語を、ビッテ伯爵は好んでいました。この単語は、スペイン国王フェルデナンド七世の宮殿で、勢力のある陰謀家集団を意味していました。この単語は普通名詞となった。ロシアでは「カマリリヤ」は、衰退した有名な一族です。彼らは、財産と権力を失うことを恐れ、新しい時代を恨みました。つまり、理解できない資本主義を。それで、彼らは、ニコライとアレキサンドラ（アリックスの新名。結婚に伴い、ロシア風に改名をした。＊）の側近を形成しました。私の友人は次のように考えていました。ロシアでは、保守主義の長い伝統の存在する他の全ての国と同じように、極右の秘密結社が、長年にわたって形成されてきました。それが、「カマリリヤ」であり、秘密警察です。アレクサンドル二世が憲法を準備した時、秘密警察は「監視の目」を離した。そして、アレクサンドル二世は暗殺された。・・・。また友人は次のようにも話をしています。アレクサンドル三世の時には、厳しく監視されているガッチンスキー宮殿には、皇帝を脅迫するために、不断において、テロリストの文書が出回っていた。このようにして、秘密警察を通じて、これらの文書を送り届け、自由主義に対する彼らの嫌悪の側に、皇帝が立つようにしていた。・・・。秘密警察が、革命組織にスパイ・扇動者を送り込み始めた、世紀末には、警察局は、皇帝の管理を脱していた。と、私の友人は断言する。即ち、その時に、恐怖の実践が生まれた。扇動家達は、嫌疑のない革命家達に爆弾を持たせて、気に入らない皇帝の官僚組織の「カマリリヤ」へ向かわせたのである。
私の友人が、さらに話した。当時、カマリリヤと秘密警察は、一連の危険な陰謀を企てていた。それらの内の１つが、日本との戦争であった。・・・。」

≪神から遣わされた慰め・・・≫
戦争が始まった。ちょうどその時、良いアイデアが考え出されても、結果は逆となる、というロシアの官僚機構の長年の慣行が機能し出した。革命を押さえるために、目論んだ戦争が、革命を励起した。
大激戦の時に、混乱の中で、革命が迫ってきた。来るべき物が来た。・・・。

これは、アレキサンドリアでのことである。そこには、小さな夏の宮殿があった。この宮殿のガラスに、かって恋する２人（若いニコライとアリックス）が名前を刻んだ場所である。ニコライは、１４歳の子供の歌う詩を聞いていた。１９０４年７月３０日の昼頃。・・・。「皇后は、周り階段を伝って、小部屋へ上がっていくのが精一杯であった。跡継ぎが生まれた。」と、ビルボア（アリックス付きの女官　？　）が回想している。

日記より。
≪７月３０日。私達にとっては忘れ得ぬ日である。神の慈悲が、私達を訪れた正にその日である。４時にアリックスが子供を生んだ。祈りながら、アレクセイと名付けた。全ては、私が驚くほど手際よく進んだ。大変な経験（戦争のこと　？　）の時期に、神から遣

わされた慰めに対して、神に十分に感謝を捧げる言葉が見つからない。・・・。≫
近衛騎兵の司令官、ラウフ将軍が、ニコライの言葉を思い出している。
「皇后と私は、跡継ぎに、アレクセイという名前をつけることに決めた。アレクサンドルとニコライの名前を絶なければならない。」　幸せ一杯の父親は、ロシア歴史学会の名誉会長に、そのような冗談を言った、ということである。実際において、ニコライとアレキサンドルの名前の皇帝は、１００年以上にわたって、ロシアを統治してきていた。
しかし、アレクセイという名前はというと、事情は簡単ではない。アレクセイという名前は、ロマノフ家においては、名誉ある名前ではないのである。ピョートル大帝の命令により、後継者である息子のアレクセイを秘密裏に殺害した後、ロマノフ家では、玉座の後継者に、この名前をつけることを避けてきていたのである。殺された皇太子アレクセイは、殺害される直前に、ロマノフ一族を呪う言葉を、大声で叫んだという説が存在した。・・・。しかし、ニコライは、この名前を使うことに決定した。というのは、長い間、ニコライは、他のアレクセイである、皇帝アレクセイ・ミハイロビッチに惹かれていたからである。
跡継ぎが誕生してから、直ぐに、有名となった仮装の「歴史的ダンスパーティー」が開催された。ホールは、古式に則った婚礼服を着た人々であふれかえった。ニコライは、アレクセイ・ミハイロビッチ皇帝の、金と宝石で光り輝く服を着て現れた。アリックスは、アレクセイの妻、ナターリア・キリーロブナの、宝石がちりばめられている服を着て。ニコライにとっては、この仮装舞踏会は、単なる舞踏会ではなく、彼の敬愛する皇帝への追慕でもあった。アレクセイ皇帝は、自分の信心深さから、穏和であり、「無言居士」のあだ名に値するほど品行方正であった。政府として行われた多くのことは、ピョートル大帝のような、厳格で、激烈な意志のもとではなく、穏和で、準準の変革であった。ニコライは、息子に、この皇帝の名前を与えた。・・・。
日記から。
≪洗礼式が１時に始まった。明るく、暖かい朝であった。・・・。宮殿の前、海の傍の道路には、金で飾った馬車が並び、軽騎兵とコサック隊からなる護送隊の小隊が居る。・・・。≫
誕生時の護送隊。そして、死亡時にも護送隊が付くことになる。

アレクセイの将来の教師となる、スエーデン国王ジリヤルが、自分の娘に授業をしていた。その時、教室に、赤子を連れて皇后がやってきた。跡継ぎは、１歳半であった。金髪の巻き毛をし、大きな灰色が刈った青い目をした赤子で、おとぎ話に出てくるような赤子であった。
しかし、その後、スエーデン国王が、この赤子を見ることはまれであった。ある病気についての噂が、宮殿中に広まっていた。
ある時、子供（アレクセイのこと　＊）が、教室に駆け込んだ。ちょうどその時、子供の後ろから、彼の後見役の年配の水兵が現れた。子供を捕まえ、連れ去った。廊下には、子供の叫び声が響いていた。・・・。子供は、また、１月ほど、姿を見せなかった。
スパル（ポーランドの城。ここに、昔から、ポーランド国王の狩猟場があった。ロシアの皇帝は狩猟好きであった。）での皇帝一族の狩猟の時に、ジリヤル国王に、少し謎解きが出来た。皇帝家族は、この古い狩猟用宮殿に住んだ。狩猟は、尽きることのない娯楽であった。・・・。ある祝日、ジリヤル国王は、舞踏会ホールから、城の内廊下に出た。
彼がドアの前に偶然出ると、どこからか、絶望のうめき声がしていた。直ぐに、彼はアリックスを見た。彼女は、邪魔になる長いドレスをたくし上げ、走って近づいてきた。動揺からか、彼女は、ジリヤルには気がつかなかった。
これは、家族全員が守らなければならない秘密であった。息子が生まれた後、アリックスが一番心配していたこと、息子が遺伝の病気に罹っていること、を医者は見立てた。この病気は、ヘッセン家に伝わっているものであり、男性の子孫（即ち、王冠の継承者に。王冠に対する運命のあざけりか。）だけに伝わるものであった。不治の病、血友病。アレクセイの教育を、ジリヤル国王に委ねる時、跡継ぎの医者であるデレベンコが、血友病の症状を詳細に説明をした。血友病患者の動脈の管は脆く、軽い打撲、圧力、落下、切り傷などが、血管の破裂を招き、死に至ることもある。この病気は、ヘッセン家の呪いであった。
アリックスは、自分が望んだ通り、息子を産んだ。が、彼女は、また、彼の将来の不可避な死の原因ともなる。・・・。これには、彼女の急速に進行していたヒステリーの謎解きが必要となる。
さて、これからは、奇蹟を信じる道しか残されていない。アリックスは、全力で、奇蹟を信じ続けた。病気が消滅してしまうこと。＊＊＊＊。聖なるセラフィムは、偉大な王座の跡継ぎを助けてくれる者を、必ず遣わすと言うことを、彼らに残しては居なかった。
聖人セラフィムの顔の絵は、皇帝の執務室内に吊してある。

家族は、ペテルブルグを後にする。首都の近郊にある、皇帝の公邸に、閉じこもる。アレクセイの病気は、政府の秘密となる。
アリックスが、どれほど救助者を待っていたことか！

この頃、アリックスに、嬉しい噂が届き始めた。シベリアの僻地の、広いトボリ川の畔の、小さいパクロフスキー村に、修道者が住んでいることが。・・・。
第一革命の直前に、敗戦の最中に、グリゴーリ・ラスプーチンが現れる。次の悲惨な戦争の最中に、次の革命の直前に、ラスプーチンは消える。

帝国滅亡の兆候
「血に汚れた日曜日」と呼ばれる、有名で、隠された（最後の皇帝の人生を語る時、この単語は何度も出てくる。）出来事から、革命は始まった。

少し歴史を。
アレクサンドル二世が、暗殺でなくなった１８８１年、社会主義者であったズバトフは、社会主義思想を捨て、警察の公務に入る。
ニコライの戴冠式の時、連隊長ズバトフは、モスクワ保安局の司令官となっていた。以前は社会主義者であった彼は、夢みたいな実験を考え始めた。労働者に対する影響を、社会主義者と、警察とを闘わせてみよう。警察は、労働者同盟を組織し始める。
ストライキの時には、警察は労働者側を支持するようになる。ズバトフは、資本家側に、譲歩するように強制する。このようにして成功を勝ち取る。１９０２年に、クレムリンの庭園を、数千人の労働者達が満たした。彼らは、一斉に、「皇帝に、神のご加護がありますように」と、唱えていた。帽子を脱ぎ、跪いて、皇帝の健康を祈願した。モスクワ知事である、セルゲイ・アレクサンドロビッチ大公は、帝位への信頼に対して、労働者達に感謝をした。ヨーロッパの新聞は、驚きを持って、前代未聞の情景を、書いている。これは警察社会主義である。・・・。しかし、ロシアで良くあるように、ズバトフの改革は、結局、放棄された。しかし、ズバトフの労働者同盟は、生き続けた。
１９０５年、ペテルブルグで、ズバトフ労働者同盟に、聖職者ガポンが現れた。戦争の敗北と、困窮の最中にあったこの年に、ガポンは、労働者達に、一般人の困窮と、工場労働者への迫害、を訴える請願を持って、皇帝の所に行くように訴えた。
労働者達の行進は、１月９日に、予定された。ガポンを案内人に、数千の労働者達は、教会の旗、皇帝の肖像画、イコン、等を持って、皇帝の所に行く準備をする。
この示威行進自体のアイデアは、ニコライの大事な夢「人民と皇帝」の権化でもあった。＊＊＊＊。一般人民は、専制君主の防衛のために、行進に出た。＊＊＊。
が、突然、行進の前に、皇帝は首都を抜け出す。皇帝は、ツアールスコエ・セロに去って行く。

予定している行進の３日前である。奇妙な出来事が起こった。宮殿河岸に、「ヨルダン」という、聖水を取るための場所が築かれていた。頂上に十字架を頂き、金色の星をちりばめた青色の、派手な天蓋の下で、ニコライは、府主教と一緒に、聖水の儀式に出席した。聖水採取の後に、伝統によれば、ネバ川の対岸から、ペトロパブロフスク要塞の大砲が、盛大に空砲を撃つことになっていた。ペトロパブロフスク要塞は、「ヨルダン」のちょうど正面に位置していた。砲撃が行われた。・・・。が、参集者が仰天した。大砲には、実弾が装填されていたのである。砲弾が皇帝に命中しなかったのは、奇蹟であった。警察隊長は、当分苦しむことになった。・・・。名字はロマノフであった！
　細かいことを、通常、誇大に語る警察は、事件は、忌々しい偶然と、説明した。誰かによって期待されている効果は、達成した。しかし、この事はニコライに、これからの厳しい仕事を想起させた。 警察隊長の名前は、予兆として聞こえた。
皇帝は、砲撃にびっくりした。
奇妙なことが続く。警察局は、行進に参加する臣民の雰囲気を、詳しく把握していた。というのは、このデモを提案しているガポンは、この警察の回し者であった。この事は、後になって、社会民主党（エスエル）の軍事組織が暴露することになる。とにかく、特殊機関は、皇帝を驚かし始める。警察から、噂が流される。デモの時、革命家達が準備している、血の無秩序状態が起こる。宮殿を取り囲む可能性がある。ペテルブルグ守備隊を指揮していた、ウラジミル大公は、フランス革命の初期時の出来事を思い出した。
ニコライは、ツアルスコエ・セロに去っている。
行進の夜、兵営では、弾薬を配り始める。ガポンの意図している行進は、射撃には絶好に形をしていた。軍用の小病院が準備される。その時、ガポンは、労働者達に最後の演説をする。警察のスパイ（ガポンのこと　＊）は、宮殿に向かうことを呼びかける。

このようにして、血の日曜日は準備された。

朝、数千の人々が、宮殿広場に向かう。群衆の頭上には、皇帝の絵が掲げられている。群衆の中には、多数の子供達も混じっている。先頭に、ガボン。広場への進入路に、軍隊が待ちかまえている。行進を解散するように、命令をする。しかし、人々はそうしない。ガボンは、我々を皇帝が待っていると、約束する。群衆は広場に進入する。・・・。銃撃が鳴り響いた。千人以上が殺され、二千人が怪我をした。・・・。雪の中に、子供の遺体。・・・。昼には、橇が行き交う。橇には紐で繋がれた遺体が。
よる、射撃の後、ガボンは、労働者に呼びかけた。
「諸君、血で団結した友人達よ！　罪のない血が流された！　皇帝の兵士の弾が、皇帝の肖像画を撃ち抜き、皇帝に対する我々の信頼を打ち砕いた。友人達よ、人民に呪われた皇帝に、陰険な皇帝の全ての子孫に、内閣に、ロシアの不幸の大地の全ての略奪者達に、仕返しをしよう。奴らに死を！」
「人民に呪われた皇帝に。」警察局のスパイは、そう書いた。打ち抜かれた皇帝の肖像画は・・・。
ツアルスコエ・セロにいるニコライには、ニコライは、死の危険を脱することが出来た、宮殿を防衛するために、銃撃をせざるを得なかった、その結果、２００人ほどの犠牲者が出た、との報告がなされた。
このように、皇帝には、事に関して、警察よりの公式報告と数値が作られた。彼は日記に書いている。
１９０５年１月５日。大変な日である！　ペテルブルグで、冬宮に向かおうとしていた労働者の願望の結果、深刻な無秩序が起こった。・・・。軍隊は射撃せざるを得なかった。町の至る所で、多くに人が死に、怪我を負った。おお、神よ、なんと哀れで、大変なのだ！」
その後、ツアルスコエ・セロに、２０人ほどの労働者が、連れてこられた。
彼らは、皇帝に、忠義な言葉を述べた。ニコライは返事を返し、彼らの請願を実行することを約束した。宮廷広場における、２００ほどの犠牲者に対して、ひどく悲しんだ。
このように、ニコライは、事件については何が起こったのか全く理解をしていなかった。
朝には、ニコライの新しいイメージが作られた。「血のニコライ」。これ以降、ニコライは、革命派から、そう呼ばれることになる。
「この日に、ペテルブルグの雪の中に投げ出された、愛らしい子供の帽子、小さな上着、女性のネッカチーフは、皇帝は死ななければならない、いや、皇帝は死ぬ・・・、という記憶として、残ることになった。」（マンデリシュトより　？＊）
血の日曜日－将来になされる復讐の理由の一つ－は、皇帝家族処刑への序曲となった。
何が起こったのか？

ある説
ベーラ・レオニードブナ。「当時は、全てが、政治に熱中していた・・・。熱中することが、流行であった・・・。当時は、全てに反抗していた・・・。ビッテに近く、自由思想を持っていた私の友人が、私に説明したこと全てを、歓喜を持って覚えています。血の日曜日事件を理解するためには、当時の状況を理解しなければなりません・・・。革命は仕切り線上にあり、これは誰もが知っていた。「右派は、神経質になっている・・・。日本との切り札で、決着をつけようとした（日露戦争のこと　＊）が、失敗した・・・。そこで、ユダヤ人問題の切り札を持ち出した。右派は、いつも、ユダヤ人問題を、弁として見なしてきた。この弁の助けを借りて、ポグロムを組織しながら、大衆の緊張した熱気を放出してきた。キエフ近郊の私達の領地で、女中が働いていた。彼女は、ポグロムの後に、私達の所に来た。群衆は家に押し入り、主人の腹を切り裂いた。全ては笑い声と、冗談を交えた中で行われた。主人の妻を、殺した主人に結びつけ、羽毛の中、２人を転がし回った。これは全て、彼女が十字架を切りながら語ったことである。「神が罰するのだ！」
そして罰した。理性を亡くした反ユダヤ主義の政治は、醜悪であるだけでなく、危険であること、を示した。そして、そのような政治が、革命を近づけた。ただ、短い期間、アレクサンドル二世の時、ロシアのユダヤ人達は、自分たちを人間として感ずることが出来た。ニコライの父（アレキサンドル三世　＊）は、政府による反ユダヤ主義を戻した。ユダヤ人は、ユダヤ人居住地域に追い立てられた。移民に群れをなした。１万人もの最も活動的な人々が、ロシアを去った。私の父の所には、天才的な技術を持った准医師が、働いていた。彼はアメリカに去り、そこで名をなした。しかし、数百万のユダヤ人達は残った。私の３番目の夫はユダヤ人であり、次のように話した。「腹一杯にならない、母の乳房。（　？＊　）」　ユダヤ人達は祖国をそのように考えていた。＊＊＊＊＊。革命政党が、それを取り込んだ・・・。私達は将軍の娘であった。私の姉妹の１人は熱心な革命家となった。しかし、地下活動中に、彼女の女友達は裁縫屋で、赤貧のユダヤ人、の娘となった・・・。

私の友人は話している。我が国の将来において、ユダヤ人の状況の危険性について、ビッテは、一度ならずに、ニコライの父に報告をしている・・・。」

状況はより先鋭化した。ビッテの回想録には、そのような箇所がある。
「　君はユダヤ人側に立つというのは、本当か？　アレクサンドル三世は質問をする。返事として、ビッテは、質問に対して、質問で答えて宜しいか、許可を求める。
ロシアにいる全てのユダヤ人を、黒海で溺死させることが出来ますか？　もし、出来るならば、ユダヤ人問題のそのような解決を、私は採用します。もし、駄目ならば、ユダヤ人問題の解決は、ユダヤ人に生きる可能性を与えると言うことです。彼らに同じ権利と、同じ法律を与えること・・・。」
しかし、ビッテは、卓越した廷臣であった。もし、ビッテに、専制君主である皇帝に、そのような勇気を持って答えたならば、即ち、皇帝は、ビッテから、詳細な返答を聞きたがる、とビッテは感じた。明らかに、慎重な主人であるアレクサンドル三世は、国内で、４百万人のユダヤ人を、どううまく利用できるか、深く考えた。しかし、更なる熟考は、解決に至ることはなかった。第一革命直前に、ビッテはひどい結果を招いた。「ここ３０年ほどの間に、非常に臆病な人の中から、自分の命を犠牲にして、爆弾を持ち、暗殺をし、強盗を働くような、革命に捧げる人が出現した。＊＊＊＊＊。」

ベーラ・レオニードブナ：
「革命を目前にして、ユダヤ人の革命家達の運動に対する答えとして、カマリリア（宮廷内反動グループ）は、新しい方法で、ユダヤ人問題を解決することに決めた。ヨーロッパには、ピヨートル一世の「遺言」が、蔓延っていた。この遺言なるものは、ナポレオン時代に、フランスによって作られた嘘である。・・・。この嘘から、ピヨートル大帝（ピヨートル一世　＊）が亡くなる時、ロシア皇帝に、世界を征服する、という遺言が残された。このようにして、ロシアの秘密警察は、本を出版することになる。内容は、ロシアの危険性は、フリーメーソン・ユダヤ人に取って代わられるというもの。このようにして、「シオンの賢人の議定書」なるものが、世に出ることになった。・・・。ロシアのフリーメーソン会員には、最も有名なロシアの人物がいた、ことは素晴らしい。自分の時代には、クツーゾフ、アレキサンドル一世、チャイコフスキーが、会員であった。ニコライ二世の友人であるアレクサンドル・ミハイロビッチ大公、彼の兄であるニコライ・ミハイロビッチも会員であった。私は、フリーメーソンに非常に興味があった。・・・。私の崇拝していた人たち、モーツアルト、ゲーテも、また、フリーメーソンであった。フリーメーソンは常に、自由主義者であった。ロシアでは、永遠の闘争があった。自由主義者と貴族との。貴族は、物わかりの悪い闇の力であった。カマリリアは、ユダヤ人と関連させて、宮廷内部の自由主義者達の信用を失墜させる試みを行った。ついでながら、私の友人は、フリーメーソンであり、最大級の貴族に属していた。そして、もくろみの公然さが、彼を怒らせた。議定書が、ニコライに提示された。全てが手抜かり無く行われた。ニコライは、子供の時から、政府の反ユダヤ主義のもとで教育をされてきている。「嫌悪すべきユダヤ人」。「キリストの敵」。これらは宮廷用語となった。私の夫は、自分の本に、ニコライの打ちのめされた肖像画を描いた。彼（？＊）は、彼（？＊）をわかっていなかった。私は、ニコライを、「中国の戯曲の出演者」と呼んだ。このように、運動は進む。ならず者は、善良な人に嘘をつく。そして、直ぐに信用する。これに対して、陰謀が構築される。このようにして、彼らはニコライと一緒に行動することになる。警察によって組織されたポグロムは、革命家に反対する人民の憤激の聖なる爆発として、皇帝には思われた。御者達の集団、闇のろくでなしの集団の「ロシア人民同盟」は、人民の心の力であると宣言した。自分たちの皇帝を防御する、ありふれた国民達の運動である、と宣言した。そして、彼（？＊ニコライ）は信用した。これ以降、グリシュカ（グリゴリーの名の愛称）・ラスプーチン、・・・。幼児的な信じ安さ。普通の人にとっては、魅力的な性格。が、政府にとっては悲運な性格。皇帝が、議定書を信用しなかった、ということは、なによりも驚きである。この事（？＊　前文）は、彼ら（？＊　陰謀派）を非常にがっかりさせた。」
皇帝に全く好かれていなかった、スパイの暴露者で著名であるウラジーミル・ブルチェフが議定書に関しての自身の調査で、断言している。
「議定書が出現した時、この議定書に信頼を持って接するか、あるいは、歓喜を持って接したならば、この議定書は、明確な偽物であると、ニコライ二世は直ぐに気づいたであろう。」
しかし、第一革命後、ニコライの気分が変化した。１９０８年に、パリに、八等官のアレキセーフが、国会におけるロシア政府とフリーメーソンの関係を解明するために、派遣された。彼は、何人かのフランス人のフリーメーソンを徴募し、大量の金を使い果たした。しかし、彼は、納得のある説明を得られなかった。・・・。

伝説は、皇帝より長生きをする。皇帝一家が殺された、エカテリンブルグ市内の家の一室で、壁に、幾つかの走り書きが見つかっている。それは謎めいた記号である。多くの調査が行われ、科学雑誌にも記載されている。走り書きの１つは、次のような文章として解読されている。「秘密の力の命令に従い、国家の破滅の犠牲者として、ここに、連れてこられた。・・・。」
ロシアからの移民者、８４歳のシュドナト氏からの手紙から、「私の叔母さんは、旧姓はビビコーバといい、イパチェフ邸の角にあった自分の父の家に住んでいました。・・・。叔母は、個人的に、イパチェフ氏を知っていました。何度も彼の家を出入りしていました。・・・。叔母の話では、殺人の行われた部屋には、小さな書斎があり、そこで主人が労働者を迎え入れていた、ということです。（これは興味があることである。とすれば、この部屋から直接、道路に出て行けると言うことであるから）　ここの主人は、建設の請負仕事をされていたそうです。書斎の中で、ここの主人が、建設労働者達に、仕事の内容を分かり易く説明をした。・・・。」

労働者達への詳細な説明の後、幾つかの本当に奇妙な走り書きが、部屋の壁に残されることになった。・・・。

ベーラ・レオニードブナ：
「ユダヤ人・フリーメーソンの陰謀という虚構は、１９０５年に実際に実行されるカマリリアの陰謀を、隠したに違いない、と私の友人は見なしている。短く言えば、革命の前に、全力で、皇帝を、右派側に突き動かした。しかし、ニコライは、突然踏ん張り始めた。その代わりに、ニコライは、変革について話をし始めた。・・・。ニコライは、譲歩することに決めた。その時、陰謀派は、弱い皇帝では、革命に対抗できない、ことを理解した。これは、カマリリアが活動することを強いた。・・・。１９０４年末に、宮廷で、秘密の陰謀が起こった。と、私の友人は見なしている。血の日曜日は、その一部分であった。・・・。」

１９０４年から、危ない変更をし始めた。革命家プレーベの処刑後、ニコライは新しい内務大臣として、地主で、貴族で、自由主義者！、のスビャトポルク・ミルスキー侯を指名する。１９０４年の最後の月に、スビャトポルク・ミルスキーは、皇帝に、世論の沈静化の方法を提案する。世論について話し合いをする時、ニコライは、ロシアの専制をどのようにすべきか、返答をした。「世論は私にどのような関わりがあるのか。」　今になって、ニコライは、この問題を真剣に考えている。日露戦争は、ニコライに、多くのことで、変節を強いた。ニコライは、社会的変動が近づいてきていることを、わかっていた。父の行った、仮借のない秩序回復を行うかわりに、ニコライは他の方法を採用した。ニコライによって指名されていた新しい内閣は、この方法を納得した。その方法とは、国内での鎮圧のかわりに、「和睦」を提案するものであった。これは気の優しいニコライの気持ちと一致するものであった。年末に、ニコライは、ロシアの指導的な政府の活動者達を集めた会議を招集する。それには、ビッテ、パベダノースチェフが入っていた。毎年ロシアで力を増している、革命指向について、ニコライは、発言をする。ニコライには、自分にとっては新しい問題を提起する。「社会の要求に刃向かう方向に進むべきか？」
問題は修辞的であった。ニコライは全てを決定した。しかし、いつもの通りニコライは、他人が、彼にこの決定を採用するように強いることを、希望している。高官が、次々にニコライの前に立ち、譲歩を要求する。パベドノースチェフは孤立した。このように、ニコライは同意することを強いられ、師の教えとは反対の方向へと進んでいく。決定が採用され、法律「国家の秩序の指示と改善について」が準備される。これは将来の改革である、と全員が理解した。憲法である！　委任されたビッテは、法律を準備する。自由主義者の完全勝利である！　全員が感動した。その知らせに接し、閣僚のホルコフ侯は、涙を堪えきれない。出席者を代表して、内閣総理大臣が、ニコライに感謝を述べる。ロシアは平和裏に、救われた。
当時の右派は次のような対応をした。既に、１月１日には、スビャトポルク・ミルスキーの政治に対する抗議の印として、右派の頭目の１人である、モスクワ警察の長であるドミトリー・フェドロビッチ・トレポフが、自身の職を辞していた。１週間後に、あの血の無秩序騒乱である「血の日曜日事件」が起こる。

このように、カマリリアの陰謀が実際に存在した、という説を認めるならば、この血なまぐさい殺戮が、何故起こったのか？皇帝を右派側に立たせ、共同して社会を攻撃するために、皇帝を単に驚かそうと考えていたのであろうか？
それとも、より深刻なことであったのであろうか？　弱い皇帝、負けた戦争、近づく革命、さらには、忌まわしい憲法・・・。右派は決断した。もう十分だ。そして、秘密諜報

班の都合の良い伝統のもと、血の争乱を起こし始めた。弱い皇帝の権威を失墜させるためである。血の日曜日事件は、運動の始めであり、皇帝ニコライを更迭させなければならなかった。
将来の安定のために目論まれた騒乱。強力な専制の到来？
とにかく、以下の出来事で、奇妙な関係を見いだすことが出来る。その関係は、ある人物の目論見であった。陰謀を。企みを。

血の日曜日事件は、成果を上げた。スビャトポルク・ミルスキーが、辞任をする。ニコライは、１月１１日、反動主義者のトレポフを、ペテルブルグ知事に任命をする。
しかし、これは単なる始めである。この後直ぐに、モスクワで衝撃が走る。モスクワには、ニコライの大事な共同者で、支持者である、大公セルゲイ・アレクサンドロビッチがいた。
皇帝の日記より。
≪モスクワで、残虐な事件が起こった。ニコリスキー門の所で、馬車に乗っていた叔父のセルゲイが、投げつけられた爆弾で死亡した。御者は重傷を負った。・・・。不幸なエーラ！　神よ彼女を助け給え！≫
２月４日に、クレムリンで、エスエル党員カリャエフが、セルゲイ・アレクサンドロビッチを待ち受けていた。カリャエフが馬車に爆弾を投げつけた。
牢獄からの、死の直前の手紙で、カリャエフは話している。「煙の臭いがし、破片が直接顔に降りかかり、帽子を吹き飛ばした。・・・。その後、５歩先を見ると、大公の着衣の塊と、裸の体が見えた。・・・。」
モスクワの副皇帝（宮廷では、そう、彼を呼んでいた）は爆弾で吹き飛ばされた。頭部は無く手と足だけが残っていた。
この時、宮殿から、エーラが飛び出した。彼女は、血だらけの衣服に抱きついた。膝をつき、夫の飛散した遺体の中をはいずり回った。・・・。大公を殺害した爆弾は、警察局に所属している専門家が作り上げたものであったことを、革命家のカリャエフは知らなかった。大公殺害は、警察局のスパイであり、エスエル党の軍事部の主幹であるアゼフ、が組織したものであった。
全てに、秘密諜報部の陰が付きまとっている。・・・。
コンスタンチン・ロマノフの日記より。
「２月５日。びっくり仰天し、最初は何も判断できなかった。ようやく、私が誰を失ったのか、気がつき、泣き出した。妻にいやなことを教える覚悟を決めなければならない。妻はセルゲイを好きであった。私の不幸な友人の遺体に、不幸なエーラに会いに、モスクワに行かなければならないと、思った。親類の誰も、未だ彼らの傍にはいない。・・・。
２月９日。皇帝、皇后、皇太后は、慰めようもない。彼らは死者に告別することも出来ない。ツアルスコエ・セロを出ることは、彼らには危険過ぎた。全ての大公は、手紙で通信し合い、モスクワには行ってはいけないこと、カザン寺院とイサーク寺院でのパニヒダ（死者の追悼祈祷）に出席してはならないことを申し合わせた。」

そうこうしているうちに、モスクワでは、壮大な悲劇が起こる。
夫の埋葬までの日々、エーラは祈りを止めることはなかった。夫の墓標に、エーラは書き記した「神よ、彼らを許し給え。＊＊＊＊。」
彼女は、福音書の言葉を、心から受け入れ、葬式の前に、監獄にいるカリャエフを訪ねた。貫首は彼女を、独房に入れた。彼女は聞いた。
「何故、貴方は私の夫を殺したのか？」
「私は、セルゲイ・アレクサンドロビッチを殺した。というのは、彼は圧政の道具であったからだ。私は大衆の敵を討った。・・・。」
「貴方の自慢は聞きたくはない。懺悔しなさい。・・・。私は貴方の命を助けるように皇帝に懇願をする。私は貴方のために、皇帝に哀願をする。・・・。私自身は既に貴方を許している。」
革命を前にして、彼女は出口を見いだしていた。＊＊＊＊＊。自分の例を手本に、不幸なエーラは、キリスト教の信仰のもとで生きることを訴えながら、社会に向かって生きた。
「拒否する。」カリャエフは返答する。
「私は後悔していない。私は自分のしたことで、死ななければならない。そう、私は死ぬ。・・・。私の死は、セルゲイ・アレクサンドロビッチの死より、私の仕事のためにより価値があるであろう。」
カリャエフに、死刑の判決が下された。「私は判決に満足している。」カリャエフは、裁判でそう答えた。「私が、社会革命党の決議を実行したとして、公開で、人民の前で、執行されることを希望する。接近している革命を、目でまざまざと見て、教えとせよ。」
カリャエフは、死を目前として、何も恐れてはいない。

ニコライはモスクワを失った。
陰謀の頭目達はその後を知っていた。ニコライには、直に、主要な相談者がいなくなる。ニコライの母である皇太后は、デンマークに行った。デンマークでは彼女の父が、病気で死の床についていた。皇帝の所には、最後の人物、叔父のウラジーミル・アレクサンドロビッチが残っている。しかし、3回目の攻撃が準備されていた。警察局は事情通であった。ウラジーミル・アレクサンドロビッチの息子キリルは、皇后の兄弟エルナ（？エルニ　＊）の家族生活を破壊した（その時には、最も理想的な夫婦と見なされていたのだが）。ビクトリア・メリッタは夫と離婚をした。そして、キリルは、彼女と結婚をすることに決めた。このようにして、家族のスキャンダルが明らかになる。キリルを罰するような、何かの対応策を採らざるえを得ない。ペテルブルグ守備隊司令官の地位を、ウラジーミル・アレクサンドロビッチは、辞職せざるを得なくなる。
デンマークに滞在している母親への、ニコライの手紙より。
「今週、クリルの良からぬ結婚が原因で、家族に問題が起こった。多分、貴方は、彼と私の話し合いについて、そして、その結果については、理解してくれるでしょう。彼は処罰を受けなければなりません。勤務からの除籍、ロシアへの入国の禁止、全ての公費の没収、大公の称号の剥奪。私が、キリルが結婚をしたのを知ったのは、先週です。・・・。私は、彼の打ちひしがれた父と、非常に嫌な話をしました。父は自分の息子の擁護はしませんでしたし、私は自分の立場を通しました。父は自分の職を辞することを希望しました。結局、私はこれに同意しました。
その代わり、私には、疑念が起こりました。人を、本当に、正しく罰しているのか。長い思案の末、頭が痛くなってきました。そして決定しました。・・・。それ（　？　）によって奪われた称号を、キリルに戻すように、電報を打ちました。ああ！　本当に嫌な日だ、今日は。今ようやく、肩から重荷がとれた。

誰？
カマリリアが、ニコライを、力のある皇帝と交代させようと意図するならば、誰がいる？退位宣言書が出た場合には、法律では、若年のアレクセイが、王座に就くことになる。しかし、アレクセイは死の病を持っているので、アレクセイは避ける。次の合法的な後継者は、ミハイル。しかし、ミハイルは、皇帝としての適格性を持っていなかった。
この秘め事を組織したものは知っている。ミハイルは避けざるを得ない。ミハイルは恋愛中であった。そして、彼は結婚を考えていた。が、ご婦人の方は、王族の血とは全く関係がなかった。当然、警察局は、彼の恋愛について情報通であった。玉座継承の法律に従えば、彼の結婚は、彼から大公の称号を剥奪することになる。
「親愛なる母上様。結婚を許可してくれるようにと、私に、ミーシャ（＝ミハイル）から手紙がありました。もう待ちきれないそうです。・・・。もちろん、私はこの結婚の許可をミーシャに与えるつもりはありません。父上もこのようなことに出会っていたであろうと、私は全身で感じています。今の危険な時期に、この事のために法律を変えることは、絶対に不可能です。親愛なる母上様、私を助けて下さい。ミーシャを自制させて下さい。神のご加護がありますように。」
当時、誰のために、全てのことが、目論まれていたのか？
大公ニコライ・ニコラエビッチ。彼は、ロマノフ家の子供達には、「ニコラーシャ」、「ニコライ・ドリンヌイ」、「雷叔父さん」、等と呼ばれていた。
軍事パレードで、ニコライ・ニコラエビッチを見た人は、一度で忘れることがなかった。・・・。毛の鶏冠で飾られた黒いヘルメットをかぶった軽騎兵達が、皇帝のパレードを主催し、黒毛の馬に騎乗し、小さな人物（ニコライ皇帝？　＊）の傍を疾走する。この軍列の中に、ニコラーシャが居た。馬と区別が出来なくなるほどの大男である。皇帝まで数歩。ニコラーシャのライオンの吠え声のような大声が響く。「全隊、止まれ。」　一瞬のうちに、騎馬隊列が停止する。人々と馬の、ため息だけが聞こえる。・・・。
ニコラーシャには、皇帝としての風貌があった。また、彼は、自身の右翼的な思想でも有名であった。彼は、目的に向かってまっすぐと進む。ウラジーミルの辞職に伴い、今では、ニコラーシャはペテルブルグ守備隊の司令官となっている。とある外国人女性との友情の関係で、アリックスは、ニコラーシャに目をかけていた。

ニコライ・ニコラエビッチ自身が、この事を知っていたのであろうか？　それとも良くあるように、「知っていたが、知らないことにした？」　彼（ニコライ・ニコラエビッチ？＊）の祖先のアレクサンドルは、彼（アレクサンドル？＊）の父、パーベル皇帝、を暗殺することを、「知っていたが、知らないことにした。」　そして、玉座に自分自身を登り

上がらせたのか？
　とにかく、ニコライ・ニコラエビッチは、この困難な日々において、皇帝に良く使えた。・・・。
　血の日曜日事件の、心をそそるような説は、以上のものである。しかし、・・・、この説は余りにも、小説過ぎる。ロシアでは、陰謀を見つけるのが大好きである。陰謀には、通常、１つぐらいの怠慢がつきものである。誰かが、何かを、調べていなかったり、誰かに、予告していなかったり。・・・。誰が、予防処置を執ることを決定し、軍隊を呼び出し、皇帝をペテルブルグから遠ざけたのか。・・・。誰かの愚行で、或いは、誰かの怠けで、我が国には、大変に悲惨な事件が、よく起きる。

≪押し寄せてくる革命を、直接目で見て、学べ≫
　血の日曜日事件で持ち上がった波は、直ちに、津波のようになった。
　コンスタンチン・ロマノフ大公の日記より。
　「１９０５年２月６日。全くわからない不幸に、我々がいかほどの速さで進んでいるのか、簡単にはわからない。至る所で、野放し状態である。全てが混乱している。・・・。政府の強い権力が感じられない。その通り、政府に権力がないのである。」
　放棄された電車から作られたバリケード、全国規模のストライキ、軍隊内での蜂起、全てが起こっている。クリミアでは、蜂起した軍艦が、接岸している。恐ろしいことに、大公の名を冠した軍艦が、砲撃を待っている。火事が、地主屋敷を焼き払っている。冗談に「イルミネーション」と名付けた、この悪意ある単語は、直ぐに、広まった。
　ペテルブルグでは、展覧会「芸術の世界」に、手で十字を作り、騒音に満ちた雑踏の中で、蔑むように、嘲るように、有名なテロリストサビンコフが、立った。公然と立った。誰も彼を官憲にちくろうとはしなかった。・・・。
　ベーラ・レオニードブナ。
　「　　ゼネラルストライキであった。祝日のようであった。マリンスキー劇場でも、バレー団がストライキをした。ニコライの愛人であったマチリダの兄弟である、ヨシフ・クシェシンスキーさえも、ストライキをした。・・・。私は、彼をよく知っていた。ついでながら、革命後、このストライキへの参加が、彼の免罪符となり、保証状ともなった。ニコライの愛人の兄弟であった彼は、共和国功労俳優ともなった。彼に最後にあったのは、戦争の直前であった。彼はレニングラード封鎖のもとで、飢餓で亡くなった。レストランの常連客であり、食通であり、銀製食器で宴会を催していた、彼が、飢餓で亡くなったのです。」

　１９０５年の秋には、ゼネラルストライキで孤立していた皇帝一家は、ペテルゴフにいた。ペテルブルグからの、唯一の通信手段は、蒸気船であった。「泳いで来て欲しい。」皇帝は、悲しみながらも、しゃれを言っている。多分、ニコライの転落の問題は、あらかじめ決まっていた。
　外国から戻り、この蒸気船に乗って、皇帝の所にたどり着いた、ビッテは、宮廷財務長官であるベンケンドルフの同情のある話を聞いた。５人の子連れの皇帝一家は、ヨーロッパの王族親類の中に、避難所を見つけるのは、困難であろう。
　それにも関わらす、嵐の雰囲気の中で、ニコライは、皇帝専用船を連れ出した。

　それより前の、１９０５年夏に、「右派」に外部から文句をつけていた皇帝が、予想外の行動に出る。６月に、アメリカ大統領ルーズベルトが、ロシアと日本が平和を取り戻すための助力の提案をする。皇帝は、アメリカ・・・に、自由主義者のビッテを派遣する！
　最初、「右派」は、歓迎をする。ビッテ代表団には、何の期待もないと。失敗するはずと。日本は大勝をした。平和条約の締結など思いもよらない。しかし、現在の状況の下では、良い条件の下で、ビッテは平和条約を締結した。ビッテはロシアに凱旋をする。ニコライは、ビッテを公爵の爵位で叙勲する。
　この時、皇帝には、２つの道が残されていた。ニコライ・ニコラエビッチに、軍事独裁をさせることを宣言すること（そして、皇帝自身は、順次舞台から退くこと。これは明らかに、カマリリアが目論んでいたことである。）。もう１つは、父が、それらと闘うようにと遺言した、改革と憲法を決定することである。
　帰国して来たビッテは、後の方の道を、皇帝に提案した。
　「ロシアは、既存の政府機構の形態を大きく凌いでいます。・・・。未だ可能性があります。憲法を贈らなければなりません。そうでないと、国民が憲法をもぎ取ることになる。・・・。」

　大男でまるまる太っていたビッテに、これまた大男のストルイピンが、替わることにな

る。この２人とも、名はよく知られ、有能であった。これには、ニコライの秘められた劣等感があった。巨人であった父（アレクサンドル三世　＊）は、常に、期待が出来、確かな保護者であった。父は、有能な人達に委任した。
ニコライはというと、優柔不断であった。ニコライは、憲法に同意した。
そして、・・・。また、ニコライは、動揺し始めた。ビッテの陰で、ニコライは、ニコライ・ニコラエビッチ大公が臨時独裁者となるのを、骨抜きにしようとし続けた。この惨めな意志薄弱を見て、ビッテは怒った。彼（ニコライ　＊）はロシアが崩壊するということを、理解したくなかったのである。ニコライの祖先が作り上げた、専制を。ニコライは、放蕩息子のように、時間を浪費するようなことをし始めた。自分が、偉大な専制帝国を終了させることになるからである。
他人が、自分自身が既に決定していたことを、自分に頼み込んでくることを、ニコライは再び期待した。
＊＊＊＊＊。前線の満州に、軍隊は居た。（全てが、１９１７年に繰り返される。その時は、軍隊は、第一次世界戦争の前線で闘っていた。）
革命を鎮圧する人がいなかった。臨時独裁者をおくことに同意することは、王朝の破滅を意味していた。

ニコライは、マニフェストに署名した日、ひどい頭痛を被った。彼の額を斬りつけた日本人を思い出した。登城してきたビッテに、宮殿長官フレデリックス伯爵が、語った。「皇帝は、再び、ニコライ・ニコラエビッチが臨時独裁者となるように、お願いする。」、と。そして、皇帝は拳銃を取り出して、語った。「私が、今、銃を撃つべきか、それとも、君が署名をするか。」
ニコライは署名をした。
日記より。
≪１０月１７日（また１７！である　著者）。・・・。ニコラーシャとスタナと朝食をとった。ビッテが来るまで、座りながら、よもやな話をした。５時に、マニフェストに署名をした。その後、１日中頭痛がし、考えが混乱した。神よ。私を助け給え。ロシアを救済し、鎮め給え。≫
蒸気船に乗っての帰り道、ニコライ・ニコラエビッチは、ビッテを、厚く抱擁した。「１０月１７日の今日は、記念すべき数値である。ちょうど１７年前、ボルク（？　＊）で、また同じ数値の１７日、王朝は、神により救われた。今回も、小さくない危険より、王朝は救われた。」
正に、１７の数値であった。彼ら王族にとっての「記念すべき数値」であった。
この日、いつも通り、ニコライは、温和しく、寡黙で過ごした。しかし、母親への手紙では・・・。
「ペテルゴフ。１９０５年１０月１９日。最期に書いた手紙は、１年前だと思います。私達は、大変で、尋常ではない印象の中で、生きています。ツアルスコエ・セローに一緒に行った、１月の日々のことを、貴方は記憶していることと思います。・・・。あの日々は、今の日々とは、比べものになりません。モスクワの周りで始まった鉄道のストライキは、直ぐに全ロシアに広がりました。ペテルブルグもモスクワも、孤立しているようです。町同志の通信は、海に依っています。このような場合には、都合が良さそうです。鉄道のストライキの後には、会社や工場が、そして、町の機関さえも、ストライキをしています。考えても見て下さい。何という恥さらしでしょうか！・・・。巡査・兵士・コザック兵の殺害、無秩序、騒動、暴動についての情報がありました。意気地なしの政府役人どもは、何をして良いのやら、あれやこれや判断をしているが。・・・。「ミーティング（最新語！）」で、武装蜂起が始まったことを知りました。攻撃時には、武器を持って行動するように、軍隊に文書で指令をしました。嵐の前の静かな時が到来しました。夏の、強烈な雷が、到来する時のような感じです。私の全神経が、緊張をしています。もちろん、このような状態は、そう長くは続かないでしょう。このような日々の中で、定期的に、私はビッテと会っています。私達の話し合いは、朝から、夕方まで、いや、深夜まで及んでいます。２つの道の内の、１つを選択するように勧められました。１つの道は、活動的な軍人を任命し、全力で反乱を鎮圧するようにすること。もう１つの道は、国民の市民権、言論の自由、出版の自由、集会の自由、結社の自由、等々を提供すること。これ以外に、国会を通じて、明瞭の法律体制を確立することの確約。・・・。これは、本質において、憲法の存在です。ビッテは、後の方の道を、情熱を持って主張しました。私が相談した、他の全員が、ビッテと同ように、私に答えました。マニフェストは、ビッテとアレクセイ・オボレンスキーが草案しました。私達をその草案を、２日間審議しました。そして遂に、私は、神に祈りながら、私は署名をしました。・・・。優しい母上様、私がさんざん苦しんだことを、貴方が想像する必要はありません。唯一の慰めは、それが神の意志であり、耐え難く、無秩序な状態から、ロシアを連れ出すけっていである、ということです。ロシア

はこの１年そのような状況下にあります。・・・。」
　皇帝の娘達の家庭教師であるジリヤールは、マニフェストが署名された日に、皇太后を見ている。皇太后は、夢遊病者のように、座りながら、１点だけを見続けていた。（彼女の　＊）世界が崩壊した。彼女の子供は、ゆりかごに居ながら、盗みを働いた。子供なので、未だ自立できていない。
　そのようなことで、皇太后は、闘うことに決意する。

　１１月、第二の首都は騒々しかった。モスクワにはバリケードが築かれた。転写は転覆された。ニコライは、惑わす物達へ憎悪を感じていた。ニコライは彼らに、憲法を与えた。彼自身は１歩を踏み出した。・・・。そして、解答に、全てが続いた！

　クリスマスに、ニコライは、母親に手紙を書く。ありふれた愛情のこもった手紙であった。しかし、今回は血が流れている。ニコライは血に大分慣れてきた。
　「１２月２２日。親愛なる母上様！　貴方のための、私の全ての祈りは、祝日には、特に熱心な祈りとなることでしょう。・・・。貴方の不在の中で、ヨールカ祭を迎えるのは、非常に寂しいです。ガッチナ宮殿の２階では、楽しいヨールカ祭があった。・・・。
　モスクワでは、貴方がご存じの通り、ああ神よ。暴動は、軍隊の御陰で、鎮圧されました。革命家達は大損害を受け、死者が何人か、怪我人は何人か、正確にはわかっていません。彼らは、怪我人達を搬送し、隠してしまうからです。・・・。」
　革命の鎮圧の最中に、アリックスは、ビッテの悪巧みを、全精力を尽くして、彼（ニコライ？　＊）に吹き込んだ。マニフェストは、何ももたらさなかった。暴動が増えただけである。・・・。彼（？　＊）の背後には、大きな影が立っていた。彼（？　＊）のロマノフ家の祖先と、天の保護者、セラフィム・サロフスキーである。彼（？　＊）は彼ら（？　＊）と一緒になって、革命を鎮圧した。大変な時期に、彼（？　＊）に署名を強いた哀れなマニフェストではない。（代名詞を多用しすぎる。意味不明　＊）
　ビッテは、後家の皇太后の回し者である。ビッテと闘いながら、アリックスは、皇太后を権力から払いのけた。永久に。

　その時期、明らかになった。ニコライは、革命に打ち勝った。嵐を生き抜き、「右派」は、もう、玉座の交代を考えていない。しかし、玉座の周りの衛兵の交代に関しては、自由主義者達を、追放する時期がやってきた。永遠に。「ビッテは自分の仕事をした。・・・。」
　直に、もう１人のニコライである大公ニコライ・ニコラエビッチが、アリックスと連帯をしたのは、偶然ではない。大公は昨夜、ビッテを抱擁し、マニフェストを褒め称えていた。彼（？　＊）は、今や彼（？　＊）の敵である。闘争の凶暴さは、皇帝を変えた。神から与えられた権利を擁護する、武器を持った騎士、そして、人民と王朝のための闘士。ニコライは、この格好がきにいる。
　母親への手紙で、好戦的に。
　「私は自分の連隊を閲兵したいです。セメノフスキー連隊から、順に始めます。・・・。好きなニジェゴロド連隊は閲兵しました。・・・。騎馬親衛隊の将校の閲兵・・・。海軍親衛隊乗組員の閲兵。」
　そして、じきに、ニコライは、母親に連絡をする。
　「彼（ビッテ　著者）のように、自分の確信を、ころりと変えるような、あのような無節操な人（カメレオンのような人）を、私は今まで見たことはない。このような性格では、今後、誰も彼を信用することはないであろう。」
　４月に、ビッテは、ニコライに辞職願を手渡した。ニコライは喜んで返答をした。
　「セルゲイ・ユリエビッチ・ビッテ公爵！　昨晩、私は君からの手紙を受け取った。手紙で、貴公は全ての役職からの辞職を願い出ている。貴公の願いに私は同意する。ニコライ。」

　ベーラ・レオニードブナ。
　「革命は沈静化した・・・。闇と絶望が到来した。知識人は、身を持ち崩し、無政府主義者となっていった。・・・。今、後ろを振り返ってみると、これは、革命家に、初めてちょっと到来した絶望であった、と私は思っている。人民の血を浴びた顔を見て、知識人は身震いしていた。・・・。
　革命は、自由の祝日ではなかった。死のような、不幸の祝日であった。・・・。本当に悲惨であると、私達は感じていた。無意識の中でも。彼女（？　＊）は戻ってくる。」

　４月末に、冬宮の玉座の間で、辞職しているビッテは、自分が育て上げた子供－国会－の様子を、皇帝と一緒に見ていた。「ニコライは青ざめていた。」、ビッテは自分の日記に

記している。皇帝が、詔書を読む。
「私の国民を幸せに思うこと、そして、堅固で、良く整備された、教養のある政府を、後継者である私の息子に渡す、という、 私の熱烈な願望を実現することである。」
後継者についてのこの言葉を、ビッテが聞いた時、ビッテは少し笑ったのに違いない。旧閣僚は、全てを知っていたから。ニコライは、状況をわかっていない国会議員達に、後継者は、自分に所属しているものを獲得する・・・・、ということを宣言した。これは即ち、憲法のない、旧態依然とした専制のことである。他の言葉で言うならば、ニコライは、この国会を追い払う、ということを、国会に語ったのである。

その後、第一回ロシア国会の、皇帝主催のレセプションがあった。カラスに似た黒い旗の中で、皇帝の従者達の着ているきらびやかの制服の中で、国会議員達は溢れかえっていた。

ビッテは、国会に関して、ニコライとの確執が、不可避であることを予想していた。そして、いつもの通り、困った時には、ニコライはそれを自分に投げてよこすことを、信じていた。
ビッテは嘲るかのように、書き留めている。「私と皇帝との緊張した関係にも関わらず、私が完全な失脚・追放の身であるにも関わらず、状況は危機的である。今になって、私のことを話題にし始めている。」そして、ビッテは書き足している。「しかし、１つだけ忘れていることがある。全てには最期があるということである。」
これは予言力のある言葉であった。すでに、水平線上には、新しい強力な人影が現れていた。
ストルイピンは、ビッテとは全く反対の人間であった。由緒ある貴族出身であった。いわゆる「身内」であった。彼自身は、自分を自由主義者と考えていたが、貴族としての自由主義者であった。ストルイピンは、根っからの貴族に備わっている男らしさを知っていたし、そのような男が好きであった。国の将来は、そのような男にかかっていると見なしていた。それ故、ストルイピンは、皇帝の思いは直ぐに理解できた。ストルイピンは、皇帝の昔の夢である「国民と皇帝」を、理解することが出来た。
第１回国会は、解散させられ、２回目の選挙が行われた。しかし、自身が驚いたことに、国会には何の変化もなかったことに、ニコライは気がついた。国会に出てきた、最も温和しかった議員達が、時間を待たず、反徒となった。国会での演説は、彼らに、歓喜を引き起こしているようであった。
例である。四等文官でペテルブルグ市会議員である、アレクサンドル・イワノビッチ・グチュコフという立派な人がいた。ストルイピンは、彼に、閣僚になるように提案した。が、彼は拒否をした。新しい国会で、グチュコフは、たちまち、全大公達を罵った。

犯罪は継続した。モスクワの鎮圧者である将軍は、射殺された。・・・。
ストルイピンの別荘のある、アプテカルスキー島で、爆弾を破裂させた。土曜日であったが、首相の勤務日であった。１階の部屋には、多数の訪問者達が待機していた。２階は、居室で、そこでは、ストルイピンの子供達が遊んでいた。娘と息子が。
３人組の軍人が、建物に入ってきた。その時、守衛は、彼らの服装が少しおかしいのに気がついた。そして３人を、阻止することを試みた。その時、叫声が上がった。「革命万歳！」　３人の内の１人が、爆弾を投げた。室内にいた全員と、３人のテロリスト自身も死亡した。爆発の規模は、ネバ川河岸の樹木を根本からへし折ったほどであった。ストルイピン自身は、爆風で、床にひっくり返った。しかし、それほどひどい怪我は受けなかった。破壊された家の瓦礫の下で、怪我人達がうごめいていた。人の肉片が、周り一体に転がっていた。・・・。そこに、怪我をしたストルイピンの娘がいた。ストルイピンの４歳になる息子は、瓦礫の中から引きずり出された。

その時、全ロシアの皇帝が、隠遁生活を、自分の家でしていた、という信じられない出来事があった。ニコライは、自分が夏過ごしているペテルゴフに、テロリストが出没した、ということを知った。・・・。ニコライは母親に知らせていた。
「私達は、アレクサンドル宮殿内に、殆ど監禁状態で住んでいます。このようなことを話すのは、真に不名誉なことです。悪党のアナーキスト達が、私達、ニコラーシュ、トレポフ、・・・、を狩猟するために、ペテルゴフに現れました。貴方は、私の気持ちがわかると思います。高いところへ出ることも出来ません。門外へも出ることは出来ません。ペテルゴフの自宅で、ジッとしている現状です！　このようなことを貴方に書くことは、本当にキマリが悪いです。」
ニコライ、アリックス、彼らの子供達の、その時の生活は、警備下にあり、散歩は無しであった。１２年後のリハーサルであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊（代名詞？　＊）。 ニコライは、全ての苦悩と侮辱に報復をしなければならない。ニコライに、激変が起こった。ニコライは、強国を維持しなければならない。暴動者を駆逐し、国に平静を与えなければならない。父の影がこれを要求した。アリックスと母親も、これを要求した。「極悪非道な人を退治しなければなりません！」アリックスは、ニコライに書いている。
そして、ニコライは無慈悲になることに努めた。・・・。彼と並んで、強力な人物、ストルイピンが居なかったならば、ニコライにそれが出来たであろうか。意志が固く、権力志向の強烈な人物であるストルイピンと、気の優しいニコライが居た。ニコライは家族が大好きであり、愛している妻に、頭が上がらない。子供達が負傷したストルイピンとその妻は、怒りが治まらなかった。そして、ストルイピンは、報復し、処刑する準備を始めた。「ストルイピン型ネクタイ」。首にロープを巻かれた革命家達は、そう呼ぶことになる。

１９０６年６月に、国会は死刑を廃止した。しかし、ヨーロッパが、歓迎の電報を送付している間に、ニコライは、軍野外法廷に関する法律を採用した。
そして、絞首台が、仕事に取りかかった。ロシアでは、イワン雷帝の時代以来、そのような大量の絞首刑を見たことはなかった。
ビッテが、かって自由主義者であったストルイピンに、昔の彼の考え方を思い出させた時、ストルイピン首相は答えた。「その通り。それは昔のことである。アプテカルスキー島での爆発までのことである。」

１９０７年８月２６日。赦免願いの電報を皇帝に送付してはならないことを、司令官は「配慮」をしなければならない。ということを、「皇帝が、軍司令官に命じなさった。」
ニコライの父の時代に、アレクサンドル・ウリヤノフが絞首刑にされた。この兄の死刑は、将来の革命の首領であるウラジーミル・ウリヤノフ（＝レーニン）の性格を形成した。死刑と血は、レーニンの潜在意識として残った。殺されたものの兄弟達は、皇帝への憎しみのもとで、ニコライ、そしてロシアへの復讐を誓った。
「本当に、死にたくはない。夜に、裏庭へ連れて行く。湿気が多い時、小雨の時。行くまでに、全身ずぶ濡れとなり、濡れたままで吊される・・・。お前は、朝起き、お前は未だ生きていることを、子供のように喜ぶ。そして、一日、生きていられることに満足をしなければならない・・・。」家族達は、このような手紙を読んだ。
血の中で、ニコライは後継者となった。血の中で、優しく気の良い人間が、皇帝となった。・・・。血の日曜日、血のホディンカ、第一革命の血、・・・。未来の予言通り、ニコライの不幸な息子は血にまみれることになった。

第一革命は終わった。将来の驚くほど似たリハーサルであった。それは１２年後に起こることになり、彼ら家族の前に提示される。しかし、警告は、無駄に過ぎ去った。
ニコライとアリックスは理解していなかった。革命を鎮静化したのは、弾丸ではなく、ニコライの内閣が書き、ニコライが署名した書面上の文字であったことを。聡明なビッテは、その時既に予言していた。この件はニコライを破滅させる。自分の部屋にこもり、世紀の出来事を考察して、老人（＝ビッテ）は、きつい言葉を書き留めている。
「沢山の血が流れるであろう。しかし、この血の中で、彼（＝ニコライ）自身を破滅させる・・・。そして、彼の長男、純真な子供、後継者である息子を破滅させる・・・。おお神よ、そうならないように。どんなことがあっても、私はそのような残酷なことを見たくはない。」

そして、神は与えた。ビッテは１９１５年始めに亡くなった。死の直前に、老人はニコライに手紙を書き、自分（＝ビッテ）の死後、皇位を放棄するように、指示した。このように、ニコライは、死後のメッセージを貰っていたのである。
手紙で、ビッテは、公爵の位の返還を申し出た。＊＊＊＊＊。しかし、これは口実であった。大事なことは、依頼の後にあった。それは、ビッテの名前と関係したニコライの大事業の一覧であった。一番の位置に、憲法があった。「これは、国民及び人間の前に為し得る貴方の永遠の貢献です。」

死を目前にした老人は、自分の憲法に対する思いで、ニコライを侮辱するつもりも、自分の貢献度を思い出させるつもりもなかった。この時、１９１５年であった。偉大なる政治家は、１９０５年の悲劇の前と、今の状況が奇妙に似ていることに気がついていた。ビッテは理解していた。直に、雷鳴が鳴り響くことを。ビッテは、もう一度、ニコライに、１９０５年の大事であった課題を、思い出させることに決めた。死は直前である！
しかし、この年、ニコライとアリックスは、国会とのお決まりとなった喧嘩のことを心

配していた。ニコライは、「以前の過ち」を思い出させると、怒り出した。今ではニコライは、憲法のことを、過ちと呼んでいた。自分の前首相（＝ビッテ）の少しの願いも叶えようとはしなかった。＊＊＊＊＊。

皇帝の将来における非業の死の、このリハーサルについては、別の視点が存在する。
「１７世紀の、ロシアで、古代王朝が途切れ、全国的な混乱がやって来た時、大貴族達がよそ者に、ルーシを委ねた時、教会の権力－総主教－はロシアを守った。訳があって、初期ロマノフ王朝の時に、総主教は、「大君主」の称号を帯びた。ピョートル大帝は、政権（教権＝教会の権力に対する）を強力にするために、総主教制を消滅させた。総主教のいない２００年間は、教会の力は弱かった。ニコライの時、総主教制の復活が、話し始められた。が、話は先には進まなかった。・・・。第一革命が到来した時、皇帝は理解しなければならなかった。自分は弱いことを。神は、優しさを持って、ニコライにこの警告を与えた。新しい、大きな不幸の予感に、ニコライは、２番目の中心を構築しなければならなかった。総主教制の復活である。強力な教会だけが、最終的な破壊状態から聖なるロシアを支えることが出来た。・・・。しかし、皇帝は警告を理解しなかった。」

幼児期。１歳半のニコライと母親。母親はマリア・フェドローブナ皇后

少年時代。皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチ

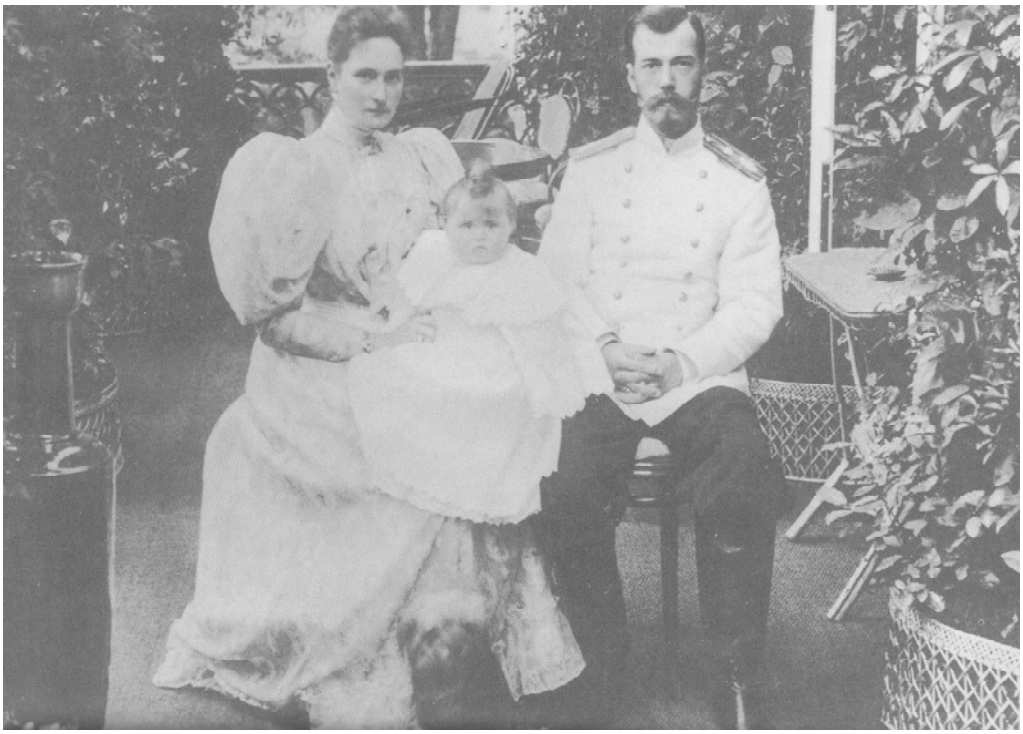
家族。アレクサンドル三世、妻、子供達。

冬の遊び。アニチコフ宮殿の庭園にて。アレクサンドル三世と家族

婚約の日。ヘッセン家の王女と兄弟のエルニ。ニコライと叔父の大公セルゲイ・アレクサンドロビッチ

左：結婚アルバム中の水彩画のアリックス。（１８９６年）
右：舞台でのマチルダ・クシェシンスカヤ。（１８９７年）

ニコライとアレクサンドラ（旧名アリックス）（１８９６年）



最初の赤ん坊の娘のオリガと。イリンスキー宮殿で。

大公セルゲイ・アレクサンドロビッチと、その妻のエリザベータ・フェドローブナ（１８９６年）

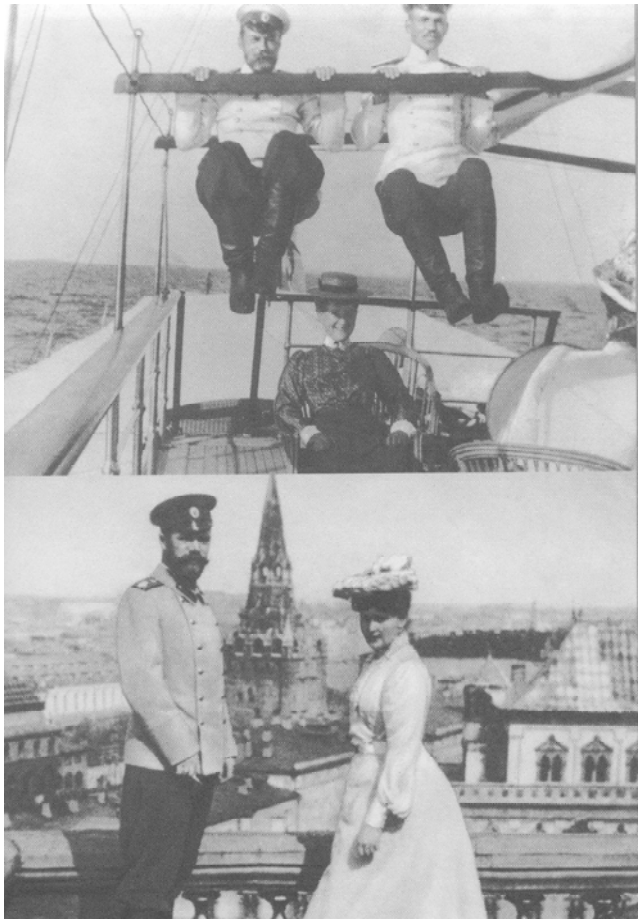
スエーデンの親族へ客として。（１８９３年）

家族が増えていく。娘の大公オリガ、大公タチヤーナ、大公マリアと。（１８９９年）

モスクワでの戴冠式。（１８９６年）

冬宮での「歴史的舞踏会」。（１９０３年）

ラトビアで親族達と。（１８９３年）



船旅。大公ミハイルとブラソバ伯爵夫人と。クレムリンの屋上で。（１８９６年）

待ちに待っていた後継者。皇太子と。（１９０５年）

第４章「強力な夫婦」

ロシアにおける革命は、家族での革命と一致した。この当時、ツアルスコエ・セローでは、２つのことが進行していた。これら２つのことは、ニコライの人生では、大きな位置を占めていたのであるが、かれの日記には少しだけ反映している。家族の生活の中で。そして、国家。
グリゴリー・ラスプーチンと、アンナ・ビルボア（タネーバ？離婚前後　＊）である。

友達
自分の回想記に、アンナ・タネーバは、自分の出自について書いている。彼女の父アレクサンドル・セルゲービッチ・タネーバは、宮殿の三等宮内官であった。彼女の祖先達は、代々この職務に就いていた。彼女の他の先祖は、ナポレオンの勝利者であるクツーゾフ将軍であった。
実際、彼女は、ある出自については、自分の本では言及していない。タネーフ家の出自に関する、パーベル一世皇帝に関する、噂である。この無教養の皇帝の血が、アンナ・タネーバの血管の中を流れていた（パーベル一世は、より正確に言うと、皇帝の法律外の息子）。そのとおり、アンナは、たどれば、ロマノフ家と繋がっていたのである。
アンナは、社交界にデビューした喜びから、１７歳の時、２２もの舞踏会で踊り回った。若い、この娘は、皇后に、アピールをした。アリックスは彼女に気がついた。
直に、急使が、実務的な電話で、アーニヤに連絡をした。皇后が、アーニヤ（＝アンナ）を招待してい、と。
彼らの初回の話し合い。アーニヤ・タネーバは、アリックスに話した。子供の時、彼女はチフスに罹り、死にそうであった。しかし、父親が、ヨアン・クロンシュタートスキーを呼んだ。彼の祈りが、彼女を病床から起き上がらせました。この事が、皇后に、何らかの印象を与えたに違いなかった。病気からの全快の奇蹟、アリックスは息子をじっと見ながら、この事を考える。
アーニヤは、音楽の才能に優れていた。最初から、正しく楽譜の通り演奏することが出来た。
直にアーニヤは、皇帝専用ヨットでの航海に誘われた。フィンランド湾の小島群の航海は、皇帝家族のお気に入りであった。
日がいっぱいの船室で、彼らは４つの手で、ピアノを弾く。アーニヤは、アリックスにじみじみと話す。興奮で、彼女（？　＊）の手が、石のようになったことを。・・・。
その後、２人でデュエットを歌った。アリックスがコントラリト、アーニヤがソプラノを。このように、運命のデュエットは、いとも簡単に形成された。
アーニヤが、上陸して去って行った時、アリックスは呟いた。「神よ、ありがとう。貴方は、私に良い友達を遣わしました。」
アーニヤを、航海に頻繁に誘うようになる。皇帝専用ヨットでの幸福で静かな夕べ・・・。平和な灯火が、沿岸に灯っている。海の香りと、皇帝の巻きたばこ。白色のヨット「極星」は、到来した夜の中を、滑るように進む。

１９１８年に、逮捕されたアーニヤ・タネーバは、再び、ヨット「極星」上にいた。そこで、中央バルト本部が会議を行うので、ヨットの新しい主人が、アーニヤを連れてきた。新しい主人とは、革命水兵である。
全てが吸い殻と、ツバだらけであり、焦げ跡もある。・・・。虫の這い回っている戦争に彼女を座らせ、その後、彼女の馴染んだヨットの質問を行う。そして彼女は夜のことを思い出す。

若い女性（＝アーニヤ）の成功の主な理由は何にあったのであろうか？
ビッテが自分の回想記に書いている。「皇后が大好きで、「アハ、アハ、アハ」と、ため息をつきながら、媚びるような目で皇太后をジッと見つめる、極ありふれたペテルブルグの貴族の娘であった。アーニヤ・タネーバ自身は、美人ではなく、デップリとした生パンが膨れたように太っていた。」
皇帝体制の崩壊した後の、１９１７年２月に、「皇帝政府閣僚、及び打倒された体制の他の高官の背任行為の検査に関する特別調査委員会」が創設された。委員会では、エカリノスラフ地方裁判所検事ルドネフが働いた。後になって、逮捕されたアーニヤの尋問について思い出している。「私は、はっきり言って、彼女に、敵意の感情を持っていた。・・・。が、彼女の目の特別な表情に、いたく驚かされた、その表情は、全く、地上のものとは思われないような優しさがあった。」
無邪気なアーニヤは、皇帝家族に、誠意、献身、熱愛をもたらした。冷たい宮殿ではそ

れらで十分であった。検査の結果は以上の通りであった。さらに、ルドネフは付け加えた。「ビルボア女史（＝アーニヤ）は、政治的なことには無関係であった。皇后の心的な、精神的な、部分を、強い力で惹き付けた。」
このように、アーニヤは、単純で、大人げなく、ブスな女性であったのか？・・・。
ベーラ・レオニードブナ。
「彼女は本当にいい人でした。・・・。美人でした。と言っても、ロシア風でだが。灰色の髪の毛、青く大きな目、ふっくらした体格。彼女を最初に見た時のことを覚えています。リハーサルの後、私はネフスキー通りを歩いていた。「アトランチダ（？　＊）」が待っていた。派手な馬車が通りを疾走していた。青い衣服を着た御者が、安っぽい馬車に乗って進んでいる。・・・。その時、近衛重騎兵の羽根飾りが、さっと通り過ぎた。・・・。御者を背にして、町の司令官が、軍曹外套に袖を通さずに、サイクリスト達に周りを囲まれながら、行き過ぎた。明らかに、皇帝が通過する。２時間後、最も贅沢な馬車が現れた。・・・。その時、私は、乗っている人を見た。そこに、気怠げに若い女性が、上半身を少し起こして横たわっていた。帽子の羽根飾りは、綺麗で、少し丸い顔の上にあった。ウールの長い肩掛けで、足下は隠れていた。」
「あれが彼女（＝アーニヤ　＊）です。」　私の友達（男　＊）が言った。彼女について、当時沢山話した。＊＊＊＊＊＊。ついでながら、彼女（？　＊）は、自分のことは少ししか話さなくて、いつもおかしいことばかりを話していた。賢明な人は、自分を少しからかう事がある。彼女（？　＊）は賢明であった。また、彼女（？　＊）は、大女優であった。・・・。ラスプーチンの全ての政治的な遊技に参加した、この女性（アリックス？　アーニヤ？　＊）は、閣僚を任命し、閣僚を引きずり落とし、宮殿内で、こみ入った陰謀を巡らした。本当に単純で、馬鹿なロシア女に見えた。・・・。」
これは仮面であったのであろうか？　それとも、永久に顔となった仮面なのであったのであろうか？
その通り、彼女は直ちに、「サナ」の特徴を理解した。彼女は、皇后をそのように呼んだ。ロシアの皇后は、内気である 。・・・。彼女の直向きさは、すぐに宮廷の冷酷さと衝突をした。彼女は、自分の世界に閉じこもった。横柄と誤解された自制心と疎外感を、身に着けた。そして、アーニヤは、サナの心の鍵を見つけた。熱狂的で、限界のない崇拝。
しかし、この単調なゲームの中で、彼女は、１２年間も、サナに付き添って、持ちこたえることが出来たのであろうか？いいや、彼女は不断において、皇帝の女房のために、新しく、心を惹き付ける、危ないゲームを考えていた。

家族の銃殺後、ユーロフスキー（皇帝一家銃殺の参加者の１人）が集めた書類の中に、沢山の書類が残っていた。第一次世界戦争中を、愛で息苦しくなりながら、アリックスとニコライは、お互いに大量の手紙のやりとりをしていた。手紙の中の文章中には、謎めいた行がある。例えば、ニコライへの手紙の内の１つに、アリックスは、奇妙な書き足しをしている。
「親愛なる貴方へ！　あの手紙が、他人の手に渡らないように、彼女の手紙を燃やしましたか？」
誰の手紙？　なぜ、その手紙が、他人の手に渡ってはならないのか？　この「彼女」は誰なのか？
他の手紙の所には、「私達２人がしっかりしなければ、クリミアでのような、愛の場面とスキャンダルが、私達の所で起こるでしょう。・・・。貴方が戻ってきた時、貴方なしで、どれほど恐怖を味わったか、彼女が話すでしょう。・・・。優しくして下さい。しっかりして下さい。彼女には、いつも、冷水をかける必要があります。」このように、「彼女」は、何かをしでかすことが出来るし、手紙でニコライを悩ますことも出来る？！
アリックスは、言葉を惜しまず、この女を激しく非難している。「彼女は乱暴で、何の女性らしさもありません。・・・。」　「彼女はしつこく、ひどくうんざりします。」　その他。
本当に悪意があり、風刺的な記述もある。「彼女は、痩せてしまうほど、完全に没頭します。私は気づいたのですが、彼女は巨大な腹と足をしています。しかも、全く食欲をそそらない。彼女の顔と、赤味がかっている首は、少なからず脂ぎっています。目の下には隈もあります。」手紙で、彼女のことを、アリックスは「雌牛」と呼んでいる。
何というヤキモチか！　可笑しいほどのヤキモチ。
叫びのような文もある。「貴方(ニコライ　＊)は「私のもの」と呼んでも、誰も笑いません。貴方の全てが私のもの、彼女（アーニヤ？　＊）のもの・・・・。アーニヤは、明日、私達の所へ来たがっています。しかし、＊＊＊＊＊、ことは、私には嬉しかった。」その通り、「彼女」、「雌牛」とは、アーニヤのことである！　「無邪気、穏やか」？　即ち、噂は真実であった。アリクスとニコライには、何の牧歌的な愛も、存在しなかったのであろうか。アーニヤは皇帝の愛人であったのか？

検査員ルドネフ。
「特別検査委員会の指令により、１９１７年５月に行われた、ビルボア女史の医学検診データに依れば、ビルボア女史は処女である、ことが、全くの疑いがないことがわかりました。」
つまり、何もなかった？（ニコライとの間に　＊）　しかし、この皇后の雑言は、どこから？
ついでに、殆ど同じ頃、アリックスは夫（＝ニコライ）に書いている。「貴方が、貴方の電報で､新聞の件でアーニヤに感謝していること、アーニヤに挨拶を贈ること、に言及してもらえませんか？」そして、他の手紙では。「アーニヤは、一人暮らしのことを話します。これが私を怒らせます。アーニヤは、日に２回私達の所へ来ます。毎夕方、彼女は私達と４時間ほど過ごします。貴方は彼女の人生・・・。」　すなわち、「恋敵」は、毎日平静にやってきた。そして、彼女に､長時間、宮殿にいることを許していた？！
そのようなことがあったのであろうか？

私は､イタリアの女性ジャーナリストと対談をする。世紀末に、世紀初における２人の女の歴史を、私達は、議論をする。イタリア人ジャーナリストはニコライに関する本を書いている。私は自分の話を始める。より正確には、全てが、ベーラ・レオニドブナが私に説明したことの繰り返し話であるが。

「第３の人」
１９１５年９月２日。アリックスが､ニコライに書いている。「オルロフの墓へ。アーニヤを連れて行きました。」　１０月４日に、アリックスはまた書いている。「アーニヤと墓所に立ち寄りました。不幸なオルロフの墓に、私が花を手向けたかったからです。」「不幸なオルロフ」の墓を訪問した毎に、アリックスはニコライに、そのことを知らせている。これは奇妙なことである。というのは、「不幸なオルロフ」は、アリックスの愛人として噂があったからである。それ以上に、社交界の噂は、アレクセイ（？ニコライ二世の息子　＊）を彼（＝オルロフ　＊）の父と呼んでいた。
アレクサンドル・アフィノゲノービッチ・オルロフは、侍従武官団の陸軍少将である。エカテリーナ大帝を玉座に助け上げた、著名なアレクセイ・オルロフと同名である。私達は、この事情に注目をしている。というのは、＊＊＊＊。
ドイツのヘッセン家の若い王女が、ペテルブルグに来てから、全てが完全に変わった。オルロフは、真の騎士としての敬意を、彼女に見せる。粗野な軽騎兵のやり方は消え失せ、最上級の女性に出会った時の騎士のある種の、感極まる崇拝が生まれた。アリックスが、ニコライの両親を拒否した時でも、オルロフは、彼女を崇拝することに何の変化もなかった。崇拝ということを、強調しておこう。
皇后になっても、アリックスは、誠実なオルロフを忘れなかった。
オルロフは、連隊勤務を命じられる。その長官は、最も綺麗な女性、その人（＝アリックス　＊）であった。いまや、オルロフは、合法的に、皇后に花を差し上げられる。中世の恋愛小説は続くことになる。
ジャック・ロンドン（アメリカの小説家　＊）は、自分たちの情熱を永遠なものとするために、神々を欺すことにした２人の話をしている。アリックスは、ニコライとのロマンチックな情熱が、俗事で消えてしまわないことを、欲した。愛におぼれる女性の本能から、アリックスは、思いついた。それには、「第３の人」は必要であると。燃え続ける火。オルロフの愛（近寄りがたい王女に対する「不幸な騎士」の敬意の籠もっている愛）は、そのような愛であった。
宮廷は予想通り反応した。ちょうどその時、皇后の密通の噂が起こった。皇太后である母親とニコライの話が、結果をあげた。アリックスは、この不安をかき立てるゲームを、敢えて打ち消そうとはしなかった。彼女は切り抜けの策を考えた。噂を打ち消すためには、オルロフがアーニヤと結婚をする。しかし、美男子のオルロフは、アーニヤとの結婚を避けた。これが、彼を破滅させたのは、明らかだ。オルロフは海外勤務となった。道中、彼は突然の病で倒れ、亡くなった。万能の特殊機関が、王家の評判に気を使った可能性がある。

「第３の人」はいなかった。アリックスとニコライの愛は、日常性の中で、息が詰まりそうになっていたのであろうか？　アーニヤは、新しい役割を果たすことになる。オルロフは、プラトニックに、皇帝を崇拝していた。これからは、アーニヤは、プラトニック的に皇帝を崇拝することになる。今や、アーニヤは、アリックスとニコライの永遠の愛のゲームで緊張を作り出す「第３の人」である。（相手に溺れている初な娘が、自分の熱情の相手である愛する人を溺愛する、ことはよくある。）　いやそうではない。もちろん、彼

女は、皇后と競争することを、自分に許してはいない。彼女はただ、片思いで死にそうな自分を許している。そして、滑稽で、無邪気で、危なくない、場面さえ作り上げている。新しい３角形の中心に、端役者としてニコライがいる。その周りには、この手の込んでいる愛の芝居の２人の女優役者。
この時、アーニヤを警戒する雰囲気が始まった。大ロマノフ家内に、女友達を遠ざけろ、という声が響き始めた。しかし、アーニヤは、新しいゲームの助けで、残ることが出来た。
一度、アーニヤは、皇后から離れ、宮廷を静かにすることに決心しました、とアリックスに言った。みんなが驚いたことに、アーニヤは、地味な海軍将校ビルボワと結婚をする。ビッテの棘のある意見。「不幸な皇后は、娘を結婚させるモスクワの商人の妻のように、号泣する。」しかし、アーニヤは、自分の結婚生活は直ぐに駄目になることを知っていた。彼女は、新郎の正確な情報を手にしていたのである。直に、彼女は、夫婦の寝床から逃げ出した。というのは、夫は性的倒錯者で、麻薬中毒者であった。神秘的な感情を持っている皇后に、アーニヤは語っている。これは、彼女（アーニヤ　？　＊）が指命を変更した、事に対する、処罰です。天から与えられた、彼女の運命とは、自分の家族を捨てて、ロシアの最上位の家族に奉仕すること。

彼女は、純朴で、人が良く、明るく、開放的である。さらに、悪賢くうち解けず、、ずるく、利口でもある。１つの情熱に、自分を捧げるような危険な女性。ビッテは書いている。「全ての近くの廷臣が、アーニヤ・ビルボワの世話をしている。これら廷臣だけではない。彼らの妻や娘も。アーニヤは、彼らに、色々な恩恵を与えるように努め、皇帝への接近、政治活動への影響を与えている。」
彼女の情熱は、権力。じきに、若い女性に、行き着いた権力。彼女は、この人を、全人生、服従させた。パーベル皇帝の秘密の血脈。・・・。アーニヤは、ヨーロッパで最も輝かしい宮廷の、目に見えない最高の支配者であった。
１９１４年に、突然、皇后の思慮のない嫉妬による嵐があった。全てが攻撃にさらされた！
何が起こったのか？　アーニヤが、ゲームで疲れ果てたのか？　南国の夜に罪があり、白いリバディスク宮殿での、この夜が、気を狂わせたのか？
＊＊＊＊＊。しかし、状況を具現化しようとしても、不明瞭の影は、暗闇の中に融け込んで仕舞っている。幕が落ちている。彼らは幕の後ろにいる。が、我々は、彼らを、不安にはさせないであろう。とはいえ、全ては明らかである。その時、１９１４年（前の祖国と、今の自分の祖国との間の戦争の始め頃）に、アリックスはヒステリーの最中であった。これが、彼女において、恐ろしいもの、肉欲のものを１つとした。それらは、「聖なる悪魔」と共に、密かに宮廷にやってきた。宮廷では、「悪魔」は、聖なるものに変化したが、彼の性欲の見えない場、彼の横暴きわまりない力を、狂人じみている皇后が、感じないわけには行かなかった。このことから、ニコライへの熱烈な肉欲の渇望の彼女の手紙があった。いや、これはもう、質素は夫婦の愛ではない、極度に興奮した呼び声である！　当時、彼女を虜にしていた嫉妬の精神錯乱によるものと結論できる。いや、いや、昨年と同じように、アーニヤは、自分の役割を、安全な「第３の人」として、熱心に演じていた。しかし、一度、アリックスは鏡の中の自分を見た。疲れ切った、老いた、自分。白髪が生えていた。しかし、ニコライと並んでいると、若く、健康的で、甘ったるい目がジッと見つめている。・・・。そして、悪魔の誘惑が生まれた。
アリックスは賢明に振る舞った。疑わしいことを大げさにして示した。これが的中した。彼女は、侮辱的な冷酷さで、友人（アリックス　＊）に、不当に腹を立てて、軽蔑しながら、答えた。そして、不作法に。最期に、再び、ロシアの最高指導者（アリックスが思いのままになったこと。＊）になった。良い薬となった。すぐに、アリックスはニコライに不平を訴えた。「朝、彼女は、また私達に、無愛想になりました。もっと正確に言えば、粗暴になりました。・・・。」　粗暴に関しては、アーニヤは他の処方箋を考えていた。「彼女は、若いウクライナ人と、いちゃついてばかりいます。」さらに、不満そうに皇后は書く。「しかし、貴方を熱望しています。・・・。」　しかし、嵐はおさまる。そして、じきに「私は、アーニヤの気分を心配しています。・・・。」そして、温和しく付け加える「私は、今、非常な平静さを取り戻しています。今までのように、彼女の粗暴な非常識な行為に悩むことはなくなりました。私達は友人です。私は彼女を大変好きです。そして、永遠に愛し続けるでしょう。しかし、何かが、無くなっているのです。・・・。」
全ては、元の鞘に戻った。
とはいえ、アリックスは嫉妬と格闘しながら。アーニヤは、平静そのもの。彼女が侮辱

されるのを決して黙ってみていない人物が、彼女のそばに立った。彼女の、アリックスとのゲームに、最強のパートナーが現れた。ラスプーチンである。

チェルノゴルスクの王女から、アーニヤは、ラスプーチンについて聞いた。彼を見て、直ちに、価値を認めた。

「ファンタスティックな人」
ラスプーチンを宮廷では長い間待っていた。皇帝家族が、入念に、国民の真実の人を探し始めた、統治の始めから。チェルノゴリク姉妹が、ヘッセンの王女を、魔法使いや聖愚者の、秘密の世界へ誘惑した時からである。それ（？　秘密の世界　ラスプーチン　＊）は、近づいていた。

彼ら（？　アリックスとニコライ　＊）が、秘密の修道院のあるサーロフでの式典に出席した時。・・・。そして、実際に、悪魔が、聖なる仮面に隠れて入ってくる。賢明で柔和なセラフィムの聖像は、「聖なる悪魔」に横取りされた。グリゴリー・ラスプーチンに。
ペテルブルグ宗教アカデミー院長のフェオファン神父が、自分の崇拝者である大公ピョートルと大公ニコライ・ニコラエビッチに、ラスプーチンについて、語っている。
「パクロフスキー村に、信心深いグリゴリーという者がいる。・・・。聖人セラフィム、イリア・プロロック、と同じように、神は、彼に隠遁生活にはいるように命じた。彼が、天に、開け、そして、恵みの雨よ降れ、と命じない間、地上では、旱魃が続く。」
既に、チェルノゴリク姉妹、大公の妻達、は情報を宮廷に持ってきていた。聖なるセラフィムと同じように、グリゴリーは、処女の娘達に囲まれて、自分の村に住んでいる。優しさ、愛、親切を説教し、病気を治している。・・・。
１９０３年末に、ラスプーチンは、ペテルブルグ宗教アカデミーの廊下に現れる。汚れたジャケット、長靴、弛んだズボンは、使い古されたハンモックのように、後ろでだぶだぶしている。もつれた髭、居酒屋の給仕のようなおかっぱの髪。眼力のある灰色で青みがかった目。優そうでもあり、怒っているようでもある目。しかし、時々、警戒しているような目。脈絡の無い、子守歌のような、そして、ぶっきらぼうな奇妙な話。・・・。

チェルノゴリク姉妹が、アリックスに、「修道者」の感極まる話をしているうちに、彼女の女友達（？アーニヤ　＊）は、修道者を宮廷に招くことにした。なんと素晴らしい監督であることか。彼女は、舞台を作り上げている。皇后への「修道者」の出現という。
夜遅く、彼らは４本の手で、皇后と一緒に、ベートーベンを演奏している。深夜当たり、アーニヤの指示で、ラスプーチンを、薄暗い部屋に、静かに導き入れる。皇后は、彼の背後に座っている。アーニヤとの演奏が続いている。時計が、深夜０時を打つ。
「サナ、何か感じない？　何か起きていない？」
「そう、そう」皇后は驚いて答える。
アーニヤが、ゆっくりと、顔を振り向ける。不幸な皇后は、従順に、彼女に従って振り向ける。神経症のアリックスがドアの方を見ると、そこには、不明瞭の男の姿があった。彼女はヒステリーを起こして、全身が震え始めた。ラスプーチンは彼女に近寄り、疲れ切った女を、自分の胸に抱きしめた。そして、静かに、撫でた。優しく話しかけながら、「心配ない。可愛い子よ。お前にはキリストがついている。」

ラスプーチンは２０世紀における最もありふれた伝説の中の１人である。・・・。
特別検査会の調査員であるルドネフは、後になって、興味あるメモを残している。
「ラスプーチン個人を解明するための最も重要な資料の１つに、保安当局が、ラスプーチンに対して行った、秘密監視の観察雑誌がある。監視は内外で行われ、部屋での監視は不断に行われていた。・・・。定期刊行雑誌では、特に多くの注意は、ラスプーチンという名前と同意語の、ラスプーチンの放埒さに向けられた。監視の結果、しかるべき注意がこの問題に向けられることになった。ラスプーチンの個人を解明するための価値のある資料は、長期に当たって、秘密に、継続して行われた、部屋で監視して得られた資料にある。・・・。
これについては、ラスプーチンの恋の情事は、尻軽な娘達や、歌娘達、当然ながら依頼の女性達との夜の狂宴の枠を出なかった、という説明がある。・・・。交流社会の女性達との接近に関してはというと、この関係においては、監査や調査からは、何の肯定的な資料は無かった。」
このように、「上流階級のご婦人方」は居なかった！　何があったのか？
グリゴリー・ラスプーチンは、シベリアのパクロフスキー村で生まれた。農民エフィムノーヴィの息子である。酷い酒飲みであった、彼（エフィム？　＊）の父は、突然気が変

わり、酒を飲むのを止め、蓄財をした。しかし、女房が死んだ。それで、再び、元の不幸な生活に戻った。飲み始め、蓄えた財産を散財した。この当時、彼の息子グリゴリー（グリゴリー・ラスプーチンの父親？　＊）は、だらしない生活で悪い評判をとっていた。だらしないまま、彼はトボリスクに行き、そこのホテルに、給仕として勤めた。そこで、女給仕のプラスコバヤと結婚をした。夫婦には、３人の子供が生まれた。息子１人と、娘２人。

グリゴリー自身は、自分の人生の荒んであった当初を、次のように記述している。「村で、夏の季節、太陽は燦々と輝き、鳥は天国の歌を歌っていた。１５歳の時である。私は神を夢想した。・・・。私の心は、遠くへ突き進もうとした。・・・。一度ならず夢想し、私は泣いた。泪がどこから来るのか、何故涙が出るのか、私は知らなかった。・・・。私の青春時代はそのようなものであった。様々な瞑想の中で、様々な眠りの中で、・・・。生はというと、生が私まで触れた時、どこか隅に駆けだして行って、黙って祈った。私は満足されなかった。何の答えも得られなかった。憂鬱に過ごしていた。そして、私は少しずつ、酒を飲むようになっていった。」
何という、優しく、甘美な話であろうか。ほら、正確には、幻惑の天賦の才能が。
３０歳まで、彼は、放蕩者で、泥棒であった。３０歳から、たまたま、うまく行った。修道院の生徒が、グリゴリーの巡礼旅路の途中で、グリゴリーに出会った。説教で、迷える心に、真の道を教え導いた。その時から、修道者グリゴリーの秘密に溢れた聖人伝が始まる。脱穀の時、家族が、彼の神聖なものを嘲り笑った時、彼は穀物の山に、シャベルを突き刺し、聖なる場所へ、出て行ってしまった。・・・。長年にわたり放浪した後、家に戻った。家畜小屋に、洞穴を掘り、そこで、２週間に渡り祈った。そして、再び、旅に出かけ、聖地で祈りを捧げた。聖なるセラフィムと同じく、グリゴリーは、キエフを訪れた。そして、サーロフ修道院も。その後、モスクワを巡礼した。その後、さらに、数え綺麗ほどのロシアの町々、村々を巡礼した。
長い放浪の後家に戻った。教会で祈りを捧げ、みんなが見ている中で、床で額を傷つけた。この時以来、彼は、神託を告げたり、奇蹟によって病気を治すようになった。
ベーラ・レオニードブナ。
「　この人間は、ファンタスティックな人間であった。最新のレストラン「ベナ」が開店した時、アルチバシェフは私を、その店に誘った。有名な戯曲「嫉妬」の作者である。この戯曲は、大成功を収めた。私達と一緒に、ペテルブルグでは有名な、信じられない人、マナセビッチ・マニュイロフも居た。・・・。彼は諜報員である、という噂が広がっていた。マナセビッチが提案をした。「ラスプーチンの所へ行こう。・・・。」これは、レストラン・ベナと並んでいた、ガラハボイという店でのことである。アルチバシェフは断った。しかし、私は、アバンチューリストであった。ラスプーチンは、２人の娘の間に挟まれてテーブルに座っていた。この娘達は、ラスプーチンの娘達であった。・・・。目は・・・、私は、しっかりとその時の感じを覚えている。ラスプーチンの目は、私を食い入るように見つめていた。テーブルには、花が置かれていた。テーブルの反対側には、若くて色白のムーニャが座っていた。ムーニャとは、マリヤ・ガラビナのことであり、皇后の女官である。女性達が到着した。ムーニャは、女官の仕事として、当然のように、ドアを開けに走っていった。その後、彼が、彼女に話した「食べ物」。そして話し合いが始まった。全てが、優しさ、心、についてであった。私は記憶にとどめるよう努力をした。その後、帰宅してから、書き留めようとも努力した。が、そうはいかなかった。あの時、全員の目が、輝き始めていた・・・。これは、愛の説明しがたいほとばしりであった・・・。私は酔っていた。」

この話は、私は、記録資料から思い出した。
皇后の青黒いノート。ノートの表示の裏側に、所有者の名前が記されている。アレクサンドラ（＝アリックス＝皇后）。この上品な署名と並んで、ラスプーチンの悪筆が。句読点無しで、ラスプーチンが書いている。「ここに　私の平穏　名声　世界の中で　光　贈り物　私の心のママへ　グリゴリー　・・・」
グリゴリーは皇后を「ママ」と呼んでいた。ロシアの大地の母のことである。「パパ」はニコライ。
「贈り物　心のママへ」　この彼の口頭の説教を、アリックスは、上品な書体で、一生懸命に書き写している。アリックスは、このノートを、トボリスクへ、そして、エカテリンブルグへと、持参する。そして、自分が殺される日まで、何度も何度も読み返すことになる。
ノートの中から幾つかを。
「誰が、自分のことを考えているか。馬鹿か、それとも、この世の迫害者か。私達の所では、一般に、閣僚は、自分のことだけを考えている。あー、それでは駄目！　ロシアは

広い。ロシアに仕事の自由を与える必要がある。しかし、左派は駄目、右派も駄目。左派は馬鹿で、右派も馬鹿。何故？　彼らは、棒で打ち据えながら、教えたがっているから。私はもう５０年生きてきている。６０歳ももう直ぐやって来る。言うことだけは出来る。誰が考えているか。彼は何を教えられ、何を学んだのか。賢者は真実を語る。それは馬鹿だ。」
「神の母は、賢かったが、自分については何も書いていない。しかし、彼女の人生は、私達の心に知られている。」
「囚われ人を追い出すこと、罪深い人を、戒律を守る生活に復活させることを、心配することはない。その苦しみを通じて、囚われ人は、神の前で、より高めてくれる。」
「天国を愛しなさい。天国は愛のために、そこへ、心が。そこに、私達が。雲を愛しなさい。そこに私達は住んでいる。」
全ロシア統治者への半ば文盲の男（＝ラスプーチン　＊）の影響は、不幸な息子（＝アレクセイ　＊）の治療だけではなく、疲れ切った皇后の心までも治療することにも及んだ。
彼の口から、沢山のキリスト教の真実の塊が、流れ出た。それらによって、彼女は俗事から清められ、心を落ち着かせた。宗教本に詳しい人、即ち、催眠術師である彼は、彼女のために、要求される修道者「セラフィム」になることが出来た。彼女が、サーロフ修道院で黙想した人物である。ラスプーチンは、蘇った聖なるセラフィムとして、振る舞った。
宮殿に入った最初は、ラスプーチンは、穏やかに、周りを照らした。その後、最終的に、修道者の役割にはいると、彼は、皇帝夫婦に、笑いかけたり、怒り出したり、或いは、馴れ馴れしく、残忍に、交互に振る舞うようになる。この際、何の格好もとらない。驚くほど単純で、自然であった。

ラスプーチンの秘密は、奇跡を行う力と言うことでは全くないが、力は疑いが無く存在した。その力は、不断無く、皇后の息子を助けた。ラスプーチンは、無理に、アレクセイと一緒にいる必要は無かった。２０世紀の魔法使いは、電話も電報も使える。
歴史は繰り返す。
ラスプーチンの部屋で、ツアルスコエ・セロからの電話が鳴る。子供の調子が悪い。耳が病んでいる。寝れない。
「わかった。子供をここへ。」　修道者は、電話で皇后に話しかける。電話に出た子供に本当に優しく話しかける。
「アリョーシャ（アレクセイの愛称）、夜の祈りを捧げた？　何の病気でもないよ。君の耳はもう病んではいないよ。お休み。」
１５分後、ツアルスコエ・セロから、返信の電話が鳴る。耳は治りました、もう寝付きました。
１９１２年、後継者が死にそうになる。浮腫ができ、血の汚染が始まった。アリックスは、深夜の寝ずの看病でヘトヘトになりながら、誇らしげに、医者に、ラスプーチンからの電報を示した。「神は、貴方の泪に視線を向けた。貴方の祈りを聞き入れた。悲しむことはありません。貴方の息子は生きます。」　著名な医師は、ただ悲しげに、頭を振るだけであった。悲惨な最期が必然的となる。
が、息子は、直に、健康を回復した。
戦争の時、ニコライは、後継者を、参謀本部まで伴った。アレクセイは風邪を引いた。子供には、普通の鼻風邪であった。しかし、この子供は普通ではない。ひどい鼻風邪となった。呼吸が困難となった。血もはき出した。医者にもこの血を止めることはできなかった。・・・。ジリヤール（人名　？　＊）と、無力な医者と一緒に、アレクセイを、皇帝列車に乗せて、ツアルスコエ・セロに向けて出発した。ツアルスコエ・セロでは玄関で、皇后が出迎えていた。
「アレクセイ様の血が止まました！」　ジリヤールは、勝ち誇ったように、語った。
「わかっています。」　アリックスは、平静に答えた。そして、
「これはいつ起こったの？」
「６時半頃です。」
アリックスは、ラスプーチンの電報を取り出した。「神は助けます。元気になります。」電報は、夕方、６時２０分に、発信されていた。
１９１５年の初め、アーニヤ・ビルボアが、酷い身体障害を受けた。ビルボアは思い出している。
「１月２日。・・・。私は宮廷から退去した。立ち去った。５時２０分の汽車に乗って、町に向かった。汽車の１号車に乗った。・・・。私の前には、女性軍人が座った。客車は人でいっぱいであった。途中で、突然汽笛が鳴った。私は頭を下にして、どこかに飛ばされ、地面に打ちつけられた。両足は、多分、暖房用のパイプに絡まった。両足が骨折していることが、感じられた。・・・。私が気がついた時には、周りは静寂と暗闇で包まれていた。その後、壊れた客車の下敷きになった怪我人や瀕死の人達のうめき声が聞こえてき

た。私は、少しも動くことができず、声も出ず、頭の上には、大きな鉄の梁が横たわっていた。」
瓦礫の下から彼女を引きずり出した。
「私を、群衆の中から、ツアルスコエ・セローへ運んだのを、覚えている。皇后、大公達が涙を流しているのを、私は見ました。私を救急車の乗せ、皇后はそれに飛び乗り、床に座り、私の頭を膝の上で、支えてくれました。死にそうだと、私は皇后に呟きました。」
女友達（＝アーニヤ　＊）は絶望的であった。その時、「修道」者を呼び出した。
ラスプーチンは、アーニヤに近寄った。・・・。ベットの上に立つ。奇妙な緊張からか、目は眼窩から飛び出している。突然、優しく囁く。「アニューシュカ（アーニヤの愛称＊）、目を覚ましなさい、私を見なさい。」　アーニヤは目を開けた。・・・。

目の前で、死から蘇らせた人と、アリックスはどのような関係を持つべきか！　人を助けることができ、彼女の息子を何度も救った、特定に個人に！　ニコライは、彼女から、息子の治療者を、取りあげることができたのか？　彼女の心の救済者を？　ラスプーチンを放逐することは、即ち、彼女を殺すこととなる。もちろん、息子も、殺すことになる。
そして、ニコライは、全てを我慢した。そして、調子を合わせることもした。
ラスプーチンのテーブルから、霊験新たなパンくずを食べること、ラスプーチンの奇蹟を想像する櫛で、髪をとくこと、のアリックスの願いを、ニコライは、従順に、認めた。アリックスは、ラスプーチンの霊験新たな力を、ゆるぎなく信じた。そして、ニコライは、同じように、信じるようにするしかなかった。
しかし、ニコライは、単に、調子を合わせてはいなかった。
ニコライにとって、グリゴリーは、真実のおもねりの結果、そのものであった。おもねりはクロポフ（？　＊）から始まった。そして、それは、宮廷では、真実の人物として終わった。「国民と皇帝」連合が、やって来た。・・・。もちろん、ニコライは、ラスプーチンのふしだらさを知っていた。アリックスと違って、神秘さの根拠を作らなかった。いや、ニコライは、ラスプーチンを、本当の国民のふしだらさとしてとらえた。彼の国民は、憲法の受け入れの準備はできていない。しかし、この粗野さに入れ替わって、ニコライは、グリゴリーに、健全な考え、良心、信頼を見た。ラスプーチンの意見はニコライにとって、国民の意見であった。
ニコライは、宮廷長官のフレデリックス伯爵に説明をした。「グリゴリーは、宗教心があり、信心深い、ただ単純なロシア国民である。ラスプーチンは、その崇拝さから、皇后を気に入っており、皇后は、私達家族とアレクセイを守るために、彼の祈りの力を信じている。これらは全く私達のことであり、全く個人的なことである。人々が関係ないことに、口を出したがるというのは、驚きである。」
しかし、人々は口を出した。宮廷で普通に行われている驚くべき儀式に、社会は、驚愕を持って話題にした。シベリヤの男が、皇帝と皇后の手に口づけをする。その後、皇帝と皇后は、男のざらざらした手に口づけをする。この相互の口づけは、正に、福音書にあることである。キリストは、自らの教え子の足を洗い流した。ロシアの君主である彼らが、シベリアの男に、謙って口づけをした。国民に。＊＊＊＊。

このように、ラスプーチンが超人間的な才能を持っていたことは、論争の余地がない。超心理学者の奇蹟に慣れている現代では、これには何の秘密もない。しかし、ラスプーチンの秘密は確かにあった。
秘密は彼の奇妙な振る舞いから始まる。

終わりのない狼藉、大酒、奔放な性欲、これら全てが、ちまたの噂となった。ペテルブルグとモスクワの町民には、豪華なレストランで、グリゴリーは、厚かましく、スキャンダラスに、放蕩したように見えた。
しかし、何故？ラスプーチンには、警察に警護されている部屋があった。そこで、彼は気の済むように、陰口や周りの怒りを受けることなく、淫乱や大宴会に耽ることができた。しかし、彼は、みんなが見ている前でするのを好んだ。
多分、挑戦である。　気違いじみた踊りと、全ての卑猥な行為が、上品なペテルブルグの上に、全ての礼儀作法の上に、あるという。・・・。
＊＊＊＊。　私は何をしたいのだ。何をぶつぶつ言っているのだ！？。
これは芸術的な悪趣味（内容がないのに文章をこねくり回すこと　＊）だ。西側の好む作り話だ。＊＊＊＊＊＊＊。
＊＊＊＊＊＊。
棘があり、警戒の眼差しを持った、ずるがしこい男。しかし、何故、そのような軽率な行為が？　何に秘密があったのか？
ラスプーチンの最も大きなスキャンダルは、１９１５年に起こった。誓約を実行しながら、

ラスプーチンはモスクワに向かった。クレムリンで、げるまげん総主教の聖なる墓に祈りを捧げる。有名なレストラン「ヤル」でのどんちゃん騒ぎで、礼拝は終わった。興味深い政治調書が作成された。
「この年の３月２６日、夜１１時頃、レストラン「ヤル」に、後家のパトムスキー名誉市民であるアニシア・レシェトニコバ、モスクワ新聞とペテルブルグ新聞の記者と共に、著名なグリゴリー・ラスプーチンが現れた。ニコライ・ソエドフ（？　＊）と。未成年の少女と。部屋を借り、到着するなり、自分の所に電話で、モスクワの新聞「季節新聞」の編集・出版者であるセメン・クグリスキーを呼び出した。そして、女性コーラスを招待した。彼女らは、何曲かの歌を歌い、「マティシュ」を踊った。・・・。酔ったラスプーチンは、その後、民族舞踏を踊った。それから、そのような役目の歌い手達といちゃつき始めた。このカフタンはおばあさんが私にくれたもの。おばあさんはそれを縫って・・・・。ラスプーチンの更なる行状は、性精神学から見ても、醜悪以外何者でもなかった。ラスプーチンは、性器を露出させ、そのまま、歌い手達と話を続けていた。彼らの何人かに、「私心無く愛せ・・・」に似たような、何かが書かれた自筆のメモを渡しながら。・・・。」
ラスプーチンの周りには、そのような興味心旺盛な仲間が集まっている。このずる賢く、用心深い男は、２人のジャーナリストを、どんちゃん騒ぎに誘った！・・・。２人の家の人のジャーナリストは、全く低俗な新聞で働いているが、それ以上に卑猥きわまるどんちゃん騒ぎに耐えている。
＊＊＊＊＊。
即ち？！。・・・。
そう、ラスプーチンの乱暴狼藉を、全ての人が知ることを、彼は欲した。当時、ラスプーチンは、おかしな連続性を発見していた。各々の、彼の公然とした乱暴は、一時的には、彼の強力な敵を元気づける。彼らは、即座に、簡単な勝利を期待して、彼に対抗しに出る。しかし、これをすることは、彼らには、高くつく。宮廷から消えることになるからである。矛盾。自分自身の乱暴で、ラスプーチンは、強力な敵を抹殺した。・・・。
不吉な細部。「ヤル」で、皇后について、次のように、ラスプーチンは語っている。調査書に記載することさえ、勇気がなかった！
「私がしたいように、彼女をさせる。」　ジャーナリストが居る前で、ラスプーチンは大声で叫ぶ。このような言葉は、彼の公然としたどんちゃん騒ぎでは、何度も言われたことである。
あけっぴろで、ずる賢い男としては、矛盾する行動があった。宮廷で、彼の乱暴狼藉を信じることができたとしても、皇后を信じさせているもの（？ラスプーチン　＊）に対する、罵詈雑言を、皇帝、アレクサンドラ（＝皇后）自身が信用しなかった！　「ママ」に対する愛情溢れた言葉を、彼らは、何年にも渡って聞いている。口はそれほどすごいことができるのか！　似たような言葉の繰り返しが、真実性を奪った。全ては、不幸な男に対するお決まりの陰謀となった。その悪魔は、酒を飲むことを誘惑した。敵はそれを利用し、不幸な男を非難する。

それ以上に、調書を作成した警察が、間違っているのは滑稽である。「ヤル」でラスプーチンと一緒に、どんちゃん騒ぎに参加していた、アニシア・レシェトニコバは、９０歳近いおばあさんであった。・・・。家からは、教会以外には出たことがなかった。典型的なモスクワ商人の妻であった。彼女の家には、しばしば、ラスプーチンが立ち寄っていた。・・・。
ラスプーチンと一緒にいたのは、アニシア・レシェトニコバではなく、彼女の親類である若いアンナ・レシェトニコバであった。当然ながら、人物像は十分に不吉なものであった。（このような間違いが何故起こったのか。この歴史の登場人物等については、私の将来の本「グリゴリー・ラスプーチンについて」で詳細に話をする。）・・・。
しかし、間違いがいくらあっても、さほどの問題ではない。皇后は、警察の調書を、全く信用しなかったからである。

この警察のしくじりが無しも、彼女（皇后　＊）は、「修道者（ラスプーチン　＊）」の行状を信じなかった。そして、ラスプーチンはこの事を知っていた。
彼はわかっていた。皇后は、自分無しではやっていけないと。そして、修道者を守り、修道者の敵に復讐を、彼女はする。
ラスプーチンの秘密。彼の大酒宴、皇帝家族に対する彼の汚い言葉。これら全ては、ファンタスティックな挑発であった。ラスプーチンは、敵の手に、武器さえ預けることもあった。しかし、武器を受け取った敵は、直ぐに宮廷から消えてしまった。
偉大な詩人の孫、大公達の教育者であったツツチェバ女史は、修道者に反対して、戦争を仕掛けた。ラスプーチンの相も変わらぬ行状から、彼女は、ラスプーチンが、大公達と

交際することを禁止することを要求する。結果、ツツチェバが宮廷を離れざるを得なくなった。
政府主幹であるストルイピンは、グリゴリーの行状について、メモを作成し、それを、ニコライに提出した。ニコライは少し読んだが、何も語らず、ストルイピンに、次の仕事に進むよう促した。直に、ストルイピン首相は、職を辞することになった。
最期に、ラスプーチンに対して、以前はラスプーチンの崇拝者であった、ニコライ・ニコラエフ大公が、出てくる。ニコライ大公は、王朝に釣り下がっている危険を理解していた。軍の司令官であり、皇帝に最も近く、シベリアの男に反対している人物。・・・。シベリアの男は、さらに強力な力を示すことになる。
ラスプーチン殺害まで、ラスプーチンの敵は、彼の罠にはまり続けている。事ある毎に、彼らは、大酒宴や、乱交擬きに対して、ラスプーチンに対する公的な告訴を提出する。が、彼らは知らなかった。ラスプーチンは、自分の奇妙な行動の秘密の理由を、アリックスや彼の崇拝者達に、ものの見事に説明をしていたことを。
その後の、ラスプーチン殺害の１人であるフェリックス・ユスポフは、自分の知り合いであり、皇后の女官であるマリア・ゴロビナから、この驚きの説明内容を知ることとなった。優しい思いやりを持ち、思慮の浅い子供に対するように、マリアはフェリックスに説明をした。「ラスプーチンが、そのような行動を取る目的は、ただ、自分を精神的に鍛えるためである。」

世界の罪を自分のものとした修道者。堕落を通じて、社会による鞭打ちの刑を、自主的に十分のものとして受け入れる修道者。古代ロシアでは、聖愚者達が、このような行動を取っていたが。ラスプーチンは、自分の行状を、なんと神秘的に説明をしたのであろうか。
帝国陸軍と海軍の首司祭であるゲオルギー・シャベリスキー司祭が思い出している。「皇后の所には、乱交の形式で、聖愚が出現することを語っている箇所に、印がつけられた本「ロシア教会の変わり者の聖人」があった。」

ラスプーチンとアーニヤ、皇帝家族に最も近かった人間達である。これら２人は、酷い伝説を産んだ。汚れた革命は、それら伝説を利用することになる。意志薄弱で妻を寝取られた皇帝、男に抱かれる皇后。これまでに話したように、皇帝を愛人ビルボワに渡したという噂。
革命時、全ロシア中に、大量の下品な絵が出回った。それらの内の１つ。あごひげの生えた男「ラスプーチン」と、彼の抱擁の中に、２人の太めの美人（皇后とアーニヤ）。絵の背景では、大公である娘達が踊り回っている。何と、恥知らずか。

第５章「皇帝一家」

彼らは、牧歌的な家族であった。
１９０４年から、後継者の病気の秘密を守りながら、皇帝家族は、宮廷に引きこもった。それなので、家族の本当の生活について知っている者は、少ない。

その後、この閉ざされた彼らの生活は、大公達の教育者、及び、後継者の教育者であった、スエーデン人のジュリアールとビルボーワが、自身の追想記で書いてる。家族の生活の中には、幾つもの汚れた伝説の原因となったものがあった。家族の死後に、皇帝家族の魅惑的な写真が作られた。その写真は、明らかに、歴史に残るものである。

朝早く、家族が目を覚ます。アリックスの夢がかなった。自分の子供時代と同じように、今は、自分の元に大家族がある。「愛のたゆまない努力」が、家族を作った。アリックスは、妻であり、母親であり、家族の屋根であり、家族の柱である。
アレクサンドロフスキー宮殿は、５人の子供達には、既に狭くなっていた。並んで立っている、巨大なエカテリニンスキー宮殿は空っぽである。しかし、アリックスは、自分の住居を替えたくはない。これは、古いかまどに対する愛着だけではなかった。小さい宮殿での一緒の生活は、みんなを団結させる。という意識からであった。
彼女の娘達・・・については、私達は、少ししか知らない。娘達は、将来の惨劇における、血の照り返しの影として・・・。
イギリスの祖母である、ビクトリア女王から、アリックスが得た遺産である、ビクトリア式教育。アリックスは、子供達にこの遺産を伝える。テニス、朝の水浴、夕には暖かく。これらは体によい。心のためには、宗教教育。神の慈愛溢れた本の読書、教会儀式の絶対的規律の実行。

「オリガ、タチヤーナ・・・はじめ入り口に立ち、勤めの間中立ち通した。りっぱ。」皇帝は、嬉しさを持って日記に記述している。
オリガが、ほんに小さい子供であった時、年上の子供達が、彼女をからかった。
「貴方は机まで手が届かないの？　貴方はそれでも大公なの？」
「わかんない。」オリガはため息をついて答えた。「パパに聞いて。パパなら何でも知っている。」
「パパなら何でも知っている。」　このように、アリックスは子供達を育てた。

白いドレスを着て、色つきのガードルをはめて、皇后の青白く紫色の部屋の中で、騒がしく遊び回る。部屋には豪華な毯がある。その上を這うのは、とても気持ちが良い。絨毯の上には、おもちゃの詰まった大きな籠がある。おもちゃは、年の順に送られる。
子供は成長する。
「オリガは、満９歳になった。申し分のない娘である。」
オリガとタチヤーナの名前は、日記に、しばしば一緒に出てくる。２人が、ホンの小さい時のこと。「オリガとタチヤーナが、自転車に、並んで乗った。」（ニコライの日記）
「オリガとタチヤーナが、２時頃戻ってきた。・・・。オリガとタチヤーナ、オリギン委員会（？　＊）へ。」（皇后の手紙より）

オリガ、反り返った鼻をした金髪の娘、魅惑的だが、かっとなりやすい性格。タチヤーナ、ひたむきさが強く、少し遠慮が無く、少し才能があるが、性格の平静さが、この欠点を補っている。彼女（タチヤーナ？　＊）は母親に似ている。灰色の目をした美人である。母親の全ての決定の伝達者。姉妹は、彼女（母親？　＊）を「家庭教師」と呼んでいた。
２人はお互いに、愛着を持ち、２人で楽しむ、少し太めで、広い肩幅。２人で一緒に仕事。マリアはロシア美人であり、可愛いアナスタシア。・・・。娘達は、アナスタシアを「私達の可愛い太めのトウトウ」と呼ぶ。（「私達の可愛い太めのトウチッカ」。これは多分英語からの翻訳であろう。彼女たちはしばしば英語で話し合っていたので。）　アナスタシアを、「シブジック」とも呼ぶ。（小さいという意味か）
彼女たちは、勉強は好きではない（これは、彼女らの日記中の、間違いだらけから明らかである）。勉強では、オリガが一番良くできた。

「あー、わかった。助動詞とは、動詞の召使い。動詞「ｉｍｅｔｂ」は、自分だけで仕事をしなければならないので、不幸な動詞です。」彼女は、ジリアーラ先生に、答える。
正に、大公ならではの言葉！
彼女たちは、大きな子供部屋で、殆ど枕無しで、折りたたみベットで寝る。

この折りたたみベットは、流刑時にも、彼女たちは持参している。彼女たちは、エカテリンブルグまで、このベットともにたどり着き、最期の夜まで、このベットで眠ることになる。その後、これらのベットで、彼女らの殺害者が、夜を過ごすことになる。

家族は全員日記を書いていた。その後、トボリスクに、モスクワからコミッサール（政治委員）がやって来た時、家族は日記を焼却する。数冊が残っているだけである。

マリアとタチヤーナの日記を見てみる。

波紋織りの裏地、金色の切り口を持った、伝統的な日記帳である。（彼らの父（ニコライ皇帝）が、子供であった時、このような日記帳で、日記を始めた。）　出来事のまとまりのない列挙。「朝、教会に行きました。夕方、パパとアレクセイと一緒に夕食を食べました。昼に、アーニヤ（ビルボワ）の所に出かけました。お茶を飲みました。・・・。」（マリアの日記より）
タチヤーナは、正確に日記を書いている。
オリガの日記は、単色の黒色のノートである。彼女は父のものと似た日記帳を欲した。そした、また。「お茶を飲みました。・・・。骨輪で遊びました。」、その他。しかし、１つの驚き。常に、「私達」である。自分についても、１つの目的も、みんなで考えていたように、それだけ、彼らは一緒であった。
魅力的なこと。少女達の日記には、押し花が残っていた。ツアルスコエ・セロの庭園から採った花の。そこでは、彼女たちは幸せに生活をしていたのであった。彼女たちは流刑の際にも、押し花を一緒に持って行った。そして、自分のノートの間に保存した。殆どの日記は燃やしたが、押し花は残りの日記に挟み替えた。壊された生活の思いでのように。
私は、注意深く、ノートの日記をめくる。・・・。彼女たちの何の心配もない生活の、最期の夏に、彼女たちのよって押し花にされた花が、バラバラにならないように。

皇后のアルバムの中に写真がある。彼女は、頭を後ろに反らして、ソファーベットに横たわっている。悲劇的な格好である。小さい椅子の周りには、娘達が座っている。床の上のクッションの上には、アレクセイ。愛の籠もった笑顔をした娘達は、アレクセイを見つめている。
細い楕円形の顔、金色の色調を持った明るく栗色の縮れ髪、そして、母と同じ灰色の目。小さい皇太子である。永遠の病人である皇太子。・・・。
「僕に自転車をプレゼントして下さい。」
「貴方はわかっているでしょう。貴方は駄目なの。」
「お姉さん達と同じように、僕もテニスをしたい。」
「これも、貴方はわかっているでしょう。貴方は遊ぶことができないの。」
そして、憂鬱でたまらくなり、「何故、僕だけが駄目なの。全部駄目なの。」と繰り返し、泣きじゃくる。
娘達は、母親が、長い苦難を味わった時の目撃者でありかつ援助者であった。戦時には、彼女たちは、看護婦として働く。
彼らの人生のページ・・・・。輝かしい舞踏会、光に照らされた騒々しい生活。ロシアの宮廷の娘として、これらが如何ほど短かったことか。・・・。
さて、夏になった・・・。
ヨット「シュタンダルト」号で、彼らは航海をした。大きな白い帽子をかぶり、純白の長いドレスを着て、覆いを取り去った馬車に座る。華麗な馬車の列が動き出した。・・・。
アリックスの夢がかなった。アレクサンドル三世が亡くなった不幸な宮殿の場所、＊＊＊＊＊。イタリア様式の白い宮殿。窓の下には、広大な海が広がっていた。凍える家の中での、シベリアでの拘禁生活では、彼らはこの天国を思い出すであろう。

リバディア宮殿では、彼らは、お互いに沢山の写真を撮った。ほら、これがアレクセイ。大好きなスパニエル犬と並んでいる。犬の名前はジョイ（悪魔）。
彼らの所には、いつも何匹もの大好きな犬が居た。アナスタシアには、キングス・チャールス。小さい犬は、負傷した将校が、ホテルで、姉妹にプレゼントをしたものである。この犬は、マフ（手首にはめる筒状の毛皮製品　＊）に入れて運ぶことができた。

ミハイル・メドベージェフ（家族の銃殺に参加したチェキスト（革命時の秘密警察）の息子）が話をする。父は思い出を語っています。「遺体をトラックに乗せる時、私はこの搬送の責任者であった。小さい犬の死体が、大公のうちの１人の着物の袖から、落ちた。

・・・。」
　ここ、リバディア宮殿で、オリガは１６歳を迎えた。彼女は、軽騎兵連隊の隊長に任命された。夜には、舞踏会があった。軍のラッパ手達によるオーケストラが演奏された。金髪をし、パラ色の長いドレスを着た彼女が、ホールの中央に立った。舞踏会に招待されている軽騎兵隊の将校達、全員が、彼女に魅了された。
　この夕べで、彼女は初めて、ダイヤモンドつきの衣服を着た。
　誕生日毎に、倹約家のアリックスは、娘達に、１個の真珠と、１個のダイヤモンドをプレゼントした。それで、１６歳の時には、オリガには、２つの首飾があった。

　冬には、家族は、ツアルスコエ・セローで過ごす。古いが気に入っているアレクサンドロフスキー宮殿で。
　アリックスが整えた日程通りに、全てが進行する。２時に彼女は、部屋から出て、子供達の部屋へ行く。馬車に乗っての散歩。彼女は歩くのは好きでなかった。彼女は足が弱かったのである。彼女は、どこか遠くの教会まで出かける。そこでは、誰も彼女のことを知らない。そこで、石畳の上に跪いて、真剣に祈りを捧げる。８時に、朝食。ニコライがやって来る。・・・。アリックスは、肩の開いた、ダイヤモンド付きのドレスで着て迎える。９時に、アレクセイと一緒に祈りを捧げるために、２回の子供部屋に上がっていく。ニコライは、自分の日記を書くために、書斎へと去る。夕方、声を出して、伝統となった読書をする。
　皇帝家族が住む、黄金の小部屋は、世紀が変わっても、何の変化もない。友人が書いている。「宮殿内の家具といえば、高祖母のエカテリーナ大帝の時、＊＊＊＊＊。羽根飾りの付いた帽子をかぶった先触れ(人　＊）＊＊＊＊。」

　アレクサンドロフスキー宮殿が、闇の中から蘇る。ロシアにおけるフランス大使マリス・パレオログの目から、宮殿の様子を見てみよう。「アレクサンドロフスキー宮殿は、私には、最も日常的なものとして思い浮かぶ。・・・。私の従者として、色とりどりの羽根飾りをつけた帽子をかぶった先触れがいる。私を、豪華な客間の間を導き、長い廊下を進んで、皇后の客間に導く。そこで、私は、茶盆を持った、非常に簡単な制服を着ている召使いに会う。遠方には、小さな内階段がある。階段は、子供達の部屋へと繋がっている。階段を、２階へと、侍女が走り去っていく。」
　２階へ去って行く侍女は、エリザベータ・エルスベルグであった可能性がある。

部屋の女性（部屋担当の女性　＊）　エリザベータ・エルスベルグ
　かって、私は手紙を貰った。「エルスベルグ・マリヤ・ニコラエブナが、貴方に書きます・・・。」
　実のところ、吃驚した・・・。皇帝家族の部屋担当女性の名前であった。この女性は、皇帝家族と同じく流刑を受けた。
　「私の叔父は、ニコライ・エルスベルグ。叔父は、アレクサンドル三世の時、釜焚き人でした。アニチコフ宮殿、ガッチンスキー宮殿、冬宮で、ペチカを焚いていました。ボルクでの皇帝列車の事故の時、怪我を負い、１８８９年に亡くなりました。叔父の娘で、私の父の妹の、エリザベータ・ニコラエブナ・エルスベルグは、愛国中学校を卒業し、ニコライの母である、マリヤ・フェドロブナによって、室内係女性に選ばれました。信念と正義を持って、１８９８年から１９１８年５月まで、勤めました。・・・。」

皇帝家族が、１９１７年に流刑となる時、皇帝は、全従業者を集め、もし、この中から、流刑について、仕事をしてくれるものがいれば、嬉しい、と説明をした。しかし、全く前途未明なので、俸給は約束できない、とのこと。義務感と、娘達への愛着心に動かされて、エリザベータは、行くことに決心した。・・・。ツアルスコエ・セローのアレクサンドルスキー宮殿の計画では、しかるべき手順に従って、全部屋がチェックされることになっていた。その中に、私の叔母のエリザベータの部屋がある。初めて、１９３２年に、父と一緒に宮殿を訪問した時、全ての状況は、「主人が退去した時のまま」であった。」（そのように父が話していた）　バルコニーと、アレクサンドラが好きであった色のアジサイのあるニコライとアレクサンドラ（＝アリックス　＊）の寝室。枕元が曲線の飾りがしてある鉄製の寝台。普通の家にあるものと同じであった。枕元には、中くらいの大きさ（家庭用）から、極小さい金属製までのイコンが大量にあった。聖人の像が描かれている陶器製のパスハ祭り用卵も。２階の子供部屋には、アレックスの子馬が。・・・。
　叔母は話しました。子供部屋の整理、洋服ダンスの調整、が彼女の責任下にありました。娘達が成長すると、娘達に手芸を教えました。叔母は片時も離れずに娘達の所にいました。クリミアへの家族旅行の時も同じです。戦争が始まった時、エリザベータは、娘達に、病人の漢語を教えました。少女達は、病院で、看護婦、看護員として働きました。少女達と

一緒に、し全ての女中と部屋係達も病院で働きました。自発看護隊を、皇后が主導しました。・・・。

叔母のエリザベータの話によれば、子供達は謙虚で、仕事好きであった。最も不平を言わないのは、ターニヤ（＝タチヤーナ　＊）とナースチャ（＝アナスタシア　＊）であった。長女のオリガは、少しわがままで、気まぐれで、怠けることがあった。ターニヤとナースチャは、縫い物や編み物を全てこなした。自分たちで、部屋の掃除さえ行った。父の皇帝は、皇后より、多くの注意を子供達に向けていた。皇后はしばしば、偏頭痛で寝込んだ。侍女とも良く口論をしていた。皇后は、アレクサンドロフスキー市場での、古物の買い付け人でもあった。（皇后は、古物や時代遅れの物品の売買を行っていた。売買の前には、螺鈿細工のボタンを、骨かガラスのボタンに替えた。）・・・。１９０５年頃、エリザベータに、同じ室内係として補助者が付いた。アンナ・ステパノブナ・デミドワである。彼女は、エリザベータ、エリザベータの家族と、非常に仲が良かった。そして、私の父の花嫁となった。父は当時、鉄道局の職員であった。５等文官ウラジミル・スクリャビナの配下として働いた。ウラジミルは、後の、スターリン体制下での首相である、ビャチェスラフ・スクリャビナ・モロトフの実の兄弟である。

部屋付き女中は、自分の所に客を招待し、宮廷公園を散歩することが許されていた。皇后は、主婦としては、非常にけちであった。女中が客を招待する場合には、その費用は自分たちで持った。こて以外、全ては予定で行われた。年金がもらえないので、勤めの間、お金を貯めた。部屋付き女中、下男は、独身でなければならなかった。結婚の場合には、辞職するか、他の職務に就いた。・・・。

私達の家に、記念に私の叔母に差し上げるという署名の付いた、家族の写真の入った大事な箱が保存されていた。署名はあっさりしたものです。「リーザへ、記念に、感謝の気持ちより。父より」。「リーザへ、貞節に対する感謝より」（アレクサンドラ）。子供達の署名。下手な子供の文字で、「親愛なるリーザへ、ターニヤから」。「リーザ、私のボタンを縫って下さい」。等々。１９３２年に、この箱を、持ち出した。開けて、全部を見直し、叔母の前で焼いた。私は泣いた。「前皇帝関係者達」の一世家宅捜査が、焼却の理由となった。金を探した。地下室や屋根裏をほじくり返した。父は非常に不安になり、危険な物を避けることに決めたのです。・・・。」

（この探査は、実際に、１９３２年から１９３３年にかけて行われている。金は簡単には見つからなかった。ツアルスコエ・セローに関係した人の中に、多分保管されているであろう皇帝の貴金属を探したのである。・・・。私達は、後になって知ることになるが、トボリスクで、地下室に隠された皇帝の貴金属を、チェキストが発見した後に、この家宅捜査が始まった。）

「人々から」見た他の視点。「人々」、ニコライは、召使いを、日記でそのように呼称している。

少女達は成長した。アリックスは、彼女らの結婚について、いろいろと考える。

「あー、子供達は、幸せな夫婦生活を送ることができるようになるのだろうか。」彼女は、夫に書いている。

「私達の知っているボルコフが、よく考えていました「その時がやって来ました。娘を嫁がせる時期が、それとも、何処にもやらないか。」　その通り、これには皆、くだらなく、子供のようになる。」

１９１２年に、オリガとドミトリーとの結婚についての話し合いが始まった。彼女は、惚れ込んでいた。

ドミトリー・・・。魅力的なプレイボーイであった。父も大好きであった。悪口のセルゲイ・ミハイロビッチさえ、彼について語っている。「上品である。ファブリジェ（？＊）の小像のようである。」

幸せであった１９１２年、８月２６日は、ボロジノ会戦の１００周年記念日である。皇帝を先頭に、大公達の乗馬集団が、名誉あるボロネジ平野を訪れた。前方に垣根があった。

クリル・ウラジミロビッチ大公は、ドミトリーに向かって、「へい、オリンピック選手、どのように飛んだらよいか、やってみよ！」（この夏に、ドミトリーは、ストックホルムでのオリンピックに参加した。著者）。ドミトリーは、高い垣根を、苦もなくさっと跳び越えた。・・・。

森には、皇帝列車が停車をしていた。ドミトリーは、馬をギャロップで走らせ、土手の上の客車に近づいた。窓から、アリックスが、ほほえみながら見ていた。オリガも。・・・。

突然、婚約が駄目になる。破談の舞台裏では、アリックスが微笑んでいた。彼女は、ドミトリーは欲しくなかった。
ドミトリーの替わりに、アリックスは、娘に、他のパートナーを探す。ルーマニアの皇太子である。１９１４年の５月末頃から、宮廷に、差し迫った婚約式の噂が、急速に広まる。
しかし、当時、彼女の父親と同じように、オリガは感じを大事にした。ルーマニア旅行までに、彼女は愛国的な言い訳を考えた。「私はロシア人です。ロシアに残りたい。」
しかし、婚約は行われなければならない。皇帝専用ヨット「シュタンダルト号」の乗って、皇帝家族は、コンスタンツ（ルーマニアの港湾都市　＊）へ孝行して近づく。
係留地での盛大な出迎え、夕方には公式の晩餐会。オリガは皇太子と並んで座る。通常の慎重な愛想良さで、皇太子と話し合う。この時、残された大公は、死ぬほどの寂しさを、周りに見せびらかす。
各自、それぞれの役割を果たした。特に、姉妹は良く行動した。翌朝には、もう、求婚の話はなかった。

　ウラジミロビッチ家のもう１人で、怠け者で、放蕩者であるボリスの嫁取りが持ち上がってくる。ボリスは、オリガよりだいぶ年が上であった。
「ボリスには、私は全く好感を持っていない。私達の娘は、彼との結婚には、決して同意しないと、信じています。」アリックスはニコライに書いている。
オリガは、同意しなかった。彼女は他の人を待つ。彼女は、母親の考えを実行していた。しかし、ドミトリーを待つ。彼女の父親がかって、アリックスを待っていたように。アレクサンドラの意志を満たして上げながら。
しかし、第一に、アリックスは同意を与えない。そして、破談となる。
「全くひとりぼっちの生活。子供達は、まれに、私の考えを理解します。オリガは、いつも不機嫌です。病院のために、それなりの服装をしなければならないということに、看護婦の服装を嫌っています。オリガは満足していません。オリガの気分から、オリガと物事をすることは、本当に大変です。」アリックスは、ニコライに手紙で、しばしば不平を言う。

何故、皇后は、ドミトリーとの結婚を欲しなかったのか？　長女に、女王の夢を見ていたのか？　それとも、その時、既に、神経症の皇后に、悲惨な予感がしていたのか、皇后は、長女を国から遠ざけることを決めていたのか？　しかし、とにかく、ドミトリーとの結婚は成立しなかった。というのは、ドミトリーは、グリゴリー・ラスプーチンの名の男と、対抗できたからである。

第６章「私は４５歳になったことを考えると、奇妙な気がする・・・」
（平穏な皇帝の日記）

戦前である、平和時のヨーロッパの牧歌的最期の年における、ニコライの日記に戻ろう。
ニコライ皇帝家族、ヨーロッパの皇族は、それぞれ独自の生活をしていた。彼らは、お互いに訪問し合い、文通し合い、結婚し合っていた。彼らには長い長い称号が付いていた。が、お互いには、ジョージとニキ、ビリー、アリックスとミンニ等と呼称していた。簡単言えば、姉妹、叔母、兄弟、叔父、父、子、の間柄である。

ニコライの日記をめくる。王族の輝かしい生活の記録である。
１９０８年。スエーデン国王が訪ロする。（国王の迎えの時、ニコライは、わざわざ、国王をビッテ伯爵に紹介しなかった。嫌っているビッテに対するアリックスの依頼であった。好きと嫌いだけ判断するアリックスの性格。ビッテ伯爵を、彼女は大嫌いであった。）
フランス大統領フェリエールとの会見、英国国王エドアルド７世との会見。
そして、再び、ペテルゴフ。１組の王族が、客として来訪した。デンマークの国王夫妻である。（ニコライの叔父が、デンマーク国王であった。）盛大な食事会では、皇后は、権力を必ず示していた。正確には、彼女にも権力が残っていると言うことを。彼女の皇帝への依頼で、全ての場合において、ビッテ公爵は、大きなテーブルの方に、並んで座った。大きなテーブルには、両方の家族が座っていた。これがアリックスの答えであった。
虚栄心の見本市が続いた。７月末、「シュタンダルト号」は、フランスへ去った。その後、英国へ。エドアルド７世への、返礼訪問であった。
再び、クリミアの、リバディスキー宮殿へ。ここ、クリミアから、皇帝は、イタリア国王訪問のために、去って行った。
この別れの前に、アリックスは、リバディスキー宮殿の庭園で、皇帝と一緒に座った。皇帝は、聞き慣れた口笛を聞いた。・・・。この口笛を聞くと、いつもアリックスはベンチから、急に立ち、少女のように顔を赤らめ、話した。「彼が私を呼んでいます。」　慌ただしく、駆けだして行った。・・・。いつもであった。１８９４年のことである。
もう、１９０９年となった。
ニコライは、ヨーロッパを回る帰国の経路を採った。オーストリアを通らないためである。ボスニアとヘツチェゴビナを、オーストリアに併合することにたいして、ニコライは、オーストリア国王に、反対声明を出していた。世界中の新聞が、ニコライのこの声明を広く報道していた。それら新聞の中には、既に、来る世界戦争の、序曲が響いていた。
再び、国王が訪ロしてきた。ブルガリア国王フェルデナンド、その後、セルビア国王。・・・。
ニコライの親友であるミハイロビッチの父である、ミハイル・ミハイロビッチ大公が亡くなった。彼の（？ニコライ　＊）の若い時に世話になった人々は既に居なくなった。
ヨアン・クロンシュタットスキーが亡くなった。彼の予言、彼の奇蹟は、全ロシアで知られていた。彼は、修道士ではなかった。彼は、家族生活を拒否しなかった。が、国民は、彼を聖なる人として、見なしていた。ラスプーチンに対抗できた、只１人の人物が死んだ。・・・。
年はたちまち過ぎ去る。・・・。英国国王エドアルド７世が亡くなった。ロシア、英国、フランスの同盟の、主要な創設者の１人であった。沢山の修道士と、数多くの皇族が、葬式に参列した。英国国王を葬ったと言うことは、平和なヨーロッパも葬った、と葬式の参列者達は考えた。世界に大損害を与える、世界戦争までわずかの時間しか残されていなかった。その中で、ニコライと瓜二つのジョージが国王となった。
帰国途中、ニコライは、ポツダムにある、ビリーの公邸に、立ち寄った。ロシアの政治の指針は、英国とドイツの間の中央にある必要があった。
ブハルスキー君主が亡くなった。ついでながら、１９０１０年１１月には、トルストイが亡くなっている。（トルストイ死亡に関する報告を、ニコライは書いている。偉大な芸術家が亡くなった、神よ彼に裁きを、と。）
１９１１年２月に、農民解放の５０周年記念が祝られた。５０年前までは、農民は、農奴として生きていた。・・・。キエフで式典があった。アレキサンドル二世の記念碑が除幕された。
１人の亡くなった改革者に敬意を祝する日に、他の偉大な改革者、ストルイピンが殺された。ストルイピンは、ニコライの目の前で射殺された。瀕死の怪我を負い、ストルイピンは、皇帝に十字を切ることはできた。・・・。
ニコライは自分の選んだ首相の死について書き残している。
「２回目の幕間で、私達はボックス席から、ちょうど出た時であった。その時、私達は、落下物が当たった音に似た、２回の音を聞いた。上から、誰かの頭に、双眼鏡が落ちたの

か、と私は思った。そして、ボックス席に駆け込んだ。ボックス席の右側の方に、武官立ちの群れを見た。彼らは誰かを引きずっていた。何人かの女性の悲鳴がした。私に対面している一般席に、ストルイピンが立っていた。彼はゆっくりと私の方を向き、左手で、空気中で、十字を切った。・・・。その時、私は気がついた。彼の立ち襟制服の右腕に血。・・・。オリガとタチヤーナはボックス席に入り、私の後ろに隠れた。・・・。」（母親への手紙）
このようにして、彼の子供達は、初めて殺人を目にすることになった。・・・。

ストルイピンは、余りにも、一人勝手であった。彼の改革は、余りにもやり過ぎであった。それ故に、ニコライは、ストルイピンの解任の準備に取りかかっていた。首相の鋼鉄のような性格を、皆は知っていた。また、皆は知っていた、皇帝はしばしな決定を変えることを。・・・。そして、再び、「警察は気がつかなかった。」、そして、警察局の手先として引き入れられた革命家が、再び殺人を行った。再び、万能の秘密局の影があったのか？
この事件に関して、１０月１５日に、国会で、右派が質問を行った。自身（？作者　？シュリーギン　＊）の本「時代」で、シュリーギンが、これ（？質問　＊）を引用している。
「この１０年間に、政治保安局員の支援のもとにおける、ロシア高官の類似した殺害が継続している、と私達は認めた。内務大臣パーベル、ウファ知事バグダノビッチ、・・・、大公セルゲイ・アレクサンドロビッチ、・・・、の殺害が、保安局員によって組織された、ということが、検事アゼフが明らかにした。・・・。至る所で、不法出版物、高性能の爆弾、テロ行為の準備、が演出された。・・・。それは（特別局　作者）は、政府内部の個人やグループの、それらの間における、内乱の武器となった。・・・。メシェルスキー侯の言葉によれば、ストルイピンは、生前、「保安局が私を殺す。・・・。」と話していた。保安局の高官の支援のもとで、保安局員の手で、彼は殺された。・・・。」

ニコライは、このような酷い推量については、考えないことを選んだ。というのは、彼は知っていたからである。人間の運命－生と死－とは、全て神のおぼす召すままである、と。
この彼の考え方を、アリックスは、ストルイピンの後継者である、ココフツオフに、語っている。
「私を信じなさい。誰が、どうにもならないなどと、不平を言う必要はありません。・・・。私は信じています。各自が、自分の役割、指命を果たすことを。・・・。＊＊＊＊。ストルイピンは既に自分の役割を終えていました。貴方に、ポストを与えるために、ストルイピンは死んだのです。・・・。」

１９１３年になった。帝国の繁栄の最高点と、大記念祭の年。ニコライの祖先が、３００年間ロシアを統治してきた。そして、ニコライの名の下に、ロシアの歴史は分岐することになる。平穏無事に、記念日を迎えることを、神はニコライに授けた。
平穏無事に？　その通り、ストルイピンの改革後、未曾有の高揚が始まった。ヨーロッパは、驚いて、上昇する巨人を見つめる。フランス政府は、ロシアに、経済学者エドモン・テリーを派遣する。彼は、自分の本「１９１４年のロシア」で、書いている。「ヨーロッパ国民の中のどの国民も、このような結果を持ち合わせていない。・・・。５０年のうちに、ロシアはヨーロッパを支配するであろう。」
国では、知的爆発。トルストイとチェーホフの祖国は、来るべき２０世紀の文化の研究所となる。マレビッチ、カンディンスキー、シャガール、フレブニコフ、マヤコフスキー、ラフマニノフ、スクリャービン、ストラビンスキー、スタニスラフスキー、メイエルホルド、・・・。
これらの喜ばしい変化は、皇帝を驚かした。古い都であったモスクワ。全てが、最近まで、昔のままであった。・・・。今では、屋敷が消えてしまた。工場の煙突からは煙が立ち登った。巨大な建物がそびえ立った。町を、モスクワの皇帝であるかのように、金持ちの大立て者達が統治した。「マンチェスターが、ツアリグラードに押し入った。（？　＊）・・・。」　同じく、ペテルブルグにも。・・・。
国が富めば富むほど、国は同一化を受けていた。文明社会は、足並みをそろえて、彼（？ニコライ　＊）の皇帝権力を、未開と名指し、ロシアとヨーロッパが連合することを夢想した。動乱と不安の未来が、直ぐ近くまで、近づいてきた。ビッテとストルイピンは実行した。ニコライは、２人の偉大な首相を好きになることができたのか？
しかし、まず第一に、ニコライは信じた。これは全て、知識層の誤解である。ニコライは、ヨーロッパを恐れた。「ドイツ人（旧ロシア（＝ルーシ）ではこの語は、外国人を意味していた）」に対する不信と、聖なる皇帝権力。国民の血のもとでの。
（誰が正しかったのか？　直に、国民革命が、皇帝権力を滅亡させる。１０年後、新し

い革命皇帝がやって来たために、ロシアは、ヨーロッパからさらに１０年にわたって、孤立した！）

皇朝３００年の日、マリンスキー劇場で、オペラ「皇帝のための命」が演じられた。カザンスキー寺院では、記念の祈祷式の時、２羽の鳩が円屋根の下を、旋回した。ニコライは、息子と並んで立っていた。ニコライには、これは素晴らしい前兆のように思われた。聖サーロフは正しいように思われた。統治の後半は、繁栄となる。
式典の時、アリックスは、原因不明で、しばしば慟哭していた。頭痛と、言葉では言い表せない寂しさ、が彼女を悩ましていた。「私は、もう廃人です。」祝日の期間中、彼女はこの言葉を繰り返した。王朝には、あと４年が残されていた。
その当時は、全てが、不動のようであった！
日記より。
「１９１３年２月２１日。木曜日。王朝３００年記念日は、煌びやかで、全く楽しい物であった。１２時少し前に、私とアレクセイが一緒に、ママとアリックスが一緒に、娘全員が一緒に、馬車に乗った。カザンスキー寺院に向かって動き出した。前方には数百の隊列が、後方にも同じく数百の隊列。・・・。
寺院で、盛大な祈祷を行い、詔書を読み上げた。順調に、冬宮に戻った。・・・。気分は好調で、私に戴冠式のことを思い出させるほどであった。ママと朝食をとった。３時４５分に、全員クジャクの間に集合した。４時半まで、コンサートホールで、祝賀が行われた。約１５００人が出席した。アリックスは疲れがひどく、横になった。
沢山の電報を読み、取捨選択をした。・・・。窓の外に、イルミネーションと、海軍省の塔からの投光器の光、を見た。強い南西風で息をした。」

しかし、「気分は好調」は、覚えていない。覚えているのは、「アリックスは疲れがひどく、横になった。」ことと、祝日の灯火を、窓から眺めている、祈りを捧げるひとりぼっちの人間。・・・。

アリックスはニコライに書いている。「貴方のひとりぼっちの姿を見た時、私は本当に憂鬱でした。」
一人ぼっち。・・・。家族だけ。アリックスと、子供と、ニコライ。
ミハイロビッチの子供達は、ニコライは今では、希にしか招待していない。
セルゲイ・ミハイロビッチは、第一に、年を取ったマチリダと同じであった。（この「恐ろしい女性」は、家族にとっては、厳禁の話題であった。）
ニコライ・ミハイロビッチは、民主派の歴史家であり、ロシア歴史協会会長である。（ついでながら、この協会の名誉会長はニコライ皇帝彼自身である。）　アレクサンドル一世を記念する伝記の著者でもある。ニコライ・ミハイロビッチは、彼の祖先の変死について秘密めいた伝説と、アレクサンドル一世の死後に、シベリアに出現した謎の老人フョードル・クズミッチに熱中する。ロマノフ家の家族文書録から、注意深く謎を解き明かすことを試みた。

彼の曾祖父（？　＊）の玉座からの秘密の退位、「老人（？　＊）」への皇帝の急激な変化は、ニコライ・ミハイロビッチ自身を、わくわくさせる。しかし、彼にとっては、語り合うことは困難であった。・・・。ニコライ・ミハイロビッチは神秘主義者、フリーメーソン、自由思想家であった。ペテルブルグで、彼は、自分の宮殿に、本や古文書に囲まれて、独りで住んでいる。ただ、パリにある家でのみ、生き返る。そこで、フランス人の友人に、皇帝ニコライ二世の統治の原理を説明しようと努力しても無駄に終わる。・・・。
皇帝家族内では、ニコライ・ミハイロビッチに、「エガリテさん」と、あだ名をつけて呼んでいた。といのは、当時、ルイ１６世の兄弟で、自由派のオレンスキー王子を、そう呼んでいたからである。

類似性の完結のために。自由派のオレンスキー王子は、フランス革命で、ギロチンにかけられた。自由派のニコライ・ミハイロビッチは、１０月革命で、ペトロパブロフスク要塞で、銃殺された。・・・。
ついでながら、この謎の大きい人物は、自分の死を予見していた。彼は、その死について、さえ書いていた。「暗い湿っぽい夜に、先祖の重い棺から数歩の所に。」

１９１３年が終ろうとしている、リバディスキー宮殿に秋がやってくる。が、綺麗な庭園の道には、人通りが無くなった。以前の常連であった住人、ドミトリーは居ない。今では、愛すべき甥は、リバディアにはやって来ない。栄えある親衛隊員は、ペテルブルグのサロンで、成立しなかった自分の婚約者と、シベリアの男に関する汚いデマを、聞く羽目

になる。・・・。
　リバディンスキー宮殿の庭園の並木道には、ミーシャ（＜ミハイル？　＊）の只１人の兄弟（？　＊）も居ない。彼（？　＊）は、母親（？　＊）との約束を、実行できなかった。２回離婚したブリフェルト女史との恋愛は、継続していた。愛する人の後を追って、彼（？　＊）はロシアを捨てる。

　ベーラ・レオニードブナ。
　「彼女（ブリフェルト　＊）は魅惑的でした。・・・。灰色の髪、愁い御帯びた物憂げな眼差し、猫のように億劫そうな美人。・・・。しかし、余りにも傲慢。教育のせい！　弁護士の娘。最初、彼女は商人マーモントと結婚をした。その後、騎兵大尉ブリフェルトと結婚をした。・・・。ブリフェルト本人は、有名な青色胸甲騎兵隊に勤務していた。この騎兵隊を、ミハイルが指揮をしていた。・・・。ミハイルは恋に落ちた。彼女は離婚をし、子供を産んだ。たぶん息子を。ミハイルが名付け親となって、ブラソフ公爵と呼ばれることになった。・・・。」
　ロシア大使館への暗号電報。「本文面の発信者、憲兵隊陸軍少将、ゲラシモフは、皇帝の命令に従って、ブラソバ（ブリフェルト）女史と、大公ミハイル・アレクサンドロビッチの結婚の禁止に関して、全てのことを収集する任務を持って、外国へ派遣します。・・・。」
　在位中の兄のニコライは、起こっていることについて、知り得る可能性が全くないはずなので、不幸なミハイルは、最大限努力を試みる。即ち、このために、彼（ミハイル　＊）は、国外に出た。そしてヨーロッパを放浪し、秘密の結婚のための、静かな場所を探す。

　暗号電報。「探査を継続しています。殿下の結婚が、どの用の状況の下で、どのようの時に行われたのか、報告をさせていただきます。・・・。１０月２９日、殿下は、同伴者に明言しました。ブリフェルト女史と車に乗り、スイスを通過し、イタリアのカンヌへ行く。彼らに同行する人や召使いは、鉄道でパリを通過していく。・・・。同じ日の１０月２９日、彼らは車で、ビュルツブルグまで到達しました。ここで、ウイーンに向かう鉄道に乗りました。そこに、殿下は、１０月３０日朝に、到着しました。同じ日の午後４時に、殿下と女史は、聖サビ・セルビア教会に出かけました。そこで、結婚式を挙げました。・・・。殿下と女史に同伴していたもの達には、彼らの旅行の目的は、全く知らされていませんでした。・・・。殿下の滞在中、諜報機関の諜報員達は、常に、特別仕様の車に乗って、殿下を追跡していました。」
　何という情景だろうか！　世紀の初めに既に、自動車レースとは。秘密警察の諜報員の乗った車と、大公が運転し、脇に愛人が乗っている車を、追跡する。・・・。その通り、彼ら２人の経路は、兄の派遣した諜報員が全部把握していた。アリックスは要求した。ニコライが、彼の父がそうであったように、頑固で通すことを。弟に同情しながら、ニコライは、将来のロマノフ一族の崩壊を許すことになる。

　１９１１年９月３日。パリのロシア大使館。暗号電報の解読。「土曜日に、得られた情報をもとに、１１月１３日、皇帝の侍従武官が、皇帝の名の下に、大公に、ロシアへの入国を禁止するとの宣言のために、カンヌに、来ました。・・・。大公は非常にがっかりし、閉じこもったままです。」
　皇太子アレクセイの誕生後、ミハイルは、後継者の名の替わりに、称号「政府統治者」をもらっていた。今、彼はその称号を採り上げられた。

　エーラはというと、彼女はまだまだ美人である。マルフォ・マリンスカヤ僧院の灰色のドレスを着て、彼女は、公園の小道を歩いている。夫の葬式後、エーラは自分の宮殿を手放し、オルディンカにある２部屋の建物に移り住んだ。そこは、マルフォ・マリンスカヤ僧院の前身である芝らしい団体が置かれていた場所であった。そこは修道院ではなかったが、僧院では、修道院に近い厳しい生活を送っていた。「マルフォ・マリンスカヤ」の名前は、「ラザリの家」を意味していた。（ラザリとは福音書に出てくる乞食の意　＊）マルフとマリアを一緒にした（？　＊）家族の所に、キリストがやってきた。・・・。僧院の女子達の仕事は、病人、捨て子、貧困な人、死にそうな人、物の援助を望んでいる人、の世話、そして、精神的な慰めをすることであった。
　聡明なエーラはわかっていた。アリックスとラスプーチンについて話し合うこと、即ち、関係（？誰との　＊）を断絶し、彼女（？アリックス　＊）を一人にする。エーラには、ただ、彼女（？アリックス　＊）のために祈ることしか残されていなかった。そして、耐える。
　ニキ（＝にこらい）には、子供時代の友達が居る。ピョートル・アレクサンドロビッチ・オリデンブルグスキー王子である。ニコライの日記には「ピーチャ」として登場する。

オリデンブルグスキー家は、並外れた厳格さで有名な、古い家柄である。ユダヤ人の年代記は、オリデンブルグスキー家の、厳格さについて書き残している。この厳しいオリデンブルグスキー家の後裔であるペーチャは、非常に愛想が良く、不釣り合いなほど背が高かった。・・・。余暇には、彼は、自然や、森の静けさを題材とした詩を書く。彼は、自分の皇帝の友人の一族の娘、オリガ大公、と結婚をした。しかし、ペーチャは同性愛者であった。そして、戦時中に、オリガは、ペーチャを捨て去り、他の男性を選ぶ。
ペーチャは、首尾良く革命を生き延びる＊＊＊＊＊。革命後、彼に、亡命者の会で、作家のブーニンが会っている。その後、書いている。年老いた革命家の講演会をじっくり聞いた、ペーチャ・オリデンブルグスキーが、叫んだ。「あー、君らはなんて優しいんだ、そして、素晴らしい人間だ。ニキ（＝ニコライ）が、我々の夜会には決して出てこなかった、のは悲しい！　君たちとニキがお互いに知り合っていたならば、全ては違う道を進んだことであろう！」
優しいニキと、優しいペーチャ。彼らは、少し似たところがあった。

日記。ページをめくる。生活が続く。
「１９１３年５月６日。　　私は４５歳になった、何か、奇妙な気がする。・・・。天気は素晴らしかったが、残念ながら、アリックスは気分がすぐれない（ここに、個人的な記述が！　著者）。聖体礼儀、食事、全ては古式通り。ただ違うのは、４人の娘がいたこと。」
ニコライの誕生日は、ヨフ・ムノゴストラダリニイの日でもある。「貴方は、ヨフの日に生まれました。私の心は、悩みで一杯です。」（彼女（？アリックス　＊）の手紙から）
彼（？ニコライ　＊）は、よく自分を、ヨフに喩えている。

「かって、ストルイピンが、重要な内政方法について、皇帝に、提案した。それを聞き終えて、少し考え、ニコライ二世は、言うならば、疑うような、苦労のない振る舞いをした。これなのか、それとも他なのか。全ては同じではないのか。最期に、彼は寂しそうな声を発した。
「私が実行することの何も、うまく行きそうがない。私はついていない。・・・。人間の意志が、これほど力のないものなのか。私の誕生日がいつか、君は知っているか？」
「確かではありませんが、５月６日。」
「その日は、どのような聖なる日か？」
「すみません、皇帝陛下。わかりません。」
「ヨフ・ムノゴストラダリニイの日。」
「順調です。閣下の統治は、最も悲惨な体験を被ったヨフが、神による祝福と幸福で報われたように、栄光のもとで行われています。」
「いや、本当なんだ、ピョートル・アルカディエビッチ（？　＊）、私には予感以上の物がある。これに関しては、私には深い確信がある。私は、悲惨な体験を運命づけられている。しかし、私は褒美を受け取ってはいない。ここ、地上で。・・・。私は、何度、ヨフの言葉を、自分に当てはめてみたことか。「なんとなれば、私がぞっとするような、恐ろしいことが、私に襲いかかった。私が心配していたことが、私に起こった。」
この話は、フランス大使モリス・パレオログの追想記中に書かれていたものである。・・・。

４５歳、すでに老人である。・・・。大好きな母親、友人、兄弟、叔父達。誰も傍には居ない。一人ぼっち。
ヨフ。・・・。これは奇妙な感覚である。人生は、全く夢に似ている。この気分は、特に、比較的穏やかで、静寂な年に、強く表れる。聖なるセラフィムによって予言された、幸福がかなえられ始めた年にである。
ヨーロッパでは、静寂、平和、さらには、皇帝ウイルヘルムとの友好的な出会いが行われる。（すなわち、ベルリンへの途中で、日記の内の、このノートが、ニコライによって書き始められた。）　しかし、このノートには、奇妙な写真が、貼り付けられている。軍服を着た子供が、敬礼をしている。皇后と大公が、同じく、彼らが司令官である連隊の軍服姿でいる。・・・。
このノートには、奇妙な軍事的特徴が現れていた。
彼は日常生活に戻る。
神経病のアリックスは、予感がし、気が塞いでいた。ひどい頭痛が、彼女を襲った。

ニコライの帝国の最も平穏であった１９１３年が終わった。１２月３１日、ニコライは書き留めている。「神よ、ロシアを、私達を、平穏無事にしてくれたことに、感謝する。信仰心を持って。」

１９１４年１月６日。冬宮で、時代を終えるかのような、最期となる洗礼祭のパレードが行われた。ホールには、親衛隊と軍学校の小隊、銀色のロシアのサラファンを着、空色のアンドレーフ大綬をつけた皇太后の母親、が整列した。・・・。アレックスは、金糸の刺繍のついた青色の長い引き裾で、クロテンで縁取りをされたサラファン、帽子は真珠のついたダイヤモンドの冠で覆われている。伝説となっているロマノフ王朝の宝物である。・・・。

エカテリンブルグの幽閉で、狭い部屋での蒸し暑さの中で、彼らは、延々と続く冷えた大理石のホール、親衛隊の隊列、てき弾兵の大男達に囲まれたばかでかいニコライ・ニコラエビッチ、を思い出すであろう。宮殿から、宮殿河岸に出て行った。氷にあけた穴で、水を清めるため、府主教が、ネバ川の氷の上に降りて行った。・・・。

戦争

１９１４年。厚い６月の日に、いつのもの通り、子供達を同伴し、彼らはヨットで、フィンランドの島々巡りに出かけた。昼頃、ヨットに、ペテルブルグからの軍使の乗った搭載ボートが横付けされた。ニコライは２つの電報を読むと、急いで、自室のキャビンへ去って行った。６月１５日、ボスニアの町サラエボで、オーストリアーハンガリーの王位継承者であるフランツ・フェルディナンド皇太子と、彼の妻が、拳銃による銃撃で、射殺された。セルビア国粋主義者が溢れているサラエボで、何故か、自動車は、警護も全く無しに、ゆっくりと走っていた。正に的になれとばかりに。・・・。殺害者は、セルビア人の国粋主義者ガブリル・プリンティップであった。当時の政治家の話から、これは戦争を意味していた。

２つ目の電報は、多分、１つ目の電報に関係していた。シベリアのパクロフスキー村で、グリゴリー・ラスプーチンが、重傷を負った。以前にラスプーチンの崇拝者であった、フェオニア・グセバという女が、ラスプーチンをナイフで刺したのである。ラスプーチンは、ドイツの追随者であり、ドイツとの戦争において全く邪魔な敵である。

このように、同時に、将来の戦争の原因が発生し、戦争を予防する試みができ、皇帝に影響力を持っている、ただ１人の人物が、排除された。今や、アリックスには助けてくれる人がいなくなった。ヨットが、ペテルブルグに係留されると、彼女は急いで宮殿に戻った。自分の部屋に閉じこもり、皇后は慟哭をした。

これはどういうことか？　同時に起こったのか？　ロマノフ家の歴史にままある、運命のありふれた悪戯か？　それとも、特殊機関のありふれた悪戯か？　ロシア側（カマリニアの多くは、この戦争を希望していた。ついでながら、大公ニコライ・ニコラエビッチも）の陰謀か、それともドイツ側（好戦的な皇帝は、この戦争を夢見ていた。）の陰謀か。

１９１４年７月に、大統領ポアンカレの乗った戦艦「フランス」が、ロシアの岸に立ち寄った。将来の戦争のための同盟について、交渉をするために、大統領がやって来たのである。

ペテルゴフ宮殿で、歓迎会が行われた。ヨーロッパの中で、最も煌びやかな宮殿が、フランス大統領を迎えた。

トイレは輝く宝石で飾られる。侍従武官の軍服の中の大統領の黒い燕尾服。宮殿長官の、豪華な服を着た老人のフレデリック伯爵は、振る舞いと、上品な顔立ちは物腰で、魅了させている。宮廷の三等級内官のワシーリ・ドルゴルコフ公爵は、背の高い美男子で、古い貴族の作法で振る舞う。そしてえ、ハイカラな宮廷内務長官ベンケンドルフ伯爵。彼らはフランス大統領に、リュドビッ（？　＊）宮殿の優雅な壮麗さを思い出させる、素晴らしい３人組であった。

この歓迎会の時、アリックスに向かい合って座った、フランス大使パレオログは、強い驚きを持って、奇妙な光景を目にした。それについてからは日記に書いている。「食事の最中に、アレクサンドラ・フェドロブナを見た。・・・。ダイヤモンドで輝いている彼女の頭、豪華に飾られたドレスを着た彼女の外観、はさらに彼女を美しく見せていた。・・・。彼女は、彼女の右側に座っているポアンカレと会話を交わしていた。が、直に、彼女の笑顔は、痙攣を伴うようになり、彼女の首は、斑点で覆われるようになる。彼女は唇を噛みしめ、彼女の熱病にかかったような息づかいが、彼女の胸を覆っているダイヤモンドのネットを、光の中でゆらゆらさせている。食事が終わるまで、このようなことが続いている。彼女は、明らかに、ヒステリーの発作に冒されている。乾杯をするために、皇帝が立ち上がった時、外見上は、彼女の様子は、穏やかとなる。・・・。」

不幸なアリックスは知っていた。大統領の来露は戦争を意味していることを。しかし、

これはみんなが知っていることであった。会食時には、大公ニコライ・ニコライビッチの脇には、彼の妻が。元チェルノゴルスクの王女であり、あたかも神の啓示かのように、大声で叫んだ。「月末の早くに、私達の所で戦争がある。・・・。私達の軍は、ベルリンに結集する。ドイツは、滅亡する！」　皇帝の考えが、彼女の予言を破った。

戦争。アリックスにとって、これは罠であった。これからは、アリックスは常に、戦争を祝福しなければならない。常に、愛国心を示し、ウイルヘルム国王とドイツに敵愾心を示さなければならない。しかし、ドイツには、アリックスの兄弟エルニが住んでいた。エルニは、アリックスの夫（＝ニコライ）と戦争をしなければならない。アリックスの新しい祖国と戦争をするために、自国の子供を兵隊として派遣する、アリックスの元の祖国があった。そして、戦争は、アリックスの沢山の敵に、極めつきの切り札となる。アリックスはすでに、囁き声を聞いた。「ドイツ女！」

アリックスの心の中には、ただ１人の人間しかいなかった。シベリヤの男である。シベリヤの男、ラスプーチンは、直ぐに理解した。・・・。そして、ドイツとの戦争の強力な反対者となった。彼は全時間、全くの不幸を繰り返して語り、黙示録の絵を描き、悲惨な予言を囁いた。
ラスプーチンのもう１つの秘密がある。アリックスが聞きたがっていることを、ラスプーチンは何時も予言した。自分で話し出すこともしなかった、心に思っていることさえ、ラスプーチンは理解し、それらに対して語った。そして、アリックスは、神の声、国民の声として、ラスプーチンの名を上げることができた。アリックスは、ニコライに、耳を傾けて聞き入るように、魔法をかけることができた。・・・。しかし、修道士（＝ラスプーチン）は、重傷を負い、シベリヤの村で、床に伏していた。

暑く雷雨がちの天候の元で、６万人の軍人が、軍事演習を行った。夕方、戦艦「フランス」内では、別れの食事会が開催された。軍楽隊が、行進曲を演奏した。痙攣を伴っている笑顔をしながら、アリックスは、明るいアレグロの音楽を聴いていた。そして、再び、フランス大使は、情景を書き残している。「苦しそうで、祈るような顔をして、彼女は懇願した。「もう我慢できない。・・・。」　パレオログ大使は、気がついた。彼は手振りで、オーケストラを止めた。アリックスはヒステリーの頂点に達していた。その時、アリックスの所に、オリガが飛び出してきた。オリガは軽やかの優雅さを持ちながら、素早く自分の母親の所に駆け寄った。母親の耳元で、何かを、聞こえないように話しかけた。」
フィンランド湾は、月光の元にあった。戦艦の影が水面にたなびいていた。

ニコライの日記より。
「７月１９日。朝食後、ニコラーシャを呼び、今後、私が軍隊に到着するまでの間、彼を最高司令官を任命することを告げた。・・・。６時３０分、フセノッチナヤ(？　＊）へ出発した。そこから戻ってきている途中で、ドイツが、我が国に宣戦布告をした、ことを知った。
７月２０日。良い天気である。気分は上々。１時半に、ペテルブルグのアレクサンドリアに向かった。ボートで、直接、冬宮へ。戦争布告の詔書に署名をした。ニコラエフスキー・ホールへの出口として、クジャクの間を通り抜け、ホールの中央で、詔書を読んだ。続いて、祈りを捧げた。・・・。ホール全体に、「神よ、助け給え」と「永遠に」の歌が、鳴り響いた。語った言葉は少なかった。戻る時、ご婦人方が、私の手に接吻をしに、飛び出してきた。アリックスと私は、少し手を引っ掻かれた。その後、私達は、アレクサンドロフスキー庭園のバルコニーに出て、大群衆に挨拶をした。・・・。６時頃、海岸通りに出て、軍人と観衆の大群衆の中を、ボートへ向かった。７時前に、ペテルゴフに戻った。夕方は静かなものであった。
７月２３日。朝に、吉報を知った。英国が、ドイツに宣戦布告を行った。
７月２４日。オーストリアが、遂に、私達に戦争を宣言した。今や、状況は明白となった。」
このようにして、帝国を滅亡させることになる、戦争が始まった。

１２月３１日。いつもの如く、過ぎ去っていく年を、ニコライは見回した。
「来るべき年に、私達に勝利を与えてくれるように、神に祈りを捧げた。その後に、静かな生活を与えてくれるように、神に祈った。神よ、私達の比類が無く、勇敢な、不平を言わぬ、軍隊に、更なる偉業を。」

ラスプーチンは、どうなった？　戦争が始まったと言うことを知って、ラスプーチンは、あっという間に人が変わった。怪我から回復すると、ラスプーチンは直ぐに、ペテルブル

グに戻った。ラスプーチンは電報を送る。後で、ラスプーチンから皇后に送られた秘密電報について、詳しく書くことにする。その電報では、ラスプーチンは、不可避の犠牲者を予言していた。
アリックス自身は、後になってこれを信じ、この秘密電報について、トボリスクで語っていた。しかし、私は、ラスプーチンが、この日送った全く他の電報を読んだ。そこでは、ラスプーチンは勝利を予言している。・・・。
１９１４年７月２０日。「犯人達は、何倍も、いろいな悪意と陰謀を得ている。・・・。神の恵みは力がある。その庇護の元で、偉大に残ろう。」
その通り、いつもの如く、ラスプーチンは、彼の主人が、今知りたいことを予言している。

ペテルブルグに戻り、アリックスの深い祈りを感じて、ラスプーチンは、自分の黙示録的な予言を、改める試みをした。ちょうどその時、ニコライはラスプーチンに、宮殿への訪問を禁止していた。いつもの如く、「聖なる悪魔」は、変わった。ラスプーチンは、自分の崇拝者達に、述べていた。「私はこの戦争を喜んでいる。戦争は、２つの大きな悪から、私達を救ってくれる。大酒とドイツの友情を。」

「素晴らしい感情の昂揚が、全ロシアに波及した」
文学・芸術団体は、ドイツ風名の人々を追い出し、ドイツ政府を、カリカリさせる。後の首相となるシュツルメルは、自分のドイツ風名を、変えないでよかろか、と考える。ペテルブルグは、ペテログラードと呼ぶことになった。
国会内での論争は全く忘れ去られた。団結！　団結！　国会と同じように、大ロマノフ家内での全ての不仲も忘れ去られた。今や、国民戦争である。ニコライは全権限を持った。叔父のパーベルと、弟のミーシャはロシアに戻った。ここで、犠牲となるために、・・・。
ニコライは、遠い祖先の時代を思い出す。今回の戦争は、あのナポレオンとの戦争と同じだ。祖国戦争・・・。ニコライは、昔の首都であり、祖国の象徴である、モスクワへ旅立つ。
クレムリン。白大理石作りのゲオルギー・ホールへ、皇帝と家族が入場する。アレクセイは、最近足を痛めたので、水兵の腕に抱かれている。皇后に並んで、妹のエーラ。・・・。皇帝の言葉。
「素晴らしい感情の昂揚が、全ロシアに波及した。家柄、民族の違いが無く。ロシアの大地の中心から、私の勇敢な軍隊へ、熱烈な祝辞を与える。神と共に！」

ウスペンスキー寺院の、イワン大帝鐘楼の所に、果てしのない群衆が。群衆の歓喜の声が、鐘楼の鐘の音を、かき消す。宮廷財務長官ベンケンドルフ伯爵は、歓喜している群衆の中を歩きながら、勝ち誇ったように、嘲るように話す。「ベルリンで、私達に約束している、革命が、これでないのか？」
その通り。ベルリンでは、警告していた。もし戦争となれば、戦争は、ロシアにおける革命で終わる。ついでながら、それ以前から、革命については、多くのものが、ニコライに警告をしていた。ニコライの統治の開始の時から。
しかし、今では、全てが忘れ去られた。歓喜の叫び声が響き渡る。この国民は、皇帝家族を迎えている。アリックスの顔には喜びが。数ヶ月ぶりの喜び。夢は的中した。長い間期待していた連帯－国民と皇帝の－が、突然に実現した。

ウスペンスキー寺院の薄暗がりに、ロマノフ王朝の起源である光栄ある１７世紀の銀色の衣服を着た宮廷の聖歌隊がいる。聖体礼儀が鳴り響く。聖職者の祭服の宝石が、明かりの中で輝く。

ちょうど３年後、冬のシベリアに見捨てられた皇帝家族は、この歓喜にわくモスクワ、鳴り響く鐘の音、自分たちの皇帝を目にした国民の歓喜、を思い出すことになる。

フランス大使は日記に書いている。「全ロシアから、私の所に届く情報は、同じである。一つとなった国民の叫び、敬虔な熱意、皇帝の周りでの１つの団結。。・・・。１９０５年の大変であった日々は、記憶から削除されたようである。集団の意志が、聖なるロシアで、１８１２年以来、そのような力を示したことはなかった。」

荘厳な様相の中で、統治の最終章が始まった。
１９１４年、ツルハンスキー地方に退去を命じされた革命家の中には、殆ど絶望が。国会議員の１人が書いている。

「全ては、１つになった。革命のことは全て見えなくなった。全員が、ロシアへの一緒となった奉仕だけを考えた。私達には、殆ど未経験な、このような純粋な雰囲気の中で、息をするのは簡単であった。」

　　その年には、熱烈な仲間達が、ツルハンスキー流刑地に集まっていた。無名のグルジア人（＝スターリン　＊）が、壁に顔を隠しながら、一日中、ハンモックに寝ていた。彼は外見に気を配ることを止めた。食器を洗うこともためた。犬が、彼の皿をなめ回していた。
　ちょうど４年後、彼は、クレムリンの壁の向こうに、住むことになる。今、クレムリンの壁の所には、皇帝と家族がいる。・・・。

　もう１人の革命家。彼も同じく、希望のない状態に陥っており、厳しい弾圧下にある。１９１４年９月に、彼らは、もう１人のツルハンスキーに流されてきたボリシェビキのスベルドロフと出会った。見解の一致等が、彼らを団結させた。悲嘆を持って、スベルドロフは妻に書いている。「何日間か、ジョージと過ごした。彼は仕事が駄目だ。・・・。活気溢れる生活から、離れで長く生活することは、彼には、全く無理そうである。このエネルギーのために、何か出口を見つける必要がある。」
「ジョージ」は、フィリップ・ゴローシェキンの党内変名である。このように、２人は、ツルハンスキー地方で、出会った。将来、皇帝と、皇帝の家族の射殺の組織者となるゴローシェキンとスベルドロフである。

　皇帝と家族は、歓喜する国民に囲まれてクレムリンに。彼らの将来の殺人者達は、絶望の中で、遠く離れてシベリアのツルハンスキー地方に。

　大公ニコライ・ニコラエビッチは、最高司令官となる。直に、皇帝は、前線にある総司令部に向けて出発をする
　皇帝は、前線に去って行く。皇后は、皇帝に手紙を書く。殆ど毎日。・・・。「皇帝は前線に去って行った。」　話はこのようにして始まる。・・・。
　１９世紀の牧歌的な時期に、彼らは、国の最高指導者になる準備をしながら、終わりの無い手紙を、お互いに出し合っていた。そして、今、王冠との別れを前にして、全てが、繰り返されている。再現されている。これらの間には、手紙の束が２組、彼らの生活の全て。ペンを手にすることは、彼らには特に必要な生活ではなかった。というのは、２０年間に、彼らの別居は、ほんのわずかの時しか、無かった。・・・。そして、戦争が。

　１９１７年、逮捕を前にして、皇后は、自分の書類などを消去し始めた。しかし、手紙には触れなかった。それらの手紙には、勝ち誇っている国会に対する恐ろしいほどの呪詛が書かれていたが。勝利者達の怒りを受けるおそれがあったが、彼女はそれらの手紙を保存している。というのは、これらの手紙には、「子供」、彼女の「愛するもの」に対する、彼女の永遠の抑えられぬ情熱が書き込まれていたからである。

　彼らは、何時も、英語でお互いに手紙を書いている。彼女がロシアに来てから、２０年が過ぎた。が、相変わらず、祖母のビクトリアの国の言葉で考えている。最期となる６５３番目の手紙は、彼女によって秘密に送られた。それで、番号はついていない。
　　６５２本の手紙を、彼女はニコライに書いている。手紙の最期で、彼女は諦める。「助け給え、守り給え」　彼は希に、彼女に返事を出している、それも電報で。どうしたのか？　彼は戦争をしていた。

第７章「貴方の手紙を何度も読み返しています。これについては、貴方が私と相談してくれることを切に願っています」
（手紙でのロマン）

２人(皇帝と皇后、ニコライとアリックス）は、お互いに、いろいろと話し合っている。・・・。私は、これらの消えてしまった会話を、適当に拾い出してみる。・・・。
アリックス：「ツアルスコエ・セロー、１９１４年、９月１９日。私の愛しい、可愛い人。＊＊＊＊＊。貴方が、この期間、大変な苦労をしたのを、私は知っています。貴方の不安な夢を、これが示しています。・・・。私が今、貴方と、愛する私達の祖国、国民と体験しているのと、同時に、私は、私の小さい「古い」祖国(ドイツ　＊)のこと、その兵士達のこと、妹のエルナのこと、で心を痛めています。利己主義のせいで、今、私は別離に苦しんでいます。私達は、別離生活に慣れてはいません。・・・。私は、宝ような息子を、死ぬほど愛しています。もう２０年たちました。私と貴方。この年月の間、どれ程至福であったか。・・・。」
１９１４年９月２０日：「私の最愛の人！　私は食事前で、ベットで休んでいます。娘達は教会に出かけました。ベビーは食事を終わりました。・・・。貴方と別れの挨拶を交わし、馬車の窓に、大きな寂しい目をした青白い顔を見ることは本当に辛いものでした。私は心の中で叫びました、「私も連れて行って。・・・。」　帰宅して、耐えられなくなり、祈り続けました。その後、横になり、回復のために、一服をしました。＊＊＊＊＊の時、私は、２階のアリックスの所に行きました。薄暗い中、アリックスのベットの脇にずっと座っていました。・・・。我が子よ、我が太陽よ、さようなら。私は、貴方の枕にキスをし、十字を切りました。貴方は、何時でも、私の心の中に、私の祈りの中にいます。」
ニコライ：「総司令部。２２．０９．１４。優しい手紙に心からのお礼を。・・・。就寝前に手紙を読みました。君と、可愛い子供達と、別れて暮らすことは、それほど長くはないとわかっていることであるが、本当に辛い。最初の夜は、私は寝付きが悪かった。というのは、各駅毎に、汽車が乱暴に、停車・発車を行うからです。・・・。私は、ここに、５時３０分に到着をしました。豪雨の最中でした。そして寒かった。ニコラーシャ（ニコライ・ニコラエビッチ　＊）は、私を駅で出迎えてくれました。そうして、総司令部に到着。・・・。彼らの客車の中で、私は、長い興味のある書類を、渡されました。予想していた通り、客車内は蒸し暑かった。・・・。私の愛する人。何度も何度も、キスをします。・・・。今、結構、時間が空いています。自分の女房、子供達について考えられる時間です。何か奇妙に感じます。」
アリックス：「２４．０９．１４。愛する人へ。＊＊＊＊、貴方がよい眠りをなされることを期待します。頭はずっと調子がよく、休息を必要としていません。諸々の考えが浮かんで、それらが混乱をさせます。・・・。貴方の手紙を読み直し、私の愛する人が、私と相談したがっていることを、私は、提示するよう努力します。とにかく、私達は、お互いに、会えないので。貴方は多忙であり、貴方が疲れ切っている時に、質問攻めで貴方を苦しめたくはありません。私達は、決して２人ではありません、１人です。・・・。」
「２５．０９．１４。・・・。おはよう、私の美人さん。・・・。」
そして、再び、心の奥底が：「これは酷い戦争です。この戦争は、いつ終わるのでしょうか？　ウイルヘルムは、ロシア嫌いの一味の影響で、戦争を始めた。が、自国民を犠牲にさらしていることで、ウイルヘルムは、時々、絶望を感じている。と、私は確信している。小さい国は戦争後、何年にも渡って、大変な苦しみを背負い込むことになります。私達の小さい祖国が、繁栄をするために、私の父とエルナが、どれだけ苦労をしたか、と思うと、私の心は断腸の思いです。・・・。祈りと神に対する献身的な信頼は、人間に、何にでも耐えられる力を与えてくれます。・・・。」（彼女は、何回かこの言葉を使うことになる。彼らの最期の家でも！）
「私達の友人が、重い十字架を、大きな責任を、背負っている貴方を助けてくれます。全てはうまく行きます。私達の考えている通り。」（彼女は、書き付けでは、「聖なる悪魔」を「私達の友人」、「グリ．」「彼」と呼んでいた。彼女の手紙には、いつもこれらの呼び名が書かれていた。彼女は、これらの名前を１５０回も、書いている。）
ニコライは、ツアルスコエ・セローに戻ってくる。しかし、すぐに、再び「皇帝は戦争へと出発する。」　いつもの通り、専用客車内で、ニコライは、アリックスの手紙を見つける。これが、彼女の習慣。
アリックス：「１０月２０日。・・・。別離の時が、又近づいてきました。胸が締め付けられます。・・・。しかし、私は貴方のためと思い喜んでいます。貴方は、出発し、新しい印象を得、兵隊を、より身近に感じる。・・・。明日は、貴方が皇位について、私が、ロシア正教に改宗して、２０年が過ぎます。これらの年月が進むことは、何と早いことでしょう！　その間、私達は、一緒に生きてきました。・・。」
「２２．１０．１４。・・・。アルベルト国王（ベルギーの　著者）の別荘に、飛行機

から爆弾を投下するという。何という卑劣なことをするのでしょうか。・・・。これが、何か悪いことの原因にならないように、神に祈ります。しかし、戦時中は敵であるが、国主が、殺されたというようなことを聞いたことはありませい。」（彼らは、未だ、１９世紀に生きていた。新しい世紀は、彼らを驚かせた。）

「私は、貴方の枕に接吻をしました。心の中で、貴方のコンパートメント内で横になり、貴方を見つめています。心の中で、貴方の顔に、キスを浴びせています。」

「２４．１０．１４。・・・。今日は、多数の負傷者が出ました。１人の将校が、オリガがいる病院に４日間滞在しました。その将校は、オリガに似た、他の看護婦は見ていない、と語っています。・・・。」（この時点、アリックスは娘達と一緒に、病院で働いていた。）

「２７．１０．１４。・・・。何という悲惨な戦争でしょうか！・・・。無関係な人の犠牲に対する思い、流れ出る血は、心を悩ませます。世界は正に、損失を被っています。しかし、何かよりよくならなければなりません。彼らが、自分の血を流さざるを得ないのは、無駄ではありません。生きている意義を達成することは大変です。「必要ならば、我慢せよ。」と言っている通りです。かっての静穏な日常に、再び、どれ程戻りたいことか。しかし、当分私達は待つしかありません。・・・。」

ニコライ：「２７．１０．１４。ようやく、私は、少しの文章が書けるようになりました。ここで、私は、年上のペチューシャに合いました。（ペーチャ・オリデンブルグスキー王子、ニコライの妹オリガの夫　著者）　３時間ほど、強力なオーストリア砲兵隊の砲火にさらされました。ペーチャは、非常な冷静さで、対応していました。そして、自分に対して、勲章を懇願しています。私は彼に、ゲオルギー勲章を授与しました。それで、彼が気が動転することはありませんでしたが。・・・。土曜は一日中、ミーシャと一緒に、気分良く過ごしました。ミーシャは完全に昔の通りとなり、再び愛らしくなりました。」

ミーシャは帰還し、彼の妻は、ブラソフ公爵夫人の称号を帯びることとなった。そして、「猛者連隊」の騎兵隊を指揮しながら、じきに、ミーシャは、ゲオルギー十字勲章を得る。ニキ（＝ニコライ　＊）とミーシャはよく似ていた。彼らはお互いに友情で結ばれていた。そして、自分たちの妻は・・・。ブラソフ公爵夫人は、自分を侮辱した皇帝家族を決して許さなかった。革命の前、１９１６年の終わり頃、「彼女のサロンは、国会の左派議員のに対して、しばしば、ドアが一杯に開け放されていた。宮廷の仲間内では、帝政への裏切りとして、彼女を告発している。が、彼女は、これを耳にして喜んでいた。これらの噂が、彼女に人望を与えることになる。彼女が話している事。その事のために、他の人は、シベリアで２０年間を味わった。」フランス大使パレオログが、自分の日記に、そのように書いた。

再び、ツアルスコエ・セローのニコライ。直に、再び、出発をする。・・・。

アリックス：「１７．１１．１４。貴方が出発してからの１人住まいの寂しいことと言ったら！　私と一緒に子供達が残っていますが、貴方と共に、私の生活の一部分も、去っていて仕舞いました。私と貴方は１つ。・・・。貴方はいつも「刷新」を表明しています。私達の友人が言っているように。・・・。友人の祈りが、貴方を見守っている、と言うことを知って、喜びに堪えません。貴方が、エヌ（ニコラーシャ）と十分に話し合える、ということは素晴らしいことです。貴方は、彼に、何人かの人に関する自分の意見を伝えなさい。そして、彼に、幾つかの考えを、コッソリと教えなさい。・・・。」　（最高司令部が、彼（＝友人　＊）に反対する証拠集めをしていることは、すでに、「友人」に知られていた。彼は「ママ（＝アリックス　＊）」に不平を漏らしていた。最高司令部に、「幾つかの考え」を吹き込むよう、アリックスは、ニコライに依頼をしている。）

「私達の最期の夜を思い出しています。貴方が居ないことで、何と寂しいことでしょうか。本当に静寂です。この階に、誰も住んでいないようです。聖なるエンジェルが、貴方を守ってくれるように。・・・。」

ニコライ：「１８．１１．１４。私が大好きで、太陽な人。心優しい妻。私は君の手紙を読みました。泣き出しそうでした。・・・。今回は、別れの時、君を手で抱きしめることができました。しかし、戦争は、大変になりました。・・・。私の愛が、足りない、本当に足りない、貴方を苦しめている。どう表現して良いかわからない。私はできるだけ手紙を書くようにしています。というのは、驚いたことに、汽車に乗っている時間に、手紙を書けるのに、気がつきました。・・・。私のぶら下がり用ブランコは、非常に実用的で有効であることがわかりました。食事の前に、私は、何度も、ぶら下がり、よじ登っています。汽車が動いている時には、体に結構良い刺激を与えてくれます。」

シェボルダエフ（元内務省勤務、現年金生活者）の思い出より：

「私が、スベルドロフに到着した時、私は、イパチェフの屋敷に連れて行かれた。皇帝家族を射殺した、屋敷の警護に選ばれたものには、この仕事は特に気分転換になった。ついでながら、塀の脇の所の場所を私に教えてくれた。その場所には、ブランコがあった。

彼（ニコライ　＊）が着た時、ニコライは、直ぐにブランコにぶら下がり、回転を始めた。ニコライの足が、塀の上まで飛び出した。それで、警備隊は、塀を２倍の高さにした。」

アリックス：「手紙、２５０番。・・・。２０．１１．１４。遅れて現れた蚊が、貴方への手紙を書いている間中、私の頭の周りを飛び回っています。私は、毎日、朝と夕方に、貴方の枕に接吻をし、十字を切っています。枕の持ち主に思い焦がれています。今日は本当に穏やかな天気です。ベビーは車に乗って遊んでいます。その後、大宮殿で、ベットに寝て、彼（ベビー＝アレクセイ　＊）を見たがっている、将校達を訪問するために、彼を連れて行きます。私は疲れ切っているので、子供達と出かけるのは・・・・。大病院では、私達に、切断手術が控えているとのこと。化膿した傷からの、酷い臭いが、私を悩ませます。」

プルシア沼で、サムソノフ軍は、破れた。敗北と損害は、熱狂を冷まさせた。怪我人、避難民、汗、血、泥。このような悲惨の状況下に、全ヨーロッパが沈んだ。
アリックス：「２４．１１．１４。前線からの情報は、そのような不安の原因となっています。・・・。精神を混乱させるような、町の中のデマを、当然信用しません。・・・。ニコラーシャの報告に、全幅の信頼をおいています。私は、アーニヤに、友人の写真を撮るようにお願いをしました。それは大変な仕事なのです。私達は、彼を祈り倒します。」
「２５．１１．１４。大急ぎで、貴方に、短い手紙を書きます。これは朝での出来事です。１人の兵士が、演習中になくなりました。本当に可愛そう。このような出来事は全くの初めてです。・・・。娘達は、勇気のあるところを見せ示していました。が、アーニヤは、こんな身近で、死を見たことは、一度もありませんでした。・・・。このことが、私達をどれ程、動揺させたことか。死というものは、本当に、いつでも、身近にあるものですね。」

「死は、本当に身近に・・・。」

この時、ニコライは、コサック村のコサック部隊を介して、カフカスに行っていた。
ニコライ：「２５．１１．１４。汽車の中で。私の最愛の人！　私と侍従武官のニコライ（＝ニコライ・パブロビッチ・サブリン、ニコライは、旅行にこの人物を伴っていた。
著者）は、絵画のような僻地を進んでいる。私にとっては、真新しいものばかりである。一方は高い山、他方は草原。客車のドアを開け放して、長い間座っていました。満足しながら、生暖かい空気を吸いました。各駅のホームは、国民、多数の子供達で、一杯でした。・・・。彼らは、頭に、小さい円筒形の毛皮帽をかぶっていて、微笑ましい。・・・。汽車は激しく揺れますので、私の悪筆を許して下さい。・・・。軍病院を訪問後、私とニコライは、クバンスキー女子学校と、大きな戦災孤児院に、少し立ち寄りました。全員、カフカス人の女子でした。彼女らは健康そうで、屈託が無く、いい顔をしていました。・・・。カザック人のこの地方は、本当に富んでいます。無数の果樹園。カザック人は、富み始めている。そして大事なのは、理解しがたく、信じられない程の多数の子供達。彼らは、未来の家来（国民）。これら全てが、神の思いやりへの信仰で満たされている。これらはロシアが必要とされる時のための備えとしてある、ということを、私は、信頼と冷静さを持って、期待していなければならない。」
アリックス：「２８．１１．１４。価値のない私！　年寄りのいたずらっ子の貴方にとって、可愛い子供達の顔を見るのが幸せ、ということは、私にも嬉しいのですが。理想体型から大分ずれた体を、私は、偶に見ることがあります。」
そして、再びニコライは戻り、また去って行く。・・・。
アリックス：「１４．１２．１４。貴方と別れているのは、私には本当に辛い。国民の中に立っている貴方を見ているのも辛い。・・・。会釈をし、周りを見渡し、笑顔をしなければなりません。貴方を見る可能性はありません。が、これは私が希望したものでした。私達の「日の光（？ラスプーチン　＊）」は、ロバに繋がれた橇で出発しました。彼は、貴方に、キスをします。彼（ラスプーチン　＊）は、今では、足で立ち上がっていられる状態です。・・・。」
「１５．１２．１４。貴方！　私達のボトキンが、連帯から通知を受け取りました。彼の息子が亡くなりました。捕虜になりたくなかったそうです。ドイツの将校が、これを知らせてくれました。かわいそうなボトキンは、完全に落胆しています。」

エブゲニイ・セルゲービッチ・ボトキンは、アレクサンドル二世とアレクサンドル三世の侍医であり、有名なロシアの医者セルゲイ・ボトキンの息子であった。息子は当然のように医者となった。著名なセルゲイと、より以上に遠慮深く、異常なほど人が好く、心の優しいエブゲニイ・セルゲービッチは、ゲオルギエフスキー団体の医者であった。

当時、皇后は、しばしば、心臓の痛みを訴えていた。彼女はベットに時計を持ち込み、心拍数を測る試みをした。皇后には、しばしば心臓の発作があった。両手は青ざめ、皇后は呼吸困難となった。ドアの所には、招待された有名なヨーロッパの大権威達が居た。が、彼らは心臓病を見つけられず、神経障害と判断した。そして、生活様式の変更を要求した。
アリックスは、誰かが自分に同意してくれないことに、我慢ができない。これは、アリックスの病気の診断に関わっていた。物腰の柔らかい、エブゲニイ・セルゲービッチが、侍医として招聘されたのは、そのためであった。侍医のボトキン父子の、今までの治療を継続する一方で、同時に、息子は、ありふれた治療を皇后に施した。動かないで横になっている、というだけの治療である。皇后の個人的状態がわからなかった、というためではなく、これを行った。ただ彼は、そのような診断は精神を治療する、と単に見なしたからである。ありふれた診断は、皇后を落ち着かせ、皇后に口答えをすることは、即ち、彼女にとって、破滅的な興奮を強めることになる。

アリックス：「心臓は拡張し、病んでいます。時々、目眩を感じます。・・・。私の病んだ心臓に、貴方を押しつけ、キスをし続けます。・・・。」

＜年取ったアベックは希に、一緒にいることに成功します。＞
１９１４年が終わった。弱い光を放つ、冬のペテログラードの太陽、目もくらむほど白い、ツアルスコエ・セローの雪に、その反射が。大宮殿の入り口に、乗用馬車の列と自動車の列。外交団が、鏡の間に、整列をする。侍従武官団を伴って、ニコライは外交団の前を歩く。フランス大使との長い会談があった。「全ロシアを巡った旅行は、私に、我が国民との精神的な一致に、私はあると、確信した。」そして、突然言葉を換え、完全に動揺しながら、皇帝は言葉を付け足した。「私は、私が気落ちし、ドイツを崩壊させる可能性を全く信じていない、平和の交渉を目論んでいる、というような考えを伝搬させている、ある試みを知っている。・・・。これは噂である。悪党と、ドイツのスパイが、噂を広めている。・・・。」

ツアルスコエ・セローで、新年を迎え、皇帝は、１月末に前線へと出発する。
アリックス：「２２．０１．１５。私の大好きな人！　ベービーは、足が少し痛いと不平を言い始めました。今晩を心配しています。・・・。私達の友人の依頼に従って、夕べ伝達することを忘れていた、ということを、アーニヤは、私に、貴方に話すように懇願しています。つまり、貴方は、一度なりとも、貴方の詔書で、総司令部について言及してはいけないと言うことです。詔書は、国民に向かって、貴方から出るものでなければなりません。」（ニコラーシャと、戦争についてよく話し合って下さい。）
「愛しく大事な人へ、ベットで書いています。今、７時。貴方が去ってから、別れてから、部屋はがらんどうです。クリスマスツリーを片付けたようです。・・・。」
ニコライ：「２６．０１．１５。私の大好きな愛する女性！　貴方の手紙に感謝するしかありません。私はニコラーシャを訪問しました。そして、彼の新しい客車を見ました。非常に快適でしたが、やはり暑かった。１時間半以上は耐えられませんでしょう。私達は、大事な問題について、しっかりと話し合いました。私が満足したことに、私達は、完全に話が合いました。・・・。彼が１人でおり、心が良い状態にある時には、彼は、正しい判断をする、ということを伝えておかなければなりません。戦争の始めから、彼には大きな変化がありました。この１人ぽっちの場所での生活を、彼は、「自分の隠遁所」と呼んでいます。彼の肩にかかっている強烈な責任の認識は、彼の心に、深い印象をもたらしたに違いありません。まあ強いて言うならば、これもまた偉業です。」
このように、ニコライは、合意を夢見ていた。ニコライは、アリックスを平静にさせなければならない。そして、ニコライは伝える。ニコラーシャは１人ぽっち、そして、酷い「悪魔の女性」がいない。悪魔の女性は「友人」の敵。・・・。

そして、再び、ニコライは帰還し、そして、出発する。
ニコライ：「２８．０２．１５。私の最愛の可愛い人！・・・。３日間家にいられて、本当に幸せでした。貴方はそう感じたでしょう。しかし、私は沈んでいます。何を感じているのかは決して話しません。本当に腹が立ちます。いつも仕事仕事で、一緒に座ることも、話し合えることもできないとは。食後、ゆっくりともしていられません。外出せざるを得ないのです。自由な時間は全てそのように過ぎて行きます。古い友人が、偶に、会いに来てくれます。」
アリックス：「２８．０２．１５。私の最愛の可愛い人！・・・。３日間家にいられて、本当に幸せでした。貴方はそう感じたでしょう。しかし、私は沈んでいます。何を感じているのかは決して話しません。本当に腹が立ちます。いつも仕事仕事で、一緒に座ること

も、話し合えることもできないとは。食後、ゆっくりともしていられません。外出せざるを得ないのです。自由な時間は全てそのように過ぎて行きます。古い友人が、偶に、会いに来てくれます。」「０８．０３．１５。私の大好きな人。私の手紙がしっかりと届くことを期待しています。私は自分の好きな本に書き込んでいるように、私は、手紙に毎日番号を書いています。・・・。イリーナ（フェリックス・ユスポフと結婚した、サンドロの娘。　著者）の所に、娘が産まれました。・・・。いや、私は娘だろうと思っていましたから。」
この手紙を読んで、ニコライは、深いため息をついた。イリーナが生まれた日のことを、ニコライはよく覚えていた。そんな昔ではない。が、もう、イリーナに、娘が。

ベーラ・レオニードブナ：
「＊＊＊＊。フェリックスは、バイセクシャルでした。噂は、人より長生きします。・・・。しかし、２人は本当に素晴らしいカップルでした。＊＊＊＊。」

アリックス：「９．０３．１５。私の愛する人、愛しい天子！　明後日、貴方をしっかりと抱きしめられると知って、どれ程幸せに感じているか。貴方の優しい声が聞ける。貴方の優しい目を見つめられる。・・・。マーシャ（オーストリアにいる）からの手紙を、貴方に渡します。＊＊＊＊。もちろん、私は彼女の手紙に、返事はしていません。・・・。」

女官マリヤ・ワシリチコバ（＞＞ミーシャ）は、１９１５年には、オーストリアに住んでいた。彼女の前に、３人の人物が現れ、皇帝へのメッセージを、彼女に頼んだ。このメッセージの内容がどのようなものなのか、彼女に話した。「全ヨーロッパは、閣下が、平和を愛していることを良く分かっています。・・・。オーストリアとドイツは、ロシアの軍事力を、十分にわかりました。」、その他。簡単に言えば、３人は、秘密の３カ国、オーストリア、ドイツ、ロシア、政府の会談の提案（未だ非公式）を持って、彼女の前に現れた。単独講和の交渉の開始のために。ストックホルムで、打ち合わせが継続された。・・・。

彼（？　＊）は理解していた。手紙での話は、酷い噂を生む。ことを。マーシャからの手紙を受け取ると、ニコライは直ぐに、この手紙を、自国の外務大臣に渡した。＊＊＊＊。彼（＝ニコライ　＊）は、これらの提案を全く隠さない。というのは、彼ら（＝提案　＊）は、彼（＝ニコライ　＊）にとって、完全に受け入れらないものであったからである。
矛盾：２０年前、一本気のウイルヘルムが、ベルリンで、アリックスに別れを告げた時、ウイルヘルムは確信していた。ヘッセンの王女（＝アリックス　＊）は、ロシアで、ドイルの信頼できる足場となるであろう。ことを。しかし、アリックスは、ドイツの王女であったので、ロシアにおいては、どんな平和についての動きについても、どんなドイツとの平和交渉の試みについても、アリックスは、嫌疑をかけられないようにしていなければならなかった。戦争は悲惨なものであることを知り、自分のかっての祖国との平和を夢に見、ニコライの決定に影響を与えながら、アリックスは沈黙していた。苦しむこと、祈ること、勝利まで、戦争に対する自分の忠誠を示すこと。・・・。結果、マーシャに、直ぐにロシアに戻ることが命じられた。

再び、皇帝は、ツアルスコエ・セローで生活をした。が、直ぐに、出発をする。・・・。
アリックス：「４．０４．１５。貴方は、また、私達を捨てるのですね。そして、多分、喜んで。庭園での仕事以外、ここでの生活はつまらないものでしたから。私は寝込んでいましたので、私達は、殆どお互いに、見つめ合えませんでした。貴方に聞きたかったことが沢山あったのに、少しも、私は聞けませんでした。私達が夜遅くに、ようやく一緒にいれれる時に。全ての思いが、消え去っていきます。・・・。」
そう、ニコライは口数が少ない。彼らは一緒にいる時でも、彼らは無口であった。ただ、別離が、愛の長談義を産んでいる。
アリックス：「私は泣いています。まるで大きな子供のように。目の前に、貴方の悲しそうな目が見えます。貴方の優しい愛撫・・・。明日は、私の最も燃える心を貴方に送ります。（彼らの大好きな４月８日、婚約の日、がやって来る。　著者）　２１年間で、初めてですね、私達が、この記念日を一緒に過ごせないのは。が、私は、あの日のことを全て、生き生きと、覚えています！　私の可愛いお坊ちゃん（＝ニコライ　＊）、この年月の間、貴方は、どれだけの幸せと、どれだけの愛を私に下さったでしょう。・・・。」
「８．０４．１５。・・・。本当に時のたつのは早いものです。もう２１年が過ぎました。私がその時のドレス「王女」を大事に持っていることを知っているでしょう。朝、それを着ました。そして、私は貴方のお気に入りのブローチを着けています。・・・。」

この時、マリア・ワシリチコバは、ペトログラードに戻っていた。当然、ドイツからの手紙を持参していた。
アリックス：「１７．０４．１５。・・・。私は、エルナ（？エルニ　＊）から、長い優しい手紙をもらいました。（？エルナなら　男女２人に同じ名前エルナがある。そのうちの１人、皇后の兄弟エルナか。エルナは女、エルニは男　＊）　貴方が帰還した折りに、その手紙を貴方に見せます。彼が書いています。「彼（貴方のこと）を理解できており、彼が何に耐えているか知っているのは、この私だけである。」　彼は、貴方に接吻をしっかりと送っています。彼は、現在のジレンマから出口を見つけるよう努力をしています。そして、誰かが、交渉のための橋を創り出さなければならない、と提案しています。ストックホルムに、信頼できる人物を、個人的に送り出す案があります。そこで、貴方が送り出した個人的な人物と会合をするという案です。個人的に送り出された人物達は、当面している多くの困難な問題を調整できるというものです。彼の案は、ドイツには、ロシアに対して、本当の憎しみがない、という点に、基礎を置いています。エルニは、２８日に、すでにそこへ、人を派遣しました。貴方は未だ帰還していない、事を、この人物に話すように、手紙を出しました。＊＊＊＊。全ての人が平和を熱望しているのに、その時が未だやってきません。貴方が帰還するまでに、この件を片付けたいと思っています。貴方には、それ（？　＊）が不快でしょう、と知っているからです。」
不幸なアリックス、彼女が期待した通りである。突然、彼は、それにも関わらず、「時はすでに到来した。」と語る。無駄に。

５月６日が近づいた。
アリックス：「０４．０５．１５。私達が、貴方の誕生日に一緒にいられないなんて、何と寂しいことでしょう！　こんな事なんて初めてです。・・・。貴方の肩に委ねられている十字架は、何と重いことか！　十字架を背負っている貴方をどれ程、私は助けたいことか。私はただただ祈り続けています。貴方の重い荷物を、私がどれ程軽減してあげたいことか。この２０年間、貴方は沢山の苦労をしてきました。・・・。貴方は、まさに、受難のヨブの日生まれです。私の不幸な友。」

「書面でこれら全てを語ることは、私には簡単です。お馬鹿なほどの内気さに・・・」
アリックス：「１３．０６．１５。・・・。最近、貴方の心臓が、落ち着かないと言うことで、私は不安です。お願いします。帰還した折りに、ボトキン医師に診てもらって下さい。私自身も長く心臓を病んでいるので、そのような人に同情を感じています。悲しみや、心配を隠すことは、心臓にとっては、とても悪いのです。心臓は、そのようなことで疲れることを、覚えておいて下さい。・・・。この事は、貴方の目でご覧になってきてたことでしょう。このようなことに関しては、私には十分な経験がありますので、いつでも私に話して下さい。多分、私は貴方を助けてあげることができます。私に全てを話して下さい。私と全てを分かち合いましょう。私と一緒にしばらく泣きましょう。これは生理的なことであり、気分を軽くしてくれるでしょう。・・・。アーニヤが私の所に着ました。朝に、グリゴリーを見たそうです。グリゴリーは、５日目でようやく熟睡できたそうです。そして、前線では、少し状況が好くなるであろうと語ったそうです。」（彼女は信じていた。グリゴリー（・ラスプーチン　＊）が、よく眠れる時には、即ち、前線は好調であると。）
「１４．０６．１５。パーベル（大公　著者）が、私に、他の情報を話してくれました。余り良い情報ではありませんが、貴方に前もって知らせておいた方が好いと思っています。つまり、この６ヶ月間にわたって、司令部内のスパイについての話が持ちきりなそうです。私がスパイの名前を聞いた時、パーベルは、ダニロフ将軍の名を上げました。・・・。この人物に、注意を怠りなく。・・・。」
この当時、前線での敗北は、スケープゴート探しが強いられていた。解決の出口が見つかった。スパイである。本物のスパイ妄想狂が始まった。最初、ユダヤ人をスパイに仕立てようと思った。ドビンスクでの野戦裁判は、何人かを、「スパイ罪」で、絞首刑にしました。その後、説明がありました。彼らは罪がなかった。そして、死後に、無罪として認められた。しかし、当時、大公ニコライ・ニコラエビッチには、すでに、他の計画が熟していた。総司令官は、大規模な狩猟をすることを決定した。

ドイツのスパイである、連隊長ムヤソエドフの有名な仕事が、発生する。ムヤソエドフの提言に従って、ニコラーシャは、自分の主力の敵、陸軍大臣スホムリノフの所まで、たどり着いた。彼は、６月にすでに解任されていた。彼から、彼の妻を経由して、「私達の友人(ラスプーチン　＊)」に電話が通じていた。即ち、アリックスに！　「ドイル娘、スパイ女」　ただ事ではない！

アリックスは、自分もスパイの摘発に参加していることを、示すことにした。彼女は身内のものを見つける。補給係のダニロフ将軍。司令部にいる、有能であるが、口の悪い将軍達のうちの１人であった。そして、本質的に、「私達の友人」の敵であった。・・・。

アリックス：「１５．０６．１５。・・・。今か、今かと、貴方が約束をした手紙を、待っています。・・・。私は、ちょっとだけ、マブラ（大公コンスタンチン・コンスタンチノビッチの妻　著者）の所に立ち寄りました。彼女は、冷静で、勇気があります。タチヤーナ（Ｋ．Ｐ．（ロマノフ家で、詩人を自称していた人物）の娘　著者）は、酷い状況です。さらにやせ細り、青白くなっています。・・・。」
６月の始めに、パブロフスク宮殿で、狭心症の発作で、Ｋ．Ｐ．が呼吸困難となりました。この少し前に、前線で、彼の息子達のうちで、若くて最も輝いていたオレグが、瀕死の怪我を負いました。Ｋ．Ｐ．には、この事を、隠しています。最愛の息子の死は、彼の死期を早めました。ロマノフ家の最期の詩人でした。ペトロパブロフスキー寺院で盛大な葬式を行いました。

アリックス：「１６．０６．１５。・・・。貴方のくれた甘い香りのするジャスミンを、エバンゲリ（？　＊）に置きました。ジャスミンは、ペテルゴフのことを、私に思い出させます。昼に、私はバルコニーに座っていました。夕方、教会に行きたかったのですが。余りにもひどい疲れが出て。心臓がとても重く感じ、憂鬱です。私達の友人（ラスプーチン　＊）が語ったことを、私はいつも思い出しています。彼の言葉に、私達は、どれだけ注意を向けていなかったことか。彼は、司令部への貴方の出向には反対でした。そこにいると、してはいけないことをせざるを得なくなるからです。・・・。グリゴリーが、何もしないように助言をした時、神は聞いていないと、助言した時には、後になって、何時も、自分の正しくないことを、貴方は納得しています。・・・。これは全てろくな事になっていません。彼（ニコラーシャ　著者）は、私達の所への、グリゴリーの訪問に賛成ではありません。というのは、ニコラーシャは、貴方を、司令部に、留めておき、グリゴリーから遠ざけておきたいからです。助ける替わりに、彼ら（？　＊）は貴方に害を与えると言うことを、彼らが知っていてくれたら、と思います。グリゴリーに憎しみを持っている彼らは、目が見えない人達です。覚えておいて下さい。私達が読んだ本の中には、神なる人によって導かれる国、政府は、滅亡することはない、と書かれていましたことを。おー、神の召すままに。」
ニコライ：「１６．０６．１５。私の大好きな太陽さん！　貴方の長い心温まる手紙に、大変感謝をしています。・・・。ダニロフの件ですが、私が、思うところは。彼がスパイであるという考えは、三文の値打ちもありません。・・・。」
アリックス：「１７．０６．１５。私の愛しい人、可愛い人！　恋女房は、貴方に楽しい、楽しい手紙を書かなければなりません。しかし、これが少し大変なのです。私は、とても陰鬱なのです。一寸したことが、私を悩ませています。今はもう８月です。国会が始まります。これをできるだけ遅くするように、と私達の友人が、何度も貴方にお願いをしておりました。・・・。今、国会議員達は、彼らに関係ないことに口を出し、審議をしようとしています。忘れないで下さい。貴方は、専制の皇帝であり、専制の皇帝であり続けなければなりません。私達は、憲法による統治下の形態に対して、未だ何の準備もできていません。この国会は、喜び以上に、大変な心配を貴方にもたらすというのに、ニコラーシャとビッテは、本当に罪な人達です。・・・。このようなことを書いて申し訳ありません。しかし、私は、大変な不幸を感じています。皆が、貴方に間違った助言をしています。そして、貴方の人の良さを利用しています。・・・。司令部なんて、勝手にしなさい！　貴方は、また、長期の不在です。グリゴリーはこれ（？国会の召集　＊）をしないように懇願していました。神の意志に沿って、全てを逆にすることです。私の心臓を恐怖で血に塗れています。・・・。私が、心配事、不幸せなこと、から貴方を守ることができたならば、とため息が出ます。＊＊＊＊＊。」
彼女はすでに証拠を手にしていた。ニコラーシャは、どうにかして、「私達の友人」を罰する決心をする。ニコライは、多分わかっていない、ただ信じているだけである！
そうこうしているうちに、スパイに関する探査は、ラスプーチンの近傍に密かに近づいていた。
ラスプーチンは、本当に、ドイツのスパイであったのか？勿論、そんな事ななかった。彼は、皇帝家族に献身的に尽くした。しかし、彼には問題があった。アリックスは、常に、新しい予言を要求した。彼はその予言に間違いができなかった。それ故、ゴロハバヤ（？地区名　＊）の彼の部屋には、実際に、彼の頭脳センターがあった。腕利きの実業家達、企業家達－「利口な人達」・・・。皇后から送られた戦時情報を彼らと、共有し、彼らと一緒になって分析した。その後、この名人は、これらから、お決まりの彼の予言を、作らなければならないので、あれやこれやと考えた。利口な人達のうちの誰かが、勿論、ゴロ

ハバヤの彼の部屋に、ドイツのスパイを、送る事はできた。が、ラスプーチンはただの男であった。ずる賢いが、気持ちが単純な男であった。・・・。証拠を見つける事は、いたって簡単であった。しかし、上院（？　＊）は、馴染みの経路を伝って進んでいった。それとともに、スパイ活動を掘り出す事に熱心の余り、彼に、「聖なる悪魔」、を与える誘惑に飛びついた。」　このようにして、彼（＝最高部？　）は、ラスプーチンの罠にかかった。

「ヤル」での、ラスプーチンのどんちゃん騒ぎの急変を知って、親衛隊の連隊長ジュンコフスキーは、グリゴリーの出来事について、書類に書き残している。この書類を、ニコラーシャは、発表する事を急いだ。

アリックス：「６月２２日。・・・。私の敵であるジュンコフスキーが、ドミトリー（大公　著者）に、汚らわしい書類（友人に敵対する）を提出しました。ドミトリーはこれを、パーベルに話しました。・・・。何たる災難。貴方がこの書類を読んで、内容にうんざりし、貴方が、私達の友人を厳しく罰する事を希望した・・・、とは。彼（？　＊）は、貴方の言葉と命令を、歪めて伝えている、と私は信じています。中傷者は罰しられなければなりません、彼（私達の友人）ではありません。司令部では、彼（私達の友人）を片付けたいとは。これは、何と不快な事でしょう！

もし私達が、私達の友人を迫害する事を許すならば、私達、そして国全部が、彼のために、苦しみに耐える事になります。・・・。あー、私の愛する人。貴方が、遂に、机を拳でたたき、ジュンコフスキーとその仲間を、怒鳴りつけた時には・・・？　誰も、貴方を、怖がっていません。彼らは貴方の前で恐れおののかなければなりません。・・・。ジュンコフスキーを、貴方の所に呼び出し、貴方は何でも知っていると、彼に話して下さい。そして、貴方は、彼に、書類を破棄し、グリゴリーに関して話してはならないと命令をして下さい。そのような事を彼はやっているのです。彼は、自分の皇帝の友人も守らなければならない忠臣ではなく、今では裏切り者です。このような事は全ての国でもある事です。おー、私の愛しい人。貴方の前で、全てのものを震え上がらせて下さい。・・・。貴方は何時も優しすぎるのです。皆がそれを利用しています。・・・。このような事は、これ以上続けさせてはいけません！」

上院は、皇帝に長い報告書を提出した。ニコラーシャは、うだるような暑さの客車内で、歓喜の大声を上げた。・・・。彼の弾劾の全ては、皇帝のよく知っていることであった。「友人」の放埒な生活、どんちゃん騒ぎ、その他。しかし、総司令部の更なる話は、酷いものであった。ラスプーチンの家では、総司令部でなされた全てを、信じやすい皇后を通じて、明らかになった全てを、ドイツの代理人達が話し合っている。と。

「私は、これについては何も知らなかった。・・・。私は予想さえできなかった。」　皇帝は、呆然として繰り返した。

その時、ニコラーシャは、総司令部に、アレクサンドル・フェドローブナ（＝アリックス　＊）を、招聘し、彼女に書類を見せる事を提案した。そして、「私達の友人」との関係を、終了する事。家族内で、物事を解決する事、ここは、総司令部で！

ニコライは同意した。今はただ、ニコライは一人になりたかった。客車から逃げ出し、家へ、ツアルスコエ・セローへ。途中、冷静になって、ニコライはわかった。これは全て、感情、推測である、ラスプーチンの裏切りの何の明白な証拠は無い。単なる、「友人」の乱交に関しての、前から知っている話である。

彼女（＝アリックス）が、総司令部内での出来事を、最期まで知った時、彼女に熱病が始まった。彼女は人事不省に陥り、自分の元に、ベービーを残すこと、自分を修道院に幽閉しないこと、自分に、夫と子供達に面会できる、祈り続けた。

「自分を修道院に幽閉しないで。」というアリックスの叫びは、何を意味していたのか。

君主制主義者プリシュケビッチが、１年後に、自分の日記に書いている。「皇帝とロシアに害を与え、ロシア国民と、ロマノフ王朝の悪玉となっている妻を、修道院に幽閉することのできる力が、皇帝にないというのは、本当か、・・・・。」（これらのことは、病人であるアリックスの想像の結果だけではなさそうである。）

ツアルスコエ・セローにいるニコライに、重要な情報が伝達される。直ちに、ラスプーチンが情報を集めた。ラスプーチンには、秘密警察との直接の連絡手段があった。これは私達の推測ではない。１９１６年１２月９日、皇后は、ニコライに書いている。「私達の友人が、語っています。・・・もしＮ（＝ニコライ　＊）（貴方）が、ニコライ・ニコラエビッチの地位を取り上げないと、直ぐにでも、Ｎは、玉座を追われるであろう。」　このように、ニコライに伝えている。陰謀が存在していることを。・・・。

これらは全てラスプーチンの虚構であったのであろうか？　「アレクサンドル・フェド

ローブナの頭にこびりついて離れない考えであったのであろうか？」（デニキン　？　＊）
　１９０５年と同じように、接近してきている惨事の恐怖を感じている、「カマリリア」が、彼（？ニコライ　＊）を、ニコラーシャで置き換えることを決めたのであろうか？
とにかく、皇帝には明らかであった。今回は、総司令部においては、うまく済まないことが。上院は、ラスプーチンを排除する（即ち、アリックスを打ちのめす！）ことを要求している。そして、ニコライは、決してこれに同意しないと言うことを知っている、アリックスには、最も厳しい手段が、可能である。ニコライは袋小路に入っていた時、彼を、総司令部から出さないことが、簡単にできる。ただ１つだけが残っている。－退位する！・・・。
　内気な皇帝は、これらの嫌疑で、ニコラーシャを、侮辱したくはない。ニコライは、大臣に、簡単に説明することを決めた。「このような大変な時には、軍の上層部は、軍の先頭に立っていなければならない。」
　このように、ニコライは、社会に、全く知性の塊もないとみなされる、決定をした。

　ペテルゴフには、酷い噂が広まっていた。ニコライは、ニコラーシャを更迭し、自分自身が、最高司令官となる、という。これは衝撃であった。ニコライ・ニコラエビッチは、彼の威光と共に、軍に人気があったそして、弱腰の皇帝、皇后がドイツ人であること、敵との彼女の関係、汚れた「修道者」、の噂！！！
　母親はわかっていた。これは惨事である。と。
　クシェシンスカヤの、好い友達である、大公アンドレイ・ウラジミロビッチは、１９１５年８月２４日付けで、自分の日記に書き留めている。
　「昼に、エラギン島のミンニ叔母さん（皇后（？　皇太后　＊）－母マリア・フェドローブナ　著者）の所にいました。そこで、酷く落ち込んだ状態の彼女（？　＊）を見つけました。・・・。ニコライ・ニコラエビッチの追放は、避けられぬ破滅を招く、と彼女は考えています。彼女は、皆に問いかけていました。「私達は何処へ行くのでしょう、私達は何処へ行くのでしょう？　これはニキではない、彼ではない、彼は優しい、人がよい、これは全て、彼（？　アリックス　＊）が・・・・。彼女は、起こった全てに責任がある。これをしたのは、私の愛している息子ではない！・・・。ママ（？　＊）が彼女（？　＊）の所にいた時、彼女（？　＊）はさらに付け加えた。これは、皇帝パーベル一世の時と似ている、と。それは、最期の年に、献身的な人々を、自分自身の所から遠ざけることから始まりました。私達の祖先の悲しい結末が、悲惨の状況下で、彼女の脳裏に思い浮かぶ。・・・と。」　　」
　歴史的に、皇帝が軍の最高司令官なので、ピョートル一世の時代と同じではなかった。アレキサンドル一世の１８１２年の時、アレクサンドル二世の時、のように、全ての試みは、直ぐに悲惨な結果を与えた。・・・。」

　ニコライは、総司令部に去って行った。彼にとっては、最も大変な旅立ちであった。ニコライは、最高部に、説明をしなければならない。太陽で焼けるように暑い彼の客車内で、大男のニコラーシャを前にして、ニコライは怯えていた。
　いつものように、客車で、アリックスからの手紙を待つ。
　アリックス：「２２．０８．１５。私の愛しい人、愛している人。・・・。彼らは、そのような決意のある貴方を、以前には全く目にしたことはありません。・・・。貴方は、最期には、自分が、正真正銘の専制である、皇帝であることを示しなさい。皇帝無しでは、ロシアは存在できないことを。私を許して下さい。貴方を平静にしておけなかったことで、お祈りをしています。私のエンゼル。これが毎日です。しかし、貴方が意志薄弱であることを、私が一番よく知っています。・・・。この２日間、私はヘトヘトに疲れ、本当に悩んでいます。精神的に、疲労困憊しています。（そして、総司令部で、全てが片付かないで、ニコラーシャが、退去しない間、ずっと苦しむでしょう。－その時、私は平静でいられます。）・・・。彼らは私を怖がり、それで、貴方の所へ出かけます。貴方が一人である時を見計らって。彼らは知っています。私には強い意志があり、自分の正しさを自覚している、ということを。貴方は正しいです。私達はこれを知っています。貴方の意志の前で、断固として、彼らを震えあがらせて下さい。貴方と共に神がいます、貴方のために「友人」がいます。・・・。聖なるエンジェルが、貴方の夢を守ってくれるように！　私は何時でも貴方の傍にいます。何者も私達を、引き離すことはできません。・・・。」

　ニコラーシャは、直ぐに理解した。会戦は負けたことを。最高部は、非の打ち所が無く身を処した。
　ニコライ：「２５．０８．１５。・・・。神よ、全ては過ぎました。私の肩には、新しい責任がのし架かってきました。・・・。しかし、神のご意志のままに。・・・。８月２８日の、この記念すべき日の朝に、ここに来ながら、私は祈り続けました。貴方の手紙を

最後まで何度も読み直しました。ニコラーシャとの面会の時間が近づくにつれて、私の心は、より平静となっていきます。ニコラーシャは、笑みを浮かべながら、入室してきました。私が、彼に、解任を命令すると、彼は簡単な質問をしてきました。私は、マニュアル通りにの返事をしました。彼は、2日間はここに滞在することができることを。その後、私達は、軍の作戦に関する問題、何人かの将軍に関して、話し合いました。これが全てでした。翌日の朝食時には、彼は非常に口まめであり、精神状態は良好のようでした。ここ数ヶ月の間に、そのような、良好な状態の彼を、希にしか見ていません。・・・。彼の副官達の顔の表情は、非常に暗澹たるものでした。それは、滑稽（？　＊）でした。・・・。」

彼（？ニコライ　＊）は、後退する軍の総司令官となった。
この時以来、全熱情を持って、抑えの効かない気性を持って、アリックスは、国と軍を指導する、ニコライの手助けを始めるようになる。
アリックス：「３０．０８．１５。私の大好きな人、私の愛しい夫。・・・。　グチュコフの件を片付ける必要がありました。が、そこに問題があります。戦時において、彼を監禁することができる、何かの根拠を、引っ張り出して来ることができないのでしょうか？
私達の友人が語っています。グチュコフは、私達の統治に反対し、アナキズムを求めている。と。・・・。」
すでに、この時、最高司令官の妻（＝アリックス　＊）に関する、国の最高支配者（＝ニコライ　＊）に関する忌まわしい絵、恥ずべき話題が、ありふれたものとなっていた。
アリックス：「ボトキンが私に話しました。列車内で、私に関して、汚らわしいことを話していた２人の男達の会話を、ゴロディンスキーという物が聞きました。彼は、２人に、ビンタを食らわせました。と。・・・。」

ニコライ：「３１．０８．１５。何時も、私は、貴方の手紙に感謝をしております。私は一人ぼっちなので、手紙は私のただ１つの慰みになっています。首を長くして、私は手紙の到着を待っています。・・・。軍事状況について、少し簡単に。ドビンスク方面と、ビリナ方面では、緊迫した状況、バラノビッチ方面では、深刻な状況、南部方面では、良好な状況。・・・。深刻さは、定員の４分の１にも満たない連隊の軍力不足にあります。１月以内に、連隊の補充をしなければなりません。新兵は、準備ができていません、ライフル銃も、大分不足しています。老朽化した我が鉄道を、以前同様に、信頼せざるを得ません。９月の１０日か、１２日に、軍の集中が完了します。このようなことから、予定していた日時より早く、帰還するという決定は、私はできません。出征に際して、貴方がくれた愛らしい花は、まだ机の上に飾っています。が、少し枯れてきました。・・・。」
アリックス：「３．０９．１５。陰鬱な日。何という損害、心臓が血で塗れています。・・・。」
「４．０９．１５。私の大好きな人、私の愛しい夫。・・・。貴方の部屋と私を繋ぐ電話がないのは、何故でしょうね。ニコラーシャとスタナ（＝ニコラーシャの妻　＊）の間にはあったのに。これは素晴らしかった。貴方は良い情報を伝えることができるでしょうし、あれやこれやの問題も好く考え得ことができるでしょう。・・・。私達は、貴方をうんざりさせないように務めてきました。貴方は、話し合いが好きではないことを、私が知っていたので。しかし、これは、私達の個人的な回線となるでしょう。誰かが聞き耳を立てているというような、嫌なことがないもとで、私達は話し合うことができるでしょう。この回線は、何か緊急の時にも、役に立つことができるでしょう。とにかく、貴方の生の声が聞けたならば、どれ程嬉しいことでしょうか！」
「７．０９．１５。・・・。寒い、風、雨。新聞を読みました。ビリナ戦線での我が軍の損失については、何も記されていません。そして、またも、全てがごっちゃまぜです。成功と失敗と。・・・。ドミトリーには、責任ある任務は与えないで下さい。ドミトリーは若過ぎますし、自惚れてもいますので。ドミトリーを貴方の所から派遣してくれたら、と私は希望しています。ただ、この事はドミトリーには言わないで下さい。」
ある時は愛し、ある時は恨む。その繰り返し、最後まで！
「１１．０９．１５。・・・。どんよりとした曇りの日で、急に悲しくなった。・・・。夏は短く、終わりのない冬がやってくると考えると、陰鬱になります。・・・。モスクワから、グシュコフと国会議員の何人かが、貴方の元に、派遣されるというのは本当ですか？
鉄道の大事故を、彼は被っていました。それは、彼に対する、神による当然の罰でした。・・・。彼らを拳で殴って下さい。自分は皇帝であることを、示して下さい。貴方は専制君主です。彼らがこの事を忘れているはずがありません。・・・。でないと、彼らには、悲劇が・・・。ミーシャが自分のために、称号を懇願するであろうことを、私は心配しています。・・・。これは、好いことではありません。彼女は、すでに２人の男性を捨てていますので。・・・。」
「１３．０９．１５。木の葉が、黄色や赤色になってきました。大きな部屋の窓から、そ

れを見ています。私の愛する人。何故、貴方が、ドミトリーを、連帯に派遣しないのか、貴方は、そのことについて何も答えていません。大公のうちの一人も前線にいない、という好くないことが起こっています。時折、ボリスが行っていますが。コンスタノビッチは病んだままです。」
ニコライ：「９月１４日。・・・。まず始めに、絶好の日和です。毎日、私は、ミーシャと一緒に自動車に乗って出かけています。私の余暇の大部分を、一緒に過ごしています。かってのように。彼は、物静かで、優しいです。君に、熱のこもった挨拶を送っています。・・・。」
ニコライは、家族が平穏に過ごすこと、を熱望している。アリックスがミーシャを気にいってくれることを希望していた。

アリックス：「１５．０９．１５。閣僚会議の前に、手に小さいイコンを持ち、友人のくれた櫛で、髪を数回剥すくことを忘れないで下さい。私は貴方のために祈り続けます。私の大事な人。ニコラーシャが、沢山の随員を連れて行くのを、私は見ています。沢山の宮廷関係者と、彼の取り巻き達、をつれて、彼が到着する、好くありません。（前総司令官はカフカス総督に任命されていた。著者）　彼らが、そこで陰謀を実行するのではないかと、私は非常に心配しています。おお、神よ、カフカスで何も起こらないことを、国民が貴方に献身さを示すように、ニコラーシャに、出来過ぎたことをさせないように！」

そして、再び、皇帝はツアルスコエ・セローを出発した。今回は、皇帝と一緒に、アリックスは、息子を派遣した。
アリックス：「１０月１日。・・・。いつもの如く、貴方のことを心配しています。ベービーが、貴方と一緒に出発したのは、今までで初めてです。これは容易なことではありません。非常に気が重いのです。が、貴方は一人ぼっちではなく、私達のベービーは、妻のいない一人の貴方に付いて、旅行することに誇りを持っています。まるで大きな子供。・・・。貴方を祝福し、本当に本当に慈しみます。優しく、愛情を持って、貴方の優しく澄んだ目を見つめています。貴方の目は、私を、ずっとずっと虜にしていました。」
「２．１０．１５。・・・。おはよう、私の大事な人。よく眠れましたか？　双方とも寝不足ですよね！　１時に、何時も通りに、彼（？　子供＝アレクセイ　＊）が、祈りを捧げている時に、私は耐えられなくなり、泣き出しました。それから、自室に駆け込みました。部屋で、彼が読むのを忘れた時のために置いてある、彼の祈りの言葉を全て読みました。彼が祈るを忘れないよう、貴方からも乞うて下さるよう、お願いします。私が、彼を、連れ去ったとしたら、貴方はどうします。貴方の出発日以来、私には、長い長い時が過ぎているようです。貴方をそれほど恋しがっています！」
ニコライ：「モギリョフ。総司令部。６．１０．１５。・・・。貴方の愛情のこもった手紙に、感謝感謝。私達（？自分と子供　＊）が出発して以来、一度も手紙を書いていないことに、私は絶望しています（？　＊）。しかし、ここでは、私は時間もないほど忙しい、のは本当です。子供（アレクセイ　＊）がいることで、幾ばくかの時間が取られています。が、当然であり、私には不満はありません。並んで寝るのは、本当に気持ちが良いものです。私達が列車に乗って以来、毎晩、一緒に祈っています。アレクセイは、祈りがものすごく早いのです。止めるのに一苦労します。軍隊が行進をしている時、私の後ろに立って、閲兵を見るのを、アレクセイは大変気に入っています。行進は素晴らしい物でした。夜前には、私達は車に乗って、森や川岸を走ります。そこで、焚き火をします。そして、私は、焚き火の周りを、歩き続けます。・・・。アレクセイは、焚き火の火の明るさにも関わらず、健やかに寝入っています。・・・。アレクセイは、朝、早く起きます。ベットに座りながら、私と、小声で話しかけてきます。私は、寝ぼけながら、彼に返事をします。アレクセイは、私を起こさないように気を使い、静かにベットに横になります。」

その後、彼らは、ツアルスコエ・セローへ帰還した。そして、再度、出発をした。ニコライは、アレクセイを総司令部に連れて行くことを、好んだ。アレクセイも、戦時中における、このような生活が気に入っていた。男達の中での生活を。・・・。アレクセイの病気は、国の最高秘密であった。
ニコライ：「１９１５年１１月２日。夕べ、私達が列車で到着した時、ベービー（＝アレクセイ）が、ふざけていて、椅子にぶつかり、左手を打撲した。・・・。昨日一日中、ベットに横になっていた。彼がよく寝られなかったのが良く分かった。私も。・・・。」
幸いなことに、何事もなく済んだ。
アリックス：「５．１１．１５。・・・。なんて魅力的な、アリックスの写真でしょう。・・・。犬と一緒のベービーの写真を、一般公開して良いかどうか、フレデリックス（？　＊）が聞いてきました。＊＊＊＊＊。犬の方が彼より頭がよく見える。私にはこの返事が気に入っています。」

ニコライ：「１２月３１日。・・・。貴方の愛情に、最大の感謝を。・・・。これが、私をどのように支えているのか、私の仕事、責任、心配に対して、どのように報いるのか。を、君が知ってくれたらと思います。神が、ちょうど良く、私に妻を与え、君に友人を与えてくれなかったならば、私は、全てをどのようにこなしてよかったのか、実際、私は知りません。私は本当のことを、話します。時には、これら正しいことを、口に出して語るのは、非常に大変であり、私には紙の上で述べることの方が、より簡単である。非常に内気なので。と。」
アリックス：「３１．１２．１５。・・・。私の最愛の人、１９１５年の最後の手紙を書きます。全身、全霊を持って、貴方のための、私達の大事な国のために、１９１６年を、全能の神にお祈りしています。・・・。私達は何時再会できるのでしょう。私は、教会へ行くのが好きですが、これは子供達には、つまらないようです。愛する貴方の部屋は空っぽ。私の大好きな人はいない、私のエンジェルはいない！」
このようにして、１９１６年がやってきた。彼らの統治の最後の丸１年となる。新年を、アレクセイは、ツアルスコエ・セローで迎えた。・・・。
アリックス：「４．０１．１６。アレクセイは、真剣に、自分の日記に取り組みました。ただ、本当に面白いのです。夕方少し時間があった、昼に書き物をし、食事。目を覚ましたばかりで、自分の次の出発。昨日、アレクセイに、満足を与えることに決めました。アレクセイは、ずっと私と一緒にいました。アレクセイは、私のベットで、絵を描き、書き物をし遊びました。貴方が私達と一緒であったらと、思っています。」

ロシアの玉座の後継者の日記を、私はめくってみる。皇帝になることの無かった後継者。この「１９１６年を記録している本」は、表装が、黄色の絹製で、断面が金色。日記の裏面には、「あたしの可愛いアレクセイの最初の日記」と、皇后の書き付けがある。
アレクセイの最初の書き付けは、へんちくりんな、丸文字で書かれている。ほとんど殴り書き。この時アレクセイは、１１歳であった。彼は学習の開始が遅かった。彼は病人であった。
「１月１日。今日は遅く起きました。１０時にお茶を飲みました。それから、ママの所へ行きました。ママは気分が悪く、１日中横になっていました。家にいました。風邪を引いていたからです。オリガ、タチヤーナ、マリア、アナスタシアと、朝食を食べました。昼に、コーリャの所で遊びました（コーリャはデレベンコ医師の子供。アレクセイの主要な友達で、一番年上の友達。　著者）　とても楽しかったです。６時に、食事をしました。その後、遊びました。８時に、ママの所にいました。ママ達は食事をしていました。１０時には、ベットにいました。・・・。」

さらに。全ては物語のように書いてある。
「７月８日。朝、風呂に入りました。その後、散歩をし、遊びました。朝食には、ママとお姉さん達が来ました。お昼に、車に乗って走りました。犬をひき殺しました。ママの所でお茶を飲みました。食事の後、町の公園へ行きました。公園では、子供達が遊んでいました。」

ニコライは、子供達と遊べなかった。ニコライは、ただ彼らの遊んでいるのを見ているしかなかった。ニコライにとっては、簡単な運動も、危険であった。規則的に、日々が進んでいく。いつもの通り。アレクセイは、この、つまらない「何時も通り」を理解し始める。彼においては、全てが、「何時も通り」。
「２月２７日。何時も通り、起きました。教会に行きました。そこで、聖体を受けました。その後、何時も通り。
２月５日。何時も通り。パパが１２時に出かけました。皆で見送りました。
３月３日。何時も通り。
４月７日。同じ。ベットで懺悔をする。
４月８日。同じ。ベットで聖体を受ける。」
「同じ」、ベット、散歩、食事、祈り、がある。そして、再びベット。参謀本部への旅行は、単調な生活を送っている彼にとっては、不思議な出来事であった。

アリックス：「２８．０１．１６。また旅行が、私の大事な人を、私から奪っていきます。が、旅行が長くないことを、私は期待して待っています。そんなことを言ってはいけない、とは知っています。結婚して大分経つ女性では、こんなことは可笑しいそうです。しかし、私には耐えられません。年を追う毎に、愛情が強くなっていきます。・・・。私達に、声を出して本を読んでくれた時は、嬉しかったです。いま、私は貴方の愛のこもった声を聞いています。私達の子供達が、結婚して幸せになった時、私は、夜を独りぼっちで過ごさなくてはならなくなります。」

「５．０３．１６。・・・。今日は、英語の全集を持ってきてもらいました。が、どれも面白くないのではないかと気がかりです。素晴らしい作家がいない国には、素晴らしい画家や音楽家がいない。奇妙の現象ですね。私達は、あまりにも急いで人生を送っています。感銘が、あっという間の早さで入れ替わっています。車とお金は世界を支配していますが、文化を破壊しています。自身を、才能のある物と見なしています。知性の堕落した方向。この偉大な戦争の最後にはどうなるのか、興味があります。全てに、覚醒と復興がやってくるでしょうか、理想が再び実現するでしょうか、人間は、綺麗に、詩的になるでしょうか、それとも、冷淡な現実主義者として残るでしょうか？　皆がそれらを知りたがっています。夕べ、匿名の嫌な手紙を私は手にしました。最初の４行ほどを読んで、直ぐに破り捨てました。」

「６．０４．１６。・・・。ベービーは、寝ることもなく、一日中楽しく遊びました。夜に、左手の痛みで、ベービーは目を覚まし、２時から眠らないままでした。娘達は、夜中じゅう、彼の傍に付き添っていました。言い表せないような、絶望です。彼は、パスハを気にかけています。明日、明かりを持って教会で、どうするのかと。・・・。一見して、彼は、鉄のバールを持って働き、ヘトヘトに疲れました。彼がそのように力強いとは。彼は激しい運動をしてはいけない、ということを、彼に理解させるのは、大変です。」

この手紙で、皇后は、彼女の病院に入院している、負傷したユダヤ人について書いている。「アメリカにいても、彼はロシアを忘れていなかった。彼はロシアを非常に懐かしがっていた。それで、戦争が始まると、兵士となり、祖国の防衛のために、ここへ駆けつけた。我が軍での勤務中に負傷をし、ゲオルギー勲章を得、彼はここに残ることを希望していた。彼が希望するロシアで生活できる権利が彼にはある。実際には、ユダヤ人にはその権利はないが。・・・。私は、本当に理解しています。彼を激怒させ、自分の前の祖国の冷酷さを感させ、てはいけないことを。」

このように、夫の帝国の法律について、不平を漏らしていた。

ニコライ：「７．０６．１５。・・・。君が書いた、負傷したユダヤ人の請願について。ロシアでのいたる場所での生活を許可。」

アリックス：「８．０６．１５。・・・。ハリストス復活！　私の大好きなニキ、私達の婚約日である今日、＊＊＊＊。私は、大事なブローチを着けています。」

１９１６年７月に、アリックスは、ニコライのいる総司令部に出発をした。そこには、ニコライとアレクセイが一緒にいた。初めて、アリックスは家族全員出発する。たかだか数日間であるが。

彼らは、休みを満喫した、その後、列車は、彼女と娘達を、好きなツアルスコエ・セローに運んだ。そして、再び、父と息子のいる総司令部へ。

ニコライ：「総司令部。１９１６年７月１３日。雨の日にも関わらず、娘達を連れてきた君の旅に対して、生き甲斐と太陽を運んできたことに対して、私は君に感謝をしなければならない。思っていることの半分も君に話せません。というのは、長い別離の後、君との出会いの時、私は何時も、愚かにも内気となってしまうからです。私は座って、ただ君を見つめる。これは私の最大の喜びです。」

この時、アリックスは、罠にかかった。スパイ探査は継続していた。スホムリノフと一緒に、マナセビッチ・マニィロフ、内務省の前エージェント、銀行家リュビンシュタインが、参加した。２人は、ラスプーチンに近かった。しかし、状況は非常に厳しかった。なんとなれば、リュビンシュタインを通じて、アリックスは、ニコライに内緒で、ドイツにいる、彼女の困窮した親族に、お金を送っていた。この件は、彼女を敵とするに十分であった！　今や、彼女には、彼ら（？　＊）を釈放し、「友人」と彼女にとって、恐怖となっているこの仕事を禁止できる、献身的な内務大臣が必要であった。

アリックス：「１９１６年９月７日。私の愛しい人！　グリゴリーは、ポスト（内務大臣　著者）に、プロトパポフを就けるように、切に願っています。貴方は彼を知っているでしょう。彼は、貴方に良い印象を与えているはずです。彼は、国会議員です。彼は私達の友人を知って、少なくとも４年は経っています。彼は私達の友人を好きです。この人物の登用において、この事は多くのことを語っています。」

そして、もう一度、破滅的な名前、プロトパポフ、が現れる。

「１９１６年９月９日。可哀相なゲンドリコワ伯爵夫人を訪問するために、町に出ました。彼女は死に直面しています。全く意識がありません。死にそうになった時、自分の所を訪問して欲しいと、彼女が私に懇願していたことを、私は思い出しました。ナスチェンコ（ナスタシア？　＊）は、元気に振る舞っていましたが、私が退去する時、彼女はただただ泣いていました。」

女官ナスチェンコ・ゲンドリコワは、皇后を、献身的に愛していた。ナスチェンコは、

宗教に没頭していた。皇后がアーニヤ（？　＊）に腹を立てた時、彼女（？　皇后　＊）は、ナスチェンコ・ゲンドリコワを教会に同行した。しかし、しばしば、ナスチェンコは、大公と出かけた。彼女は若かった。彼にとっては一緒にいることが楽しかった。・・・。皇帝一家が、流刑となると決まったとき、皇帝一家と一緒に流刑地にいくことを、最初に申し出たのは、ゲンドリコワであった。・・・。

ニコライ：「１９１６年９月９日。総司令部。プロトパポフは素晴らしい人であると、私も思っています。彼を、通商大臣の責務に就けるよう、ロジャンコが、だいぶ前に、提案しています。私は、この問題をよく考えて決めなければなりません。とにかく、この問題が突然目の前に現れたので。君が知っているように、人に対する国会の意見は、時折い極めて奇妙である。これ故、気をつけている必要がある。特に、高度の責務への任命に際しては。・・・。全て、熟慮に熟慮を重ねる必要があります。・・・。これら全ての交替で、忙しすぎて頭がくらくらしています。私の考えでは、変更は、余りにもしばしば過ぎています。とにかく、国の内部状況にとって、これは余り良くありません。とういのは、各新しい人物は、行政機関内で、同じような変更を受けているからです。私の手紙が、このような、つまらないことを引き起こし、非常に申し訳なく思っています。」

１９１６年は、帝国の崩壊まで、頻繁の閣僚の更迭が行われる。ゴレミィキン、シュチュルメール、トレポフ、ゴリチン、達が、内閣の首班を交替しあった。

というのは、国会と彼（＝ニコライ　＊）との間を取り持つ人物を捜していたからであった。そのような人物を捜し出すのは、不可能であると、ニコライは認めたくはなかった。新しい原則が必要であったが、新しくはない人物が必要であった。国会に責任のある内閣。これは国会が要求していた。しかし、ニコライには、これは、１９０５年当時への回帰にしか思われなかった。アリックスと「私達の友人」が、激しく反対を表明していた。（いつもの如く、皇后の意見を、うまい具合に、繰り返していた。）

プロトパポフの人物像は、ニコライには、適切であると思われた。彼は（？プロトパポフ　＊）は、国会において、権威を利用した。ごく最近、プロトパポフは国会代表団の長として英国を訪問していた。そして、そこで、大きな成果を得ていた。国会議長ロジャンコは、彼に目をかけていた。ニコライと国会を仲直りさせる人物を見つけたと思った。皇后とラスプーチンが、プロトパポフを是認している、と国会が知った時に、彼の運命は決まった。プロトパポフは全員に嫌われる。

ニコライの激怒は、際限がなかった。（このようなことは彼には全く珍しかった！）彼は机を拳でたたくことさえした。「その通り、私が彼を任命をした。彼はそれにふさわしかったからだ。今はふさわしくない。というのは私が彼を任命したからだ。」

アリックス：「電報。１０．０９．１６。公爵夫人が、今日の夜、亡くなりました。貴方は、ナスチェンコに電報を出しませんでしたか？　＊＊＊＊。」

母親の死後、ナスチェンコは、自分の日記で、彼女の相談相手をし続けた。彼女は書いている文章が、シベリア追放で、彼らを励ますことになる。「私達の苦悩が増せば増すほど、キリストによる私達の慰めも増大します。」

アリックス：「２２．０９．１６。・・・。私は、ほとんど一晩中眠ませんでした。度々時計を見ました。何故か知りませんが、非常に気分の良く静かな夜でした。・・・。私とプロトパポフは、１時間半も話し合いました。・・・。非常に賢く、わざとらしく、素晴らしい態度です。言うならば、フランス様か、アメリカ様です。・・・。私は、非常にざっくばらんに、貴方の命令が、組織的に実行されないで、ほったらかしにされている、人を信じるのは難しい、・・・、ことについて、彼と話をしました。私は、これ以上、少しも気兼ねをしないし、閣僚を恐れません。洪水の如くロシア語で話します！　彼らは、私の間違いを笑わないというお世辞は持っています。私が聞いたこと、見たことの全てを、私が貴方に伝えていることを、私が背後で貴方をしっかり支えていることを、彼らはわかっています。・・・。私は、貴方の目、そして耳。大好きな貴方、貴方の年取った太陽。」

「９月２６日。・・・。ほら、貴方が言っていた通りです。低俗新聞が、あらぬ事を書き立てるであろうこと。プロトパポフはアーニヤの所で食事をしました。彼女は彼と知り合いでした。すでに１年、いやそれ以上前から。プロトパポフは、貴方に直接会うことの許可を求めています。スホムリノフを釈放する命令を、貴方は彼に与えないのですか？・・・。

私達の友人の目からでは、プロトパポフは、この問題に、完全にあっているとのことです。プロトパポフは、これについて、司法大臣と、話し合いをしています。（忘れないために、この事は書き留めておいて下さい。ついでに、ルビンシュテインに関して、大臣と話し合って下さい。騒ぎがなく、彼をシベリアに派遣するために。）・・・。プロトパポフは思っています。このグチュコフが、私達の友人に対抗する証拠を発見することを期待

して、軍側に、この人物を逮捕するように、教唆した。と。勿論、彼には、汚れた金のかかる仕事となります。しかし、彼は一人ではありません！（？　＊）」

１９１６年１０月に、プロトパポフは、国会の有力議員達の会議に招聘された。会議は速記されていた。
「裏切り者のスホムリノフを自由にした、ラスプーチンを通じて任命された貴方のような人と、私達は話し合うつもりはない。」
プロトパポフは興奮して答えた。
「私は皇帝による個人的な候補者です。今では、皇帝を身近に感じ、気に入るようになりました。あなた方には、称号、素晴らしい状況、素晴らしい結びつき、がある。が、私は、出世を、地味な学生から、授業に５０カペイカを支払いながら、始めた。私には、皇帝による個人的な支持以外に、何もない。・・・。」
その時、すでに、周り全部は、新しい首相に対する、憎悪で一致していた。
カデット党党首ミリュコフは、国会の演壇で、有名となった話をした。
「裏切り行為と背信についての暗い噂が、国の端々まで、這うように広がっている。この噂は、声高々と言われており、誰も、そのままにしておけない。・・・。皇后の名前が、しばしば、彼女の取り巻きの山師達の名と一緒に繰り返されている。・・・。これは何なのか？　愚行か、それとも反逆か。」
これは、政府の愚行である、と、ミリュコフは言いたかった。しかし、国は、「背信！」を繰り返した。
デニキンが語っている。
「背信についての噂は、軍と王朝の関係に、破滅的な役割を果たした。」（デニキン）
革命後、ペテログラードの新聞のインタビューに、大公キリル・ウラジミロビッチが、語っている。
「ウイルヘルム（ドイツの皇帝　＊）との陰謀に、皇后は関与していないであろうか、私は一度ならず、恐怖を持ちながら考えた。」
アリックス：「２８．０９．１６。私はとでも楽しいです。５日後、私達は一緒にいられるから。単純には信じられない。外の空気は、ベービーにはとても有効です。２台の野外用椅子、と彼のために具合の良い机を、一緒に運び出します。そして、外気の中で、座っています。日曜日には、モギリョフでのお茶のために、３時に出発するつもりです。月曜日は５時。よろしいですか？　貴方の散歩の後に、私は少し長く横になっていられます。」
アリックス：「１２．１０．１６。心臓が辛いので、私は、また、貴方を離れます。私はこの別離を本当に恨みます。・・・。貴方は群衆の中に、独りぽっち。周りには、暖かい物はごくわずか。私達の友人の祝福を受けるために、貴方が２日間だけでも来てくれたら、と思っています。祝福は貴方に力を与えてくれていました。・・・。貴方は勇敢で、忍耐強いことは、私は知っています。が、とにかく、貴方は人間です。貴方の胸への彼の接触は、貴方の悲しみを非常に良く慰めてくれます。貴方に新しい勇気と、より大きなエネルギー、を与えてくれます。これはむなしい言葉ではありません。心のこもった私の説得です。私達の友人が、特別に与えてくれた安らぎを、私は知っています、そして信じています。貴方は、精神的に疲れ切っているのです。貴方には、年寄りの女房に、それを隠していられるわけがありません！」
アリックスは正しかった。ニコライは疲労困憊をしていた。

「私の不幸な友人」
アリックス：「１．１１．１６。私の大好きな人、愛している・・・。このように、オリガは土曜日に結婚をします。何処で結婚式を？」
皇帝家族には、もう１つのスキャンダルがあった。ピョートル・オリデンブルグスキーとの離婚後、皇帝の正統の妹は、騎兵大尉ニコライ・アレクサンドロビッチと結婚をした。後家の皇太后が、司令官となっている、キラルスキー連隊に、この騎兵大尉は勤めていた。キエフでの結婚式に、大ロマノフ家族が、集合した。キエフで、「ロマノフ家の家族会議」が開催された。全員が、１つの点で、一致した。状況は、破滅的である！　という点で。今、実質的に、政府は、アリックスとラスプーチンに、責任を持っているようになっている。そして、大家族は、１つの結論を出した。ニコライは、国会の要求に譲歩するべきであり、内閣を指名する権利を、国会に与えるべきである。これは、アリックスとラスプーチンの有害な影響から、政府を解放する。しかし、酷い噂と敗北の中にある、この危機的瞬間に責任のある、人の良いニコライは・・・・。とにかく、一刻も早く、「聖なる悪魔」を、遠ざけること！
１１月２日、総司令部に、大公ニコライ・ミハイロビッチが、やって来た。彼は、ミハ

イロビッチ家の長男で、ニコライの子供時代からの友達である。キエフにおいての家族会議では、彼とニコライは、決定的に対立した。「エガリッテ氏（？　＊）」が、この困難な任務を決意した。
ニコライ：「１１月２日。・・・。私の愛すべき人へ。ニコライ・ミハイロビッチが、１日にここへ来ました。昨日の夕方、私達は長い話し合いをしました。話の内容については、次の手紙で貴方に話します。今日は非常に忙しいのです。・・・。君に、神のご加護を、私の愛する太陽、そして子供達へ。君と永遠に、年老いたニコライより。」
ニコライはずるく振る舞っていた。２人の話し合いについて、アリックスに話すことは、どういう風になるか、ニコライはほとんど理解していなかった。そして決めた。ニコライ・ミハイロビッチが、ニコライ（＝皇帝　＊）に、渡した手紙を、アリックスに送ることを。
以下に、この手紙の一部分を示す。
「貴方は誰も信じておらす、貴方を皆が欺している。と、貴方は一度ならず、私に語った。貴方の伴侶は、貴方をこよなく愛しています。もしそうならば、取り巻いている人達の悪意があり、全くの欺瞞のおかげで、考え違いをしている、貴方の伴侶と、同じことを繰り返さざるを得ません。貴方は、アレクサンドラ・フェドローブナ（＝アリックス＝皇后　＊）を信じていますそれはわかっています。しかし、彼女の口から出ていることは、巧妙ないかさまです。全く真実はありません。もし、影響を、彼女から引き離す権利が、貴方に無いならば、少なくとも、貴方の愛する伴侶を通じてなされている執拗な口出しと、呪文のようなつぶやき、から、自分を守って下さい。・・・。私は、全ての真実を明らかにするのを、長い間躊躇ってきました。しかし、このような後では、貴方の母と、貴方の姉妹は真実を明かすよう、私を説き伏せました。それで、私は決心をしたのです。貴方は、新しい時代の波を目の前にしています。これは、陰謀の時代以上に大きな物であるといっておきます。私を信じて下さい。私が、生じてきている束縛・・・に対する貴方の持っている自由に、このように圧力をかけるのは、最も大変で、取り返しの付かない結果に対して、貴方、貴方の玉座、愛するロシアを救うための希望からです。」

最後に、ニコライ・ミハイロビッチは、ニコライに、「国会に要求されている責任内閣を、外部からの圧力無しに、これをなすこと。」、と「１９０５年１０月１７日に、記念すべき詔書が実行された、というわけではない。」を、提案として贈っている。
このように、彼（＝ニコライ・ミハイロビッチ　＊）は、新しい革命を恐れていた。そして、昔の革命を思い出していた。
アリックス：「１１月４日。・・・。私はニコライ（＋・ミハイロビッチ　＊）の手紙を読みました。彼に非常に憤激しました。何故彼との話し合いを中止しなかったのですか。彼が再び、このような話題、或いは私に触れるならば、シベリヤ送りにする、と、何故、彼に話さなかったのですか。が、とにかく今は、政府の変更に限られています。彼は何時も私を嫌悪しています。この２２年間にわたり、私を下品に批評してきました。しかし、今は戦争の時です。この時に、ママ（皇太后　＊）と姉妹（ニコライの姉妹　＊）は、貴方の背後に、身を潜めて、自分たちの皇帝の妻を守るために、勇気を持って出てきません。これは、けがわらしく、背信行為です。・・・。私の大事な人、貴方は、余りにも人が良すぎます。丁寧で、優しい。このような人間は、貴方の前で、おどおどしなければなりません。彼（？　＊）とニコラーシャは、ロマノフ家における、貴方の敵です。＊＊＊＊＊。・・・。女房は貴方の支えです。貴方の背後に、石の壁の如く立っています。・・・。」

書き足し：「私を手術する夢を見ました。私の腕を切断したのです。が、私は何の痛みも感じませんでした。そのあとに、ニコライ（＋・ミハイロビッチ　＊）の手紙を受け取ったのです。・・・。」
今や、アリックスは、ロマノフ家全員との、戦いを始める。＊＊＊＊＊。彼女は純真であり、誠実であるが、自分の非妥協性においては、ばかげていた。
ニコライ：「総司令部、１１月５日。Ｎ（ニコライ・ミハイロビッチ　＊）の手紙を、送ったことで、気分を害し、怒らせたことで、私は非常に心を痛めています。しかし、何時も通り、私は急いでいます。彼が、それについて長く、詳細に話をしたので、私はそれ（Ｎの手紙？　＊）を読みませんでした。しかし、スパイに関する歴史や、一般的な内政事情について時間を割いて言及され、君については、彼は完全には言及していませんでした。彼が、君について何かを言ったとしてみなさい。その時、貴方の夫が、貴方のために何もしない、と疑っているのでしょうか。・・・。」
可哀相なニキ（＝ニコライ＝皇帝　＊）！
アリックス：「１２．１１．１６．・・・。私は、自分の夫を、自分の子供達を、女性にとって、この世に存在している、この２つの最も大事なことを、心配する、ありふれた女です。神は、貴方の守護天使でもって、私を助けています。私は、頼れる支えを見つけ

ました。ただ、その支柱を引き抜いてはいけません。（支柱とは、つまり、「友人」とプロトパポフ　著者）・・・。明日は、十分な満足を持って、貴方の抱擁の中で休みます。貴方に、何度も何度も強いキスをします。十字を切って、貴方を祝福します。死ぬまで永遠に。」
　付け足し：「貴方！　プロトパポフに関しては、何の問題もない、ということを理解して下さい。これは、君主制と、貴方の権威の問題です。・・・。これだけで終わりである、と思ってはいけません。貴方に献身的な人々を、彼らは、１人ずつ、貴方から全て遠ざけます。そして、その後には、私達を。・・・。去年、軍に出かけた時のことを思い出して下さい。もし、貴方が、先に進もうとすれば、その時、革命を予言する全ての人達に反対していたのは、私達２人だけであり、そのうちの１人が貴方でした。貴方は、全てに逆らって、先に進みました。そして、神は貴方の決定を祝福しました。」

　「４．１２．１６。・・・。彼らに、貴方が君主であることを示して下さい。寛容さと優しさの時は通り過ぎました。今や、意志と力の統治がやってきました。彼らは、服従ということを学ばなければなりません。何故、彼らは私を憎むのでしょうか？　それは、彼らが知っているからです。私には強い意志があり、私が何か正しいことを確信（そして、友人が私を祝福してくれるならば）した時、私は意見を変えないということを。」これは彼らには耐えられません。メシエ・フィリップが、私に鐘の付いたイコンを授けてくれた時の言葉を思い出して下さい。とにかく、貴方は余りにも寛大で、信じやすい。悪い考えを持っている人達が、貴方に近づかないようにするために、私は貴方の鐘の役割を果たさなければなりません。そして、私は貴方に前もって警告をしました。・・・。
　親愛なるおばさん（？ニコライの母親　＊）が、貴方に手紙を書いた時には、彼女の背後には、ミハイロビッチ（ニコライ・ミハイロビッチ　＊）がいると言うことを、覚えておいて下さい。注意を向けないで下さい。気にもかけないで下さい。順調です、彼女はここにいない。しかし、「いい人達」は、駄目にする方法を見つけています。・・・。」

　「鐘」が鳴る！　その時、家族は最後の手段をとる。彼女（アリックス　＊）の所に、姉のエーラが、ツアルスコエ・セローに、やってくる。エーラは、最大の優しさで、アリックスに、状況の酷さを説明しようと試みるする。エーラは、ラスプーチンについて話をするが、アリックスは話し合いを中止し、部屋に閉じこもる。
　その後、妹は、姉を駅に送る。姉妹は、無言のまま別れる。それ以降、エーラがツアルスコエ・セローに現れることはなかった。それ以降、姉妹は、出会うことはなかった。
　ニコライ：「１０．１１．１６。ルーマニアでは、状況は芳しくない。・・・。ドブルジュでは、我が軍は、ドナウ川までの後退を余儀なくされた。・・・。１２月１５日頃、我が軍の集中点は・・・・終わる。クリスマスの当たり、我が軍は進撃を始める・・・。貴方の見た通り、余り良くない状況です。」

　戦争へのニコライの参加の程度は、どの程度であったのであろうか？　２つの答えがある。哀れで、門外漢で、意志のない、ヒステリーの女房とラスプーチンの要望の実行者。この答えは、その後に革命家が与えたものである。
　もう１つの答え。
　１９１７年に、イギリスの戦争大臣であった、ウインストン・チャーチルは、自身の本「世界の危機」で、書いている。ロシアの運命の酷さほど、他の国の運命は酷くはなかった。湾を目の前にして、ロシアの船は沈没してしまった。・・・。すでに、大変な犠牲を払っていた。やるべきことはやった。・・・。後退に次ぐ後退は停止した。弾丸の欠乏の方が勝った。武器は、＊＊＊＊。力強く、多数の、良く武装された軍隊は、広い戦線を監視した。アレクセーフが陸軍を指揮し、コルチャックが海軍を指揮した。指定位置に居続ける。広く延びきったドイツとの戦線に、軍事物資を搬送すること。それ以外に、何の困難な軍事行動は、要求されなかった。何の特別な軍事行動もとらず、自分の前線正面にいる敵の力を弱めること。ただ、ただ、現状に留まること。他の言葉で言えば、＊＊＊＊。
　最後の決定の時が、ニコライには迫っていた。出来事が、人間の理解を超えて、全てが不可解である最高点において、答えを出すことが、ニコライに突きつけられた。ニコライは、コンパスの針であった。戦争を続けるのか、それとも止めるのか？　進軍するのか、それともしないのか？　右翼に行くのか、それとも左翼に行くのか？民主化に賛成するのか、それとも、現状維持にこだわるのか？　これがニコライの戦いの現場である。なぜ、ニコライに、敬意でもって報わないのか？　＊＊。」
　ニコライ：「ノブゴロドへの貴方の旅行が実り大きいものであったことを、夢見ています。貴方は、ノブゴロドが好きでしたね。私は、一度、１９０４年の夏に、そこを訪れました。ちょうど、ベービーの誕生前でした。」

ニコライは、「鐘（アリックス　＊）」の抑えの効かないエネルギーが、他の方へ向くこと、を期待している。・・・。そして、ニコライは一息をつく。

ノブゴロドで、著名な予言者、マリヤ・ミハイロブナ老婆の所へ行った。老婆は、修道院に住んでいて、１０７歳であった。後になって、伝説を語り伝えた。マリヤ・ミハイロブナ老婆は暗いところに横になっていた。そこへ、アリックスが現れた。その時、老婆は突然、自分の寝床の上で、少し起き上がり、床に這いずり降りた。皇后に対して、頭を床につけて、礼拝をした。そして語った。「お綺麗な方、貴方は苦痛を受けている。」　しかし、何が伝説。アリックス自身が、出会いを書いている。
「彼女は、暗い小さい室内で、ベットに横になっていた。そのため、私達は、お互いが識別できる程度の明るさの蝋燭を持った。彼女は１０７歳。彼女は鉄鎖（苦行用の　＊）を帯びていた。・・・。普通では、彼女は不断なく働いたり、ゆっくり行ったり来たり、懲役囚や兵士のための縫い物をしている。それも眼鏡無しで。決して顔を洗わない。しかし、勿論、嫌な臭いや汚らしさは全くない。彼女は白髪で、顔は優しい細面で、卵形をしている。魅力的で、若く、輝いた目をしている。彼女の笑い顔は、本当に愛想がよい。彼女は私達を祝福し、私達に接吻しした。・・・。彼女は私に話しかけた。「綺麗なお方、貴方は苦痛を受けている。怖がることはありません。（彼女はこれらの言葉を何回か繰り返した。）　貴方が、私達の所へ来たということは、ロシアに２つの教会ができる・・・。」
彼女は話した。私達は、比較的子供達を心配していない。彼女らは結婚をする。と。後の話は、私ははっきりと聞き取れませんでした。」

多分、どのような「結婚式」についでの話・・・であったのか、アリックスは判らなかったであろう。ヘッセン家王女出身のアリックスには、ロシアの昔話は難しい。友人のアーニヤも＊＊＊＊＊。
老婆は、アリックスの娘達の、死との結婚について、アリックスに話したのであった。
ニコライ：「１９１６年１２月６日。貴方のノブゴロドへの旅行についての、貴方からの長い興味ある手紙に感謝をします。私が１９０４年に見たもの以上のもの・・・を、貴方は目にしています。さて、今は、トレポフについて・・・。（アレクサンドル・フェドロビッチ・トレポフは、際限のないめまぐるしい内閣の更迭で、１９１６年に、首相に任命された。　著者）　彼は従順で、温和しく、プロトパポフの名には触れませんでした。・・・。彼は、国会に関して、１２月１７に国会を解散し、１月１９日に招集する計画を述べました。＊＊＊＊。私はこの話し合いまでに、聖母像のイコンに近寄り、少し祈りました。気分が楽になるのを感じました。」
アリックス：「１２月１４日。・・・。私はこの夜もほとんど眠れませんでした。貴方の気持ちのこもった手紙に感謝をします。・・・。国会を延期し、１月の始めに国会を召集するという、トレポフのやり方は、全く良くありません。結果として、国会の誰も、地元に帰らないで、ペテログラードに残ることになります。彼ら全員が、町中にたむろし、騒ぎ立てるでしょう。愛する貴方、私達の友人は、貴方に国会を閉じることを懇願していました。すでに１４日経ちます。・・・。貴方はご存じでしょう、彼ら（国会議員　＊）は、いま、汚らしいことをやる時なのを。ピョートル大帝、イワン雷帝、パーベル皇帝、のように、勇気がなく、汚い彼らを、全て粉砕して下さい。国会議員に対してそのように振る舞う、貴方を見るのを、私は本当に期待をしています。ノブゴロドの老婆は、私に語りました、「怖がることはない」と。それで、私の赤ん坊（！ニコライ　＊）に、恐れを感ずることなく手紙を書いています。」

アリックスからの絶え間ない圧力で、ニコライは、限界に達していた。アリックスは、やり過ぎた。
ニコライ：「１４．１２．１６。・・・。参謀本部・・・。厳しい手紙による叱責に、君に心から感謝します。私は、手紙を読んで笑いました。というのは、君が、私を子供のように見なして話しているからです。・・・。」
アリックス：「１５．１２．１６。・・・。厳しい手紙を書いてしまった私をお許し下さい。少女（アリックス　＊）は、自分のエンジェルを、侮辱するつもりはありません。ただただ愛を持って書いています。ただ、時には、彼らが、貴方を欺し、正しくない決定をつかませよう、・・・ということを知って、少女は絶望に至っています。電話の調子が悪いのが、本当に残念です。・・・。」
ニコライ：「１６．１２．１６。・・・。私は君が書いたことに、腹を立ててはいません。私を助けたいという君の情熱を、十分に判っています。しかし、国会の召集日の変更はできません。それは、すでに法令で決まっていることですから。心からの挨拶と、接吻を、君に送ります。　君の可哀相で、意志の弱い夫。」
今回は、ニコライは、頑として願いを聞き入れなかった。

アリックス：「１７．１２．１６。・・・。再び、酷い寒さとなり、少し雪があります・・・。心臓は、特に良いというわけではありません。芳しくない気分です。私の心臓の状態が、いま、悪くなってきました、ことが判るでしょうか。・・・。＊＊＊＊＊。ほら、古い車は役に立たなくなりました。・・・。ベービーの細い体格は、本当に治るでしょうか？ベービーが、今後、太くなり始めること、さらに、青ざめた顔が治ること、を、私は期待しています。可愛い子供（＝ニコライ　＊）へ。」

これ以上先は、彼女の手紙は、鉛筆で書かれている。彼女にとって、最も酷い出来事を知った後でも、彼女はさらに書き加えていた。
「私達は、頭を寄せ合って座っています。貴方は、私達の感情、気持ちを、想像することができるでしょうか。私達の友人が亡くなった。夕べ、アーニヤが、友人を見かけていました。友人は、アーニヤに語りました。自分がイリーナ（ユスポフの妻　＊）に会えるようにするために、ユスポフが、自分を夜に自宅に招待している。それで、夕方、車を自分の所に差し向ける。と。
友人の所に自動車（軍用車）がやって来ました。それには２人の民間人が乗っていました。友人は乗って去りました。今日の夜、ユスポフ家で、大事件が起こりました。ユスポフ家で、大きな会合がありました。ドミトリー（大公　著者）、プリシュケビッチ（ウラジミル・ミトロファノビッチ・プリシュケビッチ、国会議員、最右翼　著者）、その他の人々。全員が大酒豪です。警官が、銃声を聞きました。プリシュケビッチが、飛び出してきて、私達の友人が殺されたと、警官に叫びました。・・・。警察は捜査を始めました。今し方、予審判事が、ユスポフ家に入りました。が、ドミトリーが立ちふさがっていたので、予審判事は何もできませんでした。＊＊＊＊＊。フェリックスは、今日の夜、クリミアに旅立つ予定でした。しかし、私は、彼を引き留めておくよう、プロトパポフにお願いしました。私達の友人は、今日が大変上機嫌でした。しかし、神経質でした。バチュウシン（ドイツ側のスパイに関する仕事をしていた軍の判事　著者）が、アーニヤの不利になる証拠集めをしている、ということで、アーニヤのことを心配していたのです。フェリックスは、私達の友人の家を訪れたことはなく、友人を呼び出したことは、絶対にないと断言しています。明らかに、これは罠でした。彼はどこかに逃げ出せた・・・と、私は神の情けを当てにしています。私達女性は、ここでは弱い存在です。私はアーニヤがここに住むように、残しています。彼らは、彼女の感化に取りかかっているからです。彼が殺された、とは、信じられないし、信じたくもありません。神が私達に慈悲をかける。
何という酷い不安でしょう。・・・。急いで帰ってきて下さい。誰にも彼女を、彼女がなす諸々を、破滅させる権利はありません。何時貴方はここへ来るのでしょう。」
ラスプーチン殺害は、大分前から企まれていた。大ロマノフ家は、これを、王朝を救うただ１つの方法であると見なした。そして、「聖なる悪魔」は、このことを知っていた。
暗雲が完全に濃くなった時、ラスプーチンは、何時も、見事な歩みを示していた。彼は、遺言と予言をし、それらを、皇后に示していた。
グリゴリー・ラスプーチン・ノービイの魂は約束した。
「ロシア皇帝よ！
貴方の親族が、殺人を行ったとすれば、家族の誰一人として、子供達も、２年以上生きながらえない、ことを知れ。・・・。彼らを、ロシアの国民が殺す。・・・。私を彼らが殺す。私はすでに生きてはいない。祈れ、祈れ。力強くあれ。自分の出自を心配せよ。」
ラスプーチンは、自分の秘書を通じて、皇后に、遺言を渡した。不幸なアリックスがどのように感じたかは、容易に察しが付く。リックスは、それをニコライには見せなかった。「聖なる悪魔」の警護は、より強化された。皇后の許可無しにはどのような招待も受け付けていないラスプーチンを、皇后と姉妹達は、招待した。彼らは、ラスプーチンの着物をしまい込むことさえした。
しかし、ずる賢く、単純な「修道者」は、抜け目のなさで、「忌まわしい貴族達」に勝っていた。
ベーラ・レオニドブナ：
「これは、入り組んだ筋の策謀であった。内容においては、私の好きな戯曲「マスカラード」と同じである。ドミトリーとフェリックス・・・が、陰謀を考えついた。フェリックスは、「修道者」の長年の敵であった。フェリックスは、狡猾な人物であった。マーニヤ・ガラビナを通じて、フェリックスは、「修道者」と、和解の道を探していた。・・・。経過はもっともらしく・・・進んでいた。「修道者」は判っていた。フェリックスが、親衛隊に入りたがっていた、が、ホモが好きでない皇帝は拒否していることを。そして、何の疑いを持っていない可哀相なマーニヤ－彼女は「修道者」とフェリックスを和解させることができると信じていた－を通じて、ユスポフ（フェリックス・　＊）は、自分のために、口を利いてくれるように・・・、「修道者」に要請した。そして、ラスプーチンは同意した・・・。そして、運命の夜、ラスプーチンは、完全な和解のため、フェリックスの

屋敷にやってきた。ラスプーチンに、葡萄酒と、ラスプーチンが大好きな舞踏が提供された。ラスプーチンが、どれ程踊り狂ったことか・・・、疑いもなく、彼は鞭身教派・・・の人間であった。その夜、ラスプーチンは公爵夫人イリーナ・・・を治療する約束であった。イリーナに、ラスプーチンが色欲を持っていたという伝説は、ラスプーチンの殺害後に作られたものであった。「ニコライの青年時代の友人であった、サンドラの娘に対する、ラスプーチンの汚らわしい秘められた欲望」・・・、これら全ては、「修道者」に対して、強い不快感を呼び起こしたに違いなかった。そして、殺害・・・を正当化したに違いない。
　後になって、ラスプーチンに、シアン化カリウムを盛った、しかし、毒は彼に効き目がなかった。という伝説が生まれた。真実は以下の通りである。ラスプーチンに毒を盛る役割であった人は、罪を受けたくなかった。この人は、無毒の粉・・・を、毒の替わりに使った。「毒」が、効かなかったということが判って、フェリックスは銃を撃った、そして、ラスプーチンは倒れた。そして、２つめの伝説が生まれた。フェリックスはラスプーチンを銃殺したが、ラスプーチンは生き返った・・・。という。真実の所、フェリックスは、ラスプーチンを負傷・・・させただけであった。フェリックスは、ラスプーチンを殺しきれなかった、彼は神経質・・・な人間であった。ラスプーチンは、シロクマの毛皮の上に、全く動くことなく横たわっていた・・・。部屋には、フェリックスとラスプーチンの二人だけがいた。と、ラスプーチンが気を取り戻た。フェリックスは、ラスプーチンに飛びかかり、彼の首を締め付けた・・・。手負いの猛獣のように、ラスプーチンは怒り狂って叫声を上げた。「フェリックス！　フェリックス！」　「死体」が、自分に襲いかかってきた時、フェリックスはどのように感じたであろうか！　恐怖から、フェリックスは我を忘れた。ラスプーチンは、地下室からドアを通って逃げ出すことができた。レボルバー拳銃の連発で、ラスプーチンを殺害した。が、まだ最後とはなっていなかった。自動車まで運び出すために、厚手のカーテンで、ラスプーチンをくるんでいた時、ラスプーチンは、目を開けた・・・。このようなことで、殺した生き物の、表現のしようのない様相を、彼ら殺害者達は、忘れることはできなかった。」
　ラスプーチンを、半地下階で殺した、ということは、エカテリンブルグの半地下階でのことを、あたかも予言していたようである。

　アリックス：電報。「１８．１２．１６。貴方が戻ってくるまで、ドミトリーが自宅を出ることを禁止することを、貴方の名前で命令して下さい。ドミトリーは、今日私に会いたがっていました。が、私は拒否しました。彼（？ラスプーチン　＊）は事件に巻き込まれました。体はまだ見つかっていません。いつ、貴方はここに来られますか？」

　私は、大公（ニコライ夫妻の娘達　＊）の日記をめくる。
　オリガの日記：「１２月１７日。グリゴリー父が、夜から行方不明になりました。至る所で探しています。本当に大変です。神様、私達４人を助けて下さい！
　１２月１８日。アーニヤは、私達の所に住んでいます。ママが、アーニヤを心配しているからです・・・。グリゴリー父は殺され、それを、ドミトリーがやった。クレストフスキー橋から、投げ捨てた。ということが、ようやく判りました。グリゴリー父は、水中で見つかりました。本当に酷い。もう書けない。座ってお茶を飲みました。グリゴリー父と私達・・・のことを、ずっと思い至っていました。」
　このように、ドミトリーが殺した？！　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。
　ニコライ：「１８．１２．１６。・・・。いま、君の手紙を読んだところです。憤激し、驚愕しています。一緒に祈りましょう。明日、６時に到着します。」

　ラスプーチンの予言は、抜け目のない百姓の狡さであったのであろうか？　それとも、「聖なる悪魔」の怪しい力で、口述させたものであろうか？　それとも他の何かで？・・・。なんとなれば、放埒な生活の中で、この酔っぱらいで、無学の百姓は、実質的に、先駆者であった。彼らの宮殿に足跡をつけた幾十万の凶暴となった百姓達は、彼らを殺し、葬式もしないで、ものを投げ捨てるように、彼らの遺体を投げ捨てた。・・・。

「今朝は・・・ひどい痛みを感じた」
　　（帝国崩壊の日記）
　最初、ラスプーチンの遺体は、フェオドロフスキー教会の安置所に置かれた。その後、宮殿から余り遠くない建築中の小礼拝堂に、秘密に葬られた。恐ろしい「修道者」は、最も神聖なところで、大地に横になった。・・・。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。
　ニコライの日記から：
　「１２月２１日。水曜日・・・。９時に、写真館の右脇を、原っぱに向かって、進んでいった。進んだ先には、悲しい光景があった。グリゴリーは、１２月１７日の夜に、フェ

リックス・ユスポフの屋敷で、悪党どもによって殺された。忘れ得ぬグリゴリーの遺体の収まった棺は、祈りの中で、降ろされた。アレクサンドル・ワシリエフ神父が短い祈祷を上げた。その後、私達は帰宅した。天気は灰色模様のマローズ。－１２度。報告時まで散歩・・・をした。昼に、子供達・・・と一緒に散歩をした。

ニコライは、挫けなかった。「人でなしども」－ドミトリーとフェリックスーを、ペトログラードから追放することを決定した。皇帝に断固とした処置を執らせたのは、妻（アリックス　＊）の苦痛だけではなかった。神に背いて、信者の殺人。それだけではなかった。皇帝の親族が、農民を殺したのである！　しかし、他のロマノフ家の家族は、「人でなしども」に、敬意を表した。駅では、大公アレクサンドル・ミハイロビッチが、フェリックスを見送った。
同情に値するドミトリーは、好きなペトログラードに残っている人達を、どれ程うらやましがったことか・・・。
「大好きなペテログラード」に残った皇帝の親族達は、直に殺されることになる。しかし、首都から追放された「ならず者」である、ドミトリーとフェリックスは、生き残ることになる。

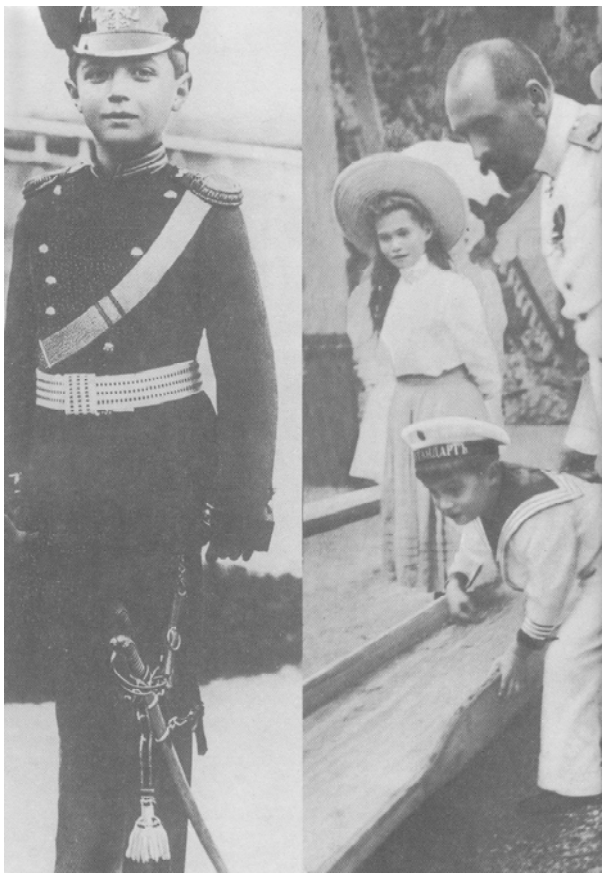
最初の日は、アリックスは、腰が抜けたようであった。最初、彼女は暴れ狂い、叫び回った。「絞首刑！」、そして、威嚇的に静かになり、全く無関心のようになった。彼女には判っていた。滅亡！、お終い。「修道者」が、予言していたことである。
アリックスは、「修道者」の悲惨な予言を、ニコライに示す。ニコライは、アリックスを宥めることを試みる。グリゴリーの約束は全て、実現している・・・。

皇后に好かれていないトレポフは追い出されること（従って、グリゴリーによることになる)、老いぼれたゴリツインが首相に任命されることーこれは即ち、実質的に、内閣の首班に、「友人」の気に入っていたプロトパポフがなる。（？　＊）　これらのことが、社会に混乱を引き起こす。終わりのない会議は続く。町議会、地方議会、貴族議会。全ての会議が、この新しい内閣に反対である。全てが、革命を待つようになり、そして革命が始まった。「聖なる悪魔」は、正しいことー自分の死後直ちにーを語っていた。そして始まった！

アリックスは、戦いのために、徐々に元気を取り戻す。
この時、アリックスは、思い出す。ラスプーチンは、この不幸で、血を流す戦争に反対であった。ことを。そして、ラスプーチンの死後、アリックス自身が心に秘めていたことを、提案する役割を実行し続ける。
アーニヤはというと、巧みに、陰謀を支持していた。（？　＊）　「私達の友人」から、いつだかもらった電報を、アーニヤは突然、思い出す。彼女は、内容を覚えている。「戦争を企んではならない。ロシアそして貴方方自身の最後となろう。全てを、次の人間にまで引き継げ・・・。」

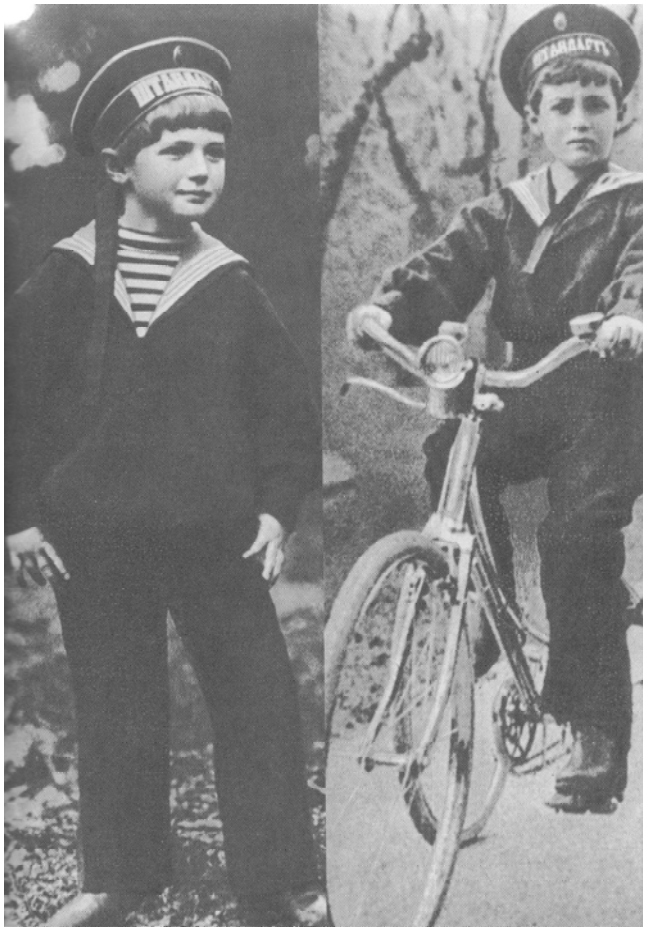
」

皇太子アレクセイ（　？年）



少年時代。左：自分の連隊の兵士として。右：自分のヨットの水兵として。（　？年）

」



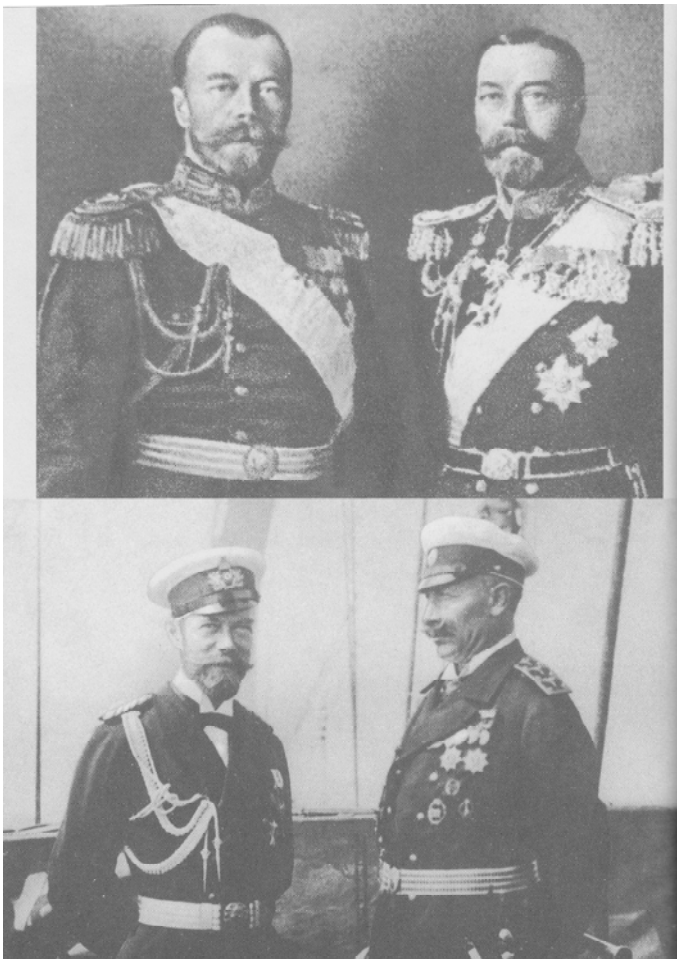
自分のヨットの水兵として

大公達（皇帝の娘の称号　＊）

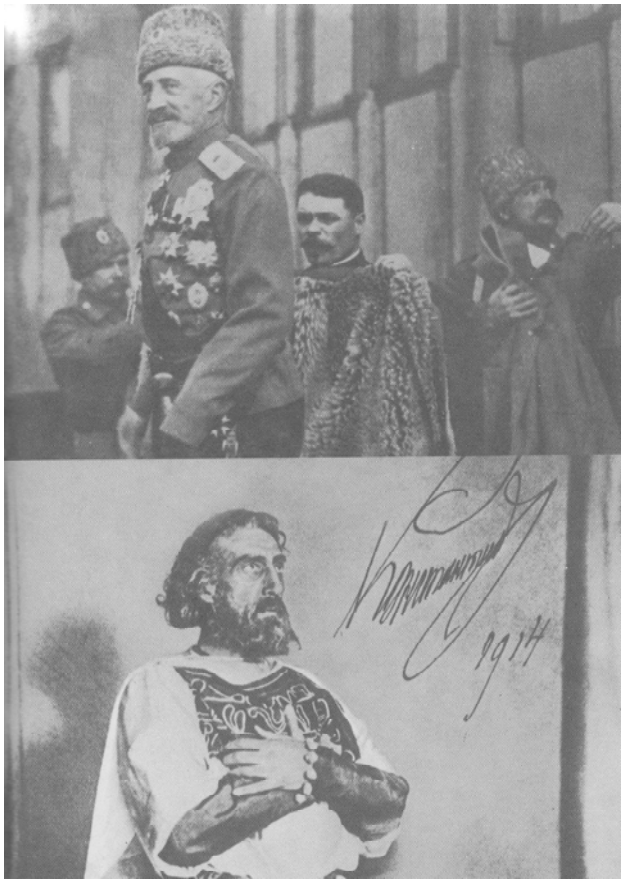
若い娘（左下に、アナスタシアの記名がある　＊）

ロマノフ家３００年記念祭
モスクワのロマノフ大貴族の玄関にて

皇帝が皇太子と一緒に、ノボスパスキー寺院を出発する



親族
上：ニキとジョージ。イギリス国王ゲオルギー５世と。
下：ニキとビリー。ドイツ皇帝ウイルヘルム二世と。



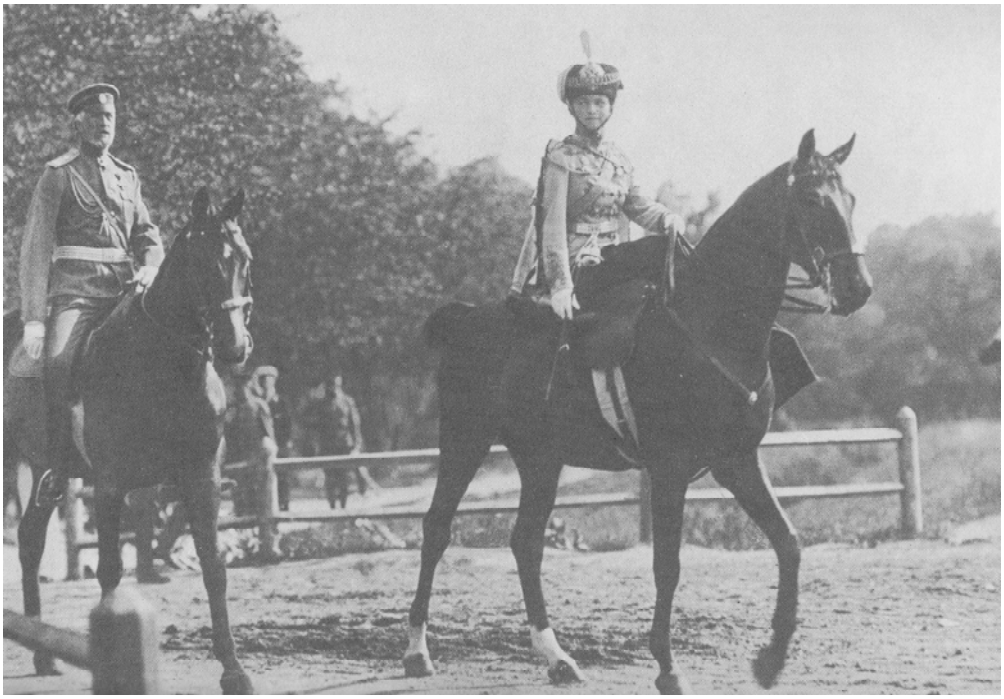
大ロマノフ家
上：「雷叔父」。大公ニコライ・ニコライビッチ
下：「Ｋ．Ｐ．」自作の戯曲「皇帝イユデイスキー」中での大公コンスタンチン・コンスタンチノビッチ

休暇の時
皇帝の狩猟。ベドベジュスカヤ密林（１９１０年）

クリミア。（１９１３年）

上：大自然の懐に抱かれて。（１９００年代）
下：テニスをした後の大公達（１９１５年）

ニコライ二世、大公ドミトリー・パブロビッチ、アレクセイ、
アレクサンドラ・フェドロブナ、タチヤーナとオリガ。ヨット「シュタンダルト」の甲板室で。（１９１４年）



パレード
ニコライ・ニコライビッチを伴った、大公オリガ・ニコラエブナ。ノービィ・ペテルゴフで。（１９１３年）

ニコライ二世と皇太子。セメノフスキー連隊の親衛隊将校の中で。（１９１３年）

戦争ごっこ。（１９０９年）